

仕事に於て云為されることが望ましいのである。……」

この文章は今年四月に書かれてある。拙論に先立つこと四月である。かうした正論が、この頃の若い文学者の間に起つてきたことはうれしい。拙論の意図も強ひて蓮田を正当づけるためではない。敗戦によって崩壊し埋没せしめられた真実を、もう一度掘り出して次代を継ぐ人々の正当な批判に委ねたいといふ悲願に発してある。

十月二十一日江藤淳氏よりおたよりをいただいた。氏は中学生時代に古本屋から伊東静雄の第二詩集『夏花』を偶然買ひ求め、集中の「水中花」その他を耽読したとあった。このおたよりの主旨を『中央公論』十二月号の「石原慎太郎論」の冒頭で、氏は次のやうに敷衍してある。氏は「水中花」を掲げ、

「かつてこの詩は私のなかにひとつの文学的体験をのこした。その体験はおのずとひとつの「美」の基準をかたちづくるほどに強烈であった。当時、私はこの詩人について何も知らず、彼が生きているのか死んでいるのかわからなかった。時はすでに伊東静雄の時代ではなく、街には水中花のかわりに焼跡のほこりが散乱していたから、私はまったく個人的に彼の作品を読んだのである。……このやうな体験は、いわば自分のなかに眠っている過去に逆照明をあてて、その意

味を啓示するといった性格を持っている。伊東静雄の詩は、私の脳裏に刻みつけられていた敗戦直前の空の碧さの意味を教えた。そのころ、天は地上に降りて来ていた。時間は停止していた。いつさいは欠伸がでるほどのどろどろで、無責任で、性的な甘美さにみちみち、銀色の翼をかすかにふるわせて航跡を描いていく敵機の軽快な爆音が官能に媚びていた。その風景——見るまに山の縁から葉脈のひとつひとつがうかびあがって来るほど鮮明な風景のなかには、「死」がかくされていた。私は、そのとき、当時の自分が意識の奥底で、余すべりのものは吾にむかひて死ねといふ、わが水無月のなどかくはうつくしき」といふ歌に唱和していたことを識つたのである。

……私は日本の詩歌の抒情がこれほど強いしらべを得た例はほかに知らない。」江藤氏は精緻を極めた伝統のエキスのやうな伊東の詩を起用し、伝統を断絶したと偽称する粗奔な石原氏の小説のクセニエにしてある。先の塚本氏の蓮田論と共に、埋没してある真実の光彩を再発見するシンセリテイに敬礼する。さう言へば「群像」十一月号で、井上靖氏も文学自伝「人と風土」で伊東とフイリッピンで戦死した中島栄次郎について触れて下さ

つてみた。

「伊東静雄の詩集は今でも時々繕いてみるが、曾てそれを読んだ時の驚きや怖れを、いまもそのまま思い出すことができる。詩的真実というものがいかなるものであるかを、伊東氏の幾つかの作品から知ったことは、私にとっては大きなことであった。……」

私は中島栄次郎の書くものからは何の影響も受けなかったが、彼に依つて小説を書く以外、もうこの世に何の面白い仕事もないのだということを知らされ、自分もまたいつかはそれを書いてみようかという気持をひき起されたのであった。」

この井上氏の文章で、まだ掘り起すべき墳墓……いや、建てるべき墓標があることを私に思ひ出させた。(O)

果樹園 第四十七号(毎月一日一回発行)
昭和三十四年十二月一日発行
池田市野町一六八
編集兼 小高根 二郎
発行人 京都府下京区壬生川通五条下ル
印刷所 同 朋 舎
池田市野町一六八
発行所 **果樹園社**
定価 三十円

果樹園

第48号

蓮田善明とその死
北の時のうた
悪い恋愛
秋

白居易詩抄
朝 百 屈
視 線
虫 の 日
無 緑
糸まきのカン
編集後記

家持を目して多情多感……、その割に万葉的な直截な情熱が失せてあるといふのが、世の評家の定評となつてゐる。この定評に対して家持の個我に発した鬱結の心緒は、得たる恋の場合ですら、なにか否定の姿であらばさねばならなかったのだと、蓮田は弁護してゐる。偽も似つきてぞする願しくもまこと吾妹子われに恋ひめや

蓮田善明とその死 (六)

小高根 二郎

蓮田は第三号にいたつていよいよ氣組が熟したのであらう。『文芸文化』九月号に、初めてまとまつたエッセイとして、「万葉末季の人」といふ大伴家持論を書いてゐる。つまり、万葉集の最後を彩つた歌人であり、その万葉ぶりを越えんとした騷人……。代々天皇の親衛隊の長として奉仕してきた家柄の、最後の栄光をからくも護持しえた武人……として、家持が負つた運命論である。

万葉で「独り」といふ詞を用つた百例の中の二割。それを家持が用ひたといふ根拠から彼が「精神的個我」を初めて意識した本朝の

歌人であつたと、蓮田はその運命論の幕を開けてゐる。

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば
天平勝宝五年(753) 家持が三十六才であつた男さかりの春の日の歌にして、なほしかりである。

この「精神的個我」に目覚めた家持の恋は直ちに行動とはならず、必然的に「鬱結」せねばならなかつた。名家の御曹子であり、いさゝか蒲柳ではあつたが美男であつたらしい家持をめぐつて、求愛する女性は無数あつた。純情な妻の坂上大嬢。情熱的な笠女郎。コケトリイナ紀女郎。その他、平群女郎、山口女王、大神女郎、中臣女郎、河内百枝娘、粟田女郎子等の多数であつた。従つて、



運動会当日応召の
挨拶をする蓮田善明

昭和三十三年十月十七日

一重のみ妹が結ばむ帯をすら三重結ぶべく吾が身はなりぬ

かやうに、家持は得た恋の場合でさへ、なぜか空しいそぶりでもどかしげに振舞つてゐる。燃える恋の直截な歓喜などどこにもない。しかるに、得ざりし恋——しかも名を記さざる或る「娘子」の場合にのみ、彼の恋は妙に真味を帯びてゐる。

妹が家の門田を見むとうち出来し情もしく照る月夜かも

思はぬに妹が笑みひを夢に見て心のうちに燃えつつぞ居る

言はゞ、得たる恋、得ざりし恋の場合も、家持は万葉歌人には珍らしく、心緒と表現との間に否定的な距離を設定してゐるのが看取される。

この個我に発した鬱結がもたらした否定的な距離——こゝから、家持は彫刻的な目から絵画的な抽象へと開眼したので。

春の苑くれなゐにほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

勝宝六年(756)。先の歌から一年を経て得た心境である。家持はもはや現実の恋緒ではなくして、想はれた女性の絵画的な抽象に到達してゐた。

その日から二年を経た勝宝八年(758)の

北の時のうた

浅野 晃

みんな去つていった この曠野から
草の花を数へながら歩いてゐたうちに
うづくまつた牛の背に日がかける
それを眺めてゐたうちに みんなみんな
秋が逝つた ながい冬が来た

節のある生木がいぶりつづける
ひらいた両の眼に涙がたまる
小さな活字で埋まつた頁を
膝のあひだにしづかに閉じる

久しい伝承の時は遠くすぎてゐた
山河のいましめから解き放たれて
みんなは幸福な時をたたへてゐた
みんなは自分の時を有つた けれどもいま
昔の焔がもえあがつたとき
焔の中の生木は一団の聖火である

むかうで海が自分の重さをひびかせてゐる
星があらたに輝いた あれははじめて見る色
だ

誰かが時を測つてゐる 風と光が交つてゆく

夏。家持は仮初めの病気で寝込むことがあつた。その間、彼は修道によつて永世に生きることを祈つた。

泡沫なす仮れる身ぞとは知れれども猶し願ひつ千歳の命を

この永生への希求は、言はゞ象徴の域にすでに到達してゐた家持の個我的精神が当然に展開した境涯であつた。雑多な夾雑物や余剰をすべて棄却して核心そのものにまで昇華する象徴。それは数なき身を捨てゝ名に生きよ……といふ白熱のやうな悲願である。いや、この家持の悲願は今に始つたわけではなかつた。

すでに五年前、勝宝元年(751)に陸奥に金が出たといふ詔書を賀ぐ歌で、八丈の遠つ神祖の 其の名をば 大来目主と 負ひ持ちて 仕へし官。海行かば 水漬く屍。山行かば 草むす屍 大皇の辺にこそ死なぬ かへりみはせじ……丈夫の 清きその名を 古よ今の現に 流さへる 祖の子どもぞ……と歌つてゐた。又、四年前の勝宝二年には、老衰した憶良の悲痛な永生希求の歌に追和して、八丈夫は名をし立つべし後の代に聞き継ぐ人も語り継ぐがねとも歌つてゐた。さらに、父旅人が常陸出張の際に出会つたことのある高橋蟲磨の処女墓の歌に追和して八血沼

更けてゆく夜 ぐつとさがつてきた気温
生木はすでに燃えあがり
私の影が壁にしたいに巨きくなる

うつくしい焔の時 どこかでいま
彼等も燃えてゐる そしてさまざまの
可能の世界をひらいてゐる いざ
もつとうつくしいものよ 来い
未知の可能を惜しみなくひらいて見せる

つひに吹雪が来る 元氣な旧知よ
君はいままで何処をぶらついてゐたのだ
君は二日夜私のまはりを荒れ狂ふ
ありとある憤懣をぶちまけてみせる
私は焔の火をかきたてる けれども自分の位
地は変へない

日光がそそぐ 天が青さをとりもどす
山がうら若い水の肌を誇らしげにかかげる
古い智慧を何がこんなに新しく見せるのか
まだ上らない暁がどんなに沢山あるのか

燃える時のうつくしさ 凍る時のまた
地熱がひそかに動いて 春だ春が帰つてくる
みんなが帰つてくる 元氣で 元氣で
私は彼等に自分の時をみんな与へる
さうして彼等の時を自分の時にとりもどす。

壮士 菟原壮士の 現身の 名を争ふとたまきはる 寿も捨てて 争に 妻問ひしけるをとめら 聞けば悲しさ……と歌つてゐた。つまり、身を捨てゝ名に永世の命を伝える……これが家持の変らぬ悲願だつたわけである。

絢爛を極めた天平の文化は爛熟すると共に類唐の時運を秘めてゐた。家持が現実には置かれた位置と彼を圍繞する世界は氏族の末期的な動物の争闘の濁つた渦に化しつてゐた。天平宝字元年(757) 橘奈良原の乱があつた。聖武天皇崩後に臨んで氏族が劃策した皇位争奪の争ひだつた。大伴の一族では古慈悲が一味として土佐に流された。

咲く花はうつろふ時ありあしびきの山菅の根し長くはありけり

花ではなく根を主体として歌つた家持の心魂には、やはり永世希求の悲願が変らず句つてゐる。翌宝字二年家持は再度の地方行政官——因幡守に任ぜられた。翌々宝字三年(759) 正月因幡の国庁で郡司等と饗宴を張つたが、その時の歌が家持の最後の歌であり、同時に運命的な万葉の結びの歌となつた。

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや 重け吉事

この歌を蓮田は「永生の希求をさびしい永別の声として作つた。」と解説してゐる。

五年後の宝字八年には先の乱の勝利者であつた惠美押勝(藤原仲應)が叛死した。家持は幾度か歌宴に招かれたことがある親しい間柄であつた。これより道鏡の専制時代は始つた。専制十四年にして道鏡は下野し和氣清麿呂の忠誠が返り咲く政変があつた。その十二年後、天武天皇と聖武天皇の血筋を曳いた水上川継が謀反し、家持は連坐して官を奪はれた。が、五ヶ月にして東宮職に復し、父旅人の大納言には及ばなかつたが中納言となり、武家の家柄の最後を飾るにふさはしく持節征東將軍にも任じられた。しかし、やがて一族の大伴継人、竹良が長岡に新造中の宮廷で造營長官藤原種継を射殺する事件が惹起した。家持はこの事件勃発の一月ばかり前に永生希求しつゝ永眠したのである。

蓮田は「万葉末季の人」家持論を次のやうに結んでゐる。

「この国にはもはや歌友大伴池主もなく京の文界も魂を失へる人々に舶載の探韻文字が跋扈し初めてゐる。而も舶載文字を旺盛に取り入れつつも伝統を身に知りぬいてゐた嘗ての憶良もあない——以後十数歳家持は古歌集と自らの古手記との間に思を遣りその以後の晩年を己を知る人もない孤独

に清けき名を誓ひつつ黙々と瞑目した。時に延暦四年六十八歳といふ。時代は桓武の御代に入りやがては又明けゆく日本のその黎白の陽炎未だ動かざる暁闇の中に彼の屍は疑問を深く残して横はたつてゐる。死後二十余日未だ葬らず藤原種継暗殺の陰謀に連るの廉を以て名を除かれ罪は其の息と一党知友にまで及んだ。果して彼に何らの心ありしやその語らざる唇から何人かその真意をきき知り得たらう。」

家持が桓武天皇の遺詔によって大赦の恩典に浴し、その名を復しえたのは死後二十年の歳月を経た日のことだったのである。

蓮田が最初のまとまったエッセイとして家持と取組んだことはかなり運命的である。「海ゆかば」の軍楽は巷間を鳴りどよませてゐた。作者の個我と永生希求の切ない悲願とにかゝはりなく、換骨奪胎されてたゞ徒死を誘惑する軍歌になり果てた「海ゆかば」……蓮田はその曲を聞きつゝ、「卑怯なまでに英雄の清い高い名を衒る孤独な精神」を回想して、この家持論を書いたのであらう。

私が興味をひかれるのは、家持が得たる恋の場合より得ざりし恋の場合に燃える、あの恋緒の否定的な距離の設定である。この家持

悪い恋愛

田中克己

十二月八日国鉄で前に立ったのは、蔵原伸二郎氏、いっしょに新宿で下りて、地下道を通り、改札を出ると交番。これは先生をしばしば不審訊問した交番だ。その前にあった電車はとりはられて、自動車の往来は前よりも激しいが、幸ひ信号がある。僕は先生の腕をとつてこの通を渡つたことを思ひ出す。そのあとはもう思ひ出すことばかりだ。けふは先生の愛嬢の出版記念会で、みないい本を書いたと大喜びなのだ。「悪い恋愛をしてゐるので」とただ一度だけ、先生はこの嬢のことを僕に話された。そのとき大して気にしなかつたが、僕ももうむすこや娘の恋愛をする齡になつてゐる。そしてその恋愛を悪くないやうにと祈るやうになつてゐる。きつと「悪い」と批判するのぢやないかとも思ふ。隣に坐つた蔵原氏は六十一歳になつたといつてゐた。

の心緒はまた蓮田のものだったからである。蓮田の死後発表された絶作に小説「有心」がある。丸二年にわたる中支応召から帰還して、最愛の妻子と再会の歓びを喫しながら、そこに心理的なずれを感じて、阿蘇の温泉に通走する物語である。さう言へば、第一次、第二次高野夏行の家族死の書簡にも、距つてこそ親愛の情にたぎり燃える心緒が仄見えてゐたことに回想ありたい。又、この資質は、第一次応召解除後間なしに執筆した「鴨長明」を解く鍵となるから、記憶の隅に留めおきたい。

それにしても家持の最後の運命も蓮田のそれもありにも酷示してゐる。蓮田の死の目撃者——連絡下士官であつた黒田稔氏の伝へるところによると、コメカミを射抜いて一回転して倒れた蓮田は、左掌に三十一文字を書いた軍用葉書を、しか……と握り締めてゐた由である。覚悟の歌！と直覚した黒田氏は、それをもぎ取らうとしたが、いかな蓮田は死後も手離さなかつたといふ。結局、無智な憲兵の押収するところとなつて知るよしもないが、家持の最後の歌「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重げ吉事」の風韻に通ふ日本禱歌であつたに相違ない。家持は旧曆といへ八月二十八日に逝き、蓮田が死んだのも八月二十日である。残暑なほ厳しい日に二十余日葬らず放置された家持も、熱帯の八月に検死のために日時を要した蓮田の受けた処遇も同じであつたと言はねばなるまい。又、家持はその榮譽ある名を復すのに死後二十年を要してゐるが、蓮田もまた二十年を要するであらう。もつとも死後五年近くなつて既述した「有心」(昭和二十五年「国典」)が紹介され、同志清水文雄氏は解説をし、師であつた齋藤清衛博士、同志池田勉氏、知友浅野野晃、保田与重郎、坂村真民諸氏は哀惜の言葉をしるした。然し、それは生前蓮田を知る者のみの声であつた。真の新しい意味で、蓮田の文業を再認識しようとする声が上がつたのは実に死後十四年を経た日の昨年である。つまり「古典と現代」誌上での塚本康彦氏の叫びを最初とする。

「国策上いかがわしい作品を罵つたことが何であろうか。亡き軍神への黙禱を乱した生徒の頬を殴打したことが何であろうか。上官と説を異にして御国の安泰を期して自決したことが何であろうか、と僕は敢えて言わねばならぬ。これらの所行は許されるし、誉められると言うのではない。斯様な所行に拘らず、蓮田が『文芸文化』を通じて直走った軌跡は息塞るまでに美しいとい

秋

福地邦樹

秋はみのりの時

野は果実の宝石で化粧される
木々の凋落とても

内にこもるための準備なのだ

このような日

恋をするものも独りの時を持つ

物思いはしかし

大人になるのに一番の近道だ

うのである。素朴と直情との恋の前代に帰れない家持の自意識の「鬱結」を明らかにし、「夢野の鹿」(撰津風土記)の伝説の哀しさに寄添う様に謳ひ、王朝文学の廃亡を一身賭けて保守した俊成が運命を象徴した「九十賀」の図を再現した蓮田の勲功は、前述の所行を微塵に砕いて映えるのだ。」(昭和二十四年四月「古典と現代」第七号、塚本康彦「文芸文化」)

又、江藤淳氏は蓮田善明なる文学者の存在を永井荷風論(昭和三十四年「中央公論」)に託して銘した。家持のやうにその名が復するにはさらに数年を要するであらう。

蓮田は翌十月の十七日(月)に召集の通知を受けた。当日は神嘗祭の祝祭日で成城学園は運動会であつた。運動会が開始されて間なし十時頃に、二十日に熊本の歩兵第三十四聯隊に入營すべき旨の電報を受けた。その由は直ちにマイクをもつて場内に伝へられ、競技は中断されて満場の拍手と歓呼が蓮田に送られた。蓮田はまたマイクを通して場内の生徒や同僚に応召の挨拶をしたのである。その時の写真が今に残つてゐる。蓮田は係員の腕章を附けた服装のまま、鋭い横額を見せ、その横額は榮爾とした笑を含んでゐるやうである。背後に立つてゐる同僚も微笑を含んでゐる。

白居易詩抄(三)

森

亮

火宅

燃ゆる宅に焦ぐる身は
霜にくじける松の葉か
うつろひやすきはうつせみの
人ぞよろづのものにまされる

★

柘枝舞

新しき舞衣を
着けて舞へまへ柘枝の舞

すでに十二日にはバイアス湾に敵前上陸を敢行し、二十一日には南支の要衝広東を占領し、中支の要衝漢口の占領も旬日の中に迫つてゐた。さうした戦勝の雰囲気は場内にみなぎってゐたからであらう。

蓮田応召の連絡は直ちに学習院の清水氏に

持統天皇と甥である皇太子草壁皇子とが執つてをられた。ときに新羅の僧で行心といふ売僧があつて、皇子をそゝのかした。

「そなたさまの骨相はとても人臣の相とはお見受けいたしませぬ。永らくその地位にとゞませらるるにおいては、つひには身を全うせられぬ運勢にござります。」

もともと皇子の額相は雄大、器量も速大、幼時から学問が好きなので博覧、詩文もよくせられた。長じては武道も愛され、強力で剣術を尚ばれた。性はすこぶる「放蕩」で位階の戒律なぞ眼中になく、上下の別なく交際されたので衆望があつた。

『懐風藻』が伝へる次の遊獵の詩は、大津皇子をして立たしめるに足る氣配を、濃厚に物語つてゐる。

朝に三の能士を扱ひ 暮には万騎の鎧を
開く
櫓を喫つて俱に輪たり 蓋を傾けては共に陶然たり
月の弓は谷裏に輝き 雲の旌は嶺前に張る

曠光(日光)すでに山に隠る 壮士しばらく留連す

舞ぎぬは塵かぶり
汗にじむとも惜しからじ

都へと君帰る
君無き鄙の舞殿に
誰がために銀泥の
舞ぎぬの袖ふりて甲斐ある

註「火宅」の原詩は自志(二の六七八)で、詩人が司馬として江州に在つた第三年、四十六才の作と思はれる。次の「柘枝舞」の原詩は看常州柘枝贈賈使君(三の五六二)で、詩人が五十三才、杭州刺史の任期満ちて洛陽に帰る途中の作。彼は常州(江蘇省武進県)で刺史賈某に招かれて柘枝舞を見た。作中の「君」は賈を指す。この舞は金鈴をつけた帽を冠り、美しく着飾つた舞姫たちが、柘(つみ、やまぐは)の枝を持つて舞ふもの。こんなところで種明かしをするのは野暮の至りであるが、訳詩の最後の行の「ふりて」は「振りて」と「旧りて」を掛けたつもりである。

も電話されて、その夜清水氏や同僚有志と祖師ヶ谷の蓮田宅でさゝやかな壮行の宴が張られた。清水氏は応召中の『文芸文化』の経営を蓮田に頼まれた。又、十一月号の原稿としてすでに神田の印刷屋に手渡されてゐる「青春の詩宗——大津皇子論」の校正も依頼され

この詩の冒頭の、皇子が扱んだ三能士とは「三能の士」つまり万能の士と解するのが通説であるが、「三の能士」つまり三人の参謀

退屈 吉本青司

ぼくは中学生を引率して
賭博者たちといっしょに
夜行列車の旅をした
風景はすこしも見えないままに
退屈な少年たちは
葡萄酒を買つてのんだ
ある少女は
少年たちに混つて
女王蜂のようにおしゃべりをした
冒険小説の好きな少年は
ポケットから鋭利なナイフをとりだし
友人たちに見せびらかした
ぼくは威厳ある態度で
ときどき学生たちを叱りつけたが
何の役にもたつたが
賭博者たちは
少年の貧しい懐をうかがい
容易に
少女たちを眠らせなかつた

るところがあつたらう。

翌十八日午後一時三十分発の急行で蓮田は郷里熊本に向つた。敏子夫人、晶一、太二君を初め、清水氏や同僚生徒達の東京駅頭での盛大な歓呼は、車窓の右にゆうゆうたる富嶽を仰ぐ頃まで蓮田の耳から消えなかつたであらう。陸軍少尉の軍装で車窓に威儀を正してゐる蓮田……。彼の脳裏に去来するのは、去月発表した家持の永生希求の悲願だつたらうか、それとも、来月発表される警余の池に鳴く鴨の声に賜死までの時限をはかつてゐる大津皇子の悲痛な運命だつたであらうか？

言はゞ応召とは一種の賜死であつた。生還といふチャンスが、個人の肉体の頑健さと武器の物理的な偶然性にだけ残された賜死であつた。蓮田は家持の永生希求の悲願とはおおよそ反対の、賜死の悲劇に陥つた大津皇子の青春悲劇に深く思ひを致したことは、刻々と迫る応召の運命の足音を聞きつゝ、自らに賜死の時の覚悟を強ひるためだつたのであらう。

時は家持の死より約百年を遡る朱鳥元年(660)のことである。父君天武天皇が崩御されてからまだ一月もならぬ日のことである。政事は大津皇子の叔母君である皇太后(後の

と解した方が味ひがある。事変後、飛弾の寺に左遷された行心、伊豆に流された帳内の磯作道作の他一人であらう。他の一人は八口朝

服 装

夜の待合室の鳥籠の中で
青い鬚哥が
しきりに歌のけいこをしていた
コーシキ コーシキともきこえ
コーシヨク コーシヨクともきこえた
かみを金髪にした
エクセントリックな女の子たちが
鳥籠のそばで喝采していた
青年たちは
ランボダかマンボダかのズボンをはき
安もんの煙草をくゆらしながら
女の子のお尻を追つかけていた
ぼくが売店で買った新聞の
詩の批評欄はまったく退屈だつた
詩もなかつたかも知れないが
批評もなかつた
流行衣装を着ない作品なんてものは
批評家のさんにはかからない
日和見じょうずな批評家も
これでは
誰かのお尻を追つかけている
ほかなからう

臣音響、老岐連博徳、中臣朝臣臣麻呂、巨勢朝臣多益須の中の一人だらう。それとも、曠光（天武天皇）がすでに山に隠る……と、大津皇子が叛意をあかした親友で、それを密報するにいたった「懐風藻」に「その才情を薄んず」と評せられる軽薄な河島皇子その人であつたかもしれない。

大津皇子は叛意を決すると伊勢に同母姉の大伯皇女を訪れた。斎宮だつた姉君に相談すると共に、神意を伺ひたかつたのである。皇子には氣になることが一つあつたからである。皇子は父君天武天皇・皇后立会ひの上で異腹の五皇子と共に吉野宮の神明に、天皇への忠誠と、兄弟相扶けて永世抗ふことがない旨を誓つたことがあつたからだ。この日、天皇皇后もまた異腹も一母同産として慈む旨を誓はれた。

二人行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越えなむ

重大決意を堅めて京に帰る皇子を、姉君は心もとなげに見送つたのである。

しかし皇子には期するところがあつたらう。当代ならぶ者がいない和漢にわたる才氣行心が覇者としてうらなつた卜占。その行心を合めての三人の参謀の智略。いや、なにもまして酒杯を汲み交した万騎こそ力であ

視線

堀ノ内 歴

公園住宅の立つ空地からは四方の景色は見通しだ

「クマちゃんネ 今日お山洗うのん忘れていよるねんヨ見てみい父ちゃん」

棒立ちの傍でチビが手を引っぱる

「あゝ そうだつたね クマがね」

真東に生駒山脈が眼近く迫つており大方の日山肌は明瞭に見てとれる

雨後や風つよい日はとくにくつきりし熊ちゃんが 山をていねいにあらう

というこゝになつていたのであつたが今日は朝から風のない小春日和

乾いた土くれの地面から陽炎がのぼり珍らしく山がすっぽり白く霞んでいた

チビはその方を射るように見据えながら眼も心も離そうとしないまゝで

「お山へ僕らも行こうネ明日でもネ 決つとネ」

「ウン／＼ そうしよう」

氣のない返事で相済まなく思ひ乍ら……

一九五九・十一月二六

る。吉野宮での神誓がなんだらう。姉君が奉仕する大神宮に祈願したのである。神助は必ず降るであらう。そもそも父君天皇も壬申の乱の覇者であられた。大海人皇子として弘文天皇を近江に攻め滅ぼして皇位に即かれるには、人心の帰趨、万騎の支援を得たから可能だつたのである。その乱の出征者、武勳者としての体験ある皇子は、さう……勝算に加へるに大義名分をもつてしたらう。

あにはからんや、十月二日皇子は帰京するやいなや捕縛されたのである。留守中に三能の一と信じた？ 河島皇子が叛いてゐたからだ。皇子は訳語田の家（大三輪町太田）で死を賜つた。時に年二十四。妃の山辺皇女は髪を振り乱し裸足のまゝ走せ帰つて夫君の死に殉じたのである。

かく悲運の皇子は徒死したが、和漢両様で残した未曾有の辞世の詩歌は文学史に光芒を放つ結果となつた。

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

金鳥は西舎に臨み

鼓声 短命をうながす

泉路に寶主なし

この夕 誰が家にか向はむ

糸まきのカン

池沢 茂

ぼくの家では、さいきんお勝手を改造して建て増したついでに、ようやくガスレンジを買つた。それには自動炊飯器が付いている。すると、幸吉はさつそく、その翌日ぐらいに

しきりに「ジドウスイハンキ、ジドウスイハンキ」と言いはじめた。そう言うのが、おもしろく、うれしくてたまらないというふうだつた。ぼくたちのいる茶の間から、ガスレンジのある板の間のお勝手のほうへ、板の間のお勝手から茶の間のほうへと、とんだり、はねたりしながら行き来して、くりかえし『ジドウスイハンキ』と発音する。そのあいだに自動炊飯器のほうを、とき／＼、ちら／＼と流し目に見えたり、あいまいに手をくねらせて指さしたりもする。長年さびだらけになつた安物のガスコンロばかり使つてきたぼくたちが、ピカ／＼のガスレンジを買ひ、ことに自動点火装置や自動炊飯器がめずらしくためしに、なんべんも火をつけてみたり、しきりに話題にのぼせたりしていたのを、そば

朝百舌

山根 忠雄

朝の机に論文の稿をすすむ

時に突如として

百舌啼けり！

一声二声また三声……

一心に

かげりなく

快晴の空に強く木魂して――

論文の稿をすすむる時に

あたかもよし！

一心に

またかげりなく

快晴の朝空に突如強くこだまして

百舌の啼くは

まことによきかな！

で見たり聞いたりしていたからに違いない。さつそくおぼえて言ひあらわせるようになつたのが、なんとなく誇らしそうにも見える。また、わざ／＼口に出して聞かせるのが、遠慮がましく、はずかしそうな素振りもある。『ほら、あんなむずかしいことを言つてる』とぼくは妻に目くばせした。『子供って、おそろしいわ。親の気持が、そつくりそのまゝ、うつるんやもん。幸ちゃんもきつと、わたしたちと一緒になつて、よろこんでくれているんやわ』と妻は答えた。『うん……』

ぼくはうなずいたが、そのときはもう、別のことを考えはじめていた。親の気持をそのまま反映するのは、たぶんたいいの子供にとつて当然だろから、この点に問題はない。むしろ妙に反応にとぼしく、親だけでなく周囲のどんな人たちの気持もなか／＼反映してくれない点にこそ問題はあつたのだが、さしたつて、幸吉はなぜ「自動炊飯器」などという名称や器具を、じきに、たやすく、おぼえこむかということだつた。ぼくには、それよりも、もつと平易な、なんでもない日常の、基本になることばのほうをさきに、おぼえて欲しかったのだ。食事どきに『おなか、へつたやろ』とたずねると『おなか、へつたや

ろ」と答える。かさねて『ごはんたべよか』とたずねると『ごはんたべよか』と答える。もう十分なれているはずのほくも、とき／＼その意味を取りあぐねて、しばらくのあいだ顔をうかどわすにいられない。すると幸吉はじれて『たべよか、たべよか、たべよか』と言いつのつてくる。それで、ほくも、幸吉が『おなか、へったやろ。ごはんたべよか』と答えたのは『おなかへった。ごはんがたべたい』という意味だったと納得する。ふつうの子供なら二つか三つになれば十分正しく答えられることでも、オウムがえしに繰り返すだけの返事で代用しているにすぎない。それ以上の会話へは、もはや進めてゆくことができない。自動炊飯器などをたやすくおぼえるのは、たぶん幸吉が、機械や器具のたぐいに、特別の興味を持っているからなのだろう。坂をおりるとき、坂をあがるか、あがるか』と言いながら、はしゃいで、駆けおどりゆく。「あがる」と「おりる」の区別を忘れていたのだ。

こんな傾向はしかし、ずっと早くから、あらわれていた。耳が遠いわけでもないのに、だれが、いくら呼んでも、返事どころか、まるきり見向きもしない。やさしく言い聞かせても、かみつくように大きな話で話しかけて

も、素知らぬようすで、あらぬほうばかり見ている。なにか飲食物が欲しいか、大小便がしたいか、いっしょに遊んでもらいたいかなど、たま／＼自分の欲望や関心に合致し共鳴したときだけ、ようやく反応がおこってくる。そのほかの場合には、いわゆる生活反応が、全然あらわれてこない。しつけようにも教えようにも、その手がよりさえ無いのに等しかった。ことほも、だから、なか／＼おぼえなかつた。オシとまちがえられるくらい、口数もとほしがつた。こんな幸吉だったが、ある限られた範囲で、意外な知能が働くのだ。二つ三つのところから、幸吉は棒や板のたぐい、カンのたぐい、ビン、のたぐい、穴のあいたワヤクギやカギのたぐいなど、六歳の現在にいたるまで、つき／＼と、いろんなガラクタを収集する妙なくせが続いていたが、はやくから「板」と「棒」を区別し「ミルクのカン」「お菓子のカン」「お茶のカン」「ジュースのカン」「くつずみのカン」など、いろんな種類をすべて識別していた。ビンでは「くすりのビン」「しょうゆのビン」「ソースのビン」「お酒のビン」「菌みがきのビン」などと一々正確に名付けていた。ことさらに教えたいわけではない。ほくや妻が、カンやビンが必要になり、幸吉の収集のなからそつと引

虫の日

芳野 清

風が吹き上げる
郷愁を
雨が打ち叩く
懶惰を
少女の眸のやうに
うっとりとした日は
かへって落ち着かなく
かみの日の日記を食む
月に暈ある夜は
妄想的醜を育くみ
果たされざる
悲しき情痴の夢を夢む

き抜いておくと、幸吉はじきに気づいて『お茶のカン！ お茶のカン！』あるいは『赤いふたのくすりのビン！ 赤いふたのくすりのビン！』などと泣きわめきながらさがしまわるので、いつのまにか勝手におぼえ、知っていたと、ほくたちはおどろくのだった。

カンの収集のなかでは「糸まきのカン」と

無縁

美堂 正義

新聞には無縁の記事が多い
家庭料理にしても
中市では集らないし
経済もゆるしさうにもない

スケジュールがギッシリつまって
秘書の組んだダイヤ通りに走り廻り
どんな集合か忘れて祝辞が云へないこともあ

秒魔に追掛けられてある知事の話
月が二つに見え
羽織を裏返して着たり

名付けていたのが、一番ながく、最後まで残っていた。ゴムばんそうこうの巻いてあったブリキ製の器具で、セロテープなどが巻いてあるのと同じ形をしている。こんなものはないという名称なのか、ほくも知らない。しかし形はたしかに、ミシンなどに使う木製の糸まきと似ている。ブリキ製で、一種の容器だから、やはりカンに違いない。すると「糸まき」を食ふ暇さへなくて忘れる

僅か三時間の睡眠で
そのひとたちの神経は別紙へであらう
体も特別製でなくては保たないだらうし
ずぼらな僕は適当にさぼり
そんな生活から落伍するだらう
いま位でも僕は結構忙しい思ひをし
疲れを明日まで持ち越す
雨の降るやうな日には
一日中蒲団のなかでのうのうとしてゐる

世の中には
想像を絶したことがあるらしい
いま本を読む時間もあらし
いまからそんな生活が来るとは考へられない

きのカン」が、まさしく適合する。そしてこれは、大小さまざまなかんの収集のなから区別するために、幸吉がいつのまにか創案していた名称だったのだ。
「幸ちゃんも頭がわるいのんと違うわ。頭はいゝのんよ」
「うーんなあ。そうかもしれない。しかし、それにしたら、ハイもイムエも、オハヨウもコンバンワも、サヨナラもイラッシャイも、なんにも言われんのは、なぜやろうなあ。どうも、よくわからん」
妻に言われて、ほくもとき／＼考えこんだ。ほとんど絶望してはいたものゝ、そう言われると、ふと、自分のほうがまちがっているのではないか、幸吉には案外な能力がひそんでいて、自分ではないかと、自分が責められ、とまどうのだった。

詩集墓碑銘

岩崎昭彌著

果樹園叢書
「墓碑銘」感動して拝読しました。「親切な嘘」のかたに於ける兄君の眞実を移動する部隊と共に描いて行つた強烈で特異な話。「雲灼くる光うけとめてバゴダ立つこ過ぎ征きて軍還らす」にはダンテの地獄の銘文をさへ感じとりました。(奉送文章)
頒価 二〇〇円

編集後記

本号で果樹園は一冊の欠刊もなく第四巻を完結した。桃栗が突るには充分な歳月を経過したが、柿が突るためにはまだ倍の年月が必要と勘定になる。

創刊の頃にはまだ京大の一期生であつた田中氏の字息は、この三月に大学を卒業すると大蔵省のお役人になる由である。早いものである。僕は田中氏と同年、大学も同じ年に出たが、長男はこの春小学校に入学する。僕栗と柿の聞きどころではない。田中氏が近頃しきりに歌ふ初老の息吹は、僕にとっては羨望できへある。長男が田中氏の子息のやうに立派な社会人となるためには、後二十年ちかくかゝる。さうなれば僕は七十である。しかもかくやくと働か突入りもよくあらねばならない。想つただけでも世帯の感に堪へない。が堪へないなどは言つてはをられない。従つて瘦我慢でも僕は初老を歌はない。

こんな僕は傍から見ればよほど滑稽に見えるに相違ない。江藤氏の評論を読んだ池沢氏から、次のやうな書簡をいただいた。

「江藤氏の評論だけ、さきに読ませていただきました。この人は現代の一番若い一番新しい評論家と言われました。ますのに、相当な旧人（お叱りを受けるかもしませんが）の小高根さんたちと、非常に近い血縁の精神なのに、おどろかされました。」とあつた。これは僕にとつて青春の余燄でも見るやうな誇りになるかもしれないが、初老の僕等の血縁だと言はれては、江藤氏にとつては迷惑どころか噴飯ごとくもならない。

十二月八日萩原素子さんの「父・萩原朔太郎」の出版記念会がある由案内をいただいた。発起人は室生犀星、佐藤春夫、中河与一、三好達治、河上徹太郎、草野平平、佐多稲子、山岸外史、伊藤信吉諸氏。日頃僕らで血縁と信じてゐる方々が多いので出席したかつたが、勤めを持つてゐる

身には歳末の多端で、視覚だけで失礼させていた。もつともその案内をいたゞく十日前、勤めの上の要務で上京したことがあつた。在京の同人諸氏に連絡して久しぶりの家談するには充分な余暇がなく、やむなく世田ヶ谷の兄に家立立ち寄れただけだつた。素子さんの住所と同じ二丁目である。もし寸暇があればお訪ねして敬励しようと思つてゐるが、新箱に買物に出掛けた老母を待つてゐるうちにその寸暇も失つた。

それほど私は素子さんが書かれる随筆に日頃感銘してゐる。山岸氏の主宰する『青い花』に連載された「萩原朔太郎の思ひ出」や、中河氏の御弟子さんたちがやつてゐる随筆版刊の「ラマンチア」月報に時に掲載されてゐる隨筆を拝見して、改めて当初の感銘を深めると同時に、二十年以上も前の青春の日を回想させられた。

その頃私は上京すると、必ずといつていゝほど世田ヶ谷中原の先生の家をお訪ねした。玄關に佇むと怒り肩の先生のお母さんがちらり……と、こちらを覗いた。来訪者の人相と風貌を一見して、先生に会はせるか会はせないかを決めるのである。私はいつもきちんとは持はせていたのだから、待機してゐると、巻頭の家族と一緒に写つてゐる制服姿の素子さんがお茶を運んでくださった。その後から午風屋で頭髪をさんばらにした先生が、風にも吹かれたやうな恰好で入つてこられた。前屈みに椅子につかつた、犬のやうにクン……クン……鼻を鳴らしながら若い詩人の話をされて、三十以上にならぬと現代では一人前の詩人になれぬと諭された。

一度田中氏と先生宅で落合つて、先生を呑みにつれだしたことがあつた。銀座裏のおでんやで呑んでゐるうちに、私は用意してきた色紙三枚をとりだした。一枚は借用、一枚は田中氏分、一枚は伊東静雄のための用意だつた。上気嫌で手品を乱発してをられた先生は、筆と硯を取り寄せる

と註文の詩句を、クン……クン……鼻を鳴らしながら書いてくださった。現に僕が秘蔵してゐる色紙には

火よ
沈黙して
言はざるかな
と書かれてゐる。興に乗つた先生は三枚の色紙では物足らず、奥から大福帳を取り寄せると、思ひつかれた詩句を次から次へと書き流して、たゞまらぬ大福帳を埋めてしまはれた。今おもへば、その大福帳を買つておかなかつたのが残念である。

「父・萩原朔太郎」での庄巻は、前にも書いたことがあるが、素子さんが情薄かつた生母との関係を書いた「幼いころの日々」である。その生母と今は隣同志で住んでゐる心する。本号で田中氏は悪い恋愛をした素子さんの話を詩述した勇氣で今度はその悪い恋愛を書いていただきたいとである。父譲りの透徹した筆致は成功すること必定である。

新年までにはまだ半月あまりあるが、とりあへず読者諸氏の御多幸を祈つておきます。

果樹園 第四十八号（毎月一日一回発行）
昭和三十五年一月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
発行人 池田市野町一六八
印刷所 同 朋 舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園 第49号

蓮田善明とその死	小高根 二郎	或る日	美堂 正義
神の試煉	小高根 二郎	穀の賜わり	吉本 青司
冬の死	堀地 邦樹	光の賜わり	堀内 歴
夕やけ	堀口 太平	乗り物	池沢 茂
		白居易詩抄	森 亮
		僕の入院	田中 克己
		冗語	森 亮
		元旦詩評	堀地 邦樹

蓮田善明とその死 (七)

小高根 二郎

磐余の池に鳴く鴨。天智天皇いらい時を告げるために設けられた時鼓。その鳴声と鼓音が聞えなくなつた時が死である。死への招待の時限である。蓮田は天津皇子と共に激しく息づきながら、敗北者となつた皇子の青春悲劇の裏側にある真相を「日本書紀」「懷風藻」が伝へる政治的な記述を越えて、これを純粋に文学的に探らうと努めてゐる。

この注目すべき蓮田の立論は、万葉巻二に収録されてゐる石川郎女に贈つた皇子の次の

歌の味到からきてゐる。

大津皇子、石川郎女に贈りませる御歌一首
足引の山の雫に妹待
つと吾立ち濡れぬ山
の雫に

大津皇子、磯に石川郎女に婚ひし時、津守連通その事を占ひ露はしつ。皇子の御作歌一首
大船の津守の占に告
らむとは正しに知り
て我が二人宿し

つまり、皇子が石川郎女に婚ひ給うたことを、津守の連が卜占で暴露し

たといふ事実の裏側には、単なる恋愛問題でなく、皇位にからまる謀略が潜んでゐる……と、蓮田は鋭く推理してゐる。
さう言へば、第一首の初句「足引の山の雫」から第三句「妹待つ」とのつながりは唐突である。万葉の行動の詠法からするならば、「妹を待つ」ための結果として「足引の山の雫」にぬれねばならぬ順序である。皇子は経験事実の中から、特に冷たく己をぬらすものを抽象して歌の前提にしてゐるのは、その冷たいものに対してじつと耐へてゐる氣組を示すものだ。しかも、その冷たきもの（山の



演習時に於ける陸軍歩兵小尉蓮田善明

「雪」を結句にリフレインとしてある。そこに濡らすなら濡れてやらう……といふ皇子の激しい対立意識と悲壯な反抗の覚悟とが看取される。

第二首はその覚悟の表明であり、反抗の宣言なのだ。大船の津守といふ看視者。その邪意に満ちた存在を皇子は「正しに知り」つつ敢て「一人宿」たのである。禁忌すべき恋愛を敢行したのである。

この皇子の恋愛対象である石川郎女は、万葉集中もとても浮薄な技巧的な恋を弄してある異常な女性である。美男で風流の誉高い大伴田主に恋をとげんとして、ある夜さ老女に化けて田主の寝所に火種を乞ひにいった。火種のはてりて老女ならぬ恋に燃えた女が眼に入る計略である。田主は面倒なので勝手に火種を取らして飯して了った。折角の計略も水泡に飯した。恥をかかされた結果に終わった彼女は、へみやびをと「吾は聞けるを 屋戸かさず 吾を還せり 鈍のみやびを」と、後日歌で復讐した。

佐々木信綱博士はこの石川郎女は二人あると推定してをられる。つまり、久米禅師と譬喩歌を贈答した石川郎女。旅人の父安磨の妻となつた石川郎女。前述した田主を誘惑せん

として果せなかつた石川郎女。この同一人の石川郎女が大津皇子に婚つたとすると、彼女の齡はすでに四十であつたといふ論拠からである。しかし、この論拠からこそ、逆に醜聞にからまる蓮田の謀反説は正当化される。四十女。いかゞはしい風聞のある中年の石川郎女。彼女に敢て皇子が関係したといふ事実は、看視者である津守通を手先とする輩に乗せられる隙を、皇子自ら作つてそれを反抗の宣言にしたのである。

この大津皇子・石川郎女醜聞事件を、「古事記」の允恭記が伝へる軽太子・衣通王女醜聞事件に蓮田は対比してある。つまり、允恭天皇崩御するや皇位は軽太子が継ぐことに定つてゐた。ところが太子は即位前に美人の誉高かつた実妹の衣通王女と夫婦関係を持つたので、臣下や人民は背いて弟の穴穗皇子についた。軽太子は大臣の大前小前宿弥の家に逃げこむと兵を構へた。穴穗皇子も兵を起して大臣の家を包囲した。大臣は兄弟相戦ふ愚を論じて、結局、軽太子を捕へて穴穗皇子のもとに突きだした。太子は伊予に流され、王女もその後を追つてゆき、共に自殺した悲劇である。

蓮田はこの事件を単なる禁忌すべき恋愛一

神の試煉

ク ロ ロ ウ

おまえたちの声は果汁のように甘いが
風や青い潮にひっかきまわされて

むしりとられた雑草のように

拷問にかけられて 血にまみれた僕の

項の皮膚は

散々の鞭打ちに黒くみみずばれし

別の国から射してくる美しい

照りかえしをあびて腐ってゆくのだ

その光は鋼玉のように底深く光を発して

暗示するかのよう 僕の唇にふれてくる

赤池の向うにあがつた月は

優しい人の瞳から

発した視線のようだ

月がみちてゆくのを恐れやしないが それは

あらあらしい欲情のようにふくれあがつて

無数の古傷のひらめく苦痛の中にくだけて

ささってゆく

強くもない梅酒でも口にすれば

僕には永遠の安息があたえられるのだ

瓶の口からただよってくるその香は

暗示するかのよう 僕の唇にふれてくる

面頬にのこつたかすかな昔の面影も

汗と血の渦の中に消えてゆくのだ

名ばかりの小さな顔が 絶叫の颯で

世界を刺しつらぬき

刃が僕の肉をさき

僕の腹の中までつきさすときには

ずたずたにさかれた僕の皮膚は

苦逢の叢の上にぶらさげられるのだ!

ああ不安よ あらゆる恐怖の源よ おまえは

暗示するかのよう 僕の唇にふれてくる

ただひとり瀕死の床に伏すかのような また

つきつけられた銃にささやかれて あるいは

苦痛にはりつめた

わが身の重量を けいれんしながら

からがらにしがみついて

麻繩にささえられているとき

僕の額には ピタゴラスの図面のように

生気がわきおこり

小さな希望の光がさしてきて

暗示するかのよう 僕の唇にふれてくる

Heimsuchung, 1949 -

たかはし しげおみ訳

肉親相姦がもたらした悲劇とは見てみない。太子の有名な恋愛へ 笹葉に 打つや殿のたしだしに率寝てむ後は 人譲ゆとも 愛しとさ寝しき寝てば 刈薦の 乱れば乱れさ寝しき寝てば、の人譲は、表面的な恋愛事件の裏に潜む謀略を暗示してあるからである。先の大津皇子を看視した津守通に対比すべき人物は、歌で太子が隠れてゐる事実を皇子に密告した大前小前であつたかもしれない。ともあれ、蓮田はこの諦念に流れてゐる軽太子の抒情に対し、「我が二人宿」といふ大津皇子の抒情は自主的な行動意志が明確な事実に着目してゐる。太子の場合は「並び居る」同格の二人であるが、皇子の場合は「吾」といふ自主性が行動してゐるからである。

伝記作者の私には、蓮田の大津皇子論そのものよりも、なぜ蓮田が大津皇子の運命を書かねばならなかつたか? といふことの方が重要である。蓮田は次のやうに結論してゐる。

「若人は死に臨んで「百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」と、「生」と「死」を恐ろしいまでに識別してゐる。更に言へばこれほどに「死」をリアリ

ステイックに見つめたものはこの皇子以前に嘗てない。この死に吾を死なしめてゐる。この、「死」に吾を迫めて「生」を鳴くものを見てゐる。此の詩人は今日死ぬことが自分の文化であると知つてゐるかの如くである。(中略)

予は、かゝる時代の人は若くして死なねばならないのではないかと思ふ。新しい時代を表明するためには若くして死ぬ——我々の明治の若い詩人たちを想ひたい。それは世代の戦ひである。かういふ若い死によつて新しい時代は斃れるのでなく却つて新しい時代をその墓標の上に立てるのである。年齢も不思議に精神の構想となる。中世の文人はまことに高齢で八十歳以上を平均年齢としてゐる。斎藤博士「精神美」と此の若い皇子は恐らく本心皇位を狙はれたのではない。それはこの皇子の現実ではない。而も古い世界からは然う見られ、然う誘はれ、然う罪せられる。それも自ら知つてゐる。然うして死ぬことが今日の文化だと知つてゐる。懐風藻は「性頗る(頗る)とは少しく位の意)放蕩法度に拘らず、節を降して士を礼し、是に由て人多く附託して、(中略)遂に戮辱を以て自ら終る、云々」と

記してゐる。」

蒲田はこゝで死は文化であると言つてゐる。死は敗北でも勝利でもない文化であると言つてゐるのである。つまり言へば変転が日常である革命期の死の倫理と言へさうである。

唐化革命の強力な推進者であつた天智天皇その批判者として壬申の乱を敢行した天武天皇。この二律背反に對して、和漢兩様の辭世をこの世に残すことによつて、シンテーゼたるべかりし宿運——文化を後世に訴求した大津皇子の死から、蒲田は明治の新時代を表明するために若死した詩人……たぶん、透谷や子規や節を回想してゐる。そこからさらに蓮田はへすべてのものは吾にむかひて、死ぬといふ、わが水無月のなどかくはうつくしき」といふ伊東の死の倫理が象徴する、昨秋逝つた久慈や中也の死に想到したのであらう。蓮田もまた彼等と等しく、死を文化たらしむべき墓標の一つたんとする覚悟を、応召といふ賜死の運命を前にして自らに強ひたのだと言はねばならぬ。

「覚悟はすつかり出来た。心境が水のやうに澄んできた」(昭和十三年「文芸後記」十一月号清水文庫後記)

さう……その頃、蓮田が清水氏に語り、淡

々として平常と変らぬ態度で西下したといふ事実は、私の論述を裏証する。

冬の死

福地邦樹

わたしの隣人は恐らく胃痛なのであつた衰弱しててもう清らかな顔にならなかつたおない年という若い丈夫な奥さんが付添つていてある風の吹く冬の夜

わたしの貸したアンデルセン童話集を奥さんは夫のために読んできかせた

「人魚のお姫様」の中で

何度か出てくる接吻という言葉を岡山なまりの奥さんはシェップンと発音するので

わたしはひとりおかしかったが病人は涙をためて

王子を恋する心美しい人魚の物語に聞き入っていた

それから半月ほどのちの暗い寒い朝

命令の貫通することを見事に覚知し、之に敵肅に服従することを本分とし、美しく沈黙してゐるのである。これほどにすべての者がひたすらに、最高のものに我をさし上げ、たとひ愚なる一兵たりとも、最高のもののみたまを享けてゐることを固く信じえて、雄々しくそれのみを語るものがあらうか。それが又私自らの憤ひともなつてきたのであらうか。」

「作戦要務令」と「軍人に賜はりたる勅諭」を原典として初年兵を訓練してゐる蓮田は、それが又私自らの憤ひともなつてきたのであらうか……と述懐するほど、教へつゝ教へられる経路をへて、いつか原典の囚となつてゆく姿が覚知される。「軍ノ主トスル所ハ戦闘デアル。」この要務令の主目的を達成するために、「上官の命を承ること実は直ちに朕が命を承る義なりと心得よ」といふ勅諭の照応こそ不可缺であつた。この照応は否応なしに兵隊に沈黙を強ひた。批判や反問の釈明は文句だと言つてピンタで沈黙せしめられた。この沈黙を蓮田は万葉集の柿本人麿の歌へ葦原の水穂の国は 神ながら 言挙げせぬ國」といふ不思議な表明と對比して、そこに納得を自ら求めようと努めてゐる。

彼は息をひきとつた

わたしはその時 別の病室に移されていったので

知らせを受けて駆けつけたとき

彼の顔はもう白布でおおわれていて鼻の所だけがしらじらとするとどく盛りあがつていた

そして今は不要になつた掛蒲団が取り去られて

毛布一枚だけが

身体の骨ばつた輪郭をつめたくかたどり爪先の所でまたひとしきり

けわしく盛り上つていた

わたしの視線を追つて 奥さんは

一昨日から足のうらが腫れはじめたのもうだめだと思つておりました

と言つて はつと涙をおさえた

数か月後 岡山からの一通の手紙を受け

とつた

わたしはその時はじめて

彼等夫婦が結婚後一年半で死にわかれたことを

知らされたのであつた

「私たちの享けてきた新しい教養は、こまやかな言挙げをこそ、識へてきた。しかし、

蓮田は昭和十三年十月二十日の早曉、熊本歩兵第十三聯隊に入營した。東北東に阿蘇連山を望む台地、天授四年菊池武光が大夫・大内・今川の北朝連合軍を撃破した古戦場——託摩野である。

そこで蓮田は入營早々召集兵訓練に従事させられた。その一ヶ月あまりの日時の所感を蓮田は「菊など」(昭和十四年「文化文芸」)といふ題で一編の随想にまとめてゐるが、そこに抽象せられてゐるのは「沈黙の美」といふ精神である。

「私は此頃五十名許りの兵隊を毎日六七時間づつ教育してゐる。一言に言へば、その教育は私の命令のままに教練を受けるうちに、軍人精神の充溢した一人々々の兵隊になつてゆくことにほかならない。その中で彼等は言を発すべからざる時には一言も口を開かざるやう訓練づけられ、私情を述べざるを恥とするやうになる。しかもかゝる中を通して最もあらはに触れ合ふものがあり、それを言としたい衝動に燃えるのである。彼らは自分の中から、露のやうな澄んだ一点を思ひ出し、最も大切と思ひ、それが磨かれそれが強くなり沸き立つのを感じ、拙い一教官の命令に、絶対なるものの

今この言葉を断つ古風な表明が郷愁のやうに、ほのぼのと息吹き来るのはどうしたところか。私はそれを語るべく理由をつきとめようとしてはゐないが、寧ろひとつの感覚として、それが私を捉へ、強く支配し服従せしめつゝある——。」

といふ言葉が、蓮田のその複雑な心境を微妙に物語つてゐる。

蓮田がこゝで理由をつきとめようとせず、感覚として肯はうとしてゐる「沈黙の美」とは一体なになのか？ 言ふなればそれは「秩序の美」である。命令一下……歩調をとり、或ひは並足となり、時に休止し、つひには散りつゝ疾駆して最後に突貫となる。この格一な秩序が日々の訓練によつて形成されてゆく様子を、陸軍少尉といふその秩序の享受者の立場から蓮田は肯はうとしてゐるのである。四月十四日の蓮田日記でも明確なやうに、地方での授業要綱はこの格一化の排除だつた。一斉指導の陸止だつた。生徒を一斉に教卓に向けるのでなく、生徒と生徒を対坐せしめて自主を発見させるにあつた。この授業要綱を棄却して要務令が命じる格一化に転身せざるを得なくなつた蓮田は、格一的な秩序、沈黙の美に、感覚として捉へられ、強く支配さ

夕やけ

堀口 太平

田舎のばばちゃんのところ、
 蛋にくわれたあとが、
 白い梨の実についた、しみのようになっ
 ている。
 おんも、というから、
 紅殻のにおいのするあき地にでた。
 夕やけがまつか。
 花のしたにいたるようだ。
 膝にまつわつてきて、せがむので、おん
 ぶする。
 まつかなぞらから、
 かすかな油煙がおちてきた。
 しわがれた、くらしい蟬の声。
 柔い重さが、
 私の肩に、あまく光っている。
 おや、哀しみよ、こんにちわ。
 私の哀しみも、
 日に灼けて、
 みるからに丈夫そうになったものだ。
 蛋にくわれたあとのような、
 保安官のバッジをつけている。
 (三四、一一一、一八)

れ、服従するやうに努力しなければならな
 ったのである。

この運田に対し、伊東はもともと「沈黙の
 美」「秩序の美」の享受者であり、愛好者で
 あった。伊東は詩を完成する最後の彫琢の時
 間として朝礼の時を選んだ。南大阪にある大
 阪府立住吉中学校。鈴懸をめぐらした校庭。
 始業のサイレンと共にぞろぞろ千余の生徒は
 学年別に整列する。壇上に登った校長に対す
 る敬礼。校長と入れ替って登壇した体操教師
 の命令で、生徒達は一斉に黒い小倉の上衣を
 脱がされる。咲きそろうた菊花のやうに純白
 なアンダー・シャツ。彼等は、命令一下……
 屈伸し、跳躍し、翻転し、休止を繰返す。教
 師等は壇側に序列順に堵列して体操を見守っ
 てゐる。前から六番目が「乞ちゃん」と仇名
 されてゐる生徒係長の伊東である。蓬髪が朝
 風にそよいである。針のやうな不精ヒゲをは
 やしたまゝの顎は微かに上下に動いてゐる。
 ひそかに未完の詩句を彫琢してゐるのであ
 る。

いま如何ならんかの暗き庭隅の菊や薔薇
 や。されどわれ
 汝らを憐まんとはせじ。
なんじ あはれ

或る日

美堂 正義

小春のやうな暖さ
 舗道を横切らうとすると
 真向ひの硝子窓が眩しい
 シンとした風景を
 バスが通り 電車が行く
 思ひ直してビルの屋上に登れば
 風は潮の香りを運んできて
 荷足船のない今日の川はだゞ広く
 水の反射が
 鳴交はす囀らを明るくす
 上流から竝ぶ橋は
 いろいろ変つた姿を見せ
 兩岸をしつかと結びつけて
 ひととひとの心を繋ぐやうに
 人生がそれぞれ違つて
 有情と非情が混交した思ひが
 しばらくは私を離さない

殻 倉

吉本 青司

浜木綿から競艇が飛び出す
 快適なローリングと共に
 そこは 白い記憶の倉
 松食虫ついでいやな奴だ
 縁日の日傘のように枝をひろげた
 岐路の松はそいつに食われ
 幼ない愛の記憶は住み家を失つた
 はぜの木には近よらぬがいい
 でも 免疫性のぼくは
 幹に触れてもかぶれはしない
 秘められた記憶は
 はぜの林に蔵しておこう
 もぎ取られた蜜柑の木には
 何を守らせよう
 球果がフレームへ運ばれた後は
 失意の記憶が残るばかりだ

運田の「菊など」と同時掲載をされた、既
 述した伊東の「野分に寄す」の中の詩句であ
 る。伊東は鋭い鷹の眼をしばたいてゐる。跳
 躍する白い菊花群を映してゐる茶褐の瞳孔。
 その臉の下縁はあやふく溢れんとする涙を支
 へてゐるからである。

乗り物

池沢 茂

幸吉が三年と二、三か月になったころ、妻
 はしきりに、絵本を買い与えるようになった。
 いなかの両親から、幸吉の成育がおくられて
 るのを指摘されて「もう絵本ぐらい読めるこ
 ろやないか。こんなことにはシマツせん」と、
 どん／＼買うてやうて、教えてやらなあか
 ん」などと注意されたからかもしれない。は
 じめは一冊、二冊と、ものめずらしく、安
 いのを大切そうに買っていたが、やがて、つぎ
 ／＼に、なるべく上等なのを買い求め、へ
 やじゅう絵本だらけになった。家計はまずし
 かつたから、いくらか意地になっていたおも
 むきもある。ぼくも影響を受け、連れだつて
 買物や散歩に出ると、きつと本屋のまえに立
 ちどまつた。まず絵本を調べ、一冊はかなら
 ず買う。ぼくはそれまで、とき／＼不安にな

光の賜わり 堀ノ内 歴

近くの病院の元陸軍元帥は私の唯一
 の友人で敬愛する閣下である

七草がゆを喰つてるとき
 おくれ賀状が配られた
 「閣下」からのものである
 風てん院をお忍びで
 とまどき閣下がご来遊
 夏冬かわらぬドテラ着に から傘一本
 たばさまれ かたくななその御一儀さ
 カララケラケラ うつくしい
 笑いをみせに来てくださる
 「賀春 御殿は部下の花さかり
 おまえにも 東方ひかりのかたまりを
 あたえたい 伝書ばとにたくすから
 受けとるやうに」と書いてある
 のこりのかゆは流しこみ
 さて あらためる裏おもて
 あな ありがたや かたじけな
 「これぞまことの 黒田ぶし……」
 眼玉パチクリ 腰ふらふら
 おもては今日も よい天気
 「九六〇・一・七

りながら、しぜんに読める時期がくるまでと
たゞ漠然と待つていたのだ。妻から相談
されても、たいていは浮かぬ顔で「買ってや
つても、それだけの効果があるかなあ。こん
なこと言いたくないけど、ふつうの子供とは
違うんや。理解できんことを無理に押しつけ
ても、役に立つやろうか」などと答えていた。
ところが幸吉が、乗り物の絵本には、関心
や興味を引きおこし、やがて、理解も示して
きたのだ。

大体いまの幼児は、むかしと違って、はじ
めは乗り物のたぐいに、一番に興味をいだく
らしい。もつとも、動物のたぐいにも、たい
ていは、そのつきか、おなじくいな興味を
持つ。すくなくとも、イヌやネコは、どんな
大都会にでも見られる。スマメ、小鳥、ネズ
ミ、金魚、それから、アリやクモ、ハエやチ
ヨウやトンボなども、見られるに違いない。
このほか、ぼくの家は神戸の山手で、池のあ
るお宮も近いから、トンビやハトはしじゅう
飛んでいるし、カメやコイもいる。近所に、
サルを街路樹にとまらせている家もあるし、
ニワトリを飼っているところもある。タヌキ
をおりに入れ、店さきに置いていた果物屋も
あった。とき／＼「ロバのパン屋」がくるか
ら、ウマも見られる。山手のほうの谷あいへ
足をのばせば、ブタ、ウサギ、ヤギなど飼わ

れているし、ちよつとした乳牛の牧場もある。
こういう身ぢかな動物たちをくりかえし教え
動物園へも再三連れていったのだから、動物
のたぐいに対する関心や興味も、当然おこっ
てこなければならぬ。

はじめのうちは幸吉にも、その芽ばえが、
あるらしかった。幸吉は神戸市のペビーコン
クールに入賞したことがあり、その賞品の一
つに、ぬいぐるみの大きな白クマがあったが
それを「わん／＼」あるいは「クマちゃん」
と呼んで、よく遊んでいた。ところが、やが
て、乗り物一点ばりになった。乗り物のほう
へ引きつけられてゆくにつれ、その他のこと
には気がむかなくなり、どん／＼忘れてしま
うのかもしれない。「クマちゃん」にも見向
きもしなくなり、「クマちゃん」にも見向
きさへ投げだしたり、水のなかへ突っこんだ
り、どぶへ放りこんだりする。いろんな絵本
を与えるようになって、そのなかから「クマ
ちゃん」に似た白クマやイヌをさがしだし、
「クマちゃんやなあ」と注意をうながし、そ
れからもつと話をひろげてゆこうとしても、
最初から、反応がほとんどおこらない。はじ
めから見向きもしないか、見ても、じきに、
ついで視線をそらしてしまう。見るのは乗り
物の絵本だけであった。
しかしぼくは、それでもい／＼と思った。ほ

中河与一著
探美の夜
上・中・下巻完結
講談社刊

かことはわからなくても、乗り物に対する
理解が、だん／＼ふかまつていったからだ。
いろいろと数が多くても、カタコトだけで、
あやふやにしか言えないなら、あまり役に立
たない。一つの種類だけでも、深い理解が得
られたなら、やがて、そこから、すこしずつ
でも範囲をひろげてゆき、ほんとうの知識が
付いてくるに違いない。幸吉は乗り物のなか
でも、船や航空機などにはあまり関心を示さ
なかつたものゝ、電車と自動車には、
たしかに反応をおこした。ことに電車では、
まもなく「郊外電車」「特急電車」「普通電
車」「モノレール」「ロープウェイ」「ケ
ーブルカー」「市内電車」「急行」「快速」な
どのむずかしい単語が言えるようになり、自
動車で「ハイヤー」「トラック」「オート
三輪」「オートバイ」「スクーター」「消防
自動車」から「警察自動車」「宣伝自動車」
「ダンブカー」などまで、絵のとおり正確に
発音できるようにになった。
ぼくはそれまでも、家に閉じこもりがちな
幸吉に運動や日光浴をさせるため、なるべく
そとへ連れて出るようにしていたが、自動車

や電車、たまには汽車などに、いつそう注意
を向けさせるようにした。すこし足をのばせ
ば、ガードのうえを山陽線が通っている。郊
外電車も山陽と神戸電鉄の二つがある。ハイ
ヤーやトラックはもちろん、大型市バスや宣
伝自動車も、すぐ近くをしきりに走っている。

白居易詩抄 (三)

森 亮

のどかなつきひ
寛いで坐り、気儘に臥、乗る駕籠は肩をゆす
ぶらない。
単衣の身軽さで、杖にすがって庭を一廻りす
る。
すき腹にしみわたる暁が三杯の酒のあぢは
ひ。
酔うてはおのれの腋の上でするとろとろねぶ
り。

いそがしから解放されて、のどかな楽しみをう
たに詠みつつ、
今やわたしは身をどのやうにでも置ける境に
くらしてある。

雪のゆふべに

劉禹錫その他と歎む

市電の通りまで坂をおりてゆくと、市電をは
じめ觀光バスも、しじゅう往来している。消
防署も遠くないから、大小各種の消防自動車
が、手にふれるようにして見られる。須磨へ
ゆけば、ロープウェイにも乗れる。おもちゃ
も、こういう実物にしたがつて、ゼンマイじ
つづく。
黄昏の悲しい灰色のなかを雪が音もなく降り
つづく。
白髪頭を楽しくくっつけ合つて酔ふほどに
神興を上げる者が無い。
四人合計すれば三百歳を越える老人どもだ。
世間は広くても今日のやうな会合は滅多にあ
るまい。

註 「のどかなつきひ」の原詩は開楽(四の六一七)で
白居易が七十歳で官吏の定年を達し、その年一ぱいで
で(?)官を退いた一その頃の作と思はれる。「雪
のゆふべに」の原詩は雪暮偶身夢得同致仕裴賓客王
尚書飲(四の六一〇)で、七十歳の作。このとき集
注者白居易と同年の劉禹錫の他に九十を越えた裴
洽と八十を越えた王超で、皆退職官吏。因みに劉は
翌年七月に亡くなった。

かけてレールのうえを走るのまで、いろ／＼
買い求めた。できるだけ多くの種類の、大小
さまざま、自動車、汽車、電車、レールな
どが、やがて、リング箱にもあふれるほどに
なった。そのかわり妻は、肉はすべてケジラ
で代用し、さかな屋へゆけば、ダシにするた
めにアラまでもらってきた。ぼくはチョコクに
二、三ぱいのしょうちゅうをのむのを、一番
のぜいたくにしていた。

「幸ちゃんがなかつてくれなんたら、生きる
かいがなみたやわ。ほかのことはどうで
も、まず幸ちゃんに、なかつてもらわんこと
には……」と妻は言い、ぼくもそれには、反
対できるわけはなかった。
「あれだけむずかしい単語が言いわけられる
のに、まとまつた文章となると、なぜ言えん
のかなあ。簡単なことでも、なか／＼言うこ
とができん……」
浮かぬ顔で首をかき上げ、ひとりごとみたい
に答えるだけだったが、ぼくも、むずかしい
単語を意外に数多くおぼえられた幸吉だから
もう一步、文章の段階へまで進んではじいと
しきりに念じていた。実物や絵本のとおりに
「快速電車」や「普通電車」「消防自動車」
などと識別できるだけでなく、せめて「快速
電車は普通電車よりも速い」「消防自動車は
ホースから水を出して火事を消します」ぐら
いは表現して欲しいのだった。

冗語

—「墓碑銘」をめぐって—
森 亮

岩崎昭弥氏の詩集「墓碑銘」に対する私の読後感が本誌第四十七号に載ったが、それに誤植があったので訂正さしていただく。私信が事後承諾のかたちで印刷されてしまったので、あれが本誌に出たことには私は関与しなかったわけであるが、私の名前を添へて出た以上は、見苦しい誤植は訂正する責任を感じる。最後から二番目のセンテンスは「詩の一篇が芸術品としても、少くともレベルに達し、レベルを遙かに越えた物も幾つもありました。」が正しい。怒っただけで引つ込むのはあいそがないから、感じたことを二つ三つ補足しておく。

「墓碑銘」は分かるスタイルでも好い詩が書けることを証明してゐる点でも注目されている詩集である。敗戦後とみに数を増して来た分、分かれぬ詩を、分かれぬから悪い詩だと極めつけるのは卑怯であるが、むつかしいスタイルが性に合はぬ人は無理をしないで、分かるスタイルで詩を書けばよい。分かるスタイルで開拓できる詩境が未だ無限に残されてゐる。

るのである。

「墓碑銘」の中で私の一番好きな作品といへば「波」。すっきりしてゐる。「インパール」(1)、(2)はもとよりこの詩集の背骨になってゐる力作である。二、三の人の読後感に挙げられてゐた「道」は私も立派だと思ふ。歩く力さへ無くなつた敗走者の夢に、恋人や晴国神社や弟が次々に現はれ、杖をついた母親が現はれたところで終つてゐると言へば、浪曲の人情物を予想させるが、それらが潜在意識を捉へる方法で捉へられてゐるので嫌味が無い。それにこの「道」は戦中詩連作の最後に置かれてゐて、全篇の反歌の役目を上手に果してゐる。既に幾つかの詩に分けて歌はれた郷里の駅や藁屋根の家が、恋人と訪れた清水寺が、招魂社の大鳥居が、再び其処に現はれて読者は一人の兵隊の死を歌つた長篇—正確には中篇—叙事詩の復習・総まとめをそれとなくさせられる。

抒情詩や準抒情詩を幾つも積み重ねて叙事詩を形成するこの詩集の構成法は見事に成功してゐる。序詩と最後の「赤い花」がワクになってゐて、それらに挟まれた二十個の詩はビルマ戦線で倒れた故人が歌つた体裁になっている。岩崎氏が亡き兄君に成り代はつて書くといふ悲壮な願ひが自然とかういふ作品を

果樹園叢書 題価二〇〇円
詩集 墓碑銘
岩崎昭弥著

産み出したのかもしれないが、結果から見ると、不運な戦争に巻き込まれた一人の兵隊の歌つた抒情詩の一つ一つが主観に溺れない安定感を持つてゐる。よい意味での作りものであるからである。最も安定してゐる「牛」は例外的で、弾薬を運ぶ哀れな輜重隊が人間の言葉で歌つてゐる詩である。劇中劇とも言ふべき作品で、読者は息抜きができる。「ティデム」に歌はれてゐる兵隊たちの松茸狩のユーモアも読者の緊張をほぐす。「インパール」(1)、(2)のやうな叙事的な作品に安定感のあるのは当然である。これら戦中詩の連作はそれを通読する読者に全篇が一つの叙事詩—長さから言へば中篇叙事詩だといふ印象を与へずにはおかない。

戦後に叙事詩を書くことが流行した時期があつたと記憶するが、さういふ自称叙事詩よりも寧ろ岩崎氏の「墓碑銘」が、現在までに現はれた戦後の最優秀叙事詩の名譽を与へられてよいものではないか。

僕の入院

田中克己

小学校の四年のとき滑つてころんで右脛骨を折つた。堺の接骨院に入院して一月半して癒つた。担任の先生の見舞を受けた時には、ちやうど勉強してゐてほめられた。二度目はスマトラのメダンの兵站病院で、原因不明の高熱四一度、注射でけろつと癒り、見舞に來た田中館秀三氏(この人はもうゐない)に現在の軍の衰勢は軍人軍属の精神力低下のせいだと叱られた。三回目は自動車事故で意識不明四日、場所は同じメダン兵站病院、意識もどるとシンガポールから二友の見舞。その帰つたあと市中へ散歩に出た。それを見て、病院中大騒ぎとなり、連れもどされると看視付きとなつた。さて今度は親友に盲腸炎を見つけれられ、やむなく開腹手術となつた。僕はこの入院をいくらか楽しみにしてゐる。それほど僕は退屈なのか。

元旦詩評

福地邦樹

元旦に新聞に載せられた詩は私の管見だけからすると、佐藤春夫の「ちいさな待ち人」(朝日)はお孫さんへの愛情をうたつたもの、同じく佐藤春夫の「光の神話」(毎日)は天の岩戸の段の戯画、二篇とも大家の遊びといえよう。西脇順三郎「季節の言葉」(朝日)は別の意味で言葉の遊びに過ぎて、発想として何らの迫真力をもつていないと思う。小野十三郎「迎春」(西園)はどいつも俳句の世界ではないかと思わせる句がある。

これらの詩人の作に比して、井上靖「元旦に」(日本経済)は氏が元來詩とは無縁の人ではないにしても小説家でありながら実に立派な詩であると感歎した。新春の新聞の詩としては数年前に三好達治の「こさめびたき」とかいふ詩が立派であったが、あれ以来であると思う。この詩には東洋の詩精神ともいふべきバックボーンを非常に清潔な形で出している。こゝにも遊びの心を含めるだけの余裕はもちながら、加うるに真摯さと、言葉の規矩というところで今時めずらしくすっきりした詩だと感じた。

こゝで思うのは、近頃の本職の詩人の方が詩がへたになつてゐるのではないかという疑

いだ。私も詩をいささか書くものとして恥ずかしく思う。今の詩人は言葉の遊びに淫して詩の本来の発想というものに何か重大な欠陥をもつてゐるのではないか。毎日芸術大賞をもらわれたという井上氏の評判の「敦煌」や「楼蘭」をまだ不勉強にして読んでいないが、その中にあるといわれる東洋のロマンテイズムがおのずからにじみ出して、この詩にまでこぼれて來ているのだからか。現代の詩に欠けている一つの要素を、こゝではっきり提示されていると思うので今後の課題として私はあえて告白しておきたい。

元旦に

井上靖

一昨年は
楓葉 荻花 秋葉々
という白楽天の長詩「琵琶行」の中の
一句に心を奪われた。
秋という季節の音が
ドイッのトリイベルヒの山小屋の
羊群の鈴の音のよう
鳴りひびき
その中に坐つてゐるのが
心たのしかった。

昨年は
天風浪々
という短い言葉を
若狭湾に沿つた小さい町の

古い旅館の横顔に発見してそれに打たれた。

波間をただよう風と潮の混血児が

微笑

私を包み、私をめぐり

私から遠ざかり流れた。

さて、今年はいかなる言葉が好きになるか。

風か、水か、光か、形のない

小さい粒子を持ったものであることに

間違いはない。

灼熱した白金線のように

何ものも受けつけぬ耀きと

一瞬に跡形もなく消えさる生命と——。

たとえば

私の生まれた時から廻り続けている

故里の水車小屋の

あのたれも知らないしぶきのような

そんな言葉がほしいのだ。

編輯 後記

昨年十二月十六日。石上玄一郎氏が弘前高校時代の後輩岩崎某を伴って久し振りで来訪した。石上・岩崎は共に高校から放校された左翼だった。東京では共に右派だといふ風聞がある……との石上の話だった。当時高根五郎といふ剣道何段かの選手があつて、再会当初石上は僕をその剣道選手と間違へてあて当然右派と思つてゐたのである。マルキストだった石上は今では仏教的アナキストであり、岩

崎は宣伝会社の社長になつてゐる。右派左派論議なんぞ時がたてば愚なることかくのごとである。酒を呑むと石上は涙をたす癖があるのに今度氣附いた。

十二月二十日。清水孝之氏が高知から来訪した。池田にある小林美術館で蕪村書画を閲覧しての飯途である。顕原退藏先生の著作の校正者としての任務を、先生の没後も管々として続けてゐる、その熱意に感激した。

十二月二十四日。中河与一氏より「探美の夜」完結巻をお恵送いたゞいた。「作品と書簡から見た伊東静雄」は未完のまゝであるが

この谷崎潤一郎伝は見事に完結した。調査のため西下された氏に僕は幾度かお会いし、そのつど伝記文字が遭遇せねばならぬ困難を語り合ひ、激励の言葉もいたゞいた。それは谷

崎潤一郎を谷口潤一郎で書かねばならなかつた事実が総てを物語つてゐる。癡愚に徹した

管である大谷崎？ にしてなほかつ不徹底な苦慮を払はねばならぬことかくのごとである。

伝記文学者が遭遇しなくてはならぬ困難を克服してめでたくこの伝記物語を完成された勇氣と努力に敬礼する。後世谷崎潤一郎を

研究する者は必ずこの谷口潤一郎伝「探美の夜」をひととかなばなるまい。

一月四日。アルベルト・カミュが自動車事故で死んだ。僕はサルトルよりカミュの細かいカ

ミュの方が好きだった。それにしてもつまらぬ死に方をしてくれたものである。享年四十六。僕より二つも若い。

一月七日。伊藤佐喜雄氏から和歌山の帰り

に來阪したと電話をいたゞいた。勤め先で会ふ約束をしたが午後五時すぎになつても現れなかつた。高等学校以來大阪を離れて三十年になる彼には、もう道順がわからなくなつてゐた筈だと後で氣附いた。

一月十日。大阪朝日の詩雑誌評に吉本青司氏の「退屈」「服婆」。産経新聞の同人雑誌評で池沢茂氏の「糸まきのカン」がとりあげられ、今年も年頭から景氣がいいぞ……と氣をよくした。もつとも昨年の両紙の同評で、

福地、池沢氏は両三度とりあげられてゐた。

一月十一日。第四十七号拙論で触れた蓮田の小学校時代の恩師横手卯作先生が去年十月二十八日逝去された旨遺族の荘介さんから御通知いたゞいた。先生から色々資料をいたゞいたのは死の一月前であつた。拙論で蓮田と横手先生が邂逅するのは洞庭湖畔での戦場に於てである。せめて後半年生きていたゞいてその場面を読んでいたゞきたかつた。謹んで合掌する。

(O)

果樹園 第四十九号(毎月一日一回発行)

昭和三十五年三月一日発行

池田市野町一六八

編輯兼 小高根二郎

印刷所 同 朋 舎

發行所 果樹園社

池田市野町一六八

定価 三十円

果樹園

第50号

蓮田善明とその死 小高根 二郎
 尼さんの： 田中克己
 鶴 堀口 太平
 茫 寞 國弘 浩介

白居易詩抄 森 亮
 春の食事 堀ノ内 歴
 軽 風 吉本 青 司
 をかした恐怖 浅野 晃
 恋 人 美堂 正義
 冬の断章 芳野 清
 散 歩 池 沢 茂

蓮田善明とその死(六)

小高根 二郎

「沈黙の美」「秩序の美」。その享受者であり、愛好者としての蓮田・伊東の同じ傾向について先に觸れたが、「文学傳統の問題」という題で提示されたアンケートに答へた伊東の次の回答は、さらに伊東の「沈黙の美」を愛好する資質を物語ってゐて興味深い。

- 1 貴下は日本文学のいかなる作品、いかなる作家を自己の血統とされるか。
- 2 貴下はいかにして傳統を作らんとされるか。

この質問に対し伊東は次のやうに答へてゐる。

「御手紙拝見いたしました。

正当な、又時にとって大へんしんらつな御質問に対して、醜態な弁解にをらぬ返答をすることは、大へん困難に感じます。

これだけではお答へにはなりませんでせうか」

この「文学傳統の問題」に関するアンケートに対し、伊東の他に阿部六郎、中河與一、中島栄次郎、保田與重郎、田中克己、中村草田男の諸氏がなにかの回答をしてゐる。その中で伊東の空無の回答を回答としたこの返事は確かに異常である。既述したが、伊東は古今和歌集——とりわけ在原業平を血統として仰いでゐた。その逆説的な肯定の譬喩は後日三島由紀夫氏に傳統されたところである。高野夏行における三度の出会の折、恐らく伊

東はその血統に関し、蓮田・清水氏に口では語つた筈である。しかし活字にすることを拒ませたのは彼の羞らひからであらう。いや、真の実作者は抱懐する己が血統なぞ語らない。語る必要がない。なぜなら、それは作品自体の内に自づと顕現し、自ら広告をせずとも後世の史家や評家が必ず発掘する筈だからである。伊東はこの「沈黙の美」によって鬱然たる自負をも同時に語つてゐるのである。

この伊東のアンケートに対し「沈黙の美」は、奇しくも蓮田の「菊など」の次の章句に照応する。

「私は文学を憶うて沈黙を美德とし、さういふ文学を信ずべく、私はなつて行くやうである。万葉の丈夫オホウサらはこの美德に堪へて熱きやまと歌を作り永遠の女性たりしわが王朝の手弱女テヨメたちは美しい散文を作り出でたのではないか。彼等の相聞や日記は、語らざるの純粹に於てのみ、いみじくも、文学となつてゐるのではないだらうか。遠い古風な文学の新らしさを、私はさう思ひつゞけてみたりすることもある。

以上は「菊など」と題された随想の序章を形成する部分であり、伊東との相似性を物語る部分であるが、その題名に相應する核心は次の文章である。

尼さんの…

田中克己

入院中ふしぎな話がある。手術のあと三日めに看護婦さんが廻って来て「瓦斯は出ましたか」ときく。「出ない」と答へると、すぐ注射を打たれた。ききめがあつて腸が蠕動しはじめた。思ったより長い時間がかかつて直腸まで動きが来ると、瓦斯が出た。僕はクスッと笑つて「尼さんのおなら」と呟いた。この極めて小さいおならは五つ出たしまひとなつた。さて僕は直訳すればかうなる外国の茸のことをしらべたくなる。退院後、ごつた返しの本の中から（僕は転宅したのである）、ドイツ語の字引を探して、尼さんの…を引く。無い。僕はあはてて英語、フランス語の字引をひく。無い。ふしぎなことである。いつこんな茸の名をおぼえたのだらう。一体、尼さんの名は僕と同じく小さくて無音なのだらうか。知つてゐる人は教へて下さい。

頬べただけは一人のこらず赤々と輝き、みんな丸く肥えている。私が彼等の顔を見廻し、冗談を言ふとワツと歓声をあげて散つたりするので、六つか七つで背中に赤坊を負うた子などは赤坊の頭を取り落しはしないかと危ぶまれる位であった。雞はそのうち原形をとどめなく肉片になつていった。するとTはふと子供たちを見廻して「こいつらのために戦はにやならんタイ」と微笑みながら言ひ放つた。子供たちはびっくりしてTの顔をげげんに見つめてゐる。Tの言つたことはさつきから私の胸にも去来してゐた事で、Tの言葉をきくと急に胸が熱くなつてきた。その前日も稲こぎをしてゐる健康な娘たちを見てさう感じたことであつた。私達はよくかういう健康なものに対して感傷的なほどに胸を熱くすることがあるのである。「こら、その柚子はどこにあるのか、兵隊さんに二つ三つ貰つてきてくれる。金は上げるでな」Tが皿を抱へて立ち上るなり怒鳴るやうに言ふので、見ると一人の子が真黄な柚子を手持つてゐた。子供たちはパツと散つて口々に何やらしゃべつたり擲つたりしながら逃げ出した。

それからその農家の爐を借り、村中からやつと探し出してきてくれた一握りの黒砂糖と灰汁のやうな自家製の醤油で煮て、二つ持つ

菊 な ど

今夜も冷えるやうである。火の気の全くないガランとした室内に、壁から、窓から、床から、寒気が忍び寄り、膝まで凍るが如くである。此頃の夜間の演習や巡察の経験から想像して、窓外では、地面に、枯芝に、白く霜の置きつつあるのがありありと分るやうである。うす暗い電燈の下に、一升瓶に挿した菊の花がある。将校集会所で催された或る会の挿し花を翌日一掴み貰つて来たら、「あ、菊ですな」と当番の兵隊がどこからか瓶を探し出して来て此の室を飾つてくれ、餘りはほかにも分けたのである。私はこの菊を見るごとに、「あ、菊ですな」と息を呑んで花を見つめたその時の当番の声を思ひ出す。而も彼は上官である私にそれ以上の感懐を述べたことを謹しむべきであり、又そんな花についてそれ以上語ることは羞しいかのやうに、口をつぐんでしまった。しかし私はその態度を嬉しく思ひ、強ひて後を尋ねず、相植も打たうとせず、私は、ひとり此の花を眺めるのである。彼は私が別に優しい言葉をかけてやらないうに拘らず、誠に忠実に、私に舌の焼けるやうな茶をよく汲んで来てくれる。私は机の上の菊の落してゐる影を注視しながらそんなこ

てきてくれた柚子を切つて汁を小皿にしぼり込み、水筒に持参の酒をくみ、二人きりの老夫婦と白い飯をたらふく食つた。帰路はよい路があるとのことで月も冴えてゐたが道の案内が分らないので老爺が村からかなり遠くまで寒い中を送つてくれた。螢流を跨いで渡つたりして微酔の三人めいめい詩を吟じたり軍歌を歌つたり喧嘩散らして帰つた。翌朝起きて服を着たら釘穴にまだ菊が挿されたまゝで、何だか一寸でれくさかつた。

昭和十三年十二月初旬

この文章が書かれた一月前、つまり、十一月十二日に母堂ふじさんは六十九才で逝去してゐる。しかしこの随想のどこにもその死については觸れてゐない。やはり私情を述べることと恥としたからであらう。

ともあれ、蓮田は義務として「沈黙の美」「秩序の美」に傾倒しながら、酔餘にわめきちらし釘穴に挿し忘れた菊で文芸を作つた。「沈黙の美」「秩序の美」から嗅み出たところが皮肉にも文芸だったからである。

読者の記憶にとめていたゞきたいのは、この釘穴に挿し忘れてゐた菊である。この菊が蓮田の生涯を象徴する結果となるからだ。即ち、五年後の昭和十八年の十二月。彼が再度

とをふと思ふのである。

もうすでに二十日ほど前、山の庵舎で、私は白い飯をうまうまと食ふ夢を見るやうになつて、自分であきれてしまつてゐた。或る半日の休養の日に戦友三人で下の谷の部落へ雞と白い飯を食ひにと目ざして、九十九折の石ころばかりの小道を半道も下つた。一軒の水車があり、数へるほどの貧しげな農家があり谷間におどろくべき狭い水田があつて刈入れと稲こぎに忙しく、どの家も殆ど大人はゐなかつた。そのしんかんとした村の其処此処に二いろ三いろの小菊が秋陽の中に咲き盛つてゐた。三人ともその花に打たれ、勝手に摘みとつて釘穴へ挿したりした。やつと雄雞ばかりゐる家で一羽を買ひ出し、出征したら鬼小隊長と言はれるやうにやるぞと自信してゐるT少尉がそれを片附けることになつた。そこへ夕刻になつて小一里もある小学校から遊び惚けて帰つてくる小学生やら、首は後ろにちぎれ落ちさうに負んぶされてゐる赤坊まで、そのどれもこれも顔から手足が乞食のやうに黒々と垢つき、はなを垂れてゐる子供たちが数へたら十七名も集つてきて、又妙に十四人は女の子ばかりであつた。彼らははなをすり上げながら、山からの清流の縁で雞を料理つてゐる我々をぐるりと取廻りて見てゐる。

鶴

堀口太平

戦友の鯉江治（鯉江治）のところへ年始にいった。子供をだいて、女房と麦畑のなかを駅までもどると、改札のそばにいた女の子が、私に鶴を折つてくれといつた。ひるをまわつた日が、種子（種子）のようにかるく、そらにかかつてゐる。小さな手をとつて、電車のくるのを待つていたら、こまかい、黄いろい風や土くれが、あんと、私の肩をたたいてゐる。

濁つた河がながれていったのだ。流水をうかべた大黄河で、河津の町の城壁のうえを、ゆつたりととんでいった鶴はわすれない折ることは疾うにわすれてしまつた。

(一九六〇・二・二三)

の応召で西下する際、大阪駅頭に見送りに出た伊東静雄から贈られた花は菊だった。八年後の昭和二十一年十一月。成城学園の素心寮で黒リボンで飾られた彼の寫真に捧げられた花も菊だった。

しかし蓮田が最も好尚した花は、菊ではなく萩の花だったのである。彼に『枕草子』『草の花は』を論じた文章がある。「昭和十九年十月」と「萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよ／＼と広がり伏したる、さを鹿のわきて立ち馴らすらむも心異なり」という清少納言の言葉に對し、

「その『草の花は』の中で、私の好きなのは萩の花で、或はこの萩の花の一行を寫さんために全文を寫し、この一章をこの本に葉のやうに取り入れておきたいために、他を除いて是一つとしたともいへる」と、拔萃の理由を述べてゐるほど萩好きであった。

つまり、蓮田は己の好尚とは別に菊花を運命の花にしたのである。

既述した「菊など」では、軍隊という断絶された境涯に収容された当初の、蓮田が持前とする強烈な自主精神を、絶対である軍人精神と換置し、或ひは調整する過程の、一種

も一諸にやってくるかもしれんぞ……といふ希望の曙光を投げかけたのは事実であった。

その曙光は、軍隊生活二カ月半を経て、やうやく自主の時間と精神的な均衡を保ち得るやうになつた蓮田にも感じられたであろう。

応召以来……初めてまとまつたエッセイ「新風の位置——志貴皇子に捧ぐ——」(昭和十四年「文藝文化」)

白居易詩抄(三十二)

森 亮

亡友の旧宅の前を通るとき

垣の外まであふれ出た柳の枝を風がさらさらとゆるがせてゐる。

思ひ出すのは楽しく語り合ひ主客ともども酔っぱらつたあの頃のこと。

今でもわたしは集賢街区の北通りにさしかかり通り過ぎるとき、
きまつたやうに眉をびくりと動かして眼を閉ぢる、彼を想ふて。

茫 寞

国 弘 浩 介

この妻に仕ふるもよしと蔑とまれて過ぐ日々も悔なしとせむ

たまたまにわれに言ひよる羞しさもいつまでかたもつ妻も老ゆれば

拒まれしひと夜は心おもくして夜あくるまでのながきときのみ

みとせいまかへりて妻をいとほしみ阿呆のごとく一日みまもる

愛情のかぎりといふにあらざれど妻の不逞に泣きし幾夜さ

愛ひとつおろそかにせし身のめぐり硬きいのちといふを寂しむ

春花の咲きもこそすれかかなべてわか

の錯乱が感知された。強制された沈黙に美を感じなければならぬこと、自体、すでに一種の錯乱なのである。

しかし、「菊など」を執筆してから旬日あまり経て、曙光らしいものが射し始めた。即ち、十二月二十二日首相近衛文麿は「支那に於ける同愛具眼の士と相携へて東亜新秩序の

号(二月)をものしてゐる。

「私は先に大化改新期の文学の黎明の一つの姿を『青春の詩宗』なる小篇に語つて、

痛ましい大津皇子の文化を綴つた。新文化のために死ななければならぬひとの運命を其処に思ひ、死によつて衛り建てた青春の悲傷の詩を見たのである。しかし此の

池のほとりて

水が浅いので魚は寄り付かず白鷺は飢えてゐる。

でも、心ざとく目を見開いてそれは魚を待つてゐる。

見掛けは如何にものんびりしてゐるが、心はあせてゐる。

さう見えてさうでもない物が此処にもあるか。

註「亡友の旧宅の前を通るとき」の原詩は通集(公宅(四の六〇〇)で、七〇才頃の作。その二年ほど前に亡くなつた中書令兼度は白居易より七才の年長者で、詩人といふより寧ろ政治家で、政治の実権を握つたこともある。晩年は居易の家で政治に仕込んでいたので互に交はつた。次の「池のほとりて」の原詩は池上富興(四の六二〇)も同じ頃の作。目に触れた材料を自在に歌つてゐる。

世きびしく雨の匂へる

逢ひ逢ひてかへる夜のみち距離すでに
とりのぞかれしまろき乳房よ

黄に昏るる夕べしめりし掌ににぎる愛
喪ひしふみからひとつ

愛などと語ることなしとときにまた連れ
たちてあゆむ夜の灯の街

ひとところ破れし障子の鳴るさへや不
安をさそふ月夜木枯し

平安はいづべにもとむ淺山河吹く風さ
むく身をば吹きぬく

ものいはぬ性もあわれと知りそめて肩
よせ合へる紅き灯の街

断ちかたき未練といふや人間の愛執を
逐ふ香き夜の路

わが希ひ充つることなくいつまでか混
沌ひとつはらわたに呑む

建設に邁進せん」といふ声明をしたからである。この声明に應へるやうに国民政府の主席であつた汪兆銘は飛行機で重慶から脱出し、二十九日仏印の河内から、近衛声明の原則である「善隣友好」「防共提携」「経済提携」に同意する旨の声明が発せられた。この新時態は、新春を迎へる国民の和んだ胸に、和平

献身によつて憧憬された至上のものが、献身の祈りに乗つて降霊し来る爽かな新風は、大津皇子の文学ではなく志貴皇子の文学であつた」と、蓮田は春の曙光を感じて筆を起してゐる。

明日香宮より藤原宮に遷居りまし後、志貴皇子の御作歌

采女の袖吹きかへす明日香風京を遠みい
たづらに吹く (万葉巻一)

明日香宮とは剣をもつて覇者となられたたき天武天皇が定められた宮処(高市郡明)である。皇太后の持統天皇は、そこから北西四キロの藤原宮(櫻井町)に遷都された。朱鳥八年(689)十二月、大津皇子の悲痛な死より八年を経た日のことである。

歌の冒頭にてでくる采女とは、小領以上の郷家の美少女の中から選ばれた下仕への女官のこと。供奉する彼女らの初々しい袖を翫へず旧都明日香から吹いてくる東南風。その春風の誘ひも、新都藤原宮の新風に馴染んでゐる彼女たちには、もはや懐旧の情を湧かしえずにただいたづらに吹くばかり……といふ歌意である。つまり、新都藤原宮を讃仰する歌である。

作者の志貴皇子は天智天皇の御子。尋常なれば父帝が都したまうた近江宮こそ懐旧すべ

きところである。壬申の乱後は全く荒廃に帰した大津宮の挽歌をこそ歌ふべきである。皇子と同時代を生きた微官の人麿でさへへささなみの大津の宮に、天の下、知らしめしけむ、すめろきの神の尊の、大宮は、ここと聞けども、大宮は、ここと言へども、春草の茂く生ひたる、霞立つ春日の霧れる、百磯城の、大宮処、見れば悲しも」と、懐旧の涙を流してゐるほどだからである。同じく微官だった高市黒人も近江懐旧の歌がなかったこと、身の志貴皇子に近江懐旧の歌がなかったことは思へば不思議である。

「志貴皇子が詠ぜられたのは却って父天皇とは好からざりし天武天皇の飛鳥京である。しかし人麻呂らのもつた民族的旧精神はすでに大津皇子によって死もて戦はれたのであり、志貴皇子には今新に黎明する京の精神あるのみ。それは敢て天武天皇の京たるを要しない。それは日本のそして世界の京の精神の開花である。寧ろ此の京の精神はその故京にありしものではなく持続天皇の新しい京に高まったものであった。新しい藤原の京は次の文武天皇迄二代の京と続き、次には遂に寧楽七代咲く花の匂ふ王朝を定めるに到る、正にその前驅であった」と、志貴皇子が藤原宮を讃仰したゆゑ

んを蓮田は解説してゐる。

さう言へば近江懐旧にまたとない好歌材―芦辺をゆく鴨を見ても、皇子はささなみの大津ではなく、大和を恋うてゐた。

芦辺ゆく鴨の羽交に霜降りて寒き夕べは大和し思ほゆ(巻二)

よほど激しい大和憧憬、藤原讃仰の思ひを皇子は抱いてゐたと見ねばなるまい。

その新都の新鮮な雰圍気は持統天皇の御製へ春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山に鮮明である。天皇は遷都の翌年二月吉野に御幸になり六月に還幸された。その日の新宮の新鮮な印象が、そのまゝこの歌に結晶したのであらう。いかにも王者らしい明るさ、博さ、微妙さ、確かさが匂つてゐる。それは日本の個々の目をもつて見得た、勝利の初めての自然世界の絵図であった。大津皇子をして戦はしめ、かつ犠牲として勝利した雄々しい讃歌である。……とは、いかにも蓮田らしい感懐である。しかし、決して唐突な感懐ではない。かつて天皇が皇后であらせられた当時、大津皇子を混へての五皇子と共に、異腹も一母同産として慈む旨、吉野の神明に誓はれたことがあった。その誓ひも、大津皇子の賜死によって破れたゆゑを告げ、あはせて新都への加護を祈られたに相違ないからである。

春の食事

堀ノ内 歴

春さきの急上昇気温
午下がりにレモンを切る
キラリと濡れて黄な輪が嘔う
おもては もう暑い
ごく自然な食欲で
子供らと行儀よく並んでたべる
レモン茶にコッペパン 外からの
反射光線をミックスして頬ばる
おもてを花売り爺さんがとおる
カーネーションと雑多な洋花が
リヤカーの後にぎっしり積まれ
みちみち空気をあわく染めてゆく
「胃ではね レモンの酸とパンが
とてもよく融けるらしいよ」 申しわけ
喚べても喚べても足りない食欲へ
「春」をほおばっている？

一九六〇・二・二七

軽風

吉本青司

芭蕉の葉が枯れてしまった後に
たずらつ子がやって来て めちゃめ
ちゃに引きちぎった とても汚なく
見られだしたので 梟の農林課へ手
入れの法を問いわせられた 初めの電
話に出てきた人は 汚なくなった部
分は切り捨てなさい 春には芽立っ
てくる といった 変つて出てくれ
た人は そのままにして置いたほう
が 株に無理がなくてよい といっ
た なるほど とばかりも思つたので
そのとおりにしてあつたら そよ風
のころ 柔らかな新芽が燃えてきた

一九五九・一〇・一三

志貴皇子にはこの新生の「誠」があり、持統天皇には「世界」の生成があった。「志貴皇子の権の歌」と題せられた次の歌に、その新生の世界を喜ぶ誠がよく感じられる。

石激る垂水の上のさ蔵の萌え出づる春に
なりにけるかも(巻八)

〈石走る垂水の水を結びて飲み〉(巻七)或ひは〈石走る垂水の水のはしきやし君を恋ふ〉(巻十二)の類例もあつて、発想はかならずしも新規といふに当らないが、詩境は群を抜いて秀絶である。清流の飛沫が湧き起る寒い谷風。その風が誘ふ流れは、読者をして自然に心を下流へと導く。その意表をついて、皇子の詩心は飄轉すると、読者を逆に上流へと案内する。薄氷を融かしてチロチロ……と囁きでる清流。その閃きが縫ふ岩間に、いつか頭をもたげてゐる祭の早蕨。春である。まさしく春になりけるかも……である。劫初から、人も、動物も、植物も、さへもが待ちに待つ春である。采女の袖を吹きかへした古都の春風。その誘ひもいたづらなりと断じた皇子にして初めて可能な新風の抒情である。

颯風は木末求むとあしひきの山の獵夫に
あひにけるかも(巻三)

この一首も、古歌に〈三國山木末に住まふむささびの鳥待つが如吾れ待ち瘦せむ〉(巻

七巻歌奇蹟)に類例がある。降って天平十一年にも、高圓山に御遊獵があつて、村里に逃げ走るむささびが勇士に遭遇して生きながら獲へられ、それを献上すると歌つたへますらをの高圓山に迫められたば里に下り来るむささびぞこれ(巻六)といふ大伴坂上郎女の歌がある。必ずしも珍らしい題材ではないが、志貴皇子の発想と表現とは、それらの歌に比して特異である。

先づ〈颯風は木末求む〉とだけ表現して、古歌のやうな餌鳥を求めるといふ目的は省略されてゐる。しかもその目的を言外に匂はせ敏捷に木末を縫ふポーズまで表現し得てゐる。痛切なまでに簡潔な修辭である。木末に餌鳥を求めること自体に何の成心があらう。己やみがたく木末にあくがれ出るのである。これは生の悲しい誠だからだ。志貴皇子はその生の実相を捕へてゐるのである。

さらに注目すべきは〈あしひきの山〉といふ枕言葉の特異な起用である。本来なれば〈あしひきの山の颯風〉と冠さるべきであり、〈あしひきの山の獵夫〉と続けるのは不自然である。獵夫は里の人であり、山に関する限りではむささびの方が主人公であるからだ。これは常套の技法を抜けた皇子の神妙自在さである。

をかした恐怖

浅野晃

むかしこの松原に松風が吹いてゐた
憂々といふ音がきこえ
道の向ふから裸か馬にまたがって
丸顔の少年があらはれた
少年ははぢらひがちに目礼し
馬を駆け去った
少年の健康な頬つべたは
疲れも汚れも知らなかった

松原はいまもあつたが
冬の赤い日は病院の壁に注いだ
ガラス窓の向ふに
ベッドが並んでうたつてゐた
歌の主らは透き通る皮膚の下に
ふくらんだ臓器をかくしてゐた
夜になると偽りの太陽が
偽りの昼を吐きつづけた

人間の肺よ
むかしの空気が吸ひたいか

松風が自由に吹き鳴らした
みどりの空気が吸ひたいか
手袋のやうにしなびた手が見よ
世界地図の上から
山や河や入海の線を
しんどさうにはがしてゆく

もつと明るく

もつと明るく
そこで彼は灯をかきあげる
いかにもこれでは暗すぎた
隅々にあんまり影が多すぎた
それにしてもなんとといふ不手際だ
灯はまたたきまたたき

いまにも消えるかとおもはれる
やつとのもつとで持ち直しはしたものの
ちつとも明るくなつてはゐない
みんなの失望した顔が眼に入ると
なほのこと妙にあがつてしまつた
ああこの貧しい灯では

いくたび自信をぐらつかされたことだらう
しよつちゆう暗くなり
いまにも消えるかと肝を冷やさせる

けれどもこのほかに
彼には別の灯の持ち合せがない
むりに微笑してみせる
でも表情はこぼつてしまふ
みんなの凝視のなかで
こぼつた表情が切なく堪へてゐる
気まづい沈黙
血管のなかで何かが急速に失はれてゆく
それからゆつくりと

あたたかいものが底からあがつてきた
これだ あまりにも暗い
自分の灯への幼ない愛情だ
そつと口のなかで吹いてみる
もつと明るく

いいんだ これでいいんだ
こぼつた筋肉がほぐれていつて
ごく自然に微笑が頬をほころばせる
うそ寒い部屋のなか
みんなの顔にはまだ失望の影が喰ひ入つて
ゐるけれど

彼はそこに個々の決意が立ち現はれるのに
気がつく、そして
みんなの顔がほころびると
それはみんなかがやいた。

小獣はただ木末をあくがれ出る。その獣の道を知る獵夫は迎へてこれを捕へる。しかも皇子はこれを捕へるといふ説明ではなしに、へあひにけるかもと、遭遇の偶然を必然の感慨で歌つてゐる。小獣の悲哀は獵夫の嘔ひとなり凱歌となる。それは述べられずに言外で歌はれてゐる。

「この歌、世に大津皇子等の野望と失墮とを諷刺すると解く者がある。併し茲では『木末求む』るあくがれは嘔はれると共に悲しまれてゐる。その悲しみは甘い同情ではなく、大津皇子が殉ずることによつてうち建てた、青春の倫理の悲しみを知らぬことであつた。寧ろこの悲しみは同情するよりもきびしく之を罰し嘔ふことが文化の道である。持統天皇はその嚴罰する英雄であらせられ、志貴皇子は之を嘔ふ詩人にましました。茲に一貫に通ずる文化の『誠』がある、それを知るのが詩人の自覚であり決意であつた。

江藤 淳

作家論

中央公論刊・二九〇頁

散步

池沢 茂

妻が市場なんかへ、さかなや野菜などのおかずを買ひにゆくときでも、ぼくはたいてい、いっしょに付いていつた。どんなところへでも連れそつてゆくのが、ぼくには愛情のあか

しのように、なんとなく力づよく、安らかだつたのだから。ぼくは親、きょうだいにもそむいて結婚したものの、あらたに家を持った神戸は、なじみがとほしかった。まずしい暮らしたから、遊びにも、めつたに行かない。市場のほうへ坂をおりてゆき、ちよつとした繁華街になつてゐるそのあたりの、人ごみのなかを歩くだけでも、かなり楽しかった。やがて幸吉が生まれ、さらに梅子が生まれても、この行動は、なか／＼やまなかつた。妻に寄りそつて、まったく見知らない人たちのあいだで生きてゐるうちに、ぼくはしかし、ふたりの子の親になつてゐたのだ。ぼくにはもう十分にぎやかすぎて、その小さな世界には、親も、きょうだいも、友だちさえも、はいつてくる余地がなかつた。幸吉が普通の子でなかつたせいもあるだろう。ふたりのおとなと、ふたりの子どもとの、この四人がいつしよに生きてゆくだけでも、しばしばあまりに大きな重荷になる。市場などへ買い物に行くのも、ぼくにはいつのまにか、子どものための散歩になりはじめていた。

妻が買い物をしてゐるあいだ、ことに市場は人ごみが激しいから、ぼくはたいてい、そとの通りで、おさない梅子をだき、そばに幸吉を置いて待つてゐる。市場のすぐ横に川が

あつて、橋がかかっているから、そのうえが待ちあわせの場所になる。コンクリートで深いU字型にかためられ、両側で露出している川床には、兩岸のうえに張りだしている家々からゴミが投げすてられて、きたならしいドブになっているもの、みなもとが山の奥のほうにあるせいか、水はいつも、かなりなスピードで流れている。梅子が歩けるようになってからは、橋のらんかんから、ふたりに川など見物させ、ぼくは危険がないように注意していた。そのころ幸吉は動く水がむやみに好きだったから、橋からずつと下のほうの、きたない水の流れにも、いっしんに見入っていたのだ。ぼくはときどき、橋のうえから紙きれなど飛ばして、水に流してやる。すると幸吉も、おなじようにして、流れてゆくもの行くえをけんめいに見つめている。

幸吉が乗り物に興味を持ちはじめると、ぼくは小公園へ連れていった。そこは市場の裏手のほうにあたっているが、五分とかからないほど近いから、買い物をするまゝ待ちあわせるのに、つごうがい。すべり台やブランコもある。それに、そこには、はずれのところ、山陽電鉄が通っている。川に橋がかゝっていて、そのうえを郊外電車の通るのが、はつきりと大きく見える。駅が近くにあるか

恋人

美堂正義

私の恋人はパリーで死んだ
ここからは遠い地球の裏側で
私の足の下の反対側

朝靄の上にエッフェル塔を浮ばせ
真裸のマロニエの並木は
寒むぎむとした風景を一層冷くする
ゴッホの画いたのは冬ではなかった
セザンヌの絵の先の諧調はなく
十九世紀の画家の画いたパリーの

風物詩はいまもなほ存在するだろうか

冷いループルの石畳に

雀のむくんだ姿は見えないか

背の屈りかけた焼栗を売る老婆たち

ノートルダムのカテドラルに降る氷雨

夜は凱旋門の光輝 カジノの騒めきは

冬霧に華やきを沈めてゐるだろう

「だんだん世の中が悪くなる」と

古い人達の敷きが浮んでくるやうだ

私の恋人はパリーで死んだ

そんな遠い昔のことではない

慟哭のあとの放心

それからパリーは私の偶像ではなくなった

めずらしいのだ。ひとつの対象を目にしてよるこび、その名をことばに言いあらわし、歓喜を身ぶりで表現している、そんな幸吉に、ぼくは気が暗れ、うれしかった。

幼児では運動神経の発達は知能の成育に正比例すると言われる。幸吉は日がたつにつれて、ブランコやすべり台にも、ます／＼こわがり、不安があった。なんとかしてブランコに乗せようとするれば、もう五つ近くになった大

きな子をひざにだき、赤んぼみたい、いっしょに乗ってやらねばならない。すべり台でも、まだ二つにならない、おさない妹の梅子に、もう、負けはじめていた。小さな女の子の梅子のほうが、よるこんで、なんべんでもすべりたがるのに、大きな男の子の幸吉は、なだめても、責めても、しりごみばかりしているのだ。

幸吉の体は、市の優良児に選ばれたくらいだから、どこかといって目に立つ欠陥はない。精神が肉体をさまたげているに違いない。脳のどこかに、なんらかの重大な障害があつて、そこから、外界に対する反応の異様なとぼしさ、知能の発育阻止、なみはずれた孤独や収集癖などが生まれ、それが結局、身体や運動神経の面でも、がんな偏食、しつこい臆病

や不安などの原因になっているのだろう。はじめは健康優良児だった体も、このために、栄養がかたより、運動が不足して、だんだん病弱になってゆく。とにかく根本は、知能の発育を一日も早く、正常なルートに取りもどしてやることだった。と、いって、いくら話しかけても教えても、なんの反応もなく、ひとことも回答しないのだったら、その方法がない。

冬の断章

芳野清

氷柱

愁しみが垂れた氷柱
わたしはそっと
孤独の煖炉で暖める
それはやがて
熱い涙となって溢れ出る

霜柱

一夜
虚しさに冷やされた心の地に

築かれた霜柱

わたしははてしない列柱に

よるぼひながら そのかげに

喪つたひとの面影を求めて彷徨ふ

やがて醜く泥濘に消ゆる

霜の宮居とも知らず

氷花

傷つけ合った昼の悔恨が

絡んで凍った

ガラス窓のアラベスク

わたしはその向ふに

虹色の太陽を見る

明るさがあったのだと

寒さの針に頬をさらす

『そら幸ちゃん、こんどは特急電車が来たよ、きれいな色してるなあ。黄色と赤に塗ってあるんや。普通電車とは違うよ。二台つないで大きいなあ』

電車に対する意外な反応を見て、ぼくは幸吉に、こんどこそはと、いろ／＼話しかける。また、そのために、市場のほうへ買い物にでかけるたびに、小公園まで連れてゆく。運動や日光浴のために散歩に連れて出るときも、それまでは山手の、しずかな山路や谷川のほうへ行っていたのに、反対に、下町のほうへおきてゆく。ほこりっぽい、ごみごみした工場街になっているもの、しばらく足をのばすと山陽線があつて、高いガードのうえを、電車や、幾台も連結した長い客車や貨物列車が、行き来している。

『そら幸ちゃん、汽車が来たよ。ポッ、ポ

ッ、ポツと、けむりをはいて。ひと一つ、ふた一つ、みつつ、よつつ…ながい…貨物列車やなあ』

すると幸吉は、そのときくんで『急行電車』『貨物列車』などと答える。たいていはぼくから視線をそらせたまゝ口のなかでつぶやくだけなので、はずかしがっているみたいない、いや〜みたいな口のきゝようだけれど、ぼくの問いに、とにかく答えているのだ。絵本を見て正しく言えた名称は、実物に対しては、やはり正しく判断している。そして調子がよいときには、単語だけでなく『鉄橋のうえを走っているなあ』『けむりが出てる。けむり、けむり…』などと、高架のうえの汽車を見て、まとまった意味を言いあらわす。『けむり、けむり、け、け、け、…』と、もう一歩、なにか突っこんで表現したらしい、こつとばをさがしあぐねるようすで、なやましうに、どもりつつけることもある。年がたつにつれて、ますますくことばを失い、知能は逆に退歩してゆくだろうと診断した医者もあつたけれど、幸吉の知能は、たしかに故障のあららしい頭脳のなかで、おさえられ、もたえながらも、あたららしい芽を出し、とにかく伸びてゆくこうとしているらしかった。

編輯後記

創刊いらい四年。一回も遅刊したことがなかつた雑誌も、四十九号がついに一ヶ月以上遅刊した。同人杉本秀太郎氏、会員兼本淳子さん、山中たづ子さん等から督促のたよりをいただいた。
今度の遅刊は、同人雑誌の後記に必ずあると言つていゝ、あの経済的な理由からはなかつた。京都の印刷所が場所がら入学期をひかへての印刷物の殺到で、刷るに刷れなかつた外部的理由にある。
今まで校正は京都の教職にある山根忠雄氏が担当し、印刷を終へるとそれを大阪梅田の万字屋まで運搬した。それを大阪の教職にある福地邦樹氏が受領して発送したのである。両氏共に多忙な教職の寸暇にやつていただいたので、大変な労苦であつた。
本号から印刷所を大阪に移して事務を合理化した。初校は印刷所の近くに在住する堀ノ内歴氏が校正し、賣了にする前に私が校閲する。発送はやはり福地氏に担当していただく。事務一切が大阪に集約されたので、二度と遅刊しないことを読者ならびに同人各位にお誓ひ申し上げたい。

戦後の終焉…ということを誰かと言ひだした。氣をつけてみると、偏向してゐたものが少しづつ是正されつゝあるやうである。眼のかたきにされて戦後は一切黙殺されてゐた日本浪漫派の再批判が、大学の卒業論文にもぼつぼつ見えてきた由である。しかし戦後はまだ終つてはゐないのである。オウトマチツク・アプローバル・システムが経済界

果樹園 第五十号 (毎月一回発行)
昭和三十五年四月一日発行
池田市野町一六八
編集兼 小高根二郎
発行人 太阪市生野区湯伊賀ヶ町一番地
印刷所 秀文社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第51号

蓮田善明とその死 小高根二郎
銅婚式 吉本青司
白居易詩抄 森野晃
どろの若芽 浅野晃

標本室 福地邦樹
回帰の時 堀ノ内歴
老境 田中克己
桃浪抄 国弘浩介
海岸 美堂正義
だまつて歩きつづける 池沢茂
後記

蓮田善明とその死 (九)

小高根二郎

その後蓮田は次のやうな書簡を清水文雄氏に書き送つてゐる。

昭和十四年一月二十三日

熊本歩兵第十三聯隊第二中隊より東京市世田ヶ谷区祖師ヶ谷二ノ六清水文雄宛書簡

コギト一月号、及びお手紙拝受。
伊東の会合のこと、大変よかつた由。君の手紙にあふるるものを受受し、涙ぐましく思つた。先生にも何かお礼いたい気がする。よつしく。大阪の連中の真剣ぶりも思ひやられる。僕の感想は廻箋に書き、この手紙と同時に

に大阪へ出す。僕は四人の誰の仕事にせよ、今迄さうゴマカシはないと思つてゐる。力不足と何ら感ずることはあつても、相前に自ら信じていい道を歩いてきたと思つてゐる。しかし発足すべきところと理想とをつねに見究めて行く上に僕らが自らきびしくあつたことは幸ひであつた。その点、先生がとにかく僕らの前に割り切れぬ活き方をしてゐられることは最大の教であつた。

君が何かの新しい道をとりに出したことは何にせよ讃むべきことだ。僕も今或る発足をしようとしてゐる。そのことも廻箋に書いておいた。
文芸文化の印刷を今頃やつてゐることだらうと昨日の日曜に辛いほど想像した。想像してゐるだけでは罪惡のやうな気がした。広告

はやはりつづけて行つた方がよい。二号分を一度に広告する時は旧号のは新号よりも活字を小さくしたらどうか。

勅撰集作部類といふやうな本があるかしら。持統天皇その他万葉の歌人の中で、平安期の歌集に万葉所載歌以外のどんな歌がどの集に出てゐるかを簡単に知りたいが。何かさういふ便利な本があつたらしらせてほしい。

「伝統」にはどうも何も書けなかつた。恰度忙しい最中であつた。文芸文化の三月号には随筆風のものでも書かう。二頁か三頁程度。巻頭言も考へてゐるが、そいつはまあ君にゆづつておかう。仲々厄介だ。垣内先生もあれきりだが何か書いてもらへぬか。

家内より、追々東京のことを書き、君に親切になつてゐること逐次に分り感謝を新にし御迷惑かけてゐること多いと思ふ。家族は当分里の家におくことにしてゐる。家内の父も寧ろそれを希望してゐるのだ。結局僕もその方がいいので、彼らの自由にしてゐる。

戦地は今将校は略々満員の状況、二三月になると恐らく軍の行動が又活潑となるだらう。そしたら前線への望みも出てくるが、とにかくこのごろもどかしい。
奥さんによろしく。

この書簡の冒頭伊東の会同のことである。

正月休暇に伊豆の伊東温泉に清水、栗山、池田諸氏が斎藤清衛先生を中心に集ったのだ。昨年八月高野山に於いて開かれた日本文学講義以来のことである。恐らく集った同人三氏の間で、主宰者蓮田の応召間、志を交へることのないことを誓ひ合つたであらう。蓮田はその報告に涙ぐんだのである。

尚、斎藤先生が「僕らの前に割り切れぬ活き方を示してゐられることは最大の教であつた」といふ不思議な文章がある。事実、蓮田がこの書簡を書いた一月下旬から二月初旬にかけて、煙霞辭の斎藤先生は伊賀近江の山部地方から安芸周防にかけ飄然と旅に出てをられる。かつてはその煙霞辭が昂じて遙々と北歐を行脚されたほどだ。先生は行脚しつゝ異國の風物と人情に触れ、日本と日本人とを反省されたのだ。「わたしは、日本に帰つて、日本人が余りにもジャーナリズムの尻にのりすぎてゐるのを不愉快として感じてゐる。」(昭和十二年十月刊)さう、結論として述べられてゐる。今度の伊賀・周防の旅でも、戦争に便乗して偏執した古典ブームに鋭い批判の眼を光らしてをられる。

「その途中、到るところの停車場等の待合室で、自今の日を惹いたのは、谷崎潤一郎

銅婚式

吉本青司

重要な会議の最中に呼びだしがあつて三月三日だから早く帰宅するようにとの電話だつた三月三日？何のことだか思い出せなかつたが結婚記念日だとわかつた

その日の会議は一人の女生徒の及落をどうするかが論議の中心だつたその子は十四才で結婚し間もなく離婚

時々授業には出席するが夜は飲屋へアルバイトに行くという早熟さ――

会議がすんでからかねて約束の友人と喫茶店で会つた仙人掌という書物を贈られるため友人の伯父で永年アメリカに住んでいた老人の俳句の本だつた一八やニグロ部落は皆跣足

夜更けて帰宅すると妻はまだ食事をしないで待っていた二人はしづかに冷たくなつた五目飯を食つた人蔘の色がはなやかに見えたと

復生せしめたら、それこそ驚愕のために自失もしかねまいことだらう。が、ありていにこれを考へるなら、そこに一脈の危機を抱くのは自分だけではないと思ふが、源氏！源氏！源氏！この源氏物語の洪水は、遂に源氏といふ活字の洪水のみで終らないでもなからう。と云ふのは、そこか

も「沈黙の美」を徹底したわけである。蓮田は書簡で約束してゐる随筆を「託摩野雜信」(昭和十四年「文芸」三月号)と題して、次の三篇の書簡体の随想にまとめてゐる。

兵器授與式

兵營の中の生活を未知の人にはめづらしいやうな事時々お知らせしませう。

今日は新兵に兵器を授與する式がありました。中隊兵舎前に回字形にずらりと整列した〇〇名の新兵が一人々々中隊長の前に出て中隊長から直接に銃を授與されるのです。長い時間がかかりますが最後迄大変緊張した式です。

その銃はやがてはその兵がそのまま戦地へ携へて行くのです。兵隊はその小銃を以て射撃し突撃してその勲功と防衛とを果すわけです。中隊長は授與に先だつて今から渡す銃は兵の生命そのものである意味を告げ、且つ我々軍隊の用ひる銃にのみは菊花の御紋章が刻んでありそれは畏多くも御稜威を頗ち賜はつたものと同然であり光輝ある帝國軍人としての諸子の精神そのものであるといふやうな訓辭を與へます。呼び出されて受領に出てく

白居易詩抄 (三十三)

森 亮

泉を歌ふ

一

泉が石に触れるおとを琴のそれに似てゐる。のどかに眠り、静かに耳傾けて世の塵にまみれた心を洗ふ。高が青苔かぶつた石ころ二箇と馬鹿にし給ふな。さわさわと鳴りつづけるひと夜の調べは銭金もつては値踏みできない。

この先生の文章でも明確なやうに、国文学者であれば古典のいかなる流行や時潮をも容認するといふ割り切れた態度をとつてをられる。この態度と、教職にありつかず昔ながらの国文学者のやうに浪々の市井の人である活き方に、蓮田は教へられたといふのであらう。

らはこれら古典の時代に対する正当の認識といふものが殆ど求められぬからである。譬喩的に云へば、鈍目鼻にあの桂姿の王朝女流の風俗に対する理會さへ無いやうでは源氏を口にする資格が現代人には無いと云へないだらうか。もちろん、国民が一人でも多く古典を話題にしてくれることは望ましい限だが、それだけ国文学者の重大な反省が要請されてゐることを忘れたくないものだ。」(昭和十四年「文芸文化」三月号) (斎藤清衛「源氏の洪水」)

石の傍を、泉のめぐりを、わたしは飽かずたちもとほる。

この心が誰に知られよう、かうして口に出さない限りは。

ただ心配なのは耳いよいよ遠く、眼いよいよ暗くなる日のことだ。

泉のささやきも石の眺めも今でさへ霞を隔てたやうなおぼつかなさ。

註「泉を歌ふ」一原詩は南侍御以石相贈助成水声因以絶句調之(四の六二六)で、詩人が七十才頃の作。洛陽、麗道街の白居易宅の庭にある。泉が歌はれてゐる。その二原詩は題名泉(四の六四四)で、同じ泉を少し後に、恐らく七十一才のときに、歌つたものである。前同(三十二)の「亡友の旧宅の前を通るとき」の最終行の末尾の句は「彼を想つて」が正しい。

がら蹠歩で中隊長の正面五六歩前に来て立つてゐると既に受領した兵が下がって来て其処で恰度並びます。するとその既に受領して両手に銃を横たへて捧げ持つてゐる兵は銃を立てて右手に執り直し一旦立銃の姿勢をとつてから勢一杯元氣な声で「敬礼」と叫んで中隊長に対して「捧銃」を同時にこれから受領する番の兵は拳手の礼をします。斯うして次々と受領して自分の列に帰るのです。ところが馴れた兵でも「捧銃」といふのが仲々正しく出来にくいもので未だ入隊三日目の新兵などは僅かに此の式の始まる直前に班長に教へられて銃剣術の木銃や手真似だけで恰好を練習してゐるだけですからもとより巧く行く筈はありません。儼然から氣遣かつた班長などは怖ろしい程緊張して見詰めてゐますがそれでも吹き出してしまふやうなこともありま

す。中に入隊前の訓練によって心憎いほど立派にやつてのける者もあります。とにかく然うして銃を受領して列に帰ると兵は何か急に堂々と見えてきます。

さて授與が終ると中隊長は今日中に銃に刻んである番号を記憶えるやう又銃には一人一人と同じ履歴がついてゐるからそれを承知しておくと共にたとひ木被の傷一つでも出来たらそれが何時出来たといふことを知っておく

と聞けども大敵は此処といへども……と憧憬する。去にしへの日の夢の美しさがあり、それを塵墟となつた今日に申ふ哀痛がありま

す。「ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」「真草苅る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し」等々。荒廃のいとも氣高き眺めの中には、美しき昔のさまの影もあはれや、遊樂後を絶ちて唯だ変りなきその池水の

昔の秩序と静寧の中に息ひたるこそ嬉しけれ。といふレニエエの詩を芝山内の古靈廟に偲ぶ荷風の詩情、「一刻々々、時間の進む毎に、吾等の祖国をしてアングロサクソン人種の殖民地であるやうな外観を呈せしめ、古くして美しきものは見る見る滅びて行き新しくして好きものは未だ芽を吹くに至らない。」中に狂はんばかりに歎き絶望し憤り哀傷するところにロマンティックな「英雄的悲壮美」を想ひ描いた(紅茶の後)荷風。少くも私の経験

位でなければならぬ尚手法は追て班長から教へられる筈である云々等の注意を與へて漸つと式を終わりました。是は恒例の一つの地味な行事にすぎないのですが、私は兵隊を戦地へ見送る時と異らぬ感激と美しさを感じました。

どろの若芽

浅野 晃

白楊の若芽はほんたうに美しい緑のらうそくを捧げてひろびろと走る並木路の両側に行儀よく並んでゐる。ぼくは夕方そこを通つたが空を仰いでおもはず感動したうすれかけた夕映の空に、もろあがるいのちを見事な形に収め一心に上方を指向してゐる。あたらしい生へ出発するものをひとしく彼らは祝つてゐるのだしづかな足音がきこえてきて夜学へ急ぐ青年が二人肩をならべてすきていった彼らの若いひとみも燃えてゐた

生きてゐるものの中にねづよく脈打つてゐるいのちといふものわたしらの中でそれはいちばん深いところでわたしらを推し進める。元氣というものだいくら漢字を廃止しろと強制されても元氣の二字だけは保守する。どろの若芽、それは元氣だ元氣を失ふな夕映はすでに色褪せて若者のすがたは遠く路にまぎれたけれどまたあたらしい足音がしづかにきこえてくるどろの若芽に見守られて彼らの足音はゆくひろびろと走るこの並木路を元氣を失ふな

長歌を誦する前に、荷風の長篇例へば近き作なる「つゆのあとさき」「瀬東綺譚」でもよし、古き「腕くらべ」「おかめ笹」「冷笑」等でもよし、長篇の一つを読みたまへ。短歌を誦せん前には、例へば「あめりか物語」の中の「落葉」又は「新橋夜話」の中の「短夜」

永井荷風

応召前私は人麿論の構想を考へてゐるうちふと永井荷風を聯想し、それきり人麿論を暫く中絶した儘にしてゐましたが、こちらに來てから暇を得ては荷風の古い作品からあれこれ順序なく読み返してみても私の豫感の必ずしも不当でなかつたやうに感じてゐます。勿論荷風も人麿の如く挽歌の詩人ですが、斯かる挽歌の詩人を生み得たわれわれの血の滯ましさと文化の高さも思はれて嬉しい限りです。人麿をあの時代の挽歌詩人と断ずることに異論も多いと思ひます。しかし人麿にも吉野宮や天皇や皇子への讃歌の如きものはないと言ひませんが、この讃歌の感情は山上憶良が「憶良らは今は罷らむ子哭くらむ其の子の母も吾を待つらむぞ」と公宴の席に私情の道德をうち立てた新しい時代に対しては既に古風の訴へであつたと言つていいと思ひます。彼は志貴皇子が新しい京を憧憬した日に、吉野宮を依然「神ながら」「神の御代かも」「絶ゆることなくまたかへり見む」とより歌つてゐない。彼の胸には常に完成された(近江宮に対して)「いかさまに思ほしめせか」と詰りつつ「天離る夷にはあれど……大宮は此処

水 仙

の短章を読みたまへと勧めたことでした。例へば演習から数日ぶりに帰つてみると、殺風景な下宿の机上の一輪さしに、此のひと月咲き続いていた一束の水仙がむぎんにも萎んで葉は赤み花は乾き縮み、而もそれが非常にあはれに美しい——などといふやうなこれ全く一人ごとなることをも、手紙として書いてはいけないでせうか。

「永井荷風」によれば、蓮田は聯隊近くの下宿に、第五高等学校生徒と一緒に下宿ずまひをしてゐる。熊本市大江町大江七〇七小林哲子方である。

そこで応召前に着目してゐた挽歌詩人としての荷風と、荷風の相似性とに、想到したのである。蓮田の論証にまつまでもなく、人麿の挽歌詩人としての資質は、へ今のみのわざにはあらず古の人ぞまさりて音にさへ泣きし(巻四)の慟哭の永遠回帰に明確であつた。この慟哭の詩人と遁世の詩人荷風とに相似性を感じたのは、いささか蓮田の趣味に淫してゐると思はれる。同宿の五高生は、「つゆのあとさき」「瀬東綺譚」「落葉」「短夜」のいづれにも、蓮田のやうには人麿的な英雄悲

壮美は感じなかったに相違ない。

荷風はへ音にさへ泣きし」といふ慟哭はせず、へ恋しきは何事につけても還らぬむかし（瀧東綺譚）式に歎歌してゐるのである。同じ挽歌詩人にしてもおらび泣きとすすり泣きの相違がある。

しかし、昭和二十年三月九日の空襲で麻布の偏奇館を焼けたされた時の荷風には、いささか英雄的悲壮美が感じられぬこともない。

荷風は道すがら老人の手を取って逃げのびる七八才の少女を誘導した。このとき愛宕山頭に凄然とのぼる緋月を荷風は見逃さなかつたといふ。さらに荷風は道をとつてもどすと、猛煙たちこめる小路に身を潜め、万巻の書と共に偏奇館が焼け落ちる最後をみとどけたといふ。このニュースを第二次応召で臺北はスラム島に進駐してゐた蓮田が伝へ聞いたら、

「その沈着に余裕綽綽たる態は文弱の徒には非ず、その遠い祖先の勇士が血のまだ斯人の血管中に流れてゐたのを思はせる。」

（昭和三十四年「新潮」一月号）といふ佐藤春夫氏と佐藤春夫小説「永井荷風伝」と同じ感懐で、思はず膝を叩いたことだらう。ちなみに、蓮田はスラム島へ進駐する途上スラム島に於て佐藤春夫氏と邂逅し、かたみとして夜光時計をいたゞいた因縁がある。

蓮田の荷風・人磨論はさておき、荷風を一

標本室

福地邦樹

鳥や獣や虫たちは
油気のなくなつた色褪せたからだに
埃をかぶつて

ガラス戸棚の中にひっそり並んで
扉をあけてみるとかすかに獣の臭がする
主人が亡くなつて長年しめきつてあつた
埃っぽい部屋のような臭がする

この鶯もこの百舌鳥も
ずっと以前高らかに鳴いたことだらう
この「かものはし」も
こんな靴べらみたいな嘴で

餌をあさつたのだらうか

それは生きてゐる姿のまま凝固したといふよりも

悲しみのままとどまつたというよりも
彼等の輝かしかつた時など まるで
よそよそしい別の世界での出来事であつたかのよう

どれもこれもそつてなく
みすばらしい恰好で立っている

動物達の眼はガラス玉をはめられて
焦点のない眼差しをあらぬ方に向け
さらに古びたものは

白内障のようににごつて
もうすつかり旨いしまつてゐる

世の遁走者なりと断じた江藤淳氏の次の文章は、蓮田がなぜ荷風を好尚しなければならなかつたか……といふ拙論の進行に役立つ。

「荷風の倒錯した論理は『マチネ・ポエティック』と『日本浪漫派』を包含している。

『日本浪漫派』の論客蓮田善明が、近代文学者中ほとんど例外的に荷風を激賞したことを忘れるわけにはいかない。おそらく彼

は、荷風のなかにかくされた『死の論理』を鋭敏に嗅ぎとつていたのであらう。」

（昭和三十四年「中央公論」九月） 読者は応召直前に賜死の詩人六津皇子の運命に蓮田が思ひを致したことを想起していただきたい。入隊後一応の精神的均衡を整へると、和平成立の春の豫感から新生の讃歌詩人志貴皇子の誠に共鳴した。その共鳴が尚早であると危惧させたの

は海南島への戦火の飛火であつた。書簡末尾に見える「とにかくこのごろもどかしい」といふ蓮田の感懐は事実だつたらう。蓮田は再び賜死までの時限をはかるにもそのきつかけを掴みそこねてゐるのである。数日ぶりで演習から帰つてきて机上に見いでた一輪さし。一ヶ月あまりも永い花命を保つた水仙も、葉は枯く根せ歪み、精氣を失つた花容はからから

回帰の時

——いとのぎれたる琴に音もなく——漱石

掘ノ内 歴

正午だ
なじみ深い春の正午
あつちで 噂ばなし
こつちで 悪いちゅうしょう
そいつらがすつかり
たち消える時こく
厨口で水おちやんで
うらの下水に
沈痛な暇の来ている時こく
笑おうとしても

らに萎んでゐる。せい一杯に咲きつづけた花は、今や、あはれにはなやいで死んでゐる。へすべてのものは吾にむかひて 死ねといふ……時代の死の倫理を奇しくも歌つた伊東の「水中花」のあの詩句が、忽然として蓮田の心底に蘇つたに相違ない。へすべてのものは吾にむかひて、死ねといふ、わが如月のなどかくはうつしき。さう……蓮田は伊東の措

顔面筋の感じない時こく
そして どこからも
危害の加はつてこない時こく
もすこしこのまま
生きてゐるのも
よいと思ふ時こく
ぼろぼろの昔ばなしの
幾百回めかを
とり出して ひとり
かみしめるのによい時こく

さあ 私たちも
心から休そくをとる
かぎりなく静止する空気
あたりに聴き入りながら

一九六〇・三・二七

辞「水無月」に換置して死を囁く「如月」の美に陶醉を感じたであらう。
あの伊東の詩は満二十八才の若さでこの世を過ぎた秀才辻野久憲の命運を豫感して歌つた哀措の詩であつた。と同時に、蘆溝橋に発した銃声が、やがては青春達を死へと駆りたてるであらう時運をも、併せ叩つた橋歌であつたのだ。亡びる美しさを讃へること。それがロマンチケルの文学的課題であつた。死の美しさを讃へること。それで死に駆りたてる時運への抗議としたのである。これがロマンチケルが武器とした逆説的なイロニイであったのである。おもへば陰微な武器であつた。
江藤氏は「生きるためには死ななければならぬ」といふ倒錯した論理が荷風の一生を支配している」と言つてゐる。その倒錯した死の論理を蓮田が鋭敏に嗅ぎとつて荷風心酔をしたのだらうと推理してゐる。当時のロマンチケルが逆説と信じた論理も、二十年後の青春を享受してゐる江藤氏には倒錯したそれに映つてゐる。逆説と倒錯。それは裏と面を見ているものの相違がある。これが生きる世代の相違といふものだらう。
私は先に荷風を歎歌型の挽歌詩人と断じたが、蓮田はむしろ人磨的な慟哭型の挽歌詩人である。もし強ひて蓮田に荷風との近似性を

求めるとすると、それは共通した道徳的傾向である。蓮田は家持の恋に於ける否定的な距離の設定を論じた。その否定的な距離の設定はまた蓮田の資質の内に潜んでゐた一性向でもあったのである。その性向はやがて蓮田をして鴨長明に感応せしめる契機となるが、長明に辿りつくまでの摸索が荷風をたぐりよせ心酔を呼んだのだと想はれる。

さういへば蓮田に劣らず伊東も大の荷風びいきであった『珊瑚集』は彼の座右の書であった。『濠東綺譚』もまたこよなく好尚して木村莊八画伯の装になる同著を撫でるやうにして愛蔵していた事実を私は記憶してゐる。いや、伊東の性向の中には、荷風ごのみのスキも潜んでゐたと見るのが本当かもしれぬ。

荷風が庶民の歓楽街である浅草を愛したやうに、伊東もまた大阪の浅草ともいふべき通天閣がある新世界が好きだった。楽屋に踊子や女優を訪ねるやうなスキは職業柄でできなかったが、彼は暗がりでも南京豆をぼりぼりやりながら、セコンド・ラン、サード・ランの霧が降るハッピー・エンドものの活動写真を鑑賞するのを、無二の楽しみにしてゐたのである。

荷風は年少の友である旗某を伴つて歌舞伎

座附近のしる粉屋に入ると、当時としては珍らしく洋装をしていた給仕の小娘をからかったもんださうである。

「荷風はこの小娘の足もとにしゃがんでそのスカートをつまみ少しくそれをまくり上げながら猫撫で声を作り、

『ちよつと見せて頂戴ネ』とからかつていた態度が妙に優雅であつたといふ。」(佐藤春夫「小説」(永井荷風伝))

伊東もまた年少の友富士正晴氏を伴つて心齋橋北詰のビヤホールにとぐろを組むと、白エプロンをした給仕の小女をからかつてみせたらしい。

「突然大声をあげて朗詠をはじめ。自分の詩ではなく明治天皇御製である。と不意に彼は少女のやうな女給仕を呼び、いかにももつともらしく、毛の有無を質問してわたしを愕然とさせて楽しむ。女給仕の方はそんな質問にはなれつこになつてゐるらしく、軽蔑するやうな表情でテンから取り合わない。伊東はいかにも残念そうに一、二回質問を重ねたが、あきらめるや否や、背骨をシャンとのばして明治天皇御製の朗詠をつづけた。(昭和三十四年五月二十日「読光新」(關)富士正晴「わが良友伊東」)

つまり、荷風も静雄も共に、少女をからかふことによつて年少の友をためす風変わりな

老境

田中克己

浅野晃さんは六十になつたからもう本当をいふのだ、といはれた。私は五十年になつたばかりなので、まだお世辞をいへばならないのか。ごもつとも、なるほど、畏れいりました……私は語彙をたづねて見ると、これらの単語は私の字引にはないのだが、もつと不快なことは、私がお世辞を全身で表はすくせを知つてゐることだ。私はよく愛想笑ひをする、よくおつきあひをする、もつともらしいことばでひとをはめる。そしていつもそれが旨くゆかないのだ。私の買つて出た就職運動は百パーセント不成立。私は交際した人からよく悪感情をもたれる。そして私のほめことばは、皮肉にとられるかほめ足りないと思はれる。私はもう隠者になりたがつてゐる。何もせず何もいはないであらうのだ。

桃浪抄

国弘浩介

いまになほ身の不所存を問はれいき春には春の花の咲く日に
視野よぎる黒き雲あり身のうちにわか遠々の罪をみだせり
そのあとには知りつつ云はず去なしてまつはる紅き灯の街をゆく
生きていることさへすでに怖れつつしあわせ過ぎ黄なるたそかれ
虚げらるおもひを秘めて今日を生く心まづしく老ゆるひと生か
思慕ひとつ秘めてこゝに幾歳月白き雲あり心をさそふ
信ずべき素朴をさへも疑へばわか哀しみはいづべにひそむ
夜も昼もただあくかれの身のめぐりろんろんと鳴る着き月の出
空の蒼乱して流る雲ひとつわれにはわれのいのちが展く
夜を徹しつづる愛飲のふみさへや別れしひとに瀾きをおほゆ

スキを持ち合せてゐた……といふことになる。蓮田が荷風に心酔し静雄に傾倒したゆゑも、荷風・静雄のさうしたかくれたスキの性向を、江藤風と言ふなら、鋭敏に嗅ぎつけてゐたからかもしれない。

だまつて歩きつづける

池沢茂

幸吉は省線電車を見て「郊外電車」と言つたこともないし、私鉄の郊外電車を見て「省線電車」と言つたこともなかった。ずいぶん似ているばあいが多いの、色や形や、線路の場所や、その他の感じの相違から、この二つを区別して、理解していたに違いない。ところが「ことば」となると、その理解に相応するだけのものが、どうしてか、生まれてこないのだった。乗り物に特別な興味をいだくやうになつた幸吉は、絵本や実物を見て、電車や自動車に關するかぎり、ほとんど普通児以上に、いろ／＼な種類の複雑な名称が的確

に言えていたのに、それから二年たち、三年たつても、その単語の組み合わせが、どうしても、ある程度しか出来るようにならないのだ。

『特急電車ははやい』ぐらいは言える。

『特急電車は普通電車よりはやい』となる

と、もう、なんべんけいこさせても、言うことができない。「よりも」という比較をあら

わす助詞が、つかめないからに違いない。その意味をあらわそうとすれば『特急電車は

はやい』『普通電車はおそい』と二つに分けて

言わねばならない。『消防自動車は赤い』も

『消防自動車はホースを積んでいる』も言え

る。しかし『消防自動車は大きなホースから

水を出して火事を消します』となると、いく

ら努力しても不可能になつてしまふ。むりに

でも言わせようとするば『消防自動車はホー

スを積んでいる』『大きなホースやなあ』『

ホースは水が出るなあ』『水がかゝると火が

消える』などと、三つにも四つに分けて表

現しなければならぬ。

具体的な名詞はおぼえやすくても、抽象的なものごととは理解しにくいからに違いない。「よりも」と同様に「のほうへ」から「くらしい」「だけ」「しか」「ほど」「だって」などの助詞は、言うことができない。副詞や

形容詞も「はやく、おそく」「赤い、青い」など、具体的に指示できるもののほかは、なかなかおぼえさせることができない。そのうえ悪いことには、幸吉の会話は一層とほしくなっていた。山陽電車や省線が見えるところへ連れて行って『そら来たよ。あれは、なんとという電車やったかなあ』とたずねても、忘れてしまったみたいにもう、なんにも答えようとしない。

山手のほうには神戸電鉄もあって、その終点の三田には、山のなかへはいったところに妻の実家がある。ぼくたちはなんべんも連れだって遊びにゆき、ことに夏には、水が特別に好きだった幸吉は、その小川で、よここんで水遊びをした。それで、その神戸電鉄を見せて『あの電車はどこへ行っているのかな』とたずねると『いなか、いなか』と答えていたのに、その返事も、しなくなった。いくらたずねても、話しかけても、なんにも聞こえなかったみたいにも、まるきり見向きもしないのだ。

ときには、ぼくもじれて、幸吉の肩に手をおき、のぞきこむようにして『幸ちゃん！』と呼びかける。やさしい態度だと、やはり反応がない。きつい調子になると、幸吉はさすがに、さっと顔色を変える。と、のった愛ら

ける。

幸吉の足は、おくれた子にめずらしく、なか／＼強い。親に手をひかれて歩くのが、なんとはいえず楽しいらしい。ひとことも口をきかず、話しかけられても返事をせず、たゞ黙々として歩きながら、じつに晴ればれしい顔をしている。すこしぐらい坂や山路があっても、三キロや四キロは平気で足をはこんでいる。ぼくにしたら、せめて足だけでも丈夫にし、健康の基礎をつくってやりたいという意図もあるけれど、だん／＼かわいそうにもなってくる。ふつうの子供なら、幸吉ぐらいな年ごろになると、友だちはもう、なんにも出来ている。いろんな知識を吸収し、おしゃべりも、さかんにする。朝から晩まで、勉強したり遊んだり、力いっぱい、その生命をそだてている。たま／＼遊びにくる、おないどしの近所の子は、テレビはもちろん、もう映画も見て、その場面や筋など、おもしろそうに話して聞かせる。幸吉には、この、子供としての生命の燃焼が、全然あたえられていない。

大きなおとなといっしょに、なんにも言わずに、ぶらぶら歩きまわっているだけで、いったい満足しているのだろうか。話しかけるといやそうにし、だまって歩いていると晴れ

しい顔をしているが、おびえて青さめ、視線をふるわせ、口もとをゆがめる。

『幸ちゃんは、父ちゃんや母ちゃんといっしょに、いなかへ遊びにいったなあ。いなかには川があったやろ。幸ちゃんは川で遊ぶのが好きやなあ』

なにか答えさせようと、ぼくは幸吉の関心

海岸

美堂正義

岩見から出雲に連なる海岸は

海に崩れ入るやうな切崖の連続

濤は白い牙を上げて嘯み上り

ガスが薄く煙むる海面は

水平線に融けながら空に消え去る

渺茫

北から打ち寄す波頭が際限なく続いて

陸は海に迫り

海は陸に反抗する

崖の中腹を汽車は走り

車窓に氷雨は小さな音をたて

幾度もスチームで曇る帽子を拭ふと

荒涼とした風景のなかに人影は見えず

激しく風が吹き荒れてゐた

この海の終るところにシベリアがあり

朝鮮がある

暗い自然が厳しく大陸を覆ひ

そこから風 氷雨 濤等は押し寄せてきて

心は冷えびえと寂かな情感をおぼえる

雲は低く垂れ

荒々しいリアス式の海岸に

濤は傾むきながら駆け上り

単調な行動を反芻してうむことがない

岩肌の青い海藻は寒々としぶきに濡れ

灰色の空は限りなく拡がって

防風林に囲まれたか拗い家が

流れるやうに視野を掠めて遠離る

ばれしい顔をしているやうな幸吉だけれど、

ぼくにはやはり、疑問がおこってくる。かり

に満足しているにしても、このまゝにしてお

いてよいのかどうか、という自責も、それから

続いてくる。さしあたっての原因はすべて幸

吉の口にあると、ぼくには思えるからだ。会

話ができないから、友だちがひとりも出来な

や興味をねらって、くりかえし話しかける。

それでも幸吉は、ひとことも答えようとしない。いくらか不安そうになりながら、なんにも聞いていないふうで、あらぬほうに目をたゞよわせている。やがて、からだをよじって、ぼくから逃げてしまう。それから、ぼくのほうを振りかえり、ぼくが怒っているのになく、やはり見守っていてくれると見きわめると、じきに安心して、すこし離れたところで、電車が通るのを黙って見つめつゞける。

せつかく応答が出来かけていたのに、また逆もどりかと、ぼくは不安になり、考えこんでしまう。おなじことばかり繰り返していいので、おもしろくないのかも知れない。あんまり幼稚な質問なので、ばからしくて、返事する気にもならないのかも知れない。それとも、押しつけがましく教えこもうとし、むりにも会話させようとするのに対して、おさない心に、なんとなく反発するのだろうか。たぶんそんなことはあるまい。もしそうだとすると、ばからしいと感じたり、反発するだけの精が作用があるなら、むしろ見込みがあるのではなからうか。……やがて、ぼくも疲れこんでしまう。それから、幸吉がぼくの手を取るにまかせ、その手をひいて散歩をつゞ

い。ろくに答えられないから、いろ／＼話しかけられたり教えられたりしても、いやな重荷になるにすぎない。なにかで興味や関心がおこっても、ことばに表現できないから、自分ひとりだけの、その場かぎりの印象にとままって、知識にプラスとならない。なんらかの故障が頭脳にあるにしても、医者や薬でなおせないとしたら、とにかく、なんとか自由に口がきけ、すこしずつでも会話ができるように、しむけてゆかなければならない……。

ところが、ぼくは、はっとして耳をそばだてる。中耳炎のため耳が遠くなっているぼくには聞きとりにくかったが、幸吉はしきりに、ひとりごとを言っていたのだ。

『いなかのおじいちゃん、おばあちゃん。

いなかのおばあちゃん、おじいちゃん、おじいちゃん、うふ／＼。いなかには川がある。かわ、かわ、かわ……』

ぼくが話しかけたときには返答しなかったのに、それから一時間以上もたつてから、ひとりごととして表現しているのだ。もう一年近くも前に遊びにいったいなかの光景も、具体的に思い出されているのだから。『マサシちゃん、ヒロシちゃん』と、いなかの子供の名も、記憶のなから口に出して『うふ／＼』とまた、おかしそうにわらう。

三月十二日。繰りのべてゐた母の喜顔と僕の誕生を祝って小宴を催した。事務連絡に福地氏も混合せて酒を呑んだ。今日は伊東静雄の忌日ではなかったか？と彼は言ひだした。年譜をくるとまさしく八週の忌日。早春になるといつもどこからか伊東の匂ひがする。

三月十三日。前川善吉といふハが来訪した。辻野久憲の異父兄とのことだった。さう聞けば写真の久憲にそっくりだ。久憲の蓋を慰めてくださった……と謝をいたした。久憲の名は久しく憲兵をしてゐた父君が記念につけたものだといふ話をうけたまはつた。

三月十四日。勤めから帰ってくると、四月から小学一年になる坊主が、お昼のテレビでお父ちゃんの小父さんが出たよとのことだった。家内に訊ねると曰井吉見氏の解説で伊東の像と詩が一二篇紹介されたとのことだった。

三月十六日。今橋クラブで桑原武夫氏にお目にかかった。氏の東南アジアの講演があつたのだ。開講までサロンで談合した。氏は伊東に關する拙論の中断を惜んでくださった。三月十九日。加藤よし子さんからたよりをいただいた。萩原葉子さんの著「父・萩原朔太郎」がN・H・Kから放送されるといふ。

保田氏と辻野が雪の日に萩原家を訪れ、朔太郎は泊まれと言ひ、お母さんは肺病の辻野を忌避して泊めまいとする。その場面を聞いてゐたよし子さんは、もし辻野が生きてゐたらとツちめてやつたところでした……と書いてきた。これが自他への真の愛情といふものだ。

三月二十六日。人文書院主渡辺睦久氏が来訪した。学生時代愚著「はぐれたる春の日の歌」を購読してくださったとのこと恐縮した。過般安岡章太郎氏が書院に立寄つた際、僕の勤め先まで連絡してくださった由だが、不在で失礼してつたらしい。章ちゃんが太つたお母さんと訪ねてくれたのは三十年の昔の日のことである。あの日棟方志功画伯は青森裁判所弁護士控室給仕を拝命してゐた。

大宰治は天才少年作家。石上玄一郎氏は革命を夢みてゐた。その同じ空気を章ちゃんはそれと知らずに呼吸して育つたのだ。ひとしれず枝をたわめるほどに実る林檎樹。夢多かつた津軽の空を渡辺氏は僕に思ひ出させた。

四月一日。久しぶりに諫早の上村肇氏からたよりがあつた。丁度伊東花子未亡人がマリオネット師になつたまきちゃんと高校生の夏樹君を伴つて帰省中とのことだ。伊東静雄の墓に碑石が建つたのだ。へわが痛き夢よこの時

果樹園

第52号

蓮田善明とその死 小高根 二郎
春の宿酔 田中克己
山鳩 吉本青司
花盗人 牧章造

郭公に寄せる 浅野 晃
日日臨終 堀ノ内 歴
白居易詩抄 森 亮
虎 美堂 正 義
散花抄 芳野 清
不安な衝動 池沢 茂
後記

蓮田善明とその死 (十)

小高根 二郎

「託摩野雜記」が発表された三月。その中旬にはすでに初年兵教育の検閲も済み、いよいよ野戦に渡る運命も内定してゐたのであらう。三月十三日の夜に書いた散文「小さい歌帖」(昭和十四年「文芸」)には「今にして書き残しておきたい幾つかの事の中に、この歌帖のことを書き残すことにした。」と、末尾にしてある。橋本文彦といふ無名の青年の私家版の歌帖。この稚純の歌集に、蓮田が格別の関心を寄せ、それに惜別の思ひを託したことははなはだ興味がある。

ある晩。蓮田は下の茶の間に降りて火鉢に

當つてゐた。そこに下宿の令嬢が、

「これ、ごらんください……。」

と、さしだしたのが、菊半蔵の黒クロス装のノートに書かれた、この歌帖であった。話によれば、数年前の九州大演習の折、この家にたまたま宿営した野砲兵の中の一人が、座敷の床に牧水の短歌の軸がかゝつてゐるのを見て、自分も短歌を作つてゐると家自刀に歌の話をもちこみ、二三ヶ月してお礼のしるしとして贈つてきた歌集だといふ。開巻……

佳きひとよ

地上のものは

はかなくも

かなしからずや

と獻辭がある。巻末には哲子刀自に寄せた手紙の形式で、収録した作品は十九から二十歳

そ遂に休らはむもの！。伊東の靈はこれで休らふことになるだろうか……。

四月二日。淀屋橋の路上で森亮氏にばたり……と出会つた。僕の退社時間を知つて走せつけるとこだった。令息がめでたく府立医大に入ることになつて、その用務で来阪したとのことだった。氏と僕は高津中学で同期だった。同じ京阪電車の沿線に住んでゐた二人は重いカバンを背に幾度か同道したことがあつた。三十余年前のその日のやうに二人は梅田まで歩いた。瘦我慢をしてゐるが僕のピンはずでに銀。ソフトでかくしてゐるが森氏の頭頂は膚が透けてゐる。別れに島根大学開校十周年記念論文「『海潮音』の用語と文体」と題する労作をいただいた。(〇)

果樹園 第五十一号

(毎月一日一回発行)

昭和三十三年五月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
発行人
大阪生野区奥伊賀ヶ町一番地
印刷所 秀文社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

にかけて作つたものであること、自分はさびしい男であること、隊の勤務の暇々に急ぎ写した由などがしるしてあつた。

そこに刀自もやつてきて、大柄な橋本青年の不思議な印象を語り、大分県の間で、農園などももち、アララギとかの歌人と自称してゐた由などを思ひ出ふかぎに語つた。蓮田はその話を聞きつゝあちこち拾ひ読みしてみ、借りていつて床の中で改めて読み返してみたのである。

桑の葉に水ぶきかくる音きこゆ夜深くしてわがめざむるに

山ひだに家群ならべりかよへる柿の若葉に見へかくれつゝ

蓮田はこれらの作に既成風なうまさを感じてゐるが、格別に関心を寄せてゐるのは入宮後の諸作だった。蓮田と同じ環境下での橋本青年の詩心が、いかに目覚め展開するかに興味があつたのだらう。入宮後の作品には「ひなうた」と題され、次の詞書がしるされてあつた。

入宮前から歌心の貧困はすなきのと自らわびしんでゐたものゝ、入宮してはつきり自分の無能さ知つた僕だ。兵營生活(男のみに許された)に飛をびこんだ筈だつたのに新しい境地の歌は一つとしてつくれなかつた。もつともその間愛馬に徹つて紫川畔を下る折などそこそこの歌ころが湧かぬではなかつたか――

「新しい心境に新しい歌が出来るのを期待してゐます」と文よせられた師の言葉に返す言葉もたぬ自分だつた。入替して七月、はじめて雅い歌をつくる。なづけて「ひなうた」

この詞書に対し、蓮田は、「男のみに許されず」と兵營生活を解したのは、橋本青年のすぐれた自覚だと言つてゐる。即ち、この自覚から、ますらをぶりの歌がほとぼしりである可能性があるからだ。このほとぼしりを閉塞したのは、かへつて骨凡な師が「新しい心境で新しい歌を」といつた誤つた忠告であると言つてゐる。この忠告がなかつたら、恐らく橋本青年は新しいますらをぶりの歌を詠みえただらうに：と、蓮田は同情してゐる。

橋本青年はときに愛馬に鞭打つて紫川を下ることがあつたというから、福岡県は小倉の第十二師団の兵隊である。その野砲第十二聯隊は小倉南西四キロの北方にあつた。その北方の練兵場の東には、足の筋を抜かれて配流された和氣清麻呂の足が立つたと伝へる足立山が聳えてゐる。その麓に流れる湯川に浴して傷いた足が治つたというのである。その時、清麻呂は誤つて川床を這つてゐた小魚——どんこの片眼を踏んづけた。爾來、どんこがすめになつたと土俗がつたへる伝説である。幼年期を北方ですごしたことのある筆者は、土地の子等と一緒に

湯川の どんこは 眼が片目
足が ちんばで いくさが上手
と、わらべうたを唱つた経験がある。

兄太郎に言はせると、すがめでちんば兵法が上手であつた山本勘介の伝説が、いつか清麻呂に訛伝したものだらうといふ。第十二師団の軍医部長をしてゐた頃の森鷗外に「和氣清麻呂と足立山」といふ考證風な随想がある。

蓮田は当時鷗外の「青年」を読んでゐた。独学でフランス語を習得した主人公小泉純一が文学者志願で上京する。たまたま知つた郷土出身の坂井法學博士未亡人の誘惑の中を泳ぎながら、ストイックに己を持する物語である。

「己が箱根を去つたからと云つて、あの奥さんは小使を入れた蝦蟇口を落した程にも思つてはるまい。そこでその奥さんに対して、己を不平がる権利がありさうにはない。一体己の不平はなんだ。あの奥さんを失ふ悲から出た不平ではない。自己を愛する心が傷づけられた不平に過ぎない。……中略……思もなく怨もなく別れば好いのだ。ああ、併しなんと思つて見ても寂しいことは寂しい。どうも自分の身の周囲に空虚が出来て来るやうな気がしてならない。好いわ。こ

山鳩

吉本青司

三十一番 竹林寺

どこかで山鳩がなっている
勤行を了えたばかりの僧侶の
おだやかな微笑に迎えられ
庭園に面した広間に
みちびかれる
遊山の酔客もここまでは訪れず
いつしかはずむ戯言
風発する清談
しずかな自然と信仰とに
閑居した寺院に
ふさわしからぬ饒舌？
憂愁を友とする僕らは
話題の何かを問わず
杳々たる主題の招きに従うだけだ
寡黙な僧侶のすすめの抹茶と
くり色の羊羹の一片にすら
豪華な味覚を
あじわいながら

の寂しさの中から作品が生れないにも限らない。」

この環境の変化で少しももの書けない小泉青年の心境を、入隊以来歌がでなくなつてゐる橋本青年の心境に蓮田は比較してゐる。或ひは蓮田は鷗外が書いたことのある足立山の麓の練兵場で、操砲の訓練をしてゐる橋本青年の暗い顔を想ひ浮べてゐたかも知わらない。

高良台の歌

七日まりわれら過ごせし高良台去るべき
あした雨降りいでぬ
筑紫路高良台演習を終へて帰途行軍間によめる歌
こゝにして筑前筑後を境すとふ古りたる
標石を見てすぎにけり

街あかり遠ぞきにけり直方のわがしまし
寐し家はいづちや

右の歌に見える高良台とは大分県久留米市東南にある高原。直方は福岡県企救郡にある町。或ひは熊本に集結した後で高良台で演習をし、筑紫路から直方を経て北方に帰營したのかもしれない。それとも大演習より前の機動演習の折の作かもしれない。大演習の折の作であるならば、この小さな歌帖を擗げた哲子刀自との出会の記念に、直方宿營に代つてへ街あかり遠ぞきにけり大江なるわがしまし

春日宿醉

田中克己

四月九日は先生の御誕生日で、雨がめつたに降らないといふ。僕はその日を前から楽しみにしてゐて、当日、時間にはもちろん早めにゆく。「石川五右衛門」がある。「敦煌」がある、と僕は見てゐる。これらは僕の同時代人のはずだが、僕はこのごろなるべく引つ込んでゐるのだ。見おぼえのある体つき、近くへ来ると兄さんではなく弟の潤三君だつた。帰朝以来の顔である。やがて先生がお越しになり、宴がはじまる。僕はすいぶん飲んだ。さて翌日のことである。どうも憂鬱だ。僕は「厭世家の誕生日」といふ、僕のバイブルをとり出して読む、ちがふ、僕のは先生のと違ふのだ。第一、昨日の先生はとても楽しげでおいでだつた。——鬱々たる半日が過ぎて夕方となり、僕はハッと気がつく。宿醉かな。そしてこの推測は酒道の専らたちにきいてまはり肯定された。僕はまた「学問した」のである。

寐し家はいづちやであらねばならぬからである。

蓮田は同宿の五高生M君ともこの歌帖を中心に文學論をやつたやうである。へ佳きひとよ、地上のものは、はかなくも、かなしからずや」という序詞から推して、当然、相聞の歌がなくてはならぬといふ結論だつた。それを見つけた蓮田は「ある！ ある！」といつて若い友M君によみきかせてゐる。

愛恋秘唱

わかばせし山のみどりやかくばかり人より
りくれば目にしむものか
思はざりしところにおひしわがこゝろお
ののく心おさへかねつも

ひとを訪ひて

奥の間ゆかばそき声す会はまくと訪ひに
しものを汝は臥れる
看護女の帰りしあとに座をすゝめ力なげ
なる汝が手にぎるも

夏相聞

汝がこゝろひるがへすすべわがしらにひ
る大路にたち咲くかも
いらだてる心すべなしひきすへて家の子
叱る声あららげ
尋常ならば論するに足りぬ稚純な歌である。その歌に、生還を必ずしも期しえない出

征直前の貴重な時間を蓮田が特別に割いたわけはその後は住所も明らかでなく、今頃は野戦に渡つてゐるかもしれませぬ……といふ、刀自と令嬢の噂に、橋本青年の純情さをいとほしんだからである。

しかし、その理由は別にある。先に蓮田はこの橋本青年と鶴外の青年像とも見るべき小泉青年の相似性に関心したことは既述したが、蓮田はさらに橋本青年と中河与一氏の「天の夕顔」の瀧口青年とを心底で対比してゐたのだ。

天体物理を専攻した瀧口青年。彼は人妻であり母性であるあき子という女性から借りた「アンナ・カレーニナ」に、へわずれじの行末までは難けれど今日を限りの命ともがなといふ高内侍の歌を書いた紙片が挿入されてゐたのを、契機として近附いてゆく。さう言へば、鶴外の小泉青年もラシイヌ一巻を借ることゝ坂井博士未亡人に手繰りよせられた。しかし、その媒体は歌ではなかった。橋本青年は床の間に発見した牧水の軸で哲子刀自に知己を求めた。つまり、小泉より瀧口の方に近い。瀧口青年はあき子が未亡人となる日まで二十三年間にわたつて恋ひつづけた。哲子刀自に「小さな歌帖」を献呈した橋本青年もまた大陸の戦雲の間を疾駆しつゝ、今日も恋

花盗人

牧 章 造

花は草の花より
木に咲く花が好きだ
頃日から
庭に木の花のないのを
嘆くふりでしたら
家の長男坊主が気を利かした
遊び呆けたか
おせい帰宅に眼をむいて
怒鳴ろうとする私の顔へ
戸口の外からニユッ
突き出したライラックの花の大枝
花の蔭から眼を輝やかしている
花盗人の長男坊主に
このやろ怪しからん奴だ

ひわたつてゐるかもしれぬのである。

蓮田は「小さい歌帖」を読みつゝ、鶴外の小泉青年の心境と対比し、さらに与一の瀧口青年との氣質的な相似性を心に思ひ浮べてゐたのである。さう私が結論するゆゑを、坂本浩氏の次の文章が実証する。

非常に多忙であつた時、氏はしばしば「天の夕顔」論を書きたいと私に言つてきた。

(昭和十四年「文芸文化」七月号)
坂本浩「美の創造」

蓮田はこの思ひを「小さい歌帖」に託したのである。

書簡を清水文雄氏に送つてゐる。
昭和十四年四月二日
熊本より東京市世田ヶ谷区祖師ヶ谷二丁六六
清水文雄宛封書
先日 は 激励の手紙本などありがたう。古今和歌集は携行することとした。文芸文化四月

郭公に寄せる

浅野 晃

ことし初の郭公の声を
今日きいた
汗だくなつてじゃがいもの
土寄せをしてゐた時だ
なつかしい声だ 細羊の森から
呼びかける
もう六月だ いくら北といつても
春はたけた
鳴いてゐる 鳴いてゐる それも
去年の声にそっくりだ
灰色のつばさの友よ この一年を
おまへはどこに暮らしてゐた

鳥に出てゐる誰もがみんな
おまへをきく
おまへの歌は過ぎ去つた日を
すばやく想ひ出させる
あの世へ旅立つた父、母、夫、妻、子
兄妹、友のすがた
こんな淋しい曠野に澁んだ人生にも
別れはあつた
けれどみんな黙々と働いて食べてゐた
夜は海鳴りをきいて
野天で焼かれたなきからは
赤々と燃えた
よく帰つてきたね 郭公の鳥よ
おまへは死を生かす
お互ひに生きてゐた その思ひの
喜びと悲しみは分ちがたい

と叱つたところで

一体小言になつたかならぬか
ライラックの花の芬りに叱せて
女房までがいそいそしはじめ
うちの花瓶は小さくて困つたわ
などと呟きながら
枝ぶりなんかを整えている

さてこのライラック

たしか郵便局長さんの庭のものだ
垣根を越して咲いていたのを
夜陰に粉れてこつそりと
頂戴してきたのに相違あるまい
そうだこんどそのうちに
局長さんと顔を合わせた折にでも
根分けして貰うとしよう
私が口に出してそう云うと
長男坊主もニヤリとする

「蓮田氏に召集令が下つたのは丁度その翌々日のことであつた。氏は極めて卒直に次の言葉を私に残して發つていった。——「天の夕顔」を最後に読んだから、思ひのこすことはない……」

その後、氏の属する聯隊にあつて演習に号も昨日受取つた。段々予定が延びて、漸く明後四日に出発することになった。南昌攻撃の筈だつたのが、案外早片附だつたので、行つて、さてどういふことをするか。

日本文学の会の仕事も、いざとなり心残る。後は、いよいよ君に大きな荷となつて、会のためにも、君自らの仕事にも悩み多い路と思ふ。健在に突破されんことを祈る。

僕の為残しとして、別送のやうな原稿を先日急ぎ書き上げた。四百字原稿紙に換算して一三〇枚位。何とか発表出来ないかと思ふ。「預言」一つでもよし、他の「詩のために」「日本知性の構想」と併せてもよし。更に、「本居宣長……」を併せてもよし。国文学の本にはなるまい。尚、同封の中河氏のはがきの如く、もし中河氏の世話を得られたらたのんでみてくれたまへ。もし本になるやうなら、純白の紙の表紙(やはらかい)にしてほしい。あとのこと、用紙などぜひたくいらぬ。安い本でいい。「日本知性の構想」は、中央公論社に了解を得る必要あり。

先生によるしく。中支派遣軍坪島部隊付となる筈なれど、詳しくは向ふについてから。体は気をつける上にも気をつけて病気で斃れたりすることないやう注意しよう
奥様へよろしく

四月二日

清水君

蓮田

蓮田は書簡の冒頭、古今和歌集を野戦に携行することを宣言してゐる。既述したが蓮田も伊東も古今和歌集の信奉者であった。彼は生死間髪の時身を置いて、さらにその文学精神を見究めたかったのであらう。

彼が出征を眼前にして書き上げた原稿とは「鵬外の方法」であった。「詩のための雑感」「本居宣長に於ける『おほやけ』の精神」と一緒にまとめられて同年の秋に文芸文化叢書の一冊として上梓された。

尚、書簡に同封された中河氏のはがきとは左のごときものであった。「早速原稿賜はり御厚志万謝仕り候御いそがしき中なることわかり相すまず候：然し一読大愛得がたきものと存じありがたく存じ候御大作に御丹念のことどこに発表せられますにや若しあてがなければ小生に御世話させられ度云々」とある。たぶん蓮田は感銘した。「天の夕顔」評を中河氏に送ったついでに「鵬外の方法」を書いてゐるとたよりしたので、折返し中河氏が上梓の世話を申し出られたものであらう。しかし、既述したやうに清水氏の努力で上梓された。

てゐる。蓮田は港頭で出てゆく船と水脈とを眺めたのだらう。完全軍装はつしりと肩に喰ひ込んでゐただらう。日本無敵なり。この言葉はむしろ自分に言ひきかせた言葉だったらう。

昭和十四年四月十四日
九江より日本文学の会宛封書

白居易詩抄 (三十四)

森 亮

あんず

趙村のあんずは来る年毎に枝いっぱい紅い花をつける。

この十五年間それを眺めに幾たび足を運んだことか。

七十三の老人ともなれば再び来れるかどうか分らない。

春のけふかうして訪れたは花に別れを告げようとしてよ。

★ 独楽吟

眼がかすみ耳いよいよ遠くなり、時にめまひ

日日臨終

堀ノ内 歴

鬱々 沈々 夜は更けており
更けすぎており
あぶり出し絵のように我が四界は
そっくり今 始生代に逆戻りする
死ぬには いま

土地は黒く 寥々と拡がり
つめたい鉄の匂ひをさせている
慰撫は願はないのに ここには
不滅な安穩が 立ちこめる
死ぬには いま

かぞえ切れぬほど「時」は訪れ
それらを見送るたび

出港は予定より一日遅れ四日となった。

昭和十四年四月五日

門司より東京市世田ヶ谷区祖師谷二ノ六六
日本文学の会宛封書

本日午後出発

われ／＼の仕事、いよ／＼望多く又難しくな

大分やって来た。江を遡って既に何日か。何しろ長い河であり、広い河である。毎日同じやうな景色ばかり見てきた。今日ここで上陸するか、或はもう二日を費して漢口まで行くか、連絡者が帰って来なければ分らない。夜来の微雨。

途中、上海、南京に遊んだ。

昨日は、十日前に砲撃を受けたといふ所を通

に悩まされる。
まだ確かなものといへば心とくちとが残って
ゐるだけ。

今朝の心はすみには多少の謂はれがある。
仏名経百部をくちづから唱へをはったその安心感。

注「あんず」の原詩は遊村邸香花(四の六七五)の春に書かれたものである。「独楽吟」の原詩は歡喜二偈の第二首(四の六九九)で、彼の七十三、四才の作。仏名経は千仏名経をつづめた語で、わが国でも昔禁中の仏名会(ぶつみやうゑ)でこれが誦せられた。前回(三十三)の注の第四行の「題名泉」は「題石泉」の誤植であつた。

悔悟や自嘲は見られなかった
「人」ののぞみが持てないこと

生きて来たことは
細く枝の尖の一類の「死」を
大事そうに持ち守つた
それだけでもう心は一ぱい

いま時間は更けて墜ち 露呈した
始生代の空間と 匂う鉄の土地とが
四方から呼びつづける
生きてゐるそのまま そつと

「死」の側へ移る可きとき

鬱々 沈々 ブップブップ……
まだ呼吸はつづいてる

死の垂れ糸の尖は 握つてある
死ぬには いま

つてきた。励まれよ。流れ去くものと、之を切つて出でゆくものとをきびしく感ずる。戎衣や、身に重きも、堪へた。日本無敵なり。友の誰れ彼れへよろしく。

門司で投函されたこの端書には万感が溢れ

つた。望遠鏡で覗いてみると、真赤なつづじが映つた。数隻の船を沈めて封鎖した所も通つた。

通過して来た戦跡と、広漠たる河と野と——ここまで来てその遠征の心がはつしと胸に來る感じがする。読むものは行李に入れてゐるので、支那語の本を時々出してよむばかり。今のところ、むしろ余り読みたいとも思はない。セルパンを持つてゐる奴があるのので一寸めくつてみたら「小説の流行」についての二三家の論があつた。僕も「小説について」に於て書いたことがある。問題なので走りよみしてみたが、まるでバナナの投売りのやうな物言ひにすぎないので、放つてしまつた。もし読むなら詩をよみたい。「西康省」(註・昭和十三年十月刊)を行李に入れてゐる。日記もつけてゐるが、詩を書くことの方が多い。

今船窓に(註・我々の乗つてゐる今の船は百七十トンの扁舟だ)、舳舻で卵を売りに來た。覚え立ての支那語で交渉(?)すると、三十個「塊錢」(一元)で、それを塩と替へて呉れといふのだ。

(僕の随筆「小さい歌帖」がのつたら、一冊、熊本市大江町大江七〇七、小林哲子氏へ送つてやつてくれたまへ——清水君へ。尚、

毎号一冊愚妻へたのむ

丸(文字)日蕪湖の対岸にゐることが分つたが、遂に連絡がとれなかった。

中支派遣稲葉部隊坪島部隊気附

蓮田 少尉

* * *

昭和十一年・十二兩年の高野夏行には、蓮田は四百里の旅路を遠しとせず台中から馳せ参じてゐた。熊本から門司、上海、南京を経て九江までの旅路。距離からすればむしろ先の旅路の方が遠い。しかし要した日数は逆である。五日門司を出港して十四日まで丸九日間。しかも水路のみであったから遠遠の感に堪へなかつたらう。『西康省』等の書籍は行李に眠つてゐる。ゆけどもゆけどもたゞ広漠たる河と野……。はつしと胸にきた遠征の心を蓮田は詩に託したのだ。

彼らは勃ねたる、倭の民なりき。

彼らは漣り無き綿津海の彼方と

大いなる空と陸とを望み見て、

情堪へがたかりければ、

「八幡大菩薩」の旗書き立て、

語通ぜぬ国々へ遠く征で行きぬ。

彼らは心ものの慾にかかづらはざりしかば

宝を供へてめで迎ふる者を礼まひいつくし

み、財を吝しみて抗ふ者を惜りて伐ちたりき。

彼ら、不思議なる徒は、かくて

大陸を、西に南に掠めめぐり、

或は古昔仏陀坐まして、花鳥の色声異しき

天竺を襲ひ

或は長江を遡りて、老仙天翔ける崑崙を探

りしに

大明国愕然騒ぎて、防ぎあへず

日本將軍に請ひて之を討滅せんとし、

不逞なる尊称を奉り、貢物山と積みたりし

も、

遂に將軍之を鎮め得しことを聞かず――。

唯いつとなく彼ら自れと水に死に行きき

……

ひとり山田長政といへる強者、

暹羅國に、王者の勢ひをほしほしに、

毒を盛られてはかなき最後をとげたりと、

青史にその遠征を惜しまれぬ。

(昭和十四年「文芸文化」)
七月号「通信紙隨筆」)

たまたま同行者に東亜同文書院出身で東朝上海特派員をしてゐたことがあるM少尉があつた。蓮田はつれづれなるまま彼らから和寇の話を聞いたのである。

もともと和寇は元寇による国防費の過重か

散花抄

芳野 清

暗い春の午後だから後悔のやうに汚れてしまつた花びらを散らしてゐる豊かな土壌と浄らかな水にはぐくまれこんなにもきれいな花びらをつけたのに

あゝ、花季のこの不安とおののきは

愛憐と憎しみとの奇妙な交錯は

滅亡と隣り合はせの花々の悲しみから

香のやうに立ち迷ふのであらうか

花びらはためらひながら地に落ちる

閉ざれた窓ガラスにもふりかゝる

不思議と艶めいた花季の午後が

そこだけ明るく暮れなづんでゐるやうだ

花々を見つめてゐると、そこから

小さく開いた唇や胸の脹らみが浮んで

くる

愛する術も知らず、修道僧のやうに

心を閉して立ちつくしてゐた雅い日が

(旧稿より)

虎

美堂 正義

動物園の檻のなかを

虎はのつそと歩るき廻つてゐる

あれらの瞳には輝く光は消え

生きものを引き裂く爪も見せないで

行つたり来たり面倒くささうに外を眺め

たり

日本で生まれた虎かも知れないが

既に野生は失はれてゐるが

あくびをした時に鋭い大きな歯並を見せ

皮膚の模様が威圧を感じさす。

桜の花柄にも心を動かさないで

退屈に疲れたやうに寝そべて

この狭い檻の外に出られないのは

随分不自由であるに違ひない

夫婦喧嘩しても逃げ出せないし

親に叱られても隠れる処がない

むしろくさしても一杯呑めないし

夜は外のネオンの明りを見ながら

仏丁面の顔を突き合してゐなければなら

ない

郷に於ても転載された勇武の士である。「惟中華に主有る、豈夷狄にして君無からん、乾坤浩蕩にして一主の独權に非ず」といふ自主精神を堅持されて、それを太祖への返事とされたのである。

然し、太祖はやがて日本が南北朝に分れ、主権は北朝を支持する足利義満が握るところであるとなつた。義満はまた明から資財を得て榮位の維持を策した。「皇明太祖実録」の伝へるところによると義満は白金一千兩、銅錢一萬五千方貫文、その他鉅額の贈与を受け、日本国王の冠服、亀紐金印までも貰つたのである。

M少尉は恐らく当時上梓された秋山謙蔵氏の「日支交渉史研究」が伝へる限度の和寇に關する知識を蓮田に教へたのだらう。或ひは上海に特派されてゐた時に金山に足を伸ばしたこともあつたらう。私が見たあの「斬寇碑」の所在も蓮田に語つたかも知れない。へいつとなく彼ら自れと水に死に行きき……さう蓮田は詩句をくちさみつつ、改めて「洋たる楊子江の溢れる春の水に、自れの運命を問ふたらう。

石浜恒夫

流 転

創元社・二六〇円

不安な衝動

池 沢 茂

『もう幸ちゃんはおかん、おきらめてしもた、いくら言葉をおぼえさせようとしても、ある程度までしか出来ん。かわいそうやけど、やっぱり、あたまがこわれてるんやなあ。受け入れるだけの力が無いんや』

ぼくがこう言つて投げだすと、妻は顔色を変えて『そんなことあれへん。あれで、なか／＼かしこいんやわ。口に出しては言わんけど、あたまのなかでは、わりあい理解してるもん。変なこと、うっかり言われへん。知らん顔しても、ちゃんと聞いて、おぼえていゝるんやもの、とき／＼こわくなる時があるわ』と反対した。

『なんで幸ちゃんはあんなんやろ。ちょっとも言うこと聞いてくれへん。お医者さんは「精神分裂症」とか「自閉症」とか言うてたけど、「精神分裂症」いうたら、つまり「気遣い」いうことやないの？ 幸ちゃんの相手してたら、こつちまで気が変になつてくる』
妻がまゆをしかめ、げつそりしてしまふと、こんどはぼくが『あせるから、いかんのや。あせらんと、気がな、気なアがに、やつて

いたら、だんだんわかってくるよ。ふつうの子が一年で出来ることに三年も四年もかかるやろけど、覚悟をきめて、のんきな気持ちでいたら、そのうちに、常識ぐらいはぼつ／＼付いてくるよ』となだめた。

ぼくたちはおたがいに、相手に絶望され、投げだされるのに、おびえていたのだ。ぼくたちのどちらにも、ひとりだけでは、幸吉という重荷の責任は背負いきれない。すこしでも多く、相手に分担して欲しいのだった。はげましあい、ごまかしあい、助けあい、なだめあつて、ぼくたちはようやく、その日その日をすごしていたのだ。ところが、はじめのうちは、運のわるい重荷に、おどろき、押しつぶされて、これだけのことで、なか／＼できなかつた。ふたりのどちらかが幸吉のことで、疲れていたり、なまけていたりすると、その相手はじきに、いら／＼し、腹立たしくなつてくる。しかもたいてい、そのまま爆発してしまふ。

戦争未亡人になつたぼくの妹に、女の子だに幸吉に似て、ずつと重症の異常児がある。赤ん坊のとき何べんとなくヒキツケをくりかえしたのが直接の原因だろうが、その父（戦死した妹の夫）の兄は、大学の教授で、精神病院に入院していた。妻ははじめのころ、腹して、これまで大切に保管していたびんを取り出してぶつつけはじめ。

ぼくと妻とのあいだが険悪になると、幸吉もやがて、なんとなく不安になつてくるらしかつた。ということ、幸吉のばあいでは、かね／＼だれにもさわらせないように保管している大切な取集物に、なにか異状がおこつたのではないかとこの心配が、ふいに、おそつてくることなのだ。かれはごそ／＼動きたしせまい家のなかを走りはじめ。品物の数が多く、保管の場所はたいい数か所にわかれていゝるので、その一つ一つを点検するのだ。そして、きつと、なんらかの異状をさがした。たとえば、コショウのびんが足りなかつたり、ピタミンのびんの一つに、ふたが取れていたりする。きげんがよいときにはそれは、ど気にかゝらなくても、こんなばあいには、猛烈に気にかゝり、居ても立ってもいられなくなるのだろう。とつぜん泣き顔になり、『くすりのびんの赤いふたア！ くすりのびんの赤いふたア！』などと泣きわめきながら、ぼくたちに突つかゝり、家のなかを駆けずりまわる。からだをよじり、よろめき、ころがり、地たんだをふむ。しばらくでも放つておく目的の品をさがしだそうとして、そこらへんのものを手あたりしだいに引っくりかえす。いすを持ってきて、たんすや棚のうえのものまで引きずり落とす。しまいいにはヤケをおこ

を立てると『幸ちゃんがあんな子になつたのは、あなたの血筋のせいよ。あなたの遺伝やわ』と目をキラ／＼させた。すると、ぼくも『ぼくの血筋と違ふよ。精神病になつたのは義理の兄やから、直接には関係ないんや。それに、松子のほうにかて、ずいぶん変わった人があるやないか。はつきり精神病やなくても、いかに精神病や自閉症に近い人がな』とやりかえした。ぼくたちは、どちらも神経がとがって、一方が腹を立てると、他方もじきに、腹が立つてくるのだ。しかし、そのあとでは結局、ふたりとも、一層はげしく疲れ、不安になり、みじめになつてしまふ。相手を突きさした針はそのまま自分に返ってくるだけで、現実はずこしも良くならない。とげ／＼しい不安な空気はむしろ幸吉にも伝わつて、よけいに悪い事態がやつてくる。

幸吉はおさないうころから、その時期によつて、ある一定の種類の品物を寄せあつめて所有するといふ妙なせに、一貫して取り付かれていゝ。ひところは、食卓用の、しょう油さし、コショウや塩の容器、ソース、それから、びんづめの菌みがき粉や塩から、つくだ煮、あるいは、ピタミンやカゼや胃腸などのいろんな薬、こういつた、あまり大きくないありとあらゆる種類のびんを収集していたが

伊東静雄全集 全一卷
人文書院刊
今秋十月刊行予定

桑原武夫 編輯
富士正晴 集
小高根二郎 集
未発表 初期詩篇
散文篇・書簡 三六四通 収録

四月十二日。大朝紙上の詩雑誌評で堀ノ内歴氏の「春の食事」が佳品としてとりあげられた。

四月二十三日。池田勉・栗山理一・清水文雄丸山学の四氏が世話人となって、八月十九日の蓮田善明の命日に文学碑が建てられる由連絡をいただいた。所は家郷である熊本は植木町の田原坂公園内である。蓮田が臺北はスンバ島で詠った絶唱——送金票に書かれてゐた姉がさるひとへのきぬのかたにせむわが名づける浜藤の花

が刻まれることを希望する。揮毫は佐藤春夫先生……とありがたいものである。

四月二十七日。高知在の吉木育司氏の譯詩「春のマスク」がN・H・K第二放送の電波に乗った。愚劣な電波芸能の氾濫のなかで、これは物語の主人公が造った鈴の音のやうに胸がすく作品であつた。

四月三十日。京都は先斗町四上ルの「いはを」で伊東静雄全集上梓の打合せが開かれた。桑原武夫氏の尽力で人文書院からこの秋に出ることとなつたのである。桑原氏。富士正晴氏。人文書院の若主人渡辺陸久氏。伊東の私淑であり編輯助手をしてもらふ京都女子大の杉本秀太郎氏。それに僕が集會した。

僕と富士氏が全集の企劃を始めたのは伊東の死んだ年の翌昭和二十九年春であつた。連名の照会状を伊東の知友に発送した。その照会によつて諸氏から寄せられた伊東書簡は三四八通に及んだ。その書簡の筆写と諸種の資料の渉猟は当時阪大の学生であつた福地邦樹氏が夏休をつぶして献身してくれたものであつた。おもへば丸六年の歳月を経たことになつた。

まだ入手してない作品は、伊東が大学三年時代に応募して一等当選をした童話「美しい朋輩達」である。大阪三越主催・大毎後援の大札記念少年少女向映画脚本募集に応じたのだ。今度三越が社業五十年史を編むことになつたので諸種の資料が整理されつつある由である。その中から或ひは伊東の童話が発見されるといふ望みも全くないわけではない。今は伊東の霊の加護をまつばかりである。

伊東の没後、彼の顕彰に力を致して下さつた諸家が多い。伊東静雄詩集を編んで下さつた桑原・富士氏の愛情はもとより、ジャーナリストックには井上靖、三島由紀夫、庄野潤三、江藤淳諸氏、蔭から支援を下すつた人に大山定一、野間光辰、河盛好蔵、栗山理一、清水文雄、田中克己の諸家がある。頼原退蔵博士の末亡人芳枝さんの応援も全く忘れがた

いものがある。ここに改めて深謝申し上げる次第である。

編輯担任は詩篇・散文篇を富士。日記・書簡篇は僕。それを監修して桑原氏が総論を書く段取りとなる。伊東が古今和歌集——とりわけ、在原業平のパラドキシカルな肯定の手法に着眼し、外象から核心を衝く諷刺詩人エリヒ・ケストネル、核心から逆に外象を構成するライネル・マリア・リルケの二様の独詩人の詩法に学び、古今和歌集と唐詩人を照応収録してゐる和漢朗詠集の融合の精神に學んで、西欧の現代詩に対応して一歩も譲らぬ日本現代詩をものした彼の偉業は当今無比と言つていい。無意識であつた中原中也に対しその意識と組織に於て雲泥の差がある。(〇)

果樹園 第五十三号 (毎月一日一回発行)

昭和三十五年六月一日発行

池田野町一六八
編輯兼 小高根二郎
發行所 果樹園社
印刷所 秀文社
池田市野町一六八
大阪生野区巽伊賀ヶ町一番地
定価 三十円

果樹園

第53号

蓮田善明とその死
雁かえる
白爪草
五月うまれ

燕の歌
多摩墓地
五月の朝
白居易詩抄
楽器
さがしもの
後記

上村肇
田中克己
美堂正義
森亮
浅野晃
池沢茂

蓮田善明とその死 (十一)

小高根二郎

蓮田が野戦第一信を發した九江は、唐詩人白居易が住んでゐたので有名な所である。

一・二〇年以上の昔、彼は兵馬をつかさどる江州司馬を拜命して九江にやつてきた。南に聳える廬山。その西北峰である香炉峰の北、滄愛寺の南に、草堂を結んで風月を友にしたのである。彼は寝ながら簾を撥くと香炉峰の雪が鑑賞できた。その風流の故事にあやかつて清少納言は才女の名を一世に高からしめたのである。蓮田がもし上陸を許されてゐたらこの風雅の出会を戦雲の下でも随喜しえたらう。

恐らく蓮田はこの風雅も知ることなしに九江を發つたらう。「ふりさけみれば廬山はいまや東ねたやうに高くそびえ、もはやうねうねと裾をひく姿ではない。湖口をすぎて大孤山を遠望すれば、道士の冠のごとく、碧波万頃の中に立つ、奇観にちがいない。」(小川環樹「吳船録」)南宋の詩人・政治家范成大が七六〇年の昔に描いた風趣は、楊子江の水と共に變つてゐなかつたらう……。少隊長として前方を哨戒をする眼は後をふりかへる余裕はなかつたらう。

翌日も蓮田は第二信を日本文学の会に送つてゐる。

昭和十四年四月十五日

中文・稲葉部隊・坪島部隊・少尉蓮田善明より大

日本・東京市世田谷区祖師谷二ノ六清水文雄宛
封書

昨日手紙出したが、時や所を書いたので着いてゐないかもしれぬ。幸ひ駐泊して、今日一寸暇があるので、――

もう第一線である。○は到る処に○○○○してゐる。実戦を昨日迄やつた兵隊などが、郷土をなつかしがって、(二字缺損) ようこと尋ねて来て、快談したりする。何しろ僕の郷土部隊(そしてこれから一結になる部隊)は物凄い攻撃力をもつてゐる。弾の下をくぐらない僕にはその逞しさが、羨しい。僕の部隊は、「中支派遣軍糧食部隊坪島部隊」だが、後便でもっと詳しくなるかもしれぬ。そちらから出す時は、「歩兵少尉」と肩書してくれる方が便利と思ふ。

文中〇で伏せてゐる個所は検閲で抹消されてゐる。昨日の書簡で時と場所が抹消されてゐないことは僥倖だった。直屬部隊さへ決つてゐない状態なので検閲を免れたのだらう。

先の書簡で漢口までの行程に要する日数は二日とあつたから、この書簡はその途路で出されたものであらう。折から漢口の北西方面に江北綜合作戦が展開されてゐた。昨年十月二十五日漢口を占領してゐたが、その奪回

を企図して李崇仁九ヶ師湯恩伯六ヶ師が四月攻勢に転じてきたからである。その作戦中心の大洪山脈より蓮田の位置はかなりあるが、その周辺にもそれ相応の波動が伝へられ、各所に戦闘が展開されたらう。その戦闘を終へて引揚げてきた郷土の兵隊に、蓮田は参考のため戦闘の実相を訊ねたのである。

「彼らの経てきた幾多の激戦——殊に最近のめざましい実戦について訊いても、実にとりよめのない話であって、将校たちでさへ、何か一心に語ってくれるのだけれど、非常に抽象的に、調はば単なる口吻のみで殆ど具体的な描写を缺いてしまつてゐることも多い。しかも相手さえ掴まへたら、その訳の分らぬ実戦談を無性にしゃべりたがるのである。唯その中で、ほんの時たま、凄まじい実戦の印象が思はず語られることがある。例えば、今度の激しい山岳戦：中時：の夜襲で、私の小隊は小隊長も傷つき敵の包囲をうけ、本隊とは連絡が断たれ、敵前三十米ばかりの岩かげに匍ひついで乱射を受けたが、真暗い中で鼻の前をヒュッ／＼機銃弾がとんで、左手の岩壁に当ってパツパツ火花が散る、没法^{マイチホウ}でしたよ——といったやうな描写がどびだす。しかし大抵は、どうも話がつかみにくく、而も又彼

みなさまお元気ですか。
赤ちゃんも大きくなられたことせう。
こちら、まことにいい気候です。
仏法僧鳥をこの間、ある山間に宿営した夜びてきました。

白爪草

吉本青司

講堂では少年たちが
剣道のけいこを始めていた
ほくは
鎌をかついで庭に出た
少女が二人
四つ葉のクローバーを探している

兵隊のとき——
△ほくは輜重兵だつた▽
異国の兵士たちが
△それは囚虜だつた▽
宮庭の白い花の絨毯にうずくまり
クローバーをちぎっては
南京袋へ入れているのを見た

雁かえる

堀口 太平

浅草にゆく。
水上バスにのせてやろうかとおもつたが、川のうえはすこしさむそうなのでやめた。山口屋ののきさきにつるされた猪が春風にふかれている。
六区の舗道は、私にも陽気に鳴っているハモニカだ。
淡島神社の堂に、埃っぽい折鶴がざっしりさがっているのをみたら、関帝廟をおもいだした。
世間の片隅をみつければ、へっついこのわきに踊るようになれるのも、休みという日のひかりなのだ。
花やしきのなかに釣堀があつた。

らはそれでケロリとしてゐる。」（「文芸号」通信紙）この先輩が語る抽象的な戦闘談義に、蓮田はたゞ彼等の逞しさを羨むよりほか術がなかったであらう。
蓮田はその書簡を出した一日後予定のごとく漢口に到着したらう。軍司令部から直風隊は河野隊である旨の指示を受けた。第一、第

小鳥まことに多い国です。
奥さま、一郎さまよろしく

★ ★ ★
この書簡には全く戦塵の臭気はない。先生に心配かけることを格別に危惧したからであ

△かれらの食糧なのか
それとも家畜の飼料なのか
わからなかった▽
柔らかい日ざしの中に
△ふたたび戦争の不安は訪れている▽
四つ葉のクローバをもとめて
あそぶ少女
△草を摘む姿勢は変わらないものだ▽

幸福というものの
何とはかなく
無力に思われることよ
ひと知れず
花をつけ初めた雑草を
惨酷に根切ることを ほくは
思いとどまった

釣堀のなかに釣堀があり、そのなかにまた釣堀があるのだが、これは末端だ。

あや子を木馬にのせてやった。
私は射的をやつて、走るインデアンや、波間に見えかくれする鯨をねらつた。
うす汚れた人たちのうえに、春の日は太鼓のようになりひびく。
月がうつつらそらにかかっている。
とんでいるのは鳩かとおもつたら、雁が帰るのだ。
新世界でホットケーキをとり、あや子のたべおわるのを待っていたら、
まえにすわっていたおばあさんに、「お父さんといっしょでいいわねえ」といわれている。
俳句がいくつもできてきそうだ。
（一九六〇・五・二）

二信と同じく通信紙に走り書かれた第三信——斉藤清衛先生宛の書簡には、直風隊名が初めて明記されてゐる。

★ ★ ★
中文・稲葉部隊・坪島部隊・河島隊少尉蓮田善明より
り東京市世田谷区祖師谷二ノ一四二齊藤清衛宛封書
斉藤先生

らう。

蓮田が郷里を発つてから一ヶ月、正確に推定すれば五月三、四日に書いた散文「通信紙随筆」（前掲）の文章を分析すると、蓮田小隊は河野中隊に合隊するため、「遡れる限りの最上流近く」、多分、漢口から分岐した漢水を四百キロ遡航して、河北河南包圍殲滅作戦の河南側の前進基地鐘祥まで進出したやうである。「隊に合するたために通つた往復四十里余の新戦場の山岳地方の行軍」とあるが、これはまさしく主戦場大洪山脈の進出を指す。「雨と泥濘と日でりと、そして初めて見た支那と初めて経たなまなましい戦跡」とは、蓮田小隊が合隊したとき、すでに作戦が終了してゐた事実を示してゐる。即ち、四月二十二日、中文軍報導部が漢水東部作戦の終結をすでに発表している事実から、それと推測される。

つまり、蓮田小隊は原隊に合体したわけでは、戦はずして作戦基地鐘祥に引揚げ、がらんとした街の一隅の二階屋を割当てられると、「次の任務を貰うまで、隊は数日此処で宿泊すること」になつたのである。蓮田は二階の奥の一室に陣取ると、斉藤先生にも書簡をした、ゆゑ、「文芸文化」に初めて「通信紙随筆」を書く余裕に恵まれたのだ。

「汚れた紙をべた／＼壁に貼った六畳程の部屋であるが、今まで半月程寝て来た所がひどかったため、この部屋に入ってきた瞬間、真正面に開いたせまい観音開きの破れ障子窓から入って来る風がサラ／＼してゐて、悪臭を伴はないのと、いかにも二階といったやうな高爽な（？）光線の感じと窓べに寄せられた珍らしく幅広い卓と、がっしりした四角な腰掛けが備えられ、あまつさえ卓上には赤い薔薇の小鉢さへ置かれた、この部屋の様子が、恰度子供が何かうれしい目にあつた時、無茶苦茶にしやべり出すやうに、急に私に心身の荷を解きたがらせるやうな気持ちにしたのである。私は敢て一般の兵の大きな苦勞をここで言はない。彼らは階下や隣の室で、板床にいつものやうに蓆を集めてしき、今日はその上に背囊から天幕も外して敷いて、ぎっしりと詰まつてゐる。に拘らず、彼らはいつものやうに宿舎につくと先づ私の床を選び、しつらへることに大いに骨折ってくれたのである。私は彼等の親切以上の心持を素直に受ける以上に感謝の方法を知らないのだが、今日の此の部屋については、もはや感謝以上の贅沢を覚え、しかも私はこの贅沢に甘え、享樂に貧欲になつて、子供のやうにひとり

得意になるのを禁じ得なかつた。私は、この得意の中で、併し又非常に手持不沙汰を感じた。そこでもう整理のすんだ手簿を繰って、無意味に小隊員の勤務メモを見たり、破れ硝子戸の外に拓榴の葉の茂つてゐるのや、庭を隔てた向ふの家のうす汚い壁や窓を眺めたり、別の手帳にスケッチしておいた鉛筆面を修正したり、吸ひつけぬバットに火をつけて吹かしてみたりして、ひとり愉しくてならなかつた。そこへさつき兵站へ手紙を受領に行つてゐた兵隊が返つて、皆に配る声、受取つて言ひ騒ぐ声が兵室の方で起つた。彼らは二月の初めに手紙を買つたとき、今日迄作戦地にあつて、手紙はおろか、米のほかは殆ど後方からの物資の輸送は途絶えてゐたので、今日此処に来て手紙が貰へる予想で先日米、心がしびれてゐたのである。彼らの声をきいてゐると、五月の今日になつて、「新年おめでとう」が来てゐたりして、大はしやぎなのだ。「おやちから手紙が来たぞ。生きてゐるバイな、あ、これで安心した。おやちから手紙が来たけん、生きとツと、バイ」といかに安心した歎びの声をあげてゐるのは上等兵である。「これだけでもう何もいらん」と言つてゐる。それから――

五月うまれ

堀ノ内 歴

五月うまれの嬰兒は すこやかに育つ夕辺が近づくと 蒼穹が
縁前から嬰兒の頬のバラ色をのぞき丸くて小さいその掌をみている
新米のつばめが軒端をかすめる
忙しい奴ら でもかせぎもの
湯屋がえりのひとが 明りの入った商店街のかゝりの店で なにかかゝまって 果物を買うている
扱 私は明日までに まだ沢山な単語を暗誦しておかなくてはならない
のではなかつたかしら……と
だがそれは疾うの昔 この季節にいつも私を苦しめた だけの事だつた
五月うまれの嬰兒には きつと
まああるい おうらかな名前が似合う

燕の歌

上村 肇

毎年春になると燕が
街中の家にはいってくる。
この店は駄目。
この家も駄目。

燕は
傍若無人に店内をめぐり
鋭く軒先まで一瞥して
とび出していく。

壁に白い糞などかけて
出て行く素早い燕よ
今年の 罫は定まつたか。

この家のあるじは
今日も時間ばかりもの凄くかゝる
民主主義の
会合に出席して帰らない。

今、夜十一時迄も――兵隊達は自分々々の手紙を銘々声あげて読み返し、聞かせ合つてゐる。私は私にも、も少し日が経てば着くであらう誰彼の手紙を想ひ描いて慰めると共に、勿論まだ私宛の手紙など届くことはないと思ひきめると、ふいに反対に、こちらから何か沸々と書き送りたい衝動が迸つて、押へ難い感じが、胸をしめつけるやうにわいてくるのであつた。」（『文芸文化』七月号）
（通信紙）渡支以來初めて与へられたこのやすらぎ。しかしそれは水くはなかつたやうである。四十里の山岳地帯の行軍で生々しい戦跡を見学したにすぎぬ連田小隊に、次の任務を与へられるまで、戦闘訓練がほどこされたやうである。

★ ★ ★

中文・稲葉部隊・坪島部隊・河野隊連田善明より
東京市世田谷区祖師谷二ノ六六清水文雄宛はがき
一寸練があつて、原稿も書きかけたが原稿書く余裕はなかつた
健在なり

★ ★ ★

その後聞もなく連田少隊は新任務が与へられた事実が、次の家族宛に出された航空便によつて判明する。宛名は長男の晶一君だが、

内容は敏子夫人宛である。

五月二十四日

中文・稲葉部隊・坪島部隊・河野隊連田少尉より
熊本県鹿本郡植木町連田晶一宛封書

健在なり。山岳地で大討伐戦があつて、昨日飯ってきた。僕はとても元気だつたし、兵隊も一人も傷つけなかつた。七八百米位のきり立った岩山の峠路がすべて敵の陣地で、打ち下ろしてくる。折からの雨で、雲が濛々とかゝり、おかげで進出しやすく、結局叩きつぶしたが、山脈を越え／＼して行つた。山に登つた数だけでも大したものので、腰が立たぬ位になつて、支那酒を途中で一杯のんで元気出して行つたりしたがギツツリ腰にはならず、妙布も汗や雨でぬれてゐるだけで、使つたことはない。

弾丸も怖ろしいことはないが、要心はずる。こんな弾丸に当つてなるものかと思つて用心する。とにかく、やはり勇氣は失はなかつた。又、拙いこともしなかつた。自信を多少は得た。これからはもつとしっかりした戦闘をやりたいと思ふ。

おかげで僕も益々みんなに大事がらられて、一昨夜、討伐の飯途、みんなで飲んだ時は、「正月以来、こんな騒いだことはない。小隊

長殿のよかですけんたい」と兵隊が言ってくれ（これは人にしゃべるな）て、猛烈な騒ぎぶりだった。

僕も裸で踊り、兵隊が裸の僕をかついで畑の中を歩いたりして、涙が出さうだった。僕は自分でそんなこと威張って言うでないがこんなに愉快に和氣霽々とやってゐるといふことを知らせて安心してもらひたいだけで書くのだ。

とにかく、二期の雨にひたり、高山を越え数ヶ師の敵を伐ちつゝ、健康で、たのしく、部下を傷けず取ってきたことを知らせておく。丁度今から後方へ行く兵にたのんで、元気なことをしらせておく。

お父さん（註・師井桂吾氏）によろしく、皆さんによろしく。

お前のポンボンも大きくなつたらう！

晶一がよくつた夢をよくみる。

太ちゃん何いつてゐるか。

★ ★ ★

連田の初陣である。名小隊長ぶりが躍如としてゐる。末尾に妊娠四ヶ月の夫人をいたはり、腺病體質の晶一君の健康をきづかひ、満三歳の可愛い盛り太二君を偲んでゐる。

この山岳戦が展開された戦場は明確ではない。鐘祥から再び大洪山脈の残敵掃蕩に戻つ

は、検閲を考慮したのであらう。地名が判定できぬ後掲の二作だけがからも送れたわけなのである。

毎日毎夜砲弾を見舞ってくるのは、長沙に至る間の防衛を担任してゐる、関麟徴麾下の精銳である。

恋のらくがき

五月の朝

美堂 正義

若葉の美しさは

降り止んで陽光が射す一瞬である

その時新緑は明るくそよぎ

風にさやさと揺れ

薄緑や深緑の木の葉がいつせいに

波のやうにうねり初める

この頃は僕の食卓に青い豆がのる

御飯のなかにも刺身のえんどうが色彩を添へ

少し塩味の匂いたのを口に含みながら

たとは思へない。次の書簡から、それは洞庭湖畔岳陽の東方にある大雲山でないかと想はれる。

★ ★ ★

六月五日（推定）

中文・稲葉部隊・坪島部隊・河野隊より東京市世田谷区祖師谷二ノ六清水文雄宛はがき

二ヶ月を経た。皆変りないかしら。

仲々便りができない。随筆みたいなものを書けるだけ書いてゐるが、まとめて送れない。今日別便でその中の軽いものを二通送った。

そちらからの通信は未だ一通も受取らない。活動してゐるのでこんな都合なり。がよくよろうも見た。書いたものもあるが、送れない。毎日毎夜敵弾を見舞はれつゝ、しかしのんびりと自信たつぷりでやってゐる。

★ ★ ★

文中に岳陽楼の名が見える。岳陽は北楊子江、西洞庭湖の東出口を扼する水運の要衝漢陽沿った商業の中心地である。城西の樓門は楊子江・洞庭湖を一望に収める景勝地として文人墨客の間に古来から名高い。恐らく坪島部隊は岳陽に進駐したのであらう。連田小隊もしばらく岳陽に駐留し、彼は岳陽楼について検分するところがあったのである。「書いたものがあるが、送れない。」とあるの

多摩墓地

田中克巳

五月廿八日は堀辰雄さんの御命日で、奥さんが二時にお詣りだと聞いて、早くから用意してゐる——なに、いつもの通り、気がセカセカしてゐるだけだ。——武蔵境で乗換へて多摩川線、下車すると奥さんと御同車とわかる。家内に挨拶させる。深沢紅子さんがひとり待っていてくれた。二時すぎに一行がそろふとお墓にゆく。はじめて見たが、横に「堀辰雄 1901—1953」とあるだけだ。私は敵敵を気にしながら、いろいろのことを思ひ出す。私がマラリヤの本場にゐたとき、留守宅を見舞っていたいたつて。萩原さんの亡くなったあと、本気に詩のことを心配して下さったんだ。——ふと亡くなられた四十九歳が、私のいまの年だとな気がついた。それから私は妙に気が重くなり、この夜は七時にもう寝てしまった。

雉子がゐるので射つて来ると拳銃をもって出かけて行ったY少尉が、ものの三分も経つた頃手ぶらで取つて来て、「連田さん、来てごらん、あなたに見せたいものがある」といふ。「雉子は駄目だったが面白いものを見つけた——」部落の裏手の牛乳屋か何かの跡らしい石門に可憐な楽書がしてあるといふ。

その説明を道々ききながら、そこにゐたもの三四人も一緒にY少尉の後に従つた。壊れた家の跡や、草の徑を通つたり、土手

ゆっくりと初夏の触感を楽しむのだ

季節の変わりめには体に変調があり

晴れた五月の空のやうには心は弾まない

疲れた体、もの愛い心

窓外には牡丹の苔が赤く

銀杏の繁みに雀が鳴きながら見えかくれする

雨は降り止んで日の光も射してきさうな時

食欲の薄い眼に

若葉は新鮮に盛り上つてきて

燃え立つやうな生命の息吹きが

吹き上げる五月の朝

を越えたり、汚い池のほとりを廻つたりして、半壊の塀の中に入つて行つた。なるほどその塀内の様子は以前小さな牧牛舎でもあったらう。その空地から表の住宅へ通ずる中門らしい所に来た時、「これですよ」と指されたので、寄つて行つてみた。角い石の門柱に白墨で三行に書いてある。「この字から見ても何だか年端の行かぬ少年らしいですね。」Y少尉は細かい観察を披露する。確に字は下手であると共に稚拙で、行も整つてゐない。しかしそれを書いた少年の、思ひ乱れた胸中は、かに現はれてゐるやうな気がした。

欲見其人而来

未見其人而去

悵然返也

此の門まで忍び入つて来て、家にその人のけはひは感じながら遂にその姿を見るを得ずして惆悵として立ち去つた少年の、有り合せの白墨の端で、恨み深い心を記した三行の文字は、そのはかない恋をそのままに語るかのやうに下の方から薄れかかつて居る。きつと、今のやうな黄昏でもあったらう。これだけの文字を書き残して、再び塀外へと忍び出て行く青い服の少年の後姿が見えるやうな気がする。

自然に出来たものでもあらうが、文句が即座に対句になってゐる所なども、さすがに支那の少年のわざと思はれた。私は中学の頃、厨川白村の「近代の恋愛観」が朝日新聞に連載されてゐたのを読んだ中に、たしか、ローマの都は廃墟となつたが、その廃墟に語られる恋愛は水劫であるとかいふやうなすばらしい名文句があつて、感じ易い胸をときめかされたことがあるが、ふとそのことを思い出したりした。そして如何なる小説にもまさる小説をそこに読んだやうな気が、その時は何故かむきにわいてくるのであつた。

小石

或る討伐戦でその日私も兵も倒れるほど苦しい任務を果して、夕刻中隊主力を追及して行くとき、広い川が緩かに流れてゐる所へ来た。五六百米向ふの松林の丘では、もう先刻から軽機、重機、大隊砲入り交つて烈しく鳴つてゐる。きけばその軽機は私の中隊で、今少しさつきまで抵抗してゐた敵の退却を、追撃射撃中だとのことであつた。——もう大丈夫です。宿舎はあの丘の下に見えるあの家ですから、宿舎で休んでゐたらいいでせう、と行き合つた某中尉が教えてくれた。私は新に中隊に協力するためには、一寸でも茲で兵に息を

入れさせて気分を新にして掛ることの効果的なのを考へて、その旨も言ひ含めて短時間の休憩を命じた。非常に澄み徹つた水が川原を幾筋も幅広く流れてゐて、簡単な人の渡るだけの橋も架けられてゐた。兵は走り下りて渴き切つた咽喉を潤はし、汗の手拭を洗ひ、水筒に満たす、顔を洗ふなどした。私は重い腰を川原の草に下して足元を流れる水を見て、兵の用意を待った。

川は清冽無比と言ひたい水で、浅い瀬を躍るやうに急ぎ足で流れて行く。水を見、水の流れるのを見るのは、われわれ兵隊にとつては、それを利用する以上に、たのしく嬉しいものになつてゐるが、私もその瞬間、食べるやうに水に見入つてゐた。すると、その浅い水底から私の網膜を眩はすやうに急に迫り上つて来るものを感じた。それは水底に色とりどりの指程の小石が、水中の花のやうに散乱してゐるのであつて、その天然のモザイクの、水を透して見る牙えた美しさ、正に清麗極りない造化の見事さ、ふと私はこちらから我とその水底のさざれ石に物言はうと屈んだ自分の突拍子もない行動におどろき、改めて再び小石の美しさに感動をくりかへした。

私はその僅か瞬時の深い感動から、直ぐ、

白居易詩抄 (三十五)

森 亮

消えてしまつた鶴

失くなつたあれは庭にふはりと置いた雪に化けたのか。
海の上をすぢ見せて吹く風に乗つて飛び去つたのか。

遠い空のどこかにいい友達を見つけたものと
思はれる。
これで三晩あれは籠に戻つて来ない。
そのころはもう青ぞらのあなたに途絶えてしまつた。

あの姿は早や望月の白さの中にとけ入つてしまつた。
わたしは思ふ、これから先この田舎の役宅で白髪頭をうなだれたちぢいに誰がついて歩くだらうかと。

★ 誠禪師の山房に泊る

ぼつんと孤立した山の頂きから一步も外に出ようとされない。

烈しく山峽にこだまして鳴りつづけてゐる銃砲声に促されて立ち上つて整列を命じたが、突嗟に私は水底から一握りの小石を掴みとり、ぬれたま、ポケットに蔵めてゐた。

(昭和十四年「文芸文化」八月号「戦地隨想」)

右の二篇共に、晶一君宛書簡にあつた——山また山……の山岳地帯の戦場ではなく、なんと洞庭湖畔の戦場で取材されたやうな印象をうける。
門柱に恋のうらみを書き残して、黄昏のなかにむなしく立ち去つた多感な青衣の少年。彼は薄暗がりて拉されると、強制的に抗日義勇軍に編入され、その恋情を憐んだ連田等にやがて砲弾を見舞つてくることになるかもしれない。それが戦争が日常とする無情といふものだ。

又、蜘蛛手をなして流れる川辺での小休止。連田は五六百米向ふの松林で鳴る軽機、重機大隊砲の交響音も忘れて水底の小石に魅了されてゐる。水底から迫り上り訴求する石花。天然のモザイク。戦場の寶石。わたしを見捨て、行かないで下さい！ さう……連田は彼女達から囁きかけられたに相違ない。戎衣を濡らして、むづ！と掴み取り、ポケットに秘めた小石。それは、△その拇鉤惜し△と南山

そのあひだに人間界では四十たび春秋を送り迎へた。

この緋衣の人はおのがからだを假りの宿りに見究めて
水の流れに身を任せたやうな生き方をしてをられる。

思ふに物の在り、事の起こるは、みな因縁相重なつたが為め、
わが心として順序次第に従つて現在のところに来てゐる。

夜更けに仏典の章句を探り当てて斯くは唱へた、

——これの世に有り経ることぞ憂はしき。

註「消えてしまつた鶴」の原詩は失鶴(三五一八)

で、詩人が五十三才(杭州刺史在任第三年)ぐらゐの作。原詩を読み下したものが谷崎潤一郎氏の名作「少將滋幹の母」に引かれてゐるので、既に読まれた方も多しと思ふ。次の「誠禪師の山房に泊る」の原詩は宿誠禪師山房題贈(四の八一九)で、製作年代は未詳。純国訳漢文大成本の樂天詩集第四巻の終りに近く見えるが、最晩年のものではない。

の戦場で失つた袖口の金ボタンの喪失を哀惜した鵬外とは、反対の心情である。鵬外は戦場に失ひ、善明は戦場から拾つたのだ。拾つべき戦場から拾つたのだ。拾つべき戦場から拾つたのだ。その反対給付として、ポケットに秘めた小石がやがて連田の命運を奪ふといふことも知らずに！
このことがあつてから四年後、連田は再度の応召をうけた。その出発に當つて、またもや彼は小石を拾つてゐる。宮城前の玉砂利である。夜来の雨で洗はれた玉砂利は、「まるで海底を歩むやうに碧く煙つて見えた」(昭和十八年「文芸文化」十二月号) 連田は見送りの夫人に玉砂利を拾はせたのだ。

汝が手に一にぎり

拾ひて

われと汝と分らん

汝が手なるは種子らにも分てよ

(昭和十八年「文芸文化」十二月号)

一皇唐を拜してかへるま

連田自ら拾はなかつたのは、濡れた石で白い手袋が汚れるのを避けたからだらう。彼は三粒四粒夫人から分けて貰ひ、それをまたもやポケットに秘めたのだ。その二粒は上条大佐を射ち、他の一粒が彼のコマカミを貫く運命にならうとは、神ならぬ身に、知るよしもなかつたであらう。

さがしもの

池沢 茂

幸吉の収集物はある期間、毎日ふえてゆきやがて、たいへんな数量に達する。それで、その保管の場所も、しぜん、何か所にもわかれてくる。びんのたぐいは、たんすのうえ、たなのうえ、テーブルの引き出しのなか、げた箱のうえの袋のなか、二つのおもちゃ箱など、大体六か所にあつめていた。「くすりのびんの赤いふたア！」などと泣きわめいて、その雑多な数量のびんの収集物のなかから、一つのふたを追求しはじめると、ほくと妻はまず順番に、その保管の場所から、点検してゆかねばならない。

ビタミンやカゼ薬のびんのふたなど、大きさは、おや指のつめほどしかない。たまへやの隅やテーブルの下などにころがってればよいが、そんなばあいはすくない。網の袋いっぱい詰めてこんでいるカンやびんのだぐいを引き出して調べる。二つのおもちゃ箱を引っつきかえし、ガラクタの山をこしらえて、そのなかを検査する。いすを持ってきて、たんすやたなのうえをさがし求める。泣きわ

めき、地たんだをふみ、これげまわり、あばれ狂っていた幸吉は、それでも、ほくたちがこうしてさがしはじめると、やっと落ちついてくる。やがて、うそみたいに機嫌がよくなり、ほくたちのあとに付いてまわる。

ほくははじめ、幸吉が「くすりのびんの赤いふた」と言っているのは、ビタミンカゼ薬のびんのふただろうと思っていた。とにかく、もうすっかり機嫌がなおっているのだから、なにか手ごろな、赤い色のふたさえ見つけてやったら、それですむと思っていた。ところが幸吉は「それ、あったよ。これやろ」と差し出すと、とつぜん、わっと泣きこえをあげ、ふた、び、ころげまわって、元どおりの狂暴な発作に落ちこむのだ。ほくは途方に暮れるよりも、神経がかきむしられ、いら／＼し、急に腹立たしくなる。びんのふたみたいな、幸吉以外の者には、わけのわからぬい、どうでもい、ようなものを、勤めから帰ってもくつろげずにさがしまわらねばならない行為が、もと／＼、ばか／＼しくもある。「これ赤いふたやがな。な、くすりのびんの赤いふたやろ。これでい、やないか。い、やろ。これにしとき！」

怒ったり、なだめたりして、ほくは無理にも押しつけようとする。しかし幸吉は絶対に

う。味の素のふたやわ」

いた、まらないように、妻が、ほくをなじった。ほくは、はっとなった。幸吉のしたに

楽 器

浅野 晃

純白な豌豆の花は
なんという魔力をもってゐるのだらう
あれほど固かった指先がそれにさはると
いっぺんに柔かになる

かぎりなくやさしい思ひが
からだじゆうに溢れてくる
それが六月の天のもと
柔かになった指先から
ありとある物の方へと流れてゆく
ゆうべのあの重苦しい眠りは
どこへ去ったのであらう

このやうに柔かな指先なら
どのやうな物をも恥ぢしめず
ひとつの影をもそこなふまい
さはやかな緑を映しあつて
すべて開かれたこの世界
純白なわたしの豌豆の花よ

知られぬ世界

おまへのおかげで柔かになった指先で
わたしはいま楽器にさはる
天地といふ名のこの巨きな楽器に

太陽よ

おまへは雲を透して輝くことができぬ
それで野の上にこんな濃い影が移つてゆく
わたしの肉体にしてもさうだ
わたしの影もまたここに歩む
おまへの光はわれらの地球が遮るのだ
だから夜が来る
夜と影とはふかぶかと匂ひ
眠つた花の上に露は輝く

太陽よ

おまへの光と別れたあとの時刻で
これら私語するものの哀歎は
おまへに知られぬ世界であるよ

伊東静雄全集 全一卷

桑原 武夫 共
宮士 正晴 編
小高根 二郎

藤村・朔太郎に次ぐ日本現代詩の高峯。
「詩と真実」に貫いた四十八才の生涯が
賭けた全業を茲に収録する。童話。卒業
論文「子規の俳論」。既刊詩集に収録せ
ざる初期詩篇「事物の本抄」。処女詩集
「わがひとに与ふる哀歌」を解明する書
簡。それらは第三の高峯たるゆゑを解
くであらう。

十月刊行予定

京都市(中央局区内) 仏光寺通高倉西

人文書院

振替京都二〇二番

受け付けないのだ。おくれているはずの知恵が、こんなばあいには、どういふ働きをするのか、いま求めているその一つの「ふた」でなければ、どうしても承知しない。どんなに似ていても、代用品であることをじきに識別して、狂暴な発作には、むしろ油がそがれてしまふ。

「幸ちゃんが言うてるのは、そのふたと違

くのびんの、いろ／＼なふたのなかで、幸吉がいちばん愛着しているのはどのふたか、はっきり知っている。そういうこまやかな注意や真実の愛情が不足していると、ほくは妻から、責められていた気がしたので。
「なんや！くすりやないのか。味の素か」
ほくはとっさに「チェッ」と舌打ちしかけたが、幸吉が「くすりのびんの赤いふた」と名付けているのも、無理ではなかった。友達

がひとりもない幸吉は、きげんのよいときは、いくつものびんを取り出して、AのびんのふたをBのびんにはめ、BのふたをCにはめ、DのふたをAやBやCにはめてみるなど、いろ／＼にこゝろみながら、ひとり、家のなかで遊んでいる。大きすぎたり小さすぎたりして、うまくいかない、と、ひどくいらいらするかわりに、たがいに異なるびんとふたとが適合すると、なんともいえない得意や満足をおぼえるらしい。味の素のびんの赤い小さなふたも、たまたまカゼ薬かビタミン剤のびんにきつちはまりこんだので「くすりのびんの赤いふた」と名付けて、特別な愛着を持つようになつていたのであらう。

「困つたなあ。たぶん、たんすのうしろに落ちこんでるんやろ」
「もうい、やないの。たんすまで動かさなか

って……」

赤ん坊をか、えて疲れきっている妻は、ほくをなだめ、もう投げ出させようとしたが、こんどはほくのほうが、意地になりはじめていた。幸吉はたんすのうえに一番多く集めていたから、小さなびんやふたなど、たんすの裏の、壁とのすきまに、とき／＼落ちこんでしまう。きげんをそこねたときには、大切にしていた収集物を、そのすきまに、わざわざ投げこむこともある。ほくたちの困るようすがおもしろいのか、ことさらに注意を引きよせようとするのか、おかしそうに笑いながら放りこむときもある。

ほくはたんすのうえのガラクタをおろし、おもしろいから引き出しを一つ二つ抜きとり上と下の二つに分解して、上の半分から動かすはじめる。妻もあきらめて、手つだいはいはじめる。こうしてほくたちは、一つのびんの小さなふたをさがすために、夜がふけてからもなんべんとなくたんすを動かし、そのうしろを調べた。それでも見つからなくて、庭や、どぶや、金魚の水そうのなかまで、さがしたこともある。そうして結局、ふとんのなかから、ころがり出たりする。幸吉は寝るときもとくに愛着している品のいくつかを寝床のなかに持ち込み、そのなかでも大切なびんやふ

たなど、にぎりしめたまま、眠ってしまうので、ふとんや毛布のあいだに、たび／＼まぎれこむからだだった。

ほくたちは、ほつとする。しかし幸吉のよろこびは、それ以上だった。「あった！ あったア」としきりに笑いごえをあげながら、びん／＼おどりあがる。さっそくカゼ薬やビタミン剤や味の素のびんなど、指のあいだにはさんで、片手に、もどかしそうに三個を全部持ち、その赤いふたを、一つ一つ、はめたり、はずしたり、しはじめる。いかにも安心したようで、うれしそうにしている。それから、はげしい興奮のあとで疲れのか、そのびんやふたをにぎりしめたまま、ふとんのなかにもぐりこみ、やがて眠ってしまう。すると、その顔に、じきに変化があらわれてくる。涙のあとはあるけれど、狂暴な発作にゆがんでいた顔など、もう、どこにもない。にや／＼わらいながら、ふたをはめたり、はずしたりしていたときの、どこか異様な喜悅の表情もない。すやすや眠りながら、いかにもまじめな、と、のった、しつかりした顔つきなのだ。健康優良児にえらばれただけあって頭の形もよく、額もひいでている。これが本来の姿なのか、かしこく、すこやかな、すぐれたひとりの幼児として、疲労のあとの深い寝息をつづけている。

編輯後記

五月二十四日。竹内好氏から都立大学辞任の挨拶状をいただいた。新聞で弘報されたものである。氏の深遠な行動は論理的に正しく見える。然し、よく考へると其た非論理的にも感じられる。氏が就職に際して誓約した憲法そのものに、日本語を日常語とするほどの者なら、果して憲法を感じなければならぬほどの純正さを感じ得たかといふことである。名詞がなつかつたからだ。私は帝国憲法の亡霊なぞ擔ぎだすつもりはない。ただ翻訳でない純然たる日本語の憲法のためならいつ判じてまいと考へる五月二十八日。清水文雄氏に久しぶりでお目にかつた。お話ししてゐるうちに、先づの後記で蓮田の文学碑の揮毫者は佐藤春夫先生に……と書いたが、甚だ憎悪なことを言つたと気が附いた。蓮田の恩師である齋藤清衛先生がいらしたからである。五月三十日ボリス・バステルナークがヘルデルキで死んだ。まさに現代の殉難者の象徴だ。世界よりも二度と第二のバステルナークを出してはいけない。前号後記十行目短歌の「輝がは」の誤植(O)

果樹園 第五十号 (毎月一日一回発行)

昭和十五年七月一日発行
池田市野町一八六
編輯 小高根二郎
發行所 小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷所
池田市野町一八六
發行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第54号

蓮田善明とその死 小高根二郎
白居易詩抄 森亮
異常體質 田中克己
休止者 堀ノ内歴

室戸岬 浅野晃
喫茶店にて 美堂正義
鏡 芳野清
バー・ホクロ 福地邦樹
刺 吉本青司
テーブルと調理台 池沢茂
後記

蓮田善明とその死 (上)

小高根二郎

昭和十四年七月七日

中文・稲葉部隊・坪島部隊・河野隊より東京市世田谷区祖師谷二ノ六六清水文雄宛封書

今日は事変満二年目である。前便を出した後、この山(僕にとって生涯の忘れがたい山)に第二回目の警備に来て、明日又返る。この山については、別にいろいろ書いたもので他日よんでもらふことがあらう。岩と草ばかりの、汚損不明……扱んでた(しかし高くはない)山で、汚損……線が見通して、敵は目の前に、又……汚損……うろつき、今度も野砲、迫

さて、この数日敵は気味わるいほど蠢動をやめてしまったが、ある気勢は迫るのを見てとった。そして昨夜からはこちらも非常警戒をとった。(今、友軍の砲がこの前を斜射中。日は中天から照……汚損……屋根、ムシロ屋根の下も頭がやける……汚損……一信(五月二十四日出)と文芸文化六月……汚損……昨夜(今朝)二時、果して山の東西……汚損……の銃砲音が乱れたが、友軍の方が、手ぐすねひいて待つてゐたので、長くなく撃退。この山も歩哨が近くまで俯ひついて来たといふので、緊張して待ったが、遂に何事もなくて夜を明した。今朝は山上で集合、訓話と勸諭奉諭と遙拝をやった。それから山上を掃除して、それから席の上……汚損……ねだ。目がさめると十二時。文芸文化をよみ終へ、昂奮した。六月号は非常によかった。

この山へ来て三回目に、君の小包(コギト、知性、文芸文化)がとどいた。それと誰彼からの手紙。コギトは最上級にうれしい贈物の一つであった。伊東さん兄妹からも手紙。仲原(註・成城中学)さんからも手紙。汚損……君の手紙末に書いてくれた祖師谷……汚損……息がつまるやうななつかしさだ。……汚損……よむ。君が慰問袋を送ってくれた由。中隊

汚損：てみるさうだから君のかもしれない。
仲々届かぬのだ。家からの四五日前やと
初めて一つついた。みんな分けあってたべ
る。君のをいたゞいたら又分けよう。たのし
いものだ。この手紙も、明日中隊に取ってか
ら出すことになるが古今和歌集論みたいなもの
のノートに九十頁…汚損：ほど書いたのを何
とかして送りたいと思ふ。君の古今集の花の
論、その他、古今集について言ふことが…
汚損…だと思ふ。

僕の書いたのは、主として序文に於ける貫
之…不明…書いたものだ。総じて古今集の「
歌のさま」「…不明…」を「しる」ことにつ
いて書いた。君が送ってくれた古今和歌集が
ゆくりなく僕に一つの開眼をもたらした…
又便あらば「新古今集」御惠贈を乞ふ。

今日は昼食も倦んじて取やめて、二、三人
並んでゴロ眠をしてゐる。風絶えず吹くが暑
い。僕もこれだけ書いて何やら、もの倦い。
筆を措く。

数日後…飯隊してから、コレラ…汚損…
と軽い扁桃腺で、頭がはっきりせずぶらぶら
とすごした。今日は軽くなったので筆をとる
気になった。

戦線が非常に静かになった。雨もよくふ
る。雨が降ったら、泥濘と、クリークの泥濘

で大変だ。暗れると暑い。しかし、去年迄、
もう夏休みといふので暑かったよりも、暑さ
を凌いでゐるのは、気分のためだらう。

写真を一枚入れる。前に感…汚損…昌のそ
ば)でとったもので、行軍の途中…汚損…態
だ。写したものが、焼いてみて誰か分らな
ったといふから、この写真のやうなスコイも
のではない。戦地に来てゐるからとて、こん
なパソクのやうな顔してゐないし、当人すこ
…汚損…があるつもりだったところ、カメラ
…汚損…のだ。笑ひ草として送る。ユメ実：
汚損…るなれ。

この手紙、廻箋とされたし。写真も。

七月七日

★ ★ ★
中文派遣連業部隊・坪島部隊・河野隊より熊本県
鹿本郡植木町連田品一宛絵はがき

事変の二年目を山の上で迎へてゐるところ
へ、慰問箱が届きました。晶一の、病気の時
書いたお膳の絵が入ってました。大へんい
い絵です。写真も入ってました。お菓子な
ど兵隊さんと皆で分けてたべました。お砂糖
でぜんざいをこしらへました。チョコレート
もおいしかったです。しかしやはらかくなって
ました。ゴマ塩は今度はありません。羊羹は
一番いい。

白居易詩抄 (三十六)

森 亮

別れの歌

さわさわと野原に茂った草、
その一歳の栄はひととせで終る。

でも、野火に焼かれた枯れ草は亡びたのでは
ない。

春風吹く頃ともなれば新しい芽が萌え出る
香くはしい草はむかしの道をわが物顔に覆ひ
晴れた日の野の緑は荒れはてた城までつづく
ゆかしい人の去ってゆくのを送って又も野に
立てば、

かがやくばかり青々しい草に別れの哀しみは
広がってゆく。

★

酒歌

天が降らせる甘露は甘いばかりで人を酔はせ
はしない。

地から湧き出る醴泉は純粋なのはよいが香氣

がもひとつ足らぬ。
このさかづきの中身を味はひ分ける人が幾人
あるだらうか。
柔らかな旨味のなかにある真当な風姿。

註 初めの「別れの歌」の原詩は賦得古原草送別(二
の三四八)で、詩人が十六才で首都長安に出たと
きこの詩を当時の名士某に示して驚かせたといふ
挿話が伝へられてゐる位に若い頃の作。題詠であ
る。次の「酒歌」の原詩は府酒五絶中の辨味(四
の九四)で、詩人が河南の尹であった六十一才
の作。

附言 昭和三十三年から續けて来た「白居易詩抄」は
この三十六回を以て打ち切ることにする。主として
詩人の日常生活に取材した作品を選んで訳して
来たが、その方面の秀作・佳品でも私の好みと力
不足から訳し漏らしたものが多し。殊に長い作品
はすべて取り上げなかった。それでも長恨歌や新
樂府の詩人の別の面を或る程度紹介することがで
きたのではないかと思つてゐる。

山から取ったら、広島丸山さん(広島市
南千田町一五〇丸山雅枝)、成城学園五黎
会(小包五個)から慰問品、清水さんからお
本を送ってきてみました。晶一の写真持って
ります。

★ ★ ★

同じ日に清水氏と晶一君に宛てた書簡。し
かし、その形式、内容は非常に違つてゐる。

清水氏宛のは、戦闘中と飯管してから、通信
紙に書き継がれてあり、敵砲弾の硝煙の臭ひ
が泌みてをるが、晶一君宛のは小倉静三描く
ところの中国の子供の絵葉書で、家族の心配
を危惧してか硝煙の臭ひははぶかれ、軍隊内
務の家庭的な雰囲気だけが盛られてゐる。

清水氏宛書簡の末尾に、同封した写真の解
説があり、「咸：汚損：昌」とあるのは、明
らかに「咸寧」「武昌」である。その間を行
軍し湖畔の岳陽に入城し、そこから幾日かの
交替制で、大雲山方面の警備を担当させられ
たのであらう。敵もまた占拠された岳陽の死
命を制すべく、頑強に山中に籠つて抵抗して
ゐるわけである。

連田は吊瓶うち射ってくる野砲、迫撃砲
弾の洗礼の後に、しきりに詩を書かうとして
ゐる。「詩が見えるのはかゝる時と処」と
言つてゐる。総ゆる雑念が炸裂音で拭拭さ

今和歌集について(「文芸文化」昭和十四年十
月号)であった。これにはかつての大津皇子、
志貴皇子、大伴家持論のやうな緊密な論理性
に缺けてゐるかに感知される。エッセイと呼
ぶより詩と言つた方がい、ほど憑かれた熱狂
が感じられる。あたかも弾着を確かめるため
に闇に放たれた曳光弾の光芒のやうに、不確
かであるが鮮烈な閃きだけがアフター・イ
メイヂとして残る。

「古今和歌集中の最高の詩人は素質的に在
原業平である。「よみ人知らず」のすぐれ
た詩人をも含めて。

しかし古今和歌集のもつ性格は、此の在
原業平をも含めて、業平的なものを代表と
せず、紀貫之的なものである。といふの
は、古今和歌集には、表質的なものよりも
詩歌世界的なもの、その世界を「しる」と
いふ姿が著しいのである。此の「しる」と
いふことに最も力を致してゐるのは、撰進
者の筆頭にえらばれた紀貫之であると言は
ねばならぬ。貫之自身の歌は素質的にもな
く、彼は批評家であった。そしてその歌も
「しつて歌ふ」骨法を伝へて、それは何人
にも増して正確で、正確すぎる位であつた

が、それ故、多くの人が詩歌に予想するやうな、ほのかな志もなく、ふんわりした着せ物もない。これが、古今集及び貫之らの歌を理智的で、文学として物足りないなどとも噂されるのである。』を前提とした、烈々たる弁護論である。

連田はノート九〇頁にるとして、「しつて歌ふ」貫之の革新的詩精神は、紀記の自然発生的、或ひは萬葉の現実直情の世界を峻拒して、自然や現実とは全く別個の「歌の世界」——「文学の天国」を触知し、この抽象世界を創造した功績を評述してはゐるが、貫之の最大な功績——詩精神と散文精神の日本に於ける最初の分岐者であったといふ重大な論述を逸してゐる。

つまり、延喜五年(965)「古今和歌集序」に貫之が樹立した詩精神に内抱されてゐる批評性。それが三十年後の承平五年(935)に仮名文字で最初に綴られた日記——日本に於ける最初の散文と云ふべき「土佐日記」を生ましめたのである。

「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて」女性に仮託し、貫之自身を歌も読み得ぬ無風流の一老人に擬装して、承平五年頃に執筆された。一流の漢文的教養の持主であった彼は、多分女房方の要求で

すでに古今集仮名序を書いたともいわれ、形式的な漢文体の行きづまりから脱却して微妙な心理描写をなすとけ、平明で清新な仮名文学を創始したことは文学史上画期的な業績だ。」(朝日写真ブック「土佐日記」清水孝之解説)

つまり、五十五日間の土佐から京までの船旅。その間の、失った娘への哀憐。辺地の風土や鄙語。海賊の恐怖とそれを紛らしめるユームア。それらの生の体験を、詩精神を根拠とする漢文で綴るに堪へざらしたものは、貫之の散文精神の確立であった。これを裏から言へば、貫之の心裡に於ける詩精神と散文精神の明確な分岐であった。この分岐をもたらしたのは三十年前に「歌の世界」を造型しつくしたから初めて可能となつたのである。

もともと連田の論究は分析ではなかつた。譬喩、冠辞、縁語、掛詞、序詞で守られた古今集の花の城。桜や梅といふ代りに唯「花」といふ抽象の城に、連田は立籠り何物かを防衛しようとするに於つた。それは伊東と全く志を同じくする、明治以後は歌壇からも、鑑賞者からも見棄てられ、たゞ学匠の考証の玩具となり果てたかつての花の城を痛惜することだけではなかつた。

「私が茲に古今和歌集のことを言ふのも、古今和歌集を再認識すべしなどといふので

休止者

堀ノ内 歴

陽なたの公園で

一本の葉桜の木が枝をひろげ
陰鬱なそのしげりの太い幹を

小さい赤蟻が這い昇ってゆく
一つ又一つ 小さな彼等に大きな距離を

斯くは越えさせる強い魅惑は
私はふと 欲しいと思う

無風な炎天に 荒涼とした葉桜の
威厳の下で……

いまも地球を 人工衛星が
二時間で一週しているというのに

私には 何もみえないことだ
むこうの広場じゅうに散らばった

野球少年たちが 喧しく元気だが
彼らは いつかな休息しない

蟻は なおも昇りつづけねばならないが
私の時間は 停まっている

一九六〇・六・三〇

異常体質

田中克己

飼って四ヶ月にしかならない小犬がなくなつた。翌日、家内が実は昨日トラックに轢き殺されたのだと報告する。夜のうちにいふと、また眠れなくなるのを心配してくれたのだらう。僕はそれほど神経が弱いのだ。国会前のデモで女子学生ひとりぐらゐる、といふ神経ではない。どんなにわめいてもがなつても国際的な騒ぎにはならない。せいぜい貿易がとまり、失業がふえる位で、水爆なぞ落ちつこない、といふ太い神経は、僕のどこにも隠してゐない。僕はこの細い神経を露出して父であり、教師であり、人間であることがつらくてたまらない。といつて本当の詩人でもないことは、だんだんとわかつて来た。異常体質なんだな。どこか療養によいところはなにかしら。僕は本気に考へてゐる。

つもこの異い姿を幻に見つ、ひとり勝手に古今集をその幻のせりふにして来たかのやうである。しかし、かのはるかな世の古今集の歌人たちの美しいみやびをそのままに想ひ描くには遠く、唯、貫之の高邁な身ぶりにわずかに思ひなぐさむ感傷をわづらつてゐるにすぎないかもしれない。私は何を思想しようとも思つてゐない。何を論じようとも思つてゐない。私はかゝる文章を綴ることを試みようとしてゐるのでさへもない。」

連田が文章の彼岸にひたぶるに夢想しようとしてゐる異世界……。貫之の高邁な身ぶり——詩精神と散文精神を初めて分岐したその決断に、連田はあやかつて生と死を分岐することから生ずる恐怖を、超克しようとしてゐる姿がありありと感ぜられる。

連田は先の手紙で初めて手紙や本、慰問袋が沢山届いた喜びを告げてゐる。伊東静雄と妹りつさんからも武運長久を祈つた手紙がとどいた。今は同じく中支戦線蕪湖にある学友丸山学氏の夫人からの慰問袋も混つてゐた。徹宵の戦闘の後、拳式をし、朝寝をしてから読んだ「文芸文化」六月号。それを読んだ昂奮を告げてゐる。同号には「詩精神と散文精

神」の特輯があり、それに連田は「詩のための雑感」といふアフォーリズムを発表してゐるからだ。恐らく、日本を発つ間際に書き送られたものだらう。

「精神とは嚴肅そのものである。そのため既にモラルを破却して君臨せなければならぬ。況や肉体をや。これを日本人は戦争に於ても実行した。戦争は唯人を殺し合ふのではない。我を殺す道であつた。文学は人を唯頽廢せしめるのではない。「死ね」と我に命ずるものであり。この苛酷なる声に大なるものの意志が我に生き及ぶのである。戦争とか死とかに關する此の年頃の安物の思想で愚痴るなかれ。この「死ね」の声は大きく彼方こそ詩である。我々は戦争に於て勝利は常に信じきつてゐる。そんなことを気づかずに攻撃しない。我々は己の死すべし（決して生物的な生命を惜しみ愛するのではない）場処をひたすらに想ふのである。弾丸に當る。眼くらみて足歩み、斃れんとして足下に一土塊、一草葉を見る、或は天空に一片の雲を見ん。此の土塊、草、雲、即ちそれ自ら詩である。究極の冷徹、自然そのもの。併し生命を踏み越えて凍つた精神である。」（昭和十四年「文芸文化」二、六月号「詩のための雑感」）

ちなみに「文芸文化」同月号に、連田が感銘した清水文雄氏の「古今集の花の歌」も掲載されてゐる。

八月十七日

中支・稲葉部隊・坪島隊・蓮田善明より東京市世田谷区祖師ヶ谷二ノ六清水文雄宛絵はがき
「辭鑿」（註・垣内松三編、昭和十一年）と原稿紙の小包正に落手、これも亦、山上で受取つた。

喫茶店にて

美堂正義

よく澄んだ空
風にそよそよ若葉青葉のゆらぎ
溪流の絶え間ない音を
人気がない道に躑躅の花が
雑木に交つて艶に開いてゐるのを
いま河畔の喫茶店の窓に凭つて
眩しく反射する河水を見ながら想ひ出す
梅雨空に似ない青空に
夏雲が溶けさうに浮んでゐる
橋の上をバスや貨物自動車を通る
次々に間なく過ぎる自動車三輪車 車車の群

室戸岬

浅野 晃

甲の浦から土佐になる
そこから二時間も飛ばしたらうか
佐喜の浜の町もすぎ
日はとつぷりと暮れて
いまヘッドライトを横切るのは
椎名の男や女のひとた
晩夏の海は炎熱を収め
まっくらな空間に
海だけが鳴つてゐる
道がぐぐつと曲ると
大きな岩が二つ重つて見えてきた
とがった頭を星の間にはげしく突込んでゐる
に、文学は「死ね」と我に命ずるものであり、「死ね」の声は大きく彼方こそ詩である……
といふ思想が発見される。これは明らかに、
一昨、昭和十二年の夏に高野の茶店で朗吟を
聞いた伊東の「水中花」に歌はれてゐた思想
であつた。

すべてのものは吾にむかひて
死ねといふ。

読むものも持つてゐないので、辭鑿を時々ひらいてよんだりする。包み紙の読書新聞などもよんだ。全く秋である。昼も夜も岩山で虫がすだく。夜はチンチロリンがなくて郷愁をそそる。この頃宣撫した土民が山の下の家で、安んじきつて灯をつけてゐるのを見るのもうれしい。こんだけ砲撃もうけないやうだ。などといつてゐるといつぶつとんでくるかもしれないが。夜の山上は風つよく寒し。八・一七

繁華街を結ぶ橋の往来は
警笛とブレイキの音が喧しく響いてくる
足早やに洋装の娘が行く
スカートが河風になぶられながら
頭髮が乱れ頬が淡朱い

この街に見るものは
心落ち付かせぬ忙しい人間の生活と
鋭ぎすまされた神経
不可解な多面の相貌がいらいらさせ
ここにはしつとりとした人生はなく
静かな憩ひを求める術がない
心にはいつも峡谷のせせらぎと
柿の新緑の瑞葉が鮮かに
いつの間にか座を占めようとする

室戸ですといふ声

室戸室戸

これが室戸か

しめつた岩間には玉半歯がそだち

浜木綿の花も咲きのこり

馬追などしきりに鳴いてゐるよう

頭上は鳥が泊る御崎山で

二十四番の札所がある

土州室戸に勤念すれば

明尾来り影ずとか

道は石門をくぐるやうにしてつづき

外はただただ暗い太平洋

けれど貧欲な旅人は

未見の風景をむさぼり食む

ああこれが室戸

岬よ岬よ岬よ

わが水無月のなどかくはうつくしき。

秀才辻野久憲の且夕に迫つた命運を哀惜したこの詩……この詩は同時に飾られた死に急がねばならなかつた世代の若者の命運をも哀惜した詩であつた。すべてのものが吾にむかひて死ねといふ水無月。その水無月は連田が「死ね」と声高く彼方の詩であつた。貫之が花に抽象した「歌の別世界」であつたのだ。

鎮江は「大地」のバック一家が住んでゐたことのある土地だつたと記憶する。バックの戦へる使徒（註・深沢正策訳、昭和十二年五月、第一書房刊）よんだか。これは鶴外の作とも思はれるものだ。「詩と批判」といふ古今集論、熊本から届いたかしら。」

この書簡は、「鎮江港全景」「甘露寺」「金山寺」の写真版がある絵葉書に書いてある。蓮田が鶴外の作に比してゐるパアル・バックの長篇小説「戦へる使徒」は一八九九年義和団事件から渡支、宣教のため骨を中国に埋めたバックの父アンドリウの伝記である。

九月六日

中支・稲葉部隊・坪島隊より日本文学の会宛封書
今、山上にゐる。秋の夜風を葉蔭で塞いで、星をみながら寝る。岩の上に背の低い萩の花ひらいてゐる。

今度来てみたら、土民がくれた難雑が三羽小屋の傍に飼つてある。まだこともなだか雄雞は尻尾の羽も伸びてゐないのに、トサカは見事で、こましゃくされてゐる。白と黄のめんどり。一羽は鳶につかまれて足をびっこひいてゐる。小屋の廻りを残飯や何や拾ひ廻り、小さい声で啼いたり、又朝は雄雞が幼い

声で、時をつくる。兵隊は水をやるのを忘れるので、僕が自分の受持ときめて、糞詰の空罐に洗面の水の余りなど入れてやる。三羽そろってその廻りに集まり、嘴でくはへてうんと咽喉を反らしてのんでゐるなど仲々愛嬌だ。

山上からみると、敵はこの頃防禦陣地をつくるのに忙しい。夜中にはひとりでおびえて乱射やつてゐる。ピクピクしてゐるのが見える。

この手紙の後、暫く郵便も出せなくなるかもしれない。でき得たら、その前に一度短いものでも書いて送らうと思つてゐる。

★ ★ ★

この書筒によると敵の砲撃が間遠になった事実を示してゐる。爆砕をまぬがれた蓮田の好きな萩の花が秋を知らせてゐる。三羽の雛に水をやる蓮田……。空を仰いで水を嘔む可憐な姿に、子供達の姿を想ひ描いたに相違ない。とりわけ、鶯に襲はれてびっこになつてゐる一羽……。病弱な晶一君を連想したに違ひない。晶一。太二。雛雞の数より一人足りない。あとの一人は敏子夫人の胎内で陽の目を見る日待ち焦れてゐる。生み月は来月だ。洗顔を終へた蓮田は、寸時、目を閉して險の裏に故郷の風物を思ひ浮べると、安産を

鏡

芳野 清

修道女が床に伏して祈るやうに
美しく あえかなもの
やさしく 抒情的なすべてを
求める心は募るのだが
手をのばせば消えてゆく
オルフォイスの妻 さながらに
影形も薄れて
虚しく空をつかむばかりだ
愛憎と闘争と陰謀だけが

祈つたに相違ひない。

書筒の末尾ではばらく音信の杜絶を予言してゐる。大雲山を源にして洞庭湖に注ぐ新墻川。「修水許せど新墻川は許さじ」。その呼号で長沙第一陣を負負する敵は旺んに防禦陣地を構築してをり、その殲滅作戦が月末に期されてゐるからである。

★ ★ ★
九月中旬

中支派遣・稲葉部隊・坪島部隊・河野隊より日本文学の会宛はがき

テーブルと調理台

池沢 茂

ぼくの家のお手前は、材木はいなかの義父から上等のを送ってもらい、思いきつて改造し、増築したので、ほかの居間や座敷にくらべると、ちょっと不似合ひなくらい、立派になつてゐる。流しはもちろん調理場もタイルばかりで、ガスレンジがすえてある。ひろいガラス窓があつて、朝のうちは、日があかくとさしこんでくる。板の間になつていて、しゃれたテーブルやイスも、そなわつてゐる。ずいぶんせまいけれど、料理をして、その場ですぐたべられるように、食堂も兼ねてゐるのだ。ところが、そのお手前に、古い勉強用のテーブルが引っこりかえて足を天井に向け、こわれた裁縫台や板ぎれなどが押しこめられ、何脚ものイスがうすだかく積みかさねられてゐるのだから、一体なにことだらうと、だれでもびっくりするにちがひない。

料理や洗ひものなどするのにも、ふる場や洗面所へ行くのにも、板ぎれなどにつまずきながら、天井まで届きそうなイスの山や、引っこりかえつたテーブルのあいだを縫つてネコ

横顔を思ひ出す。好漢!と半畳を入れたくなる。君は輪を大きくするほど立派なものを書く人だ。小さくなるな。この頃書くものは君にとつて材料も長さも小さいので、却つて損をしてゐないか。大物に立ちむかふ時、君は別な光りを発する。怪しい光を。勿論外から見た批評だが。雲海に虹すわが影合なる慰問品多謝。今後は必ず御無用。

★ ★ ★

訂正・第五二号所載、昭和十四年四月十四日蓮田書簡中、「小林哲子」は「小林哲子」、「丸」(文字不明)「日無湖」は「丸山は無湖」の誤

蓮田善明碑建立趣意書

建立場所・熊本県鹿本郡植木町田原坂公園内
碑文染筆・齋藤清衛先生
除幕式・昭和三十五年八月十九日命日
募金要領・一口三百円以上(経費予算十五万円)
送金先・熊本市大江町熊本商科大学丸山学苑

発起人 (順不同)

齋藤清衛、久松潜一、西尾実、中河亨一、保田与重郎、榎方志功、三島由紀夫、池田勉、栗山理一、清水文雄、丸山肇、小高根二郎

不思議と目について仕方がない
僕の鏡はもう曇つてしまつたのか
僕は決して敗北主義者ではないのだが
物事の渦中にはゐるたくない
何事も執すれば地獄に墮ちると
いみぢくも現代の巫女は云つたが
その辺の事情を諷したのかも知れぬ
と、僕流に解釈して、さて、今日も
緑陰のニッパの浴みを想ひ描く
半獣神の好色の笑を浮べる
こんなにも僕の鏡は曇つてしまつた

みたにに、からだをほそめて通らねばならぬ。便利だった食堂も、そこで食事しようとするか、イスが全部積みかさねられているから、立つたまま、たべなければならぬ。不似合ひなほど立派だったお手前も、しばらくすると、物置き同然の様相を呈してきたのだ。おさないころから棒や板ぎれ、カンやピン、クギやカギや輪の形のもの、それから、マジックインキ、落書きした紙きれと、さまざまの収集癖を遍歴してきた幸吉が、その痕跡を保ちながら、七歳になつたころから、こんどはテーブルやイスを収集しはじめてゐるのだつた。

幸吉は学齢の六歳になつても、ふつろの小学校へは行けなかつたので、特殊児童ばかり集めてゐる市立の学園に、はいつた。ちょうどその年の五月に開設されたばかりで、場所もわりあい近かつたから、ぼくや妻にも、幸吉自身にも、たいへん運がよかつた。もつとも、はじめのうちは、そんな学園でも、ぶじに続けられるかどうか、あやふやだつた。不正常出産や小児マヒなどのため、身体、ことに知能の発育が、いちじるしく阻害されてゐる児童が大部分なのに、そのなかでも幸吉は異常性が目立ちすぎるのだ。はじめ児童相談所へ入園をたのみにつたとき「なにしろ社

会性が全然欠けていますのでねえ。めずらしい例なので、わたしたちはかりに「小児精神分裂症」あるいは「自閉症」と名付けているのですが……まあ一応は、入れてもらえるようにしてみましよう。しかし半年間だけでですよ。そのあとのことは保証しませんよ」とダメを押されたが、そのとおりに幸吉は、集団生活がまるきり出来ないのだ。先生が、いくら呼んでも、話しかけても、返事どころか、見向きもしない。いろ／＼手をつくして整理させようとしても、ひとり、勝手なところをうろついている。みなが教室に集まっているときでも、廊下や運動場へ出て、なにかしきりに「ひとりごと」を言いながら、走ったり歩きまわったりしている。机のうえに乗ってはビヨンと飛び、机のうえに乗ってはビヨンと飛びして、ひとり、はしゃいでいるときもある。窓やドアや消火器、園長室のテーブルのまえなどに立ちどまって、いっしょうけんめいカギなど調べているときもある。ひとりごとは言っても会話はできないから、せっかくだ大ぜいの友達が出来たのに、だれとも遊ばうとしない。つまり幸吉は、これまでの家庭の生活を、そのまゝ、平然と、学園のなかへ持ちこんでいるのだった。

バー・ホクロ

福地邦樹

なぜホクロという名かと聞かれるとマダムは唇の下のホクロを指さすのだ。黒い眼が似合うのが自慢で陽気で親切で、いくらか退屈で幾分おっとりしている狭いカウンターの前にはとまり木が八つあって、夕方になると酒飲み鳥がずらりと並んで豆をつつきながら安物のウイスキーを飲んで暗い照明はよい人を酔わせるマダムには一人娘があつたとこの顔立ちのおとなしい小学生だ

あたらしい環境への順応性が、ふと芽生えてきたらしかった。それまでは先生からの要請で、妻が、ときにはほくが、いつも幸吉に付き添って登園していたが、そのころから、ほかの児童たちとおなじく、スクールバスまでの送り迎えだけでよいようになった。そ

たったひと間しかない二階が麻雀きちがい占領されると実に従順に暗い階段の中途に腰かけてゲームの始まった時から印度の聖者のように根気よくその終りをまちはじめるそれほど混んでいるときはマダムの衣裳がえも階段で行われるいま着替え中だから来ちゃいやよそんなこと言うと余計のぞきたくなるよ麻雀の音は遠くで聞くと疲れた馬がよろめき歩いてるようだ酔つてくるととまり木がぐらぐらするアブサンは女の髪油をなめてるみたいだマダム ちょっとホクロをみせろふん マダムのホクロはどちらかと言えばちっぽけなほだよ明日からバー・イボと改名しなよ

刺繻

吉本青司

あなたは靴下の破れを刺す
いちんち
靴下の孔から夏の太陽がのぞく
あなたの小さな針は
空色の糸を速くまで運ぶ
あなたは いちんち
靴下の破れを刺す

宇宙旅行の話や
星の話や
地震や 津波や 人殺しの話や
いろいろな放送を
素直にみ 素直にきいて
気をもんだり 悲しんだり
しながら

イスをいれ、いっせいに歓声をあげながら、一方の壁へむかって押しつけてゆく。一クラスで十人以下の生徒だから、やがて机は壁ぎわに一列に並んでしまう。ところが幸吉には、こ

あなたは靴下の破れを刺す
いちんち
靴下の破れを刺す
あなたの刺す靴下は
自然の美しい形に縫い取られる
あなたの息子や孫たちは
そんなことにはお構いなく
あなたの刺した靴下に
足を突っこんで出かけていく
だか

かれらの破れた視線が
ふと足もとに投げられた時
そこにちりばめられた
花や小鳥やけものたちに
かれらは改めて
驚きの眼をみはる

うして一年がおわり二年目になると、幸吉はぼつ／＼、学園の生活をそのまゝ、逆に家庭のなかへ持ちこみだした。幸吉に影響を与えるのは、いつのまにか、主として学園だった。学園では、生徒たちは帰るとき、それ／＼の簡単な動作も、なか／＼できなかった。おそい子でも二週間もたつと、たいていおほえこんだのに、幸吉はうろ／＼して、ほかの子に手つだつてもらわねばならない。この一つの動作をおほえるのにも、やはり半年以上、一年近くが必要だった。そうして、いったんおほえると、机はすべて、家に帰ってからも、おなじようにせねばならないと思うら

学園のと似た机やイスは、もちろん家にはない。ほくが古道具屋から買ってきて使っていたテーブルが、ずっと大きいけれど、色や形など、学園の机と、いくらか似ているかもしれない。イスはみな背中のもたれが付いているから、全然違っている。すると幸吉は、調理台に着目したのだ。お勝手が一坪たらずのせまひ十間だったとき、ほくがラワン材を買ってきて日曜大工で作った調理台で、ずっと大きく、足も長いけれど、箱の形をした学園のイスと、なるほど似ているかもしれない。この調理台を持ちだしてきて、幸吉は、テーブルの下に入れた。テーブルには足の中

伊東静雄全集 全一巻

藤村・朔太郎に次ぐ現代詩の高峯！
「詩と真実」に貫いた四十八才の生涯が
賭けた全業を茲に収録。 童話。 卒業論
文。 既刊詩集に収録せざる初期詩篇「事
物の本抄」。 処女詩集「わがひとに与ふ
る哀歌」を解明する書簡。 それらは第三
の高峯たるゆえんを解くであらう。

十月刊
京都市(中央局区内) 仏光寺通高倉西
人文書院

も幸吉は、うん／＼力みながら、いっしょう
けんめい押しこんでしまおうと、なにか大きな
義務をはたし、一つの立派な仕事をやりとげ
たような気持ちになるらしかった。
しかし、ほくにも妻にも、そんなことは、
はじめのうちにはわからなかった。 たゞ、座敷
のなかに、カサのたかいテーブルや調理台を
持ちだされ、すえつけられると、目ざわりな
だけでなく、そうじをしたり、ふとんを敷い
たりするとき、じまになつてしかたがな
い。 テーブルだけでなく、そのなかに調理台

が押しこんであるから、なかく／＼動かしにく
い。 ひとりで無理をすると、たゞみを痛めて
しまう。 そうじのときなど、おさない妹の梅
子にまとい付かれたりすると、いら／＼し
て、そのテーブルや調理台をたゞきこわし、
どこかへ放りだしたくなる。

「これも幸ちゃんの収集癖の一つやろ。ピ
ンやカンがやまった代わりに、テーブルや調
理台になったんや。 なにか一つのこと執着
せずいられんのやから、しかたがない。 ま
あそのうちに、やまるやろ。 二カ月から三カ月
か、せひ／＼半時も待っていたら……」
気が立ってヤケになりか、ったり、沈みこ
んでため息をついたりしている妻を、ほくは
なだめようとする。 しかし直接の被害者の妻
には、ほくのこいう、のんびりした、気長
ななだめかたが、かえって気にさわるのかも
しれない。 まゆをひそめ、肩をふるわせて、
けわしい感情がだん／＼つものつてくる。

「そんなら、幸ちゃんの知らんまに、かた
づけといってみよう。 見えなくなつたら、その
ま、忘れてくれるかもしれん」
スクールバスの停留所まで、妻はたいいてい
梅子もつれて、吉幸を送ってゆく。 ほくはそ
のあいだに、テーブルのしたから調理台を引
きだし、調理台は納屋のなかに、テーブルは

ほくの居間になつて居る応接間のすみに、そ
っとかくすように、しまひこんでおいだ。

編輯後記

六月十一日。 早大川副国基教授より伊東全集に關
して註をできるだけ詳細に……との註文をいたゞい
た全集。 の主眼は作品・資料を多く収録することに
あるで註には自ら限界ができる。 他日伊東評伝で
要望にお答へしたい。

六月十九日。 京大の大学院同人誌「視界」をいたゞ
いた。 杉本秀太郎氏の「伊東静雄論」は味到された好
エッセイだ。 特に伊東のサ行偏愛の論証には教へら
れるところが多かった。

この日安保條約が自然成立した。 あちらでは官庁
に提出した書類が二週間になつても何ら応答がない
と自然承認になる風習がある。 一国の運命をこの事
務処理方式で片付けうる憲法に問題がある。 安保條
約に關して発表された意見は多かつたが、言葉や古
典に基いて正すことからはじめろ……といふ朝日新聞
に発表された三島由紀夫氏の意見が一番傾聴に値し
た。

果樹園 第五十四号 (毎月一回一日発行)

昭和三十五年八月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
發行所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
果樹園社
定価 三十円

果樹園

第55号

蓮田善明とその死 小高根二郎
ほくとボクとの対話 吉本青司
黄金虫 浅野晃
米 田中克己

夕ぐれ 美堂正義
壮行祝歌 上村肇
物への愛着 池沢茂
海光 森内亮
満足 堀内歴
後記

蓮田善明とその死 (一三)

小高根二郎

槍ヶ岳の東麓、浮島をつくる蜷気楼や、湖
上から龍燈が立昇るといふ説話を秘めて眠る
木崎湖……。 そこから蓮田に寄せ書をかき送
ったのは、清水文雄・栗山理一両氏・斎藤清
衛先生の長男一郎さん・それに伊東静雄だっ
たやうである。

この夏、斎藤先生は親戚に当る法政大学予
科長の井本健作氏の北軽井沢の別荘を借られ
た。 先生が木崎湖の夏期大学に出講された留
守に、昨夏の高野会同を記念すべく、北軽井
沢夏行がもくろまれたわけである。 池田勉氏

は奥さんが病気で参加できなかった。 その池
田氏の代りに「コギト」の評論家中島栄次郎
も伊東と共に招待された。 中島の名が蓮田の
文面に見える
のは北軽井沢
から東京に行
って寄せ書に
参加しなかつ
たからであ
る。

一郎さんに
関して、「こ
の恐ろしい天
才が後年この
夏をどう思ひ



第四野戦病院に於ける師弟の邂逅

左・軍医少尉横手卯作、右・負傷姿の蓮田善明

出すだらう云云」の記述があるのは、蓮田は
成城学園で一郎さんの担任であつたことがあ
る。 当時、一郎さんは日本全国の鉄道の駅名
と、汽車の発着時刻を全部記憶してゐて、そ
の風変わりな天才ぶりは蓮田を吃驚させたこと
があつたからだ。

蓮田は寄せ書を見ながら一昨、昨年の高野
会同を郷愁よりも濃く思い出しているのだ。
あの日、「作文」の編纂におほらははであつ
た。 栗山は精神無比といつた逞しさで筆を走
らせた。 伊東は小鳥のやうに欄干にとまつて
嘹唳と甘美な口笛を吹いてゐた。 運命的な伊
東の「水中花」を聞いたのもあの日だ。 大門

近くの土産店で、鶯笛をかたみに吹き合ったのも、あの日だった。蓮田は過日読んだ「コギト」の詩——小高根二郎「通天閣にて」。蔵原伸二郎「蕨を探る」「合歡花」「四月、電ふる」。村上菊一郎「視界」「晴天」。等の詩に混った伊東の「夜と昼」「燈台の光を見つつ」で、とりわけ死の世界をすら盛感にする伊東の韻律に魅了されたのだ。

夜と昼

伊東 静雄

柳

やま吹の 咲きふる垣ねのへに やなぎは 幾日いくひ ちりにし穂状花おとむらぎぞ

葉をもろしろきひかりに交はりて

わが取りおとす 堪へごころ ひとに知られず

春をよろこぶもの目に 朝かげと

夕陽のひかり自立たぬ季節きせつなれ

山吹はいつか移りし 卯のはなのいましろ

き 垣かきへを

柳はおのれき揺れつつ 青くかすかに照らすなり

かかるとき かかるころの 玉ゆらの青きかげに

誰れか驚きて見入らざらん

ながとし月 過計なりはひの心われより奪ひにしかの 奇しくあかるきおもかけぞ そこに立てれば

燈台の光を見つつ

くらい海の上に 燈台の緑のひかりの

何といふやさしさ

明滅しつゝ 廻転しつゝ

おれの夜を

ひと夜 彷徨ふ

さうしておまへは

おれの夜に

いろんな いろんな 意味をあたへる

嘆きや ねがひや の

いひ知れぬ——

ああ 嘆きや ねがひや 何といふやさしさ

なにもないのに

おれの夜を

ひと夜

燈台の緑のひかりが 彷徨ふ

「夜と昼」末尾の△奇しくあかるきおもかけ△は、「燈台の光を見つつ」第一聯の△明滅しつゝ 廻転しつゝ△の詩句さながら「花の堡」に立籠る蓮田の心裡に佇んだであらう。まさに伊東恋……といふ言葉が適切であったかもしれない。伊東の処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」を戦場に携行しなかつたことを、蓮田は沈痛な悔としてゐる。

ところで不思議なことに、伊東が寄せ書を木崎湖で書く寸前、軽井沢で「わがひとに与ふる哀歌」のわがひと——酒井百合子さんに伊東は出会つてゐたのだ。伊東は大阪から東京に行き、そこから軽井沢に廻り、八月十七日に版販した事実が、富士正晴・今井茂雄宛書簡で判明してゐる。伊東の恩師酒井小太郎先生は昨年に姫路高等学校を停年退職され、年末には東京に引揚げられた。伊東は東京に酒井家を見舞ひ、百合子さんが軽井沢ホテルに避暑してゐるのを知つて訪れたのだ。旅から販つてきた伊東に、彼が軽井沢で初恋のひとに会つてきたといふ話を、私は聞いた覚えがある。旅を共にした清水・栗山両氏の記憶にも、その出会を聞いた覚えがあるといふ。木崎湖からの伊東の寄せ書には、恐らくその出会ひを、湖面に浮島を形成する蜃気楼や、湖上に立昇る龍燈のやうに匂はせてゐたであらう。

ぼくとボクとの対話

吉本 青司

★ 暑い日の真昼に発見した秋は ぼくの中で徐々に成長した

✕ キラキラシタ夏ノ太陽ガ

ボクヲ海ベニ招ク

ヒマワリノヨウニ

びいちばらそるがヒラク

★ 八月の土堤に

風が野路菊を見つけたよろこびを 君は知らないのか

とても

あの海の塩からさの比ではない

✕ あいすくりいむノ冷タイ味覚ヲ

恋人タチハタノシム

ナギサヲ飛ブ黒イカゲロウニ

詩人ノ眼ガアソソデイル

★ 歯科医師の銀色の治療器が

ぼくの歯の痛みをしずめる時

しみじみと

人生を感じるのはいいものだ

✕ ヨシテホシイムシ歯ノ痛ミ

クサヒバリガ鳴イテイル

★ あれだ……

あれが秋の声なんだ

ところで君

✕ △天国と地獄の結婚△を観にいかないか

ボクハソレヨリ

△小サイ人魚△ノ方ガ好きダ

ツマリハ

コノ世ハ ユメニ過ギナイッテコトサ

★ たとえ ゆめでもよいのだ

三百年もいられないからこそ 聰明に生きなければ……

ぼくはこれからオベラを観に行く

あの裸山のいただきへ

風だけが過ぎていくあの石の上だ

✕ イヤダナ ソンナノ

ムシロボクハ街ノ喫茶店デ

はちゃとりあんヲ聴クヨ

スマイレ色ノかくてるヲ注文シテサ

★ ハチャトリアンとアンデルセン

妙なとりあわせだね

✕ ソンナコト問題デハナイ

タダ陶酔スルコトダ

殉教ガボクタチヲ

生キルコトヘ夢中ニサセル

★ おぼれることを望んでいるの 君は

人魚だつて王子にナイフを向けなかつた

✕ ソノカワリ

ないふヲ海ニ投ゲコミ

ワレト海ニオボレタ

★ いやおぼれたのではない

ひとを刺すまえに

大事なことを想いだしたのだ はげしく

生まれるための聰明さから

✕ 生マレルタメノ聰明サ

★ そうだ

まったく全身的な行為なんだ

さあ

もう野外劇場へ行く時刻だ

らう。

寄せ書を読みつゝ蓮田は、雲海の彼方に睡
つてゐる洞庭湖を想望し、遙かなる木崎湖に
切なく思ひを走せたらう。黄泥の中国の水と
ちがひ、十米の水底が透視できる普通第六号
の木崎湖……その間に蓮田は虹を懸け、己
が幻影を渡らせたのだ。

雲海に虹すわが影音なる

蓮田は「花の堡」の中に己が分身を旅立た
せてゐる。それはまた近附く戦闘の日のため
の覚悟からであつたらう。

★ ★ ★

昭和十四年九月二十一日

中文派遣・稲葉部隊・坪島部隊・河野隊より東京
市世田谷区祖師谷二ノ六清水文雄宛はがき

コギト八月号落手、丁度今日から山へ行く
ので、携へてゆくによかつた。

何か書いて送らうと思ひつつ、書くのがも
の憂くてベンがとれなかつた。事情がやや切
迫してきたが、そのためではない。涼しくな
つたので、本をよみたい気は強い。中央公論
八月号と、日本書記を欽明記以後くりかへし
てゐる。読みものを註文したいが、今では一
寸仕様がなないので、又改めて後日註文した
い。

コギトの後記をみても、雑誌の用紙にも一

佐野・高屋部隊と共に、小原・原田部隊の掩
護射撃の下に、新堀北岸から進撃、敵前渡河
をして新堀に突入した。当時の新聞は、新堀
河北岸の丘陵地帯を追撃、或ひは水煙を蹴立
て、渡河する坪島部隊の写真を掲げてゐる。
後者の渡河部隊の先頭に立って、抜刀をふり
かざし突貫を叫んでゐるのが蓮田かもしれな
い。

敵は河岸の二重陣地から迫撃砲、機銃、擲
弾銃、小銃で一斉射撃を浴びせてきた。轟音
で天地が炸裂、疾駆する地面が斜傾するよ……

……と見る間に、蓮田は右腕に衝撃をうけて転
倒した。握つてゐた軍刀は草叢にすつ飛んで
ゐる。起き直つて左膝を立て、刀に手を伸ば
さうとして、衝撃によるシビレが激烈な疼痛
に変わつてゐるのに気が附いた。「糞ッ！やら
れた」。右腕前膊から血潮が滝となって腕を

伝ひ、地に滴つてゐる。下唇を噛むと左掌は
反射的に右脇を止血のため押へてゐた。火の
やうな疼痛が右腕から全身に稲妻した。「此
の土塊」「草」「雲」。かねてこの時のた
め用意してゐたアフホリズムを、呪文のやう
に口ずさんでゐた。「即ちそれ自ら詩」。

蓮田は新堀に急設された稲葉部隊の第四野
戦病院に収容された。カルテには「右腕前膊
貫通銃創」と記されてゐた。陸軍歩兵少尉蓮

段と困難が加はつたらしね。

★ ★ ★

蓮田は「日本書記」「欽明記」以後を繰返
し読んでゐる。

百済に対する援軍の派遣と、その結果とし

黄金虫

浅野 晃

この一匹の黄金虫

つめ草のみどりのかけて

もうろうと眠つてゐるもの

けれどもそれが呼吸してゐることを

わたしは知つてゐる

それがわたしの安心である

夕べの風とともに

かれはめざめる

あたりを眺めまはす

つめ草の花のあひだを這ふ

夕映の反射のなかを

翅をさんらんとかがやかせ

うなりつつ飛び翔ける

かれのささやかなうなりが

曠野のたましひを叩かせる

夜がやってくる

すべての草が眠つたあととも

不眠になやむこの曠野を

けれどもかれが生きてゐることを

わたしは疑はない

それがわたしの慰めである

さまざまの影

ゆたかな影、溢れる光の中の

季節の花の影、尾をひいてゆく風の影

夜は匂やかな月の——

いのちのあかしの影と死の影と

閉ざされた

何も語らない影がある

はてしないくり返しの影がある

沙漠をわたつてゆく駱駝の影

鳥や獅子や虎の影

豆粒よりも粟粒よりも小さい影

這う虫の影には

つめたい刺すやうな笑い

もはや何事も起らない

田善明。その姓名を見て軍医少尉の横手卯作
は自分の部屋に収容するやう衛生兵に命じ
た。確か植木小学校の代用教員時代に担任し
た金蓮寺の三男坊の蓮田だ。横手少尉は二十
数年の時空の向ふ……、ぶりぶりッとした蓮

でもたらされた仏教文化。神仏抗争と国家に
よる仏教文化の容認。この百済文化の本源で
ある唐・隋との交渉開始。爾後に於ける舟証
法的な展開の悲歌と讃歌とを代表する大津皇
子・志貴皇子・大伴家持論。蓮田はこれらの
詩人の決意と覚悟とを回想することによつて、
切迫した戦闘に臨まんとする己をためし、
てゐたのであらう。

この書簡の二日後の二十三日、つひに戦闘
の火ぶたが切られた。中文派遣軍報導部は次
のやうに作戦意図を発表してゐる。

(1) 軍は江南の敵第九戦区を殲滅すべく九月
中旬作戦行動を開始す。

(2) わが陸軍洞庭湖渡航部隊は海軍部隊と密
接なる協同の下に九月二十三日払曉汨水
河南方洞庭湖岸に敵前上陸。岳州附近に
於て攻撃準備中のわが精銳部隊は九月二
十三日払曉、敵第九戦区軍の中核第五集
団軍を撃滅すべく洞庭湖粵漢線通城地区
より一斉に進撃す。

即ち、渡河部隊が汨水に敵前上陸をして鉄
路を爆破、退路を遮断されて袋の鼠となつた
関麟徴麾下の中央軍直系十數ヶ師を包圍殲滅
する作戦である。

蓮田小隊の属する坪島部隊は岩崎・池田・

田の幼な顔を思ひ出した。その幼な顔を腹裏
に置いて部屋に入ると、まさしくその蓮田だ
つた。負傷後の貧血した顔は、二軒ばかりの
地点にある新墓地の墓に花を捧げて飯つてき
た十才の少年蓮田の顔だった。その純真無
垢、強毅沈静な面輪にヒゲをアクセサリーに
してゐるだけであつた。

「よう……。蓮田君！淵上だヨ。」旧姓を
名乗つた横手少尉の声は、いつもの傷病者を
励ます時以上に弾んでゐた。蓮田は立ち上る
としばしためらつた。十六才の紅顔の淵上先
生の顔と、鼻下にヒゲを蓄へてぶつ太つた
横手少尉の顔とのビントを合せるのに、しば
らく時間を要したからである。太つた頼もし
げな顔は、小壮気鋭で活潑な紅顔に収縮し、
再び他人の生命を託すに足る顔容に膨脹した

「あ！淵上先生でしたか……。こんな所で
再た御世話になりませうとは。」と肩綱帯を
してゐぬ左手を蓮田は差し出した。横手少尉
は右腕に反射せぬやう蓮田の掌を包むやうに
して握つた。見事新墓地の墓に花を捧げて深
夜の闇を踏破して飯つてきた少年——全学年
を通じて唯一人の試胆会の成功者であつた第
三学年の蓮田の手を握つてやつた時と同じで
あつた。たゞ、あの時は小さな肩をさらに叩
いて激励してやつた違ひがあるだけだつた。

「傷はだいぶか、りませうか?」「いや、大きな血管を切つてゐないさうだから、一月も治療したら治癒するだらう。」竹む二人の耳に次第に遠退いた砲音が遠雷のやうに聞えてゐた。

蓮田は五日間横手先生と起拳を共にして昔談に堪能した。前線は十五キロ以上も進んでゐた。敵の遺棄死体は包圍圈を縮少するに及んで三千に達した。敵四ヶ師必死の抵抗で味方の死傷も増大した。横手少尉の第四病院はさらに前線に移動せねばならなかった。従つて蓮田は岳陽の病院に後送されることになつた。二十数年ぶりに邂逅した子弟は別れねばならなかつた。二人はこの邂逅を記念して関帝廟の前か、貞節石碑の前で記念撮影をした。巻頭に掲げた写真がそれである。爾後二人は再たと出会う機会に恵まれなかつた。横手卯作先生は昭和三十四年十月二十八日故郷山鹿市津留に没した。

★ ★ ★
昭和四年十月二十三日

中文派遣・坪島部隊・河野隊より東京市世田谷区
祖師谷二ノ六六清水文雄宛(手書)

負傷のことで心配かけたと思ふ。しかし負傷は、実にいい、負傷ですんだ。痛みも、注射の針の方が痛い位で、大きな血管をきつてゐないことが分つてからは元気で、他人の負傷

を思つてゐた時ほどのこともなく、あつけないものだった。何といつてもすこし手の筋がへんな位で、この通り不自由もしい。御安心を請ふ。

病院で、君の手紙二通、かげらふ日記と新古今の小包、文芸文化とコギト、受取つた。

感謝してゐる。かげらふ日記もよみたかつたものゆえうれしかった。三嬢(註・清水みえ・あさ・はる)の絵、美しく、病院の壁に、又、今の山の上の塚の松丸太の柱に貼つてかざつてゐる。

僕の本のこと、題のこと、往復がおくれ、もう間に合はない。「本居」は二度の出版になるので、「古今和歌集」の方を入れたかつた。とにかく大へんお世話かけた。本屋へもよろしく。

「文芸文化」への原稿、今のところ何も書きえない。しかし古今集論があるからよからう。「新風言」へは、こちらからその原稿を送るまで、しばらくのせいでくれたまへ。

前線で新しい陣地をもつことになつたので、当分忙しく、敵も相当出てくるので、目はなせぬ。

病院の近くが岳陽楼なので、幾度か訪れた。文芸文化やコギトをそこでよんだ。「辞箋」と原稿紙のついたことは前にも返事出し

夕ぐれ

美 堂 正 義

ビルの屋上から見る都会の相貌はいろいろと変化が激しい
驟雨が酷暑を払ふやうに降り出し
高層建築の石造りの壁に
黒いしみがふえるのを見る
原爆の娘の顔を思ひ出させる
墨絵のやうに並んでゐるビルの群
その一つの屋上でビルを呑まうとしてゐる
間もなく俄雨は過ぎるだらう
夕ぐれの色どりが濃くなり
陰影がいろいろと変化を与え
灯が眼に泌みてくる
ネオンの煙むるやうに浮んで
冷たくなつたり 暖い雰囲気をまいたり
この都会の相貌に魅せられ
空気のなかに生きづく
翼が立ち始める
昼から夜へと転換する時刻
都会は急に親しみ深くなる

たが、届かなかつたかもしれぬ、たしかにいたゞいた。そちらからのもの大抵まちがひなく届いてゐる。

★ ★ ★
負傷してから一ヶ月目の手紙である。蓮田は岳陽の病院から再び前線の山に分遣されて、この手紙を書いてゐるのである。今度の山は先の大雲山ではなく、過日まで敵が天嶮をたのんで陣をしいてゐた、西洞庭湖の東方の万洋山であらう。

それにしても、岳陽病院での二十日余の日は、次第に苦痛や不安が薄らいでゆくと共に、快適な休息の時間であつたらう。読みたと思つてゐた藤原道綱の母の自伝的日記「蜻蛉日記」も手許にある。清水氏の努力で文芸文化叢書の第一冊として編纂されてゐる「鵬外の方法」上梓の日を夢みることも楽しかつたであらう。蓮田は大雲山の陣地で脱稿した「古今和歌集について」が収録されなかつたことを残念がってゐる。「本居宣長に於ける「おほやけ」の精神」は、既に昨年「国文学試論第五輯」として日本文学の会から上梓されてゐたからである。清水氏が「古今和歌集について」を収録しなかつたのは、既述した蓮田の自衛的な自己陶醉が感じられたからであらう。そこで熱狂して構築した「花の堡

未来

田 中 克 己

過去や故人を語りすぎた。このへんで未来のことを語らうよ。それにはよい実物見本がある。私の父はむかしの文学青年で、晶子や信綱先生について歌を作つた。明治三十七年の戦争には一兵卒として従軍し、勲八等をもらつた。いま七十九才だが、私の弟の家に母といつしよにゐる。このごろ昼は寝、夜も寝る。テレビも世相ももう関心がない。何もするごとなく、何も考へなくてゐる。私は丁度三十年たつた私を見るおもひがする。いや私の老衰はもう少し早いだらう。あと二十年かな、二十五年かな。私は数学が不得意——父と同じく——なので、数字を見るとこはいが、世の中から不要になるのは、もう少し早いやうに思ふ。この弱気も確実に私は父から受けついでのだ。

」。それが飛弾を或ひは致命部からそらし、右腕前膊貫通銃創だけで救つてくれたのかもしれない。蓮田が未収録を残念がる思ひの底には、救命の論としての未練が潜んでゐると見ねばなるまい。

蓮田は白衣吊帯の姿で病院の近くの岳陽楼をしばしば訪れ、そこで「コギト」「文芸文化」九月号を読んだのだ。一ヶ月前の作戦で海軍部隊の快速艇が水脈を曳いて進航した洞庭湖。李白は南楚の張嘉延を討つため集結した官軍の海軍を「九日登巴陵置酒望洞庭、庭水軍」といふ題で歌つたことがある。

さう言へば、「白や詩に敵なし」の讃辞で李白の無二の詩友ぶりを示した杜甫も、若き日、山東省魯郡石門での交歓の時は楽しかつたらうが、晩年には時潮に翻弄されて、流滴と放浪のはて岳陽にたどりつき、共に実るところがなかつた詩人の老境を洞庭湖の水に敷いてゐる運命は、まことに不思議である。李白は安祿山の乱後、肅宗の弟宗王に勳皇軍だと誤信して投じ、心ならずも叛逆罪に問はれ、入獄の後に転々と流滴し、杜甫は幸ひ肅宗に走せ参じて米達の路を拓いたと思はれたが、やがて地方に左遷され、飢饉のため官を捨て、水上を放浪したのである。

李白

清いあした巴陵（註・岳陽の丘に登り）
あまねく見渡せば 見えぬ所とてない
明るい湖は 空の光に映え
底ひにまで 秋の色がみなぎってゐる
秋の色は なんとといふ蒼さだらう
遠く海にいたるまでも 澄みわたってゐる
山は青くて 遠くの樹々は煙り
水は緑で ひやりとする霧もない
やってくる帆は 揚子江の中から現れ
去る鳥は 陽のあたりに羽ばたいてゐる
風は長沙の浦に すがすがしく
山は雲夢の田舎（註・湖南の北の沢に消えてゐる）
光を見ては 薄れゆく髪を惜み
水をみては 逝きてかへらぬ年が悲しい
北の渚は ゆらゆらとたゆたひ
東の流れは さらさらと音たてゝゐる
鄂の人が珍らしくも歌ふ 雪の歌
越の女が歌ふ かなしい採蓮の歌
聞いてゐたら 腸を断つおもひ
厓によれば 涙は泉のやうに吹きでる

岳陽樓に登る

李甫

むかし聞いてゐた 洞庭の水の満々

今うつつに 岳陽樓にのほれば

呉と楚の国々は 東と南にひらけ
天地は 日夜をわかつた浮んでゐる
親戚ともがらからは 一字の便りさへなく
考いさらばへた病身を託すのに 孤舟ある
ばかり

関山の北では 戦がいつ果るともなく
軒によれば 涙は眼鼻から流れやまない

岳陽樓で雑語をひもどいた傷痕の蓮田は、
盛唐のこの二詩人の老いの歎きにどんな思ひ
を寄せたことだらう？李白・杜甫が生を享け
たのは大津皇子の死後十数年から二十数年後
であり、その不遇であった生を閉ぢたのも大
伴家持の死より十数年から二十数年遡ってゐ
る。蓮田は欄干に身をよせると、湖神・湘君
の棲家と伝へる君山のあたりに眼をやつたら
う。木崎湖に想ひを走せ、遙か雲海に虹を渡
して、その上に自分らの身を付ませた、あの
「花の堡」の要はもうなかったらう。九死に一
生を得て、水青い木崎湖ではないが、名だた
る洞庭の水に、今、対し得てゐるのだから……
。戦時下なので、李白の詩にある鄂人の雪
の歌は聞こえなかつたであらう。越女の採蓮
の唄も聞こえなかつたらう。又、李白が叔父に
従って船遊びをした楽しかつた日に聞いたと

伊東静雄全集

十月刊行

人文書院

いふ、呉人の歌曲——白茅の歌も、蓮
田は耳にしなかつたらう。

然し、「花の堡」から解き放たれた蓮田の
耳に、聴覚を越えるほど高いオクターズの韻
律が、かすかに聞こえてゐた。彼はたゆたひ
、或ひは疾走する洞庭の水に、いつか瀬戸内
海を思ひ浮べてゐたのだ。君山は淡路島だ。
蓮田は「古事記」中で、それは「日本浪漫詩
情の北斗としていつくしび誦してゐる一駒」
を自分で口ずさんでゐたのである。それは瀬
戸内海を渡つた船「枯野」で作つた琴が奏で
る高く貴い韻律であつた。天に通ひ、天から
降ってくるやうな韻律だつた。

枯野の琴

この御世に、免寸河の西の方に高き樹あり
けり。その樹の影、朝日に当れば淡道島に逮
び、夕日に当れば高安山を越えき。かれ、こ
の樹を切りて船に作れるに、いと捷く行く船

にぞありける。時にその船の名を枯野とぞ謂
ひける。かれ、この船を以て日夕に淡道島の
清水を酌みて大御水獻りき。妓の船の壊れた
るもて鹽を焼き、その焼け遺れる木を取り
て、琴に作りしに、その音七里に聞えたり
き。かれ（註・こゝに、故に、そしての意）歌に、

枯野を 塩に焼き
其が余り、琴に造り
振き弾くや 由良の門の
門中の 海石に

壮行祝歌

上村 肇

北村徳太郎先生渡欧・訪ソの旅にいて給つ

わが くにはばらに 今あらくさの生ひしげり
陽はくらく 霖雨はしとど土にしむ
つちにしみるはくにたみの
嘆きの水と知るぞ 君。
葉末をわたる夜のかぜの
季節外れのつめたさは
あけほのとほき くにたみの
嘆きの風と知るぞ 君。

振れ立つ 浸漬の木の

こは静歌の返歌なり。

（昭和十五年「文芸文化」二月号、
蓮田善明「古典新生」）

〔附記〕

「蓮田善明とその死」はこの第十三回を以て
一応前篇を終つた。中篇は第一次応召より飯
還後の蓮田の文学活動最もはなやかな時期で
あり、後篇は第二次応召より自決までの予定
である。後掲の蓮田善明碑趣意書が示す通り

あゝかゝるとき くにばらの
われらの悲愁をみに秘めて
たゞ徒にうちさはぐ
雑草の上をとぶ愛国の北村徳太郎。
しこのあらくさ刈りとりて
種まくひとを待ちのぞむ
われらの汗の願いぞ
知り給う太陽の人北村徳太郎。
翔べ信頼の わだつみ越えて
世界の新しき風
世界の新しき雲
歓呼を上げて幾たびか君を迎えむ。

（七月十七日佐世保公会堂にて朗読詩）

蓮田善明碑建立趣意書

建立場所・熊本県鹿本郡植木町田原坂

公園内

碑文染筆・斎藤清衛先生

除幕式・昭和三十五年十月十九日

募金要領・一口三百円以上（経費予算
十五万円）

送金先・熊本市大江町熊本商科大学

発起人（順不同）

斎藤清衛、久松潜一、西尾実、中河与一、
保田与重郎、榎方志功、三島由紀夫、池田勉
栗山理一、清水文雄、丸山学、小高根二郎

物への愛着

池沢 茂

幸吉がある期間、ある一定の種類「物」に、だん／＼深く執着してゆくには、あとから考えると、いつも、それらしい原因がある。はじめのころの板ぎれや棒は、ほくの日曜大工から来ているに違いない。カンのたぐいは、最初はたぶん粉乳のカンだけだった。そのころ赤んぼだった妹の梅子に飲ませるための粉乳で、幸吉もとき／＼飲んでいたが、そのうちに、梅子のために用意しているのを引ったくったり、おぜんの上などに置いてあるのを勝手にたべようとして引っこりかえしたり、するようになった。それで、妻も、ほくも、勝手にさわらせないように、たなの上や、みずやのなかなどに、かくすようにした。たぶんこんなことから、幸吉はカン入りの粉乳を、特別に貴重なものと思いはじめた。やがて、中身のなくなったカラのカンだけでも非常に大切なものに見えた。そうして、それらのカンを集め、だれにもさわらせないように取られないよう、自分だけの所有物として保管しだした。それが菓子のカン、お茶のカン、

ジュースのカンなど、カンというカンの収集へと展開していったに違いない。

ビンのはじまりは、ぼくが会社からもらったきたビタミンのビンだったらしい。まずしかったうえに不なれな育児で疲れきっていたぼくと妻は、会社から無料でビタミン剤の配給を受けると、たいへんありがたいことに思っていて、たがいにすゝめあいながら、一個ずつたいせつに服用していた。これが幸吉の目にとまったのだろう。やがて、カンのばあいとおなじ経過をたどって、小型のビンというビンすべてを収集しはじめたが、どのばあいでも、たいていは、ぼくたちが中止させようとする、かえって、一層ひどくなってゆくのが常であった。知らぬまに、かくされたり、取られたり、しないかと気を使って、幸吉はかたときも神経が休まらないのだ。夜も、い／＼かげんに寝かそうとしても、だれかが起きていると、眠ることができない。うとうとしかけても、収集物のふれあうような音がカタッともすると、はねおきて、保管の場所へ駆けつけてゆく。ひるまも、運動のために連れだそうとしたら、一家全部そろって、カギをかけてから出なければならぬ。ひとりでも残っていると、いくら言い聞かせても、るす中に取られはしないかと疑って、どうして

海光

森 亮

数限りない水のしわ、
数限りない光の明滅、
岩にそれが塞かれるところだけが
白いしぶきとなって岩をとりかこむ。
真昼暖かい北の海。
やせた少年が水潜水、
肥った弟がビニールの袋に彼のさざえを
受け取る。

—昭・三四・七・三〇—

島根半島・北浦にて—

満 足

堀ノ内 歴

幼稚園のチビ助が 昂然たる面持で
満艦飾の筐かざり
七夕さまを手に帰ってくる
「おう 出来たな 西瓜もあるなあ」
汗のかおを振向けもしない
今日はこちらぞ と云っているのだ
「この筐 ほかさんといや
僕 大事にしとくねんからなあ」
二階の窓から表へ 彼はそれを
突き出して くくりつける
毎日これからは そうしておくよと云う
「やれやれ これは／＼……」
ピタ／＼ サラ／＼ 晴れやかに
風に鳴りはじめると 筐の枝は
まるで別のものに みえてくる
近くの淀んだドブ川には 毎年今頃
捨て餌の塵芥塚が出来
みるからに 汚ならしいが
こちらには やさ／＼と鳴り止まない
チビの 満足のかお

も外出しようとしな。たま／＼近所の子が遊びにきて座敷へあがると、その子に取られるかと恐れて、玄関のそとへ押し出し、戸をしめ、カギをかけてしまう。ぼくや妻や梅子さえ締め出される時がある。

「いつになったら、やまるのかなあ」

ぼくと妻は、とき／＼、ため息まじりに語りあう。いつかはやまる日がくると思っても、あまりにひどい状態がつまきすぎると、つい、やりきれなくなるのだ。しかし幸吉も、この異常な神経の緊張には、おさない心身がやがて耐えきれなくなってくるのだろう。頂点の期間が二週間から一か月ほど続いたのちに、すこしずつ弱まってゆきながら、ときには三、四か月から半年ほど尾を引いて、ふっと休止する。完全には消滅しなくても、何十という収集物のなかから一つか二つ、せいぜい四つか五つぐらいの品を残して、あとは全部、取られても無くなっても、どうでもいい、ものに変質してゆくのだ。かぞえきれないほどのビンのなかでは、ペンジンのビンだけが残っている。棒ぎれも一、二本ある。カギやクギや輪の形のもの、小さいせいか、わりあい多くて数種類かためている。何百枚となく落書きしたり切り抜いたりした紙きれは、テープルにトラックが乗っているところをマジッ

クインキでかいたのと、黒クマの絵本をまるく切り抜いたのが、三枚ほど残存している。マジッククインキは、カラのビンやカンの一つ二つが、ほこりにまみれている。そして幸吉は、これらの過去の記念物を二つの木箱におさめ、たなの上へあげたま、ほとんど忘れていた。なにかの拍子に思いだしても、ちょっと、さわってみる程度にすぎない。しかしひとつの執着が終わつてゆくときは、つぎの執着がはじまっているときなのだ。

幸吉があらたにテーブルと調理台に執着しだしたとき、ぼくは困って、テーブルは応接間にしまい、調理台は納屋のなかにかくした。するとやはり逆効果になった。これまでで懲りているはずなのに、つい忘れてしまう。

ふつうなら小学校の二年生になっている年齢なのに、幸吉にはまだ、会話がほとんど存在しない。ひとりごとを言うけれど、その単語の数も、ふつうに成育している三才の梅子より、いつのまにか、はるかに少なくなった。「一、二、三、四、……」と数を数え、なんべんも繰り返していると、きげんのないときには、十までも言えるときがある。しかし翌日には、せい／＼三までしか言えない。のどがかわくと、幸吉は『ブウカ』とお茶を要求する。「違う」と注意すると「ブウが欲しいの

んか」と言いなす。「か」が付いているからいかん。「欲しい」と言いなさい」と教えると、しばらく考えこむようにしてから、ためらい、どもりながら、ようやく小さな声で「ブドが欲しい」と言う。しかし二十べん三十べん繰り返しても、やっぱり「ブツか。ブツか欲しいのんか」に逆もどりしてしまふ。どんなばあいでも、たいてい、相手がたずねることばをそのまゝ、「ひとりとごと」のように相手にむかって言っているのだ。こういう幸吉に日常接していると、つい考えが甘くなってくる。どんなに執着している物でも、しばらく隠しておけば、じきに忘れてしまふだろうと思えてくるのだ。ところが幸吉は学園から帰ると、まさききに、テーブルと調理台をさがしまわった。くつをぬぐまもどかしく駆けあがって、いつもの場所から消えているのを見ると、さっと目の色を変え、たちまち泣き顔になって、ぐる／＼家のなかを走りはじめる。応接間に隠しておいたテーブルはじきに見つけたが、納屋にしまひこんだ調理台は、なか／＼見つからない。すると幸吉は、「この調理台のことを「こしかけ!こしかけエ!」と言いながら、ぼくに、妻に、またぼくに、くりかえし、せがみ、突つか、り、すがりついて、だん／＼狂おしくなつてゆく。

テーブルのしたに調理台のはいっている形が、幸吉はどうしても欲しかったのだ。学園では帰るとき、四角い机のしたに、箱のような形のこしかけをすっぽりとおさめ、一方の壁ぎわにきちんと並べないといけない。ほかの子どもには一週間か十日でできたこの行為も、幸吉には、おぼえるのに半年以上もかゝつたけれど、それだけ大切だった知識に違いない。しかたなく納屋から調理台を出してきてやると、幸吉はさっそく、その調理台をうん／＼力みながらかゝえて、テーブルのしたに入れた。学園の机とこしかけに比べると、ずっと大きく、足も長いけれど、とにかく似た形になる。すると幸吉は、まもなく、うそのように興奮がおさまってしまふ。そしてテーブルに、胸を押しつけ、疲れたようすで、頬もじつと押しあてている。それはテーブルではなくて、なにか特別に愛する生きものの、たとえば馬のようであった。

「よく帰ってきてくれた!ようこそ、もどつてくれた!」

テーブルと調理台に、幸吉はそう言っているようだった。やがて、いつものように、おもちゃの大きな木のトラックをテーブルに乗せ、片手だけで、目では見ずに、そのトラックをしずかに行ったり来たりさせながら、頬は

やはり、じつとテーブルに押しあてている。ものやさしく目をうるませ、やすらかに黙りこくって、一時間も二時間も、調理台のはいったテーブルに、寄りかゝっているのだ。

編輯後記

七月三日。東京教育大成田孝昭氏より解題学会編集の「解題」をお送りいただいた。拙誌の交換を希望されてある。回誌に氏は「四季」総目録を連載してある。この種の真面目な学術誌との交換は歓迎するので希望のむきは申し出られた。

七月十日。伊東書簡と年譜原稿を人文書院の渡辺睦久氏に手渡した。諸家の御教示によつて大体完璧を期し得たと思つてゐる。井上靖、三島由岐夫兩氏からの推薦文も届いた。江藤淳氏も書いてくれる由で、その文章がたのしみになる。

七月十四日。安保問題で「身体を張る」といつた主相として前代未聞のヤクザの放言をした岸信介氏は、荒牧と呼ぶヤクザに刺された。これでは毒が毒に刺せられた恰好だ七月二十七日。大朝詩難語評で第五三三所載の吉本青司氏の「白爪草」上村肇氏の「燕の歌」が佳作としてとりあげられた。又、浅野晃氏著、詩集「火船歌」が果樹園叢書として近刊されるので広告する。(〇)

果樹園 第五十五号 (毎月一回一日発行)

昭和三十五年九月一日発行

池田市野町一六八
 編輯者 小高根二郎
 大阪市東住吉区桑津町五の八
 印刷所 元市印刷株式会社
 池田市野町一六八
 発行所 果樹園社
 定価 三十円

果樹園五十六号 昭和三十五年九月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園 第56号

伊東静雄全集上梓記念号

わがひとに與ふる哀歌 小高根二郎
 伊東静雄について 井上靖
 伊東静雄君 三好達治
 伊東静雄全集推薦の辞 三島由紀夫

伊東静雄全集を推す
 中津川 溪谷 江藤 淳
 脚 立 堀口 太平
 猫 緩 堀ノ内 樹
 弛 日 感 懷 堀ノ内 樹
 夏 日 感 懷 堀ノ内 樹
 花 火 美 堂 正 義
 海 と 妹 池 沢 茂

わがひとに與ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄(四十五)

小高根二郎

昭和十三年の三月末、伊東は休養中の頼原先生に、次のやうな書簡を送つてゐる。

「このごろ御健康いかがでいらつしやますか。風邪などだいぶ流行つたやうでございませうが」

昨日は御厚志のこもりました記念の御著いただき大へんうれしく存じました。厚くお礼申し上げます。

先日は又、教科書について特にお言葉いただきましたのに「在来のもので悪いとこ

ろがあれば言つてくれ、悪ければ代へよう」といふ様な主任の意見の上に、自分の先生のものとなると一層力説がたいやうな教員間の空気にて結局お言葉にそむくことになってしまいました。下つばの苦衷お察し下さいまして、お許を願ひたく存じます。

二十七日

伊東静雄

頼原退蔵先生

(昭和十三年二月二十七日堺市北三国ヶ丘より京都(市上京区大膳軍西町三六頼原退蔵宛封書)

この書簡冒頭にある「記念の御著」とは、病気の療養中に弟子達から見舞ひの金品が頼原先生に贈られたので、その返礼のために、先生は自費で山崎宗鑑の「校本犬筑波集」(昭和十三年五月)を上梓して、これを弟子達に

贈られたのである。

又、教科書の新規採用の件も見えてゐるが、これは頼原先生と市川寛氏の共編である「新国語読本」(昭和十二年七月発行、十三)を、



近くの林で……
 左・まきちゃん 右・伊東静雄

伊東が奉職する住吉中学校で採用するやう要請され、伊東が交渉をした結果の断り状である。

当時、住吉中学校の教員の主力は広島文理大系であった。恐らく芥藤清衛博士の編纂にかゝる教科書が採用されてゐたであらう。その教科書は、伊東の友である蓮田善明、清水文雄、栗山理一、池田勉諸氏が実は編纂してゐたことは既述の通りである。思つてみればをかきなことである。

伊東は「コギト」三月号に次の作品を発表してゐる。

早春

野は褐色と淡い紫、

田圃の上の空気はかすかに微温い。

何処から春の鳥は戻る？

つよい目と

単純な魂と いつわたしに来る？

未だ小川は唄ひ出さぬ、

が 流れはときどきチカチカ光る。

それは魚鱗？

なんだかわたしは浮ぶ気がする、

けれど、さて何を享ける？

第二詩集「夏花」

この詩で回想されるのはメーリケの「春」である。来訪した伊東は、私の書架にある「世界文学全集」「近代詩人集」(昭和五年五月、新潮社刊)を抜き取つて、独逸詩篇中から特にメーリケのその一篇を選んで朗読したことが再三ある。メーリケと言へば、伊東は六年半前、「ブラーグへの旅路のモツアルト」に感銘した旨、百合子さん宛書簡に書いてゐた。彼はシュワーベンに隠栖してゐたこの牧師詩人の伝記小説だけでなく、詩もまた愛好してゐたのである。

春

B・メーリケ
生田 春月 訳

この春の丘辺に横はれば
雲はわたしの翼となる、
一羽の鳥が前を飛ぶ。

中津川溪谷

堀口 太平

さいかちにつく、かぶと虫のように、
偈がきた。

人々は、柿の木や、朴の木のしたに、
つていた。

五月のあついで、はれた溪谷の村の、
ひんやりとした花のような葬式だ。

川の音が、はげしくあがってこるところ
までいって、

私たちは、低い石がきに腰をおろした。
茹で玉子が、まだあたたかかった。

石のあいだにさいていた、かたばみの小
さな花を、

黄味のうえにのせてやったら、

祝福の意味を、ぎりぎりにつかんでいた。
麦畑がゆれ、

てっせんの花のような、しおからとんぼ
が、風にのつてきた。

一九六〇・八・二二

脚立

吉本 青司

詩の本は

いちばん高い棚に飾ってある

とても手がとどかない

まるで山の頂きだ

キラキラとかがやく

新雪みたいな本はあるだろうか

詩の本を買うお客がきたら

店のひとは脚立をして取るのだろうか

下の方の棚には小説の本

赤と黒

挽歌

犯人は誰だ などなど

いちばん低い陳列は雑誌のなかま

裸形

拳銃

三文オペラ そして

詩の本はいちばん高い棚に

飾ってある

あゝ、語れ、たつた一つの愛よ、

何処にゐるかを、お前の傍にゐるたいから

！

けれどおまへと風とは棲家がない。

向日葵のやうにわたしの心は開いてゐる、

愛と望みとに、

あこがれつゝ、

ひろがりつゝ、

春よ、おまへは何をねがふ。

いつわたしの心は鎮められる？

IM FRÜHLING

Her lieg' ich auf dem

Frühlingshügel:

Die Wolke wird mein Flügel,

Ein Vogel fliegt mir voraus.

Ach, sag mir, all einzige Liebe,

Wo du bleibst, dass ich bei dir

bliebe!

Doch du und die Lüfte, ihr habt

kein Haus.

Der Sonnenblume gleich mein

Gemüte

offen,

Sehnd,

Sich dehnend

In Lieben und Hoffen.

Frühling, was bist du gewillt?

Wann werd' ich gestillt?

つまり、二聯からなるメーリケの「春」の第一聯を、伊東は精神の奥処で対応してゐるやうである。春の鳥に、メーリケは「たつた一つの愛」を期待してゐるに對し、伊東は「つよい目と単純な魂」を期待してゐる。又、結句に於て、メーリケは一つの愛がもたらす「鎮魂」を期待してゐるに對し、伊東はつよい目と単純な魂が享受しうる、先の粕原先生宛書簡に見えた、下っばとしての「極く凡庸な幸福」を期待してゐるやうである。

この「早春」が発表になった三月に、伊東も同人として参加してゐた「日本浪漫派」が終刊してゐる。伊東は寄合世帯のこの「日本浪漫派」に期待外れを感じてゐたのである。その発展的集団ともいふべき「新日本文化の会」はすでに昨昭和十二年から発足してゐた。佐藤朝山の幻想的な武人の彫刻に、佐藤春夫氏が楽しんで三月月や暁の明星を描き添へた表紙で「新日本」は創刊されてゐた。編輯委員は、林房雄、萩原朔太郎、中河与一、保田與重郎、芳賀檀、藤田徳太郎、浅野晃、佐藤春夫、三好達治諸氏で、やがて、その「

新日本文化の会」に招かれるに相違ないといふ期待が、実は、伊東の「早春」の底に動いてゐるやうである。しかし、その期待も、春の流れにチカチカ光る魚鱗ほどの、仄かなものであったのだらう。

伊東は「コギト」四月号にもひきつゞき「早春」の連作を発表してゐる。

早春

風がそこいらを往つたり来たりする。
すると古い、褐色の、ささくれた孟宗の葉は、
一頻り騒めかうと気負うてみるが、
ひっそり後はつづかない。

犬は毛並に光沢があり、何も覓めてゐない癖に、
草の根かたなど必ず鼻先をもつてゆく。
が忽ちその気紛れが、馬鹿らしく、
あちらの方へ行つて仕舞ふ。

梨？ 桃？ 藪の空地に、それは何の花か、知らない。

早過ぎた儼れな白い花を見て、
ひとはふつと自分のすこして来た歳月に

或る気懸りな思ひが、してくる。

空は一面うそ寒く、陰つてゐるのだが、

猫

福地邦樹

九才の牡猫のミーは死んだ
五日間帰らなかつたので
私達はあきらめたのだ
最後にはつきり見た印象もないままに
誰にも知られずに死んでいった

若いころに二三匹鼠をとつただけで
その後はなんにも仕事はせず
大食漢で喧嘩すきで太い声で恋を歌い
雨が降るとわざと外出したがる癖があつた

近所の鳩を食つたり
金魚をひっくりかえしたり
五才頃まで行状すこぶるよろしくなく
しかし清潔すきで
水も蛇口から直接飲みたがり
きれいな蒲団にねころびたがり

あしびきの山の獵夫にあひにけるかもVの堅
確な計算と暗喩に通ふものを感じる。伊東の
詩が志貴皇子の歌の風韻に通ふといふ意見は
三枝康高氏も「日本浪漫派の運動」で述べて
ゐるから全く同意見である。

伊東は「コギト」五月号に絶作「夕の海」
を発表した。

夕の海

徐かて確実な夕闇と、絶え間なく揺れ動
く、
白い波頭とが、灰色の海面から迫つて来
る。
燈台の頂には、気付かれず緑の光が点さ
れる。

それは長い時間がかかる。目あてのない
、
無益な豫感に似たその光が
闇によって次第に輝かされてゆくまでに
は――。

が、やがて、あまりに規則正しく回転し

大便している時に眺めると

ちよつとばつの悪そうな眼つきをし

生傷の絶え間がなく

いつもいやな顔してヨーチンをぬられ

最近では彼の頭は

切られ与三郎みたいに傷だらけで

耳の先はぼろぼろになり

おまけに幾分充げかけて来て

しかし最後まで彼の茶色と白のぶちは

あたりの猫を圧して

堂々とめだつておつた

一週間たつても十日たつても

ミーはとうとう帰つてこなかつた

死ぬとき姿を見せないという猫の心があ

われだつた

前に死んだ犬のエスは

死ぬ晩にジステンパーの身をひきつづつて

緑先まで鳴き声で挨拶に来て

その翌朝庭隅のごみ捨て場で死んでいた

そのほかに死なした数匹の犬や猫たち

誰れも太陽の在処を気にしない。

ただ、樹々に隠された小道のうへの、水溜りが、

不思議な空気の明るさの鏡。

第二詩集「夏花」

三月に発表した「早春」が晴天なら、この
四月の「早春」は曇天である。これは暗喩の
ない透徹した写真……と見るのが至当だら
う。しかし、その四聯のどの聯をとつてみて
も、暗喩が囁きかけるのを感じさせられる。
つまり、第一聯は気負ひ屋の猛宗竹を諷
し、第二聯は物色好きだが気紛れ屋の犬を皮
肉り、第三聯はお先ッ走りの花を暗喩し、第
四聯は太陽の所在も気にせぬくせして寒い空
模様だけを案じる得手勝手な人心を諷刺して
ゐる。

とまれ、これら「早春」二篇は、早春が醸
成する仄かな期待と、それに相当する不安と
を、心にくいほどよく描写してゐる。その描
写の完璧さと抒情の緻密な計算に於て、蓮田
善明が新生の希望の詩人として讃歎してやま
なかつた志貴皇子の風韻に通ふものがある。
△石激る垂水の上のさ廠の萌え出づる春にな
りにけるかもV、或ひは△鴈鼠は木末求むと

して

海は二晩中横たはらねばならぬだらう。

第二詩集「夏花」

この詩で伊東が対応を求めたのはリルケの
「海のうた」である。さう……私が推理する
ゆゑんは、前月の京大独文学雑誌「カスターニ
エン」に、OSといふ匿名で大山定一氏の「
海のうた」の翻譯が掲載されてゐるからであ
る。大山氏が新聞に書いた「独逸人の日本観
」(昭和十五年九月二七)に關しては、すで
に触れるところがあった。翻譯に際しての日
本人の決断といふことに関し、伊東は格別に
大山氏に要望してゐるほどだからである。恐
らく、伊東は「カスターニエン」のOS訳のリ
ルケの「海のうた」を発見すると、これをイ
ンゼル版で対照吟味しつつ、リルケの古典の
海に立向つたのだ。

海のうた

リルケ
OS訳

太古のまま海をわたつてくる風
夜ふけの沙かせ――

誰もみなもう眠ってしまったてゐる
もし誰かひとり目をさましてゐたとし
たら

きつと彼は自分のうしろに
ながく風の空洞が裾をひくのを見なけれ
ばならぬ

太古のままに海をわたつてくる夜風は
ただ古びた海岸の巖のためにだけ
吹いてくるのだらう
何もない海面を
とほい沖のほうから

月かけのあかるいあの丘で
葉をゆすぶられてゐる無花果の樹は
どんなふうにおまへを感じてゐるだら
うか

LIED VOM MEER

(Capri Piccola Marina)

Urtales Wehn vom Meer,
Meerwind bei Nacht:
du kommst zu keinem her;
wenn einer wacht,
so muss er sehn, wie er
dich übersteht:
urtales Wehn vom Meer,
welches weht

nur wie für U-r-Gestein,
lauter Raum
reissend vom weh herein...

O wie fühlt dich ein
treibender Felgenbaum
oben im Mondschein.

リルケが「海のうた」を取材したのは、この原詩の副題が示す、ナポリ湾南方に浮ぶカプリ島のピコラ海である。伊東が「夕の海」を取材したのは、大阪湾北方の堺港の海である。共に海に對し、リルケは夜、伊東は夕の時刻を選んでゐる。

リルケの、太古の海風が吹き寄せるのは、蒼然たる古語を解しうるカプリ島の原始岩のためである。伊東の、夕闇が徐々にしかも確實に推し寄せるのは、明治十年創建にかゝる五丈一尺の堺港口の燈台のためである。

又、リルケの、目覚めてゐる人にして初めて見得る太古の海風は、海風そのものではなく、その人の背後に裾を曳く「長い風の空洞」である。伊東の、晴天光達十哩と称する燈台に、ソツと点された緑の光をそれと覺らせるのは、たゞ「長い時間」だけなのである。

最後の聯に於て、リルケは海風の孤獨な精

神を測るのに、原始岩を使はずに、丘の上の無花果のそよぎを起用してゐる。その転起法に對し、伊東は孤獨な燈台の光を規則正しく回転し明滅させるために、退屈した黒い海を一晚中横たはらせてゐるのである。

つまり、リルケは、現代の目覚めた一人として、なほ覺知することを得ない、茫々たる太古との懸絶の歎きを抒情してゐるのだが、伊東は「目あてのない無益な予感に似た」先達者の光を、「徐かて確實な夕闇」と云ふ不易と、「絶え間なく揺れ動く海」と云ふ流行に對応させて、時潮の目覚めることの遅さと同時に飽つばさをも歎いてゐるわけである。

この頃私は伊東に伴はれて「夕の海」をさまよつたことがある。堺の目貫を通り、遊廓のあつた龍神通りを抜けると、港にそゞり掘割の堅川が、空よりも速く夜の到来を告げてひたひた……と皺寄せてゐた。この時伊東は詩人に解説者が必要だといふやうに。

「ゲエテのエツケルマン。ヘルデルリンのヴェスベル。詩人なんて解説者が後年解説してやらないと、てんで言動が支離滅裂で、一般には全く理解ができぬ種類の、人間なんです。」

さう……伊東は言ふと、彼自ら三好達治と全く同じ意図で詩を書いてゐながら、三好氏

がてんで同情を示さない事実を、その例証かのやうに附言した。

伊東は堀割の畔を通りつゝ、堺港の復興者であつた古川俵右衛門の二十数年の経営の苦節を、きつと回想してゐたのである。

俵右衛門は江戸の人、材木商であつたらしい。安永の頃堺で木材を買ひ、江戸に送らう

弛 緩

堀ノ内 歴

裏町の家のかどには 必らず
小さな箱うえなどの
風仙花の紅が咲いていた
どれも面倒臭げな咲きようで……
「とに角咲いておりますよ……」か
川端の風致地区ではまた 暗い庭に
夾竹桃が ひそんで咲いていたっけ

でも 花など何うでもいい日日だった

七月からすぐ八月
暑中休暇の終りは 日かすが

としたが、風浪のため廻船まなならず、一端、木材を大阪に曳航し、そこから江戸に廻送した。この堺港の不備を知つた俵右衛門は、後日、私金二万金を携へて再び堺にきた。彼は地理を踏査し、湾形を案じて築港案を得るや官許を求めた。が、案があまりに大規模であつたので、世を欺く絵空事だとして却下

一つずつ ぼろ／＼墜ちる
小学生の背中には 疲れが
汚ない色になつて出ている

今年小型の台風が 次々と生まれ
近附いて来るが どれも
ゆっくり ゆっくり 海上を
たのしみながら 上つている
海原とおい そのとおり径などは
きつちり測れやしないよ ねえ

「横丁の百日紅はまだ咲いてるかな
あのお白い花だ
広場で櫓が組まれてるんだつて
すると地蔵盆だね 宿題は……
みんな出来ちやつたんか 偉い／＼」

一九六〇・八・二三

された。然し、俵右衛門はそれに屈せず、さらに精密な研究の末、成案を得て再三にわたる官許を懇請したが、強訴者として投獄の憂目を見るにいたつた。獄窓にあること十五年。やうやく放免されたが初志を屈せず、さらに十数年の経営の末にやつと官許を得ることができた。彼は新川を開き、吾妻橋、米橋、勇橋を架橋すると、数年にして絵空事とされた大築港工事をやり了せたのであつた。

「詩人には解説者が絶対に必要です。」
さう……つばやく伊東に伴はれて、水族館前の広場から、旅館兼料理屋や、貸席や、潮湯が建ちならんでゐた海辺をさまよつた。それらの店には客がいらしく、門燈のけげはしきにか、はらず、建物は颯々と夕闇の中に大きな図体を沈めてゐた。その建物と建物との間隙から、まだ睡りきらぬ海面が垣間見え、時折、港頭の燈台から夜光虫のやうな緑の光が点滅してゐた。

私共は公園を二と廻りすると、湯を覚えて、公園入口の料理屋が兼業してゐるビヤホールに飛び込んだ。伊東はさもうまさうに眼を細めてコップを乾した。酔ひが廻ると彼は流行歌を唱ひだした。よく覚えてゐるな……と感心するほど歌詞は正確だった。酒は、涙か、溜息か——。にこにこ顔で唱ふのであ

る。そのセンチメンタルな歌詞と凡そ対蹠的なにこに顔。いや、流行歌とは似て似もつかぬ彼の風態がをかしいらしく、エプロン掛けした少女はぶっ！と吹きだしてつた。伊東はまたそれがうれしいらしく、知つてゐるかぎりの流行歌の、総ざらひをおツ始めたのだつた。

今おもへば、この時、伊東は「夕の海」の構想を得たのだらう。OS 訳のリルケの「海のうた」。それに対応し得る堅確な発想が彼の胸に結実したのだらう。その結実を和らげるためと、その結実のこみあげるうれしさから、伊東は思にもつかぬ流行歌を唱つてみせたのに相違ない。

伊東は翌六月の「四季」に次の作品を発表してゐる。

無題

四辺あたりがくらくらくなって来たやうな気がして、
わたし達は、繁木しげきの下を離れた。
空にはしかし未だ、昼の涯あはしなない、
淡いあはいはい藍色が行き渡つてゐた。

花火

美堂正義

道路を隔てたビルの上空に
火花が上り 崩れ落ちるのを見た
昼の光が残る夕ぐれの僅かの明るさのな
か
ふり仰ぐ人もゐないかなたの空に
音もなく消えゆく美しさ
交叉点あひだに自動車は長い列をつくり
人波もそこに跡絶えて
街路樹は秋近い風に葉を揺られてゐる
いま都会は夜の粧ひに忙がしく
ネオンの灯の色もまだ精彩がない
ふとわが前を過ぎる娘の項の白さ
薄明りの空気のなかに墨絵のやうに淡く
この時刻はみな物象を愛しくする
それらの上をまた花火は華やかに開いて
は
燃焼する生命が鮮やかに臉に残しながら
須臾にして虚空に融け入るやうに消え去
つた

おんな、先刻言葉少年に見つけてゐた
あやめの花をも一度、ちらと振返つ
た。

私達は徐かに柵の方へと歩いて行つた。
その弓場ゆばに、ひとりの少年が、
額ひたひを青白ませて最後の礼射をしてゐた。
矢は射られた。

少年はしばらく射放した姿勢のままに、
凝ひたひと、正しい礼儀で立ってゐた。

師の教への尊いかな！

さうわたしは咬つばいて、女の目を見た

と、言ひやうない、孤高な悲しみが

わたしの胸に満ちるまへに、
女をんなの瞳ひとみに

かすかに、水のやうに揺れるのを認
めた。

この詩に現れる女とは、次の百合子さん宛
書簡に現れる村上菊枝さんのことだらう。菊
枝さんは百合子さんの女学校時代の先輩で、
彼女の許に小太郎先生が時々訪ねる由、昭和
十年六月十一日附書簡に見えてゐた。菊枝さ

んは、近く姫路高校を停年退職される小太郎
先生の消息を伝へに、伊東を訪ね、伊東は彼
女を送りがてらに反正天皇御陵から仁徳天皇
御陵の方向にさまよつたのであらう。その途
中に「文芸文化」の栗山理一氏が勤めてゐた
堺中学校がある。その校庭の片隅の弓場に、
放課後の少年が礼射でもしてゐるのをみ
つけ、伊東も菊枝さんも、小太郎先生の人徳を
はからずも想起する……といふのが、この詩
の背景だらう。

「東京においで由、いつか菊枝さんにき
いてゐました。お姉さん方も御転任の由で
、お目出度うございます。姫路のお宅も皆
さんお引越なのですか、それがご一緒で、
い、ですね。わたしもさき頃から、東京に
住みたいと思ひ、心当りの人に、東京の学
校の口をたづねてゐます。ほんとうを云ふ
と、口がきまつてから出かけるやうでは中
々行ける時は来ないのぢやないかと思ひま
すが、係累多いので、思ひ切れずに居るの
です。しかし、近い内に転住出来るやうい
ろいろ骨折りたいと思つてゐます。ゆり子
さんもい、口がお気付でしたら教へて下さ
い。わたしがたのんでゐるのは重に文学者
(文筆業者) なのですから中々あてにな
らないのです。東京に行きたいこの気持は

夏日感懐

田中克巳

うろろ歩き廻ることをよさう。むか
し僕は植物が好きで、紅いルコウ草を植
ゑた。裁判所の前など大阪に多い夾竹桃
は好きでなかつたが、総体に草木は好き
だつた。その後、犬猫を好いたが、これ
は倚つて来るからで、自分の方で追つか
けるのはいやだつた。もう年寄つたの
で、動作が鈍くなり、うっかりするどけ
がをする。僕は草木のやうに人を待つこ
とにしよう。さう思つて夏中、家にゐ
た。訪ねる人は少なくなつたが、草木のカ
ードはだいができた。漢詩にあらはれた
草木で、みな漢字だが、日本語では何と
いふか。日本になければ学名を何とい
ひ、むかしは中国人にはどんな感じを与
へたか。だいたいのところはいへさうに
なつた。いつて何になるか。それはもう
考へない。

、面倒で一寸簡単には筆ではかけません。
弟は昨日アングストといふ独逸人と一緒
に、支那に出かけました。黄浦江といふ映
画をとるためださうで、軍艦にねとまりし
て三ヶ月ほど向ふにゐると云つてゐました
。東京で公開したら見に行つてやつて下さ
い。

子供は大きくなりました。毎日早く学校
から返つて近所の林のところ言つて、木
のほりの真似や、ブランコやマ、ゴトをし
て一緒に遊びます。又私の定期バスで一
緒に用もないのに電車にのつて往復します。
時々は大和川と云つて大きな川のふちまで
出かけて石を投げます。子供は物をなげる
のがすきです。

詩も出来ます、おちついて書けるやうに
なつてゐます。時々「新日本」といふ雑誌
ものぞいて下さい。こんど私はあの会員に
なりましたから。

このごろは毎晩のやうに、夜おそく、何
千といふ兵士や馬が私の家の下の街路を出
征して行きます。わたし達はそれを見送つ
て、何とも云へない気持になります。道に
立つてゐて、行進する兵士にラムネや氷水
を接待すると彼らはあるきながらそれをの
むのです。出征する馬をみるのはことに哀

れなものです。心がないのですから。

二十二日

伊東静雄

ゆり子様

(昭和十三年六月二十二日。堺市北三国ヶ丘町四のより東(京市鶴町区元岡町)の四九元岡コトノ酒井ゆり子宛封書)
この書簡によると、停年退職された小太郎先生は、故郷の諫早へでなく、ゆり子さんがゐる東京に引揚げる準備をしてをられる。「東京に行きたいこの気持は、面倒で一寸簡単には筆で書けません」と言っている理由の一つに、既述した三好達治氏の無理解を、上京によって打破しよう……という願ひもあつたと見られるやうである。即ち、既述した「新日本」の編輯者、佐藤春夫・林房雄・中河與一・保田與重郎・芳賀檀・浅野晃・藤田徳太郎氏等に三好が加はつてをり、伊東が今度「新日本文化の会」の会員に列したことによつて、無理解を打破し知己を得る絶好なチャンスに恵れたわけだからだ。

彼は就職先を文学者(文筆業者)に依頼したと言つてゐる。文筆業者と括弧書きを附けてゐるわけは、彼は売文渡世をする文筆業者と真の意味の文学者とを、心の中で厳密に区分してゐたからである。売文渡世をする者。必ずしも、文学者とは限らない。これは彼の終生変らぬ志操であつた。

彼は学校が退けると近所の林でまきちゃん

と遊ぶことを日課にしてゐる。松の茂みの下に人形を大事さうに抱いてゐるまきちゃんを、浴衣の裾をまくつて毛脛を出した伊東が、「おいで……おいで……」をしている巻頭写真。それは映画「黄浦口」の撮影から取つてきた弟寿恵男君が撮したスナップである。木樂り。プランコ。マ、ゴト。人形を抱いて離さぬいたいけな彼女と遊ぶことによつて伊東は上京によつて詩業を展開する……といふはやる気持を、なだめ、或ひは紛らしてゐたのであらう。毎夜近くの金岡隊から死地に進発する数千の兵・馬。憂! 憂! と鳴る軍靴と蹄鉄のどよめきは、いやがうへにも彼の決意を夜毎に迫つてゐたからである。

又、彼は時に通勤定期乗車券を利用して浅香山に出て、まきちゃんを大和川の堤防で遊ばせたのである。はやる気持を川の水と共に流し、浮びでる金星に彼の覚悟と矜持を確かめたのだ。「コギト」七月号に発表した次の詩は、その情景と伊東の心情を如実に物語つてゐる。

金星

河原にちらばる しろい稜石かどいしをながめる
人の 目のやうに

陽のすべりおちた 夕べの空はいつまでも明るく わたしを眺め入る
そのあかるさの河床かはどに 大川のあさい水は無心に蜘蛛手かばてにながれ
樹々はとり囲む垣に似てつらなり とほく退いて 自ら暗くなつた
ひとり金星が 樹々の影絵のはるかうへに
ゆらゆらと光りゆれながら わたしを時問のうちへと目覚めさす
第二詩集「夏花」

この主題の「金星」と言へば、その歴史は古かつた。若い日、安代さん宛書簡(昭和二年三)に「八哲を浅み建礼門の上に出し明星いまだ光放たず」と書き送つたことがあつた。紫宸殿正面の外門である建礼門。その上に光を放たうとする宵の明星は、若い日の伊東の希望の象徴だつたのだ。

この象徴も伊東の終生変ることがなかつた。昭和二十一年、伊東は「光耀」と一緒にやつてゐた富士正晴、林富士馬、島尾敏雄、庄野潤三諸氏と道頓堀は松竹座前のコンプレ

で酒を呑んだことがあつたが、伊東は酔ひにまぎれてマダムに向つて叫んでゐる。
「君、僕は日本の金星だ。こゝにゐる若い友人たちもみな金星だ。マダム、この人たちを大切にして下さい。」(「私国」昭和廿八年七月号、庄野潤三「反響」のこ) まきちゃんを大和川堤防に連れだし

た伊東は、彼女が河原の稜石を拾つては投げ、拾つては投げする無心の動作に気を配りながら、同時に、蜘蛛手になつて流れる大和川と、堤防の背後に影絵となつて佇む疎林と、それらの総てを蔽つてゐる夕空に、注意を怠つてゐない。普通なら、まきちゃんの投石を止めさせて飯宅を促す時刻である。伊東

はまだ何かを待つてゐる。それは昂すべだ。夕空の一番栗りの金星だ。その揺れ定まつた光耀を確めてから、「さア……、まアちゃん。販りまシヨ。」と、愛児の手を曳いた伊東が浮び上る。
ちなみに、伊東はこの七月「金星」と共に

海

浅野 晃

ある日、汽車にのつてゐた
わたしと、小学二年生の長男と——
汽車はトンネルばかりの山あひを走つてゐた

急に海岸へ出た

「海だよ」

「どら」

子供はすぐに半身をのり出した

密雲のたれこめた下で

海は不機嫌に荒れ狂つてゐる

子供はじつと見てゐる

「ひどい浪だね」

「うむ」

「冷たいだらうね」

「冷たいな」
「船なんか沈むだらう」
「どうか」
「沈んだら助からないね」
「さうかも知れん」
「呼んだつて聞えないものね」
「うむ」
わたしは子供の間に答へながらいつか自分で自分に言つて聞かせてゐた海よ、おまへは自他を傷つけてゐる
他をも己れをも陥れてゐる
みづからを慮げ、みづからを拒んでゐる
みづからを叩きつけ、粉碎してゐる
おまへは、さうやつて、自分を見失ふ、他のすべてのものとともに

しかも再びおまへが見出すのは、おまへみづからなのだ
みづからを再びみづからの前に、おまへは

掲げるのだ
じつと見てゐる子供の眼に、おまへはその姿をやきつける
子供はもう一語をも発しない
食ひつくやうに見てゐる
とつぜん
むしやうに切ないものが胸をつき上げて来た

わたしは大声で叫んだ
こころの底の底で——
「坊や
おまへも海なんだ
おれも、おまへも、海なんだ
いいか、海なんだぞ
だから、だから——
大きくなれ、たくましくなれ
そして生きるんだ
いいか、生きるんだ」

「稲妻」——肥前の思ひ出——を「文芸文化」創刊号に発表した。肥前と一葦帯水の肥後に成育した蓮田善明。彼の主宰する国文雑誌に結縁した事情と「稲妻」の解説は、すでに「蓮田善明とその死」(一)に詳述したので、これを省略する。

夜の葦

いちばん早い星が 空にかがやき出す利
それは どんなふうだらう
それを 誰れが どこで 見てゐたのだらう

とほい湿地のほうから 闇のなかをとほ
って 葦の葉すれの音がきこえてくる
そして いまわしが仰ぎ見るのは揺れ
さだまった星の宿りだ

最初の星がかがやき出す利那を 見守つてゐたひとは
いつのまにか地を覆うた 六月の夜の闇
の余りの深さに 驚いて
あたりを透かし 見まはしたことからう

この軒島とした伊東の心姿は、「夜の葦」と同時に「コギト」八月号に発表された、田中氏の次の詩をもつても偲ぶことができる。

虹 霓

田中克己

桑原武夫・富士正晴・小高根二郎 共編

伊東静雄全集 全二巻

藤村・朔太郎に継ぐ日本現代詩の正統。その詩精神は古今和歌集の譬喩に発し、独逸詩人ケストナー、リルケに対応を求めつつ、和漢朗詠集を経てこれを超越し、現代詩として初めて西欧の詩歌に一步も譲ることのない高峰を形成した。

【詩集】 既刊詩集の萌芽をなした未刊

童話「山科の馬場」名品「今年の夏」

「子鼠の俳諧」伊東の詩精神を

解明する「談話のかはりに」等

【書簡】 「わがひふる歌」のわがひとを解

明する書簡を含む三六六通

【日記】 未発表の日記

★菊版上製函入 ★660頁★豫価2000円位

十一月一
上 発

京都市(中央区内) 仏光寺通高倉西
人文書院

振替京都二〇二番

そして あの真暗な湿地の葦は その時
きつと人の耳へと
とほく鳴りはじめたのだ

第二詩集「夏花」

この詩が取材されたのは、明らかに、家のすぐ近くにある反正天皇御陵をとりめぐる隠沼である。家を出て西側の径を通れば、岸近いほど葦が茂つてゐて、水面からも放恣に葉叢が突き出てゐた。その葉叢と葉叢の中にぞく淀んだ水面に、いもりが水底から浮び上つてきて赤腹を翻して再び沈んでいつたし、メタン瓦斯はさかんに臭いアブクを吹き上げてゐた。伊東はその畔にかぐみこむと、大和川堤防に佇んだ時のやうに、金星が輝きやきたす利那を待つたのだらう。金星。宵明星。太白星。昂。夕づつ。六連星……。これらのさまさまな愛称を思ひつき語り継いだ人間。その光芒を最初に発見した劫初の人の歌壇な驚ろきに伊東は回版してゐるのである。西空にみなぎりわたる夕映。荘厳なたゆたふ光耀の均衡。その均衡を破って一番初めにきらめきだす光芒、金星……。彼は畏怖のあまり、伊東のやうに葦間にしやがみこむと、葉叢をすかして恐る恐る光度を増す金星を見守つただらう。いつの間にかあたりを埋めつくしてゐる

る六月の闇。彼は改めて闇の深さに四面を見廻したことであらう。その時、彼の耳へと鳴つた葦の言葉はなんであつたか伊東は歌つてゐない。が、それは詩の外で、「お前が金星の発見者なのだ。お前以前には誰もその光芒をみつけた者はなかつたのだ」といふ言葉を暗示してゐる。

この劫初の人に対し、伊東が仰ぎ見たのは、揺れさだまった星の宿り、つまり、六連星だつたのだ。鴨外。藤村。春夫。朔太郎。賢治。中也。或ひは末尾の二人のうちの誰かに、静雄自らを換置してゐたかもしれない。「僕は日本の金星だ」といふ後年の傲然たる自負は、すでにこの日に持つてゐたといふのが事実であらう。

私は先に「夕の海」の解説で、その作品をリルケの「海のうた」に对照したが、「海のうた」に真の意味で対応してゐるのは、この「夜の葦」の方かもしれない。リルケは現代の目覚めた一人として、太古の海風と原始岩との間の相聞を、無花果の葉のそよぎを介して知らうとしたが、伊東は、金星を初めて発見した太古人と、その光芒のすでに揺れ定まった六連星を凝視してゐる彼との間の相聞を、葦のそよぎを介してしてゐるからである。全く同じ発想といふべきである。

暑き日なりき

大寺の三重塔の風鐸も

そよろ動かぬひるさがり

門前の茶屋に 日向に腰かけて

彼はゐたりき

手にせる盃よりは虹立てり

その吐く息のうつくしき――

まことなり すじかひの古道具屋の

光琳にまがふ花鳥の屏風さへ

その色褪せて見ゆるほど

泉州堺の町と伊東静雄との記念に

この詩は、田中氏が第一学期で浪速中学の教職を擲つて上京する時の別れの歌である。

伊東静雄について

井上 靖

伊東静雄氏は光芒の尾を長くひらめかせ、忽ちにして消えた一つの星である。だれも氏の詩業に近寄ることもできなければ、真似ることもできない。それほど氏は独自であつた。しかも氏の仕事は日本の詩の伝統の中にヨーロッパ風の近代詩精神を打ち建てることであつた。氏はみごとにそれを為しとげたと言へる。「夏花」「春のいそぎ」「反響」等の詩集はいずれも、日本の現代詩の中に不

滅の光を放つもので、既に古典としての価値を持つてゐる。

伊東静雄の詩業はいかに高く評価しても、評価しすぎるといふことはあるまい。今日、詩に志す者は伊東静雄のところから出発しなければならず、しかもまた結局はそこへ帰って行かなければならぬであらう。

伊東静雄全集の上梓を心から悦ぶものである。

伊東静雄君

三好 達 治

「四季派」というやうな言葉が、いつ頃からか詩壇に通用するやうになつた。後年さういふ名称が生れようなどと、私もは思つてみたこともなかつた。あの雑誌「四季」の間は、いつかうまとまりもなかつたし、仕事つぶりに野心的な趣きもなかつた。しごくのんびりとしてゐた記憶だけが残つてゐる。けれども「四季派」といふ言葉が生れてみると、それにも理由があるやうに思へる。理由といふのは、簡略に説明しにくい、その中心に、最も明確な存在として、伊東静雄君を置いてみると、輪廓がややはっきりとするだらう。伊東自身が、詩人としての位置をそん

な風に明確に把持してゐたこと、その輝きが歳月の経過とともにいよいよはつきりとしてきたこと、そのことに今日からいってまなほ未來的な意義を少からず持ちつづけてゐること、すべてが伊東静雄一家の成果であつたけれども、それが「四季派」の引立夜のやうな意味をも同時に擔つてゐるのを私は覚える。生前彼の仕事つぶりの抑止的であつた真価が、後年いよいよ発揚されてゆく姿を私は再三思ひ思ひ眺めてゐる。

伊東静雄全集推薦の辞

三島由紀夫

日本の近代詩人のなかで、伊東静雄氏は私のもっとも敬愛する詩人であり、客観的に見ても、一流中の一流だと思ふ。その煮えたぎって煮つまつた抒情の底から、一粒一粒宝石をひろひ出すやうな作業は、おそろしいほど自虐的な苦業だつたと思はれるが、作品の上には完全な悲痛の静謐だけが現はれてゐる。伊東静雄氏の詩は私の青春の師であつた。氏は浪漫派に属してゐるやうに言はれてゐるが、その一面をゲエテ的な明朗な古典精神が支へてゐるのである。

伊東静雄全集を推す

江藤 淳

伊東静雄の名は、私の少年の日の渴仰の的であつた。狼狽を極めた戦後の生活のなかで、私は幾冊もの詩集を次々と手離さねばならなかつたが、この未知の詩人の「反響」だけは持ちつづけていた。そこには、敗戦と同時に砕け散つてしまつた白刃のやうな「美」があり、私はその「美」によつてわずかに空息をまぬがれていたのである。一度だけ詩人に呈した手紙に、令息からの計報の返書をいただいたばかりには、私は詩人と何の交渉をも持ちえなかつた。しかし、今、その全集の編まれるというときに、一文を草して渴仰の詩人の業績をたたえる機会をあたえられたのは、どういうめぐりあわせであらうか、乞う、読者よ、ここに集められた珠玉の詩篇を窓を清くして読まれよ。そこに秘められてゐるのは、喪われた日本の美である。

兄と妹

池沢 茂

梅子は三つをすぎると、ぼつ／＼絵本をせ

るからだ。そのかわり、公休日と、泊まりあけて早帰りの日には、すくなくとも半日間、梅子はほくに付きまといつてゐる。ことに晩はまだおさないせいもある、いっしよに寝てやらなければ眠れない。そのあいだに妻は食事のあとかたづけをすませる。それから、雨が降つていても、きまつて洗たくをする。ほかが会社の宿直室からダニなどの害虫を持つて帰つたというので、殺虫剤を散布するだけでは足りず、ねまき、はだ着、敷き布など、しきりに洗いきよめようとするのだ。公休日と泊まりあけにふろを立てるので、その残り湯を利用するためもある。

ところが幸吉は、妻が起きてゐると、どうしても寝ようとしな。梅子のほうはほくと絵本など読みあつてゐるうちに、やがて眠つてしまうのが常だが、幸吉は、ほくがいくら呼んでも、なか／＼こない。しばらく来て、うと／＼とねむそうになりかけても、じきに起きて、またお勝手へ出てゆく。食事はもちろん学園の送り迎えも妻の手にかゝりきつてゐるので「お母さん子」になつてゐるせいもある。それに本当は、それだけではなかつた。お勝手にはテーブル、こしかけ、調理台、折りたゝみの台はしこなどが積みかさねられ、ひもで嚴重に結びあわされている。そ

のうえに木の箱がのせられ、キハツ油のビンをはじめ、折れくぎやネジ、とめがね、こわれた時計、マジックインキの古ビン、クリムムの容器、いろんなふた、とめビンや安全ピン、落書きした紙きれなど、えたいの知れないガラクタが、いっぱい詰めこんである。これらの大きな家財道具も、やつと見えるほどの小さな鉄くずも、みんな、幸吉がなによりも大切に保管してゐる。「たからもの」なのだ。そのために幸吉は、お勝手や、そこから続いているふろ場などに、だれか人のいる気配があると、さわられはすまいか、取られはすまいかと気をつかつて、ひとり、いらだつてくる。いくらねむくても、よほどのときでないかぎり眠ることができない。洗たくの早くすむ晩はい、お勝手のあたりにだれもいなくなり妻が添い寝をしてやると、幸吉は安心して、まもなく寝入つてしまふ。ところが妻の洗たくは、たいてい、なか／＼すまない。ねまき、はだ着、敷き布など、ふろのたびに洗うとなれば、四人家族でも、相当な量になる。ほくは自分のはだ着だけは洗うことにしたが、はだ着以外の衣服に、かえつて手間がかゝる。そこへ毛布などの大きなものが入りこむと、夜半の一時をすぎ、ときには二時にもなる。

がみだした。簡単な筋なら大体はおぼえて、絵を見ながら自分から、さかんに発言する。「金太郎」「桃太郎」などは、むしろ兄の幸吉にあてがうつもりだったが、梅子が取つてしまふ。幸吉は筋など全然おぼえず、じきに見向きもしくなるのだから、しかたがない。どうやら興味を示したのは「乗り物」のなかの汽車と電車「金太郎」のなかのクマぐらいだつた。こんな幸吉を置き去りにして「こぶとりじいさん」「花咲かじいさん」「一寸法師」「鉢かつぎ姫」と、梅子はずん／＼進んでゆく。べつに早いわけではない。おなじ年ごろの女の子たちと遊んでゐると、むしろおどろかしているのが目立つ。それでも幸吉のそばに置けば、まず／＼正常らしいというだけの成育が、目ざましい進歩に見える。

ほくや妻が、ほめたり、すゝめたりしたので、梅子は絵本を見るのが、だん／＼得意になつた。ひところは、よる寝るとき、きまつて、どれかの絵本を持ってきて「読んで。読んで」なとせがんだ。「あたしが読んだけるわね」といばつて言うときもある。

もつとも、こういう晩は、ほくには、ほく一日おきにしかない。一週間のうち、二日は会社泊まり、あと二日も、たいてい夜がふけて、梅子がもう眠つてゐるときに帰つてく

ほくの勤めは一体に、晩がおそいかわりに朝もおそい。家でも自然、ふつうの家庭に比べると、朝も晩も、一時間から三時間ぐらゐずれている。しかし幸吉には学園がある。それに梅子が、寝付きがよいかわりに、朝早く目をさまして大きな声をあげ、妻とともに幸吉も、ねかしておかない。

「幸吉の睡眠時間は標準よりも、だいぶ短いよやなあ。頭を使うことがすくないから、眠るのんも、すくなくして済むのやろか。それにしても九時、おそくとも十時には寝てくれんと、体も弱つてくるし、頭のためにも、よくないやろなあ」とほくは言わずにいられない。おそくまで幸吉が起きてゐると、ほくも気が落ちつかず、いら／＼してくる。

「よるの洗たくはやめようかしら。九時や十時に済めばいいんやけど……」と妻も、いらだつたり、沈みこんだりする。

しかし洗たくは、電気洗たく器を使つても、湯と水とでは、効果も手間もずいぶん違う。残り湯を翌日まで持ち越せば、さめてしまふし、木製の湯がねはいたむに違いない。ふつうの家庭より朝がおそいし、スクールバスの停留所まで幸吉を送つていたりせねばならないから、夜のあいだに洗たくをすませ、すぐ干せるようにしておかないと、晩ま

はに乾かないものも出てくる。回数を減らしたら、ダニなんか繁殖して、ことに子供たちは、かゆくて安眠できない。そうして結局、夜なかの洗たくは、やめるわけにいかないことになる。

とうとうぼくは、幸吉の手を引っぱって、ぼくの横に、連れてきて寝させた。もう一方のわがには、梅子が寝ている。あおむけに寝かせても、絵本を持ちあげ、枕もとのスタンドで照らすと、よく見える。

「幸ちゃん、これ見てみ。大きなカメラさんやなあ。海のなかから、のこ／＼上がってきたんや。水のなかにはっかりおたら、つめたいうってなあ。いっぺんぬくいところで、幸ちゃんも梅子ちゃんと、遊ぼうと思うたんやろ。ところが悪い子があつた。カメさんを棒でた、いたり、ひもでく、つて引っぱつたりしよつた。そら幸ちゃん、見てみ。この子は棒でた、いとるやろ。この子はひもを引っぱつてるやろ」

ぼくはできるだけ幸吉に話しかける。なるべく早く寝かせたいつもりだが、できるならば幸吉にも、絵本に興味をいだかせ、知能を芽生えさせたいと思っている。ところが幸吉は、最初に、ひと目だけ、ちらと絵本を見たにすぎない。「そんなおもしろくもない、む

ずかしい話、ごめんや」と言うように、じきに体をちぢめ、横向きになって、ぼくのわきの下や横腹に、顔を押しつけてくる。甘えか、って鼻を鳴らしたり、くっ／＼と含み笑いをもらしたりして、赤んぼみたい、たよりなく、たわいがない。

「はよう読んでえな。つぎは浦島太郎がカメさんの背に乗って行くんや。そしたら、リユググジョウがあつて、きれいなおヒメさまがいてたんや。はよう、めくりいな」

梅子がもう一方のわがから、金切り声で、さいそくする。ぼく／＼ねむくなるころだから、だん／＼機嫌がわるくなり、だ／＼がつつてくる。ぼくはあわててページをめくる。すると幸吉は、そのわずかのすきに、ぱっと起きて、お勝手へ駆けだしてゆく。それから洗い場を足場にして、テールやイスなど積み重ねたうへへ、よじのぼる。天井に頭がつきそうなほど高いところだ。妻がふろ場で洗たくをしているあいだ、自分の「たからも」のテールやイス、ガラクタを入れた箱など守るように、その高いところに腰をおろして、じっと待ちつゞけようとするのだ。

★ ★ ★

編輯後記

八月八日、京都先斗町「いはを」で伊東静雄全集の最後の編集会議を桑原武夫・富士正晴両氏と共に催した。蒐集した限りの作品・書簡・日記は勿論………記録の類にいたるまで一応収録することになった。いま三人だけの好みで、これを整理撰すことには、あまりに憚りであり、総ては後世に委ねらるべきだ………といふ結論になつたからである。田中光子宛書簡十七通、敵録ともいふべき日記も追加された。これで見えない人間、伊東静雄の像が読者の前に照現するだらう。井上靖・三島由紀夫・三好達治・江藤淳諸氏の推薦文に感謝申し上げる。

八月二十一日、ソ聯の宇宙船から実験犬ストレルカ・ペルカの地上回収に成功した。この事実を、戦争の可能性が成ひは戦争の終焉にとるかは各人各様であらう。が、僕が終焉と解釈してゐるのは樂觀的にすぎるだらうか？なせなら国境でさへも無意味とする時代がすでに到来してゐるからである。国境はやがて武器ではなく言語であるといふ時代が来るだらう。

果樹園 第五十六号 (毎月一回一日発行)
昭和三十五年十月一日発行

編輯者 池田野町一六八
大坂市東住吉区桑津町五の八
発行所 小高根 二郎
印刷所 元市印刷株式会社
池田野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第57号

わがひとに與ふる哀歌 小高根 二郎
火 事 浅野 晃
恋 歌 森 亮
ナルキッソス 福地 邦樹

夜 明 駅 上村 肇
葉 ず れ 芳野 清
ある 表情 池 沢 茂
精霊のとき 堀ノ内 歴
須 磨 琴 吉本 青司
編輯後記

わがひとに與ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄(四十六)

小高根 二郎

田中克己氏の東京の動機は、伊東とは同じく東京の無理解を打破するためであつたやうだ。即ち、三年前日本浪漫派が創刊された時にも彼は同人に招かれなかつた。役人と教師は入れんといふ保田氏の方針だと、彼は伊東から伝へ聞いた。ところがふたを開けると当の教師である伊東が同人に参加してゐた。三枝康高著「日本浪漫派の運動」では田中を同人の一人に加へてゐるが誤謬である。その「日本浪漫派」はすでに解体に類してをり、田中はすでに「四季」同人としての地歩を占め

てゐたが、眼には見えぬが東京人種が醸成する一種の煙幕を上京によつて打ち開く衝動に駆られたからであらう。「僕は保田の一言(伊東から聞いたので詩人の創作だつたかもしれない)に発憤して、教師をやめて東京に出て来た。皆その勇ましさをほめてくれた。」(昭和三十三年「パール」八月号所載)と、後年田中氏は述懐してゐるが、職の目当てがあるわけでない彼の決意は、悲壯であつたに相違ない。

既述したやうに「新日本文化の会」の会員に迎へられてゐた伊東も上京の悲願を秘めてゐた。伊東にすれば、してやられた……といふ先越されたくやしさを胸に秘めてゐた筈である。その伊東が、光琳の屏風を色褪めさすほどに軒昂として田中氏の眼に映つたのは、田中氏の胸裡に潜んでゐた上京による生活の

不安と期待のこんぐらがつた心境から……といふより、伊東の「金星としての確乎たる自負から……だつたらう。堺の大寺神社の名物ぼた餅屋で別れのビールを酌み交した二人は、それから堺高砂町に安西冬衛氏を始めて訪れた。同じ堺に住みながら伊東が安西氏を訪ねたのは、前にも後にもこの一回限りである。多分、大阪に袂別する田中氏の発意だつたのだらう。

この頃、伊東は次のやうな書簡を細原先生に送つてゐる。

「府中村からのお葉書拝見して、一度そちらにお会いに行きたくなりました。中学校は勤労奉仕が度々あつて、一寸旅行も思ひ立てない状況です。それでも七月の末からこの月の始めにかけて高野山に行きました。文芸文化といふ雑誌の主催で、久松・垣内・斎藤(註・久松潜一・垣内松三・斎藤清衛)の諸氏が講習をなされたので、大へん誘はれて行きました。自分が勉強してゐませんのでエトランゼを感じました。それでもこのころは新花摘(註・蘇村の亡母追善句文集)をよんでゐます。先生の全集(註・有朋堂刊)と、春陽堂の小さい本でよんでゐるので、一度は、一生の中、あんなふうのもの

を書いてみたいものだかと考へてをります
(阿々)、コギトの連中ではこのころ涼袋
(註・建部綾足の俳号) がはやつてゐます。そ
の日記をコギトから出版すること、先生の
御原稿を、せしめること、など空想話して
りました。新日本といふ雑誌にのる佐藤春
夫氏の打出の小槌もたのしみにしてよんで
をります。

何だか自分のことばかり書きました。大
阪はやつと昨日から雨が上り、陽がさすの
で喜んでゐますと、その照り工合が何だか
秋めいてゐまして今年夏は夏なかつたやう
な、後悔めいた一種のさびしさを感じま
す。

先生の御健康を祈ります。

八月七日

伊東静雄拜

須原退蔵先生

(昭和十三年八月七日堺市北三国ヶ丘町四〇より京都府
与謝郡府中村富岡方須原退蔵宛(封書))

須原先生が天橋立対岸の府中に避暑してを
られるのは、宝暦四年から七年迄の蕨村の興
謝時代の資料を探すためだつたのだらう。恐
らく、遊びにこないかといふ案内が先生から
来て、これはその返事であらう。

伊東は府中には行かなかつたが、七月二十
八日から三十一日迄の四日間、高野山大師教
会で催された「文芸文化」主催の日本文学講

筈に参加したのである。蓮田善明が講筈万端
を主宰したことは「蓮田善明とその死」(5)で
詳述した通りである。東大教授久松潜一博士
は宣長の「もののはれ」に象徴される文学
精神と「古道」に象徴される民族精神・国家
精神との分離と統合のいきさつを講演した。
東京文理大教授垣内松三氏は漱石の間隔論。
斎藤清衛博士は宗祇から利休を經過して芭蕉
に至る風雅の歷程を論述した。伊東をこれら
学匠の講話にエトランゼを感じてゐるのは、
自分の不勉強のせゐにしてゐるが、実は評論
家と実作者の懸隔が、さう……感じさせたの
である。

伊東は須原先生編の「蕨村全集」で「新花
摘」を読んでゐる。伊東はこゝに蕨村の骨董
趣味侮蔑論や、狐狸にちなんだ怪奇談や、其
角の弟子との交友録に配した日記風に配置さ
れた句を読んで、他日このやうな詩文集を書
いてみたいと言つてゐる。

又、当時コギトの同人間の一部で流行した
俳人としての建部綾足——涼袋——について
触れてゐる。俳人、歌人、作家、国学者、画
家を兼ねた六面八臂の才人。真淵流の国学の
影響を受けた綾足は、俳史的にはまことに逆
行論ではあるが、「片歌論」の唱導者であつ
た。つまり、句の体は俳諧に則つとるが、そ

鼓峯を死守する日本軍第十九師団とソ聯狙撃
二個師団との間に一ヶ月米死闘が繰返されて
ゐた。張鼓峯はソ聯重爆機の爆撃を受け、た
めに山容を改めたほど圧倒的な重圧を蒙つて
ゐたのである。言はゞ、近代主義の攻勢によ
る肉弾的復古主義の廃滅の兆は、すでにこゝ
に現れてゐた筈であつた。六月初旬、長期抗
戦を決意して蒋介石が重慶に逃避してから、
伸びるだけ伸び切つた日本軍の進攻路線……

火 事

浅野 晃

よんべ火事があつた
ひどい海からの風のなかで
火は思ふさま燃え狂つたらしい
原因はつけ火ださうな
けさ焼跡を通つてみた
焼けのこつた家屋のかけに
子供らがうづくまつてゐた
きゆうにひろびろとした焼跡の感じは
心を放たせる何物かである
空まで澄んで近々と見える

いかなれば

日光までが奇妙にあたらしい
あけ方の月は
どんなにか冷たく照つたことだらう
けれどももうここまで来ると
火事があつたことを語る何物もない
兄弟は平気な顔して歩いてゐる
元氣な顔のもし不景氣な顔のもし
重荷をしょつてよろめきすむ老婆のう
しろから
口笛をふいた若者が追いぬいてゆく
木にはさかんなみどりの若葉をつけ
日光はいつぱいふり注ぎ
地はそれをうまさうに飲んでゐる
ここまで来ればもう何事もなかつたのだ

果樹園叢書

二八〇円

詩集 火焰 歌

浅野 晃 著

イズムといふ一切の拘束と呪縛を棄却し
た著者の詩境は、当今無比の豁達さと平
明さとを誇つてゐる。濾過に濾過を経た
詩語は何等の新奇なてらひも弄せず、
しかも宇宙の理、人生と哀しみ喜びを盡
し得て妙である。まこと、達人の境界を
極めたと言ふべきであらう。

(目次) 吊橋の歌、国道の歌、朝の河の歌、落日の
河の歌、夏の讃歌、終着駅の歌、一本の道の歌、友
だちの歌、内面の歌、チエロによる歌、ある不時
着の歌、火焰歌、楳子の歌、南瓜の歌、ななかまど
の歌、地に平安の歌、はまなすの歌、船の歌、あつ
らへむきの天気の歌、くちはなの歌。

果樹園社

の心は古事記の片歌を基にするといふ、あま
りにも復古論的な復古論だつた。言はゞ、か
ゝる復古論が当時の時潮であつたのである。
この須原先生宛書簡が出された八月七日
は、終熄に近附いてはゐるが、ソ満国境の張

いかなれば今年の盛夏のかがやきのうち
にありて、

なほきみが魂にこそ夏の日のひかりの
み鮮やかなる。

夏をうたはんとては殊更に晩夏の朝かけ
とゆふべの木末をえらぶかの蝸の哀音
を、

いかなればかくもきみが歌はひびかする
。
いかなれば葉広き夏の蔓草のはなを愛し
て曾てそをきみの時かざる。

曾て飾らざる水中花と養はざる金魚をき
みの愛するはいかに。
第二詩集「夏花」

言はゞ、自問自答の詩である。いや、伊東
はこの問ひの答へを、読者に要求してゐるの
である。

第一聯は、今年の夏よりなぜか光あざやか
に感じられる去年の夏。第二聯は、近く夏の
象徴として朝夕にせ、らぎのやうに鳴く蝸の
哀音。第三、第四聯は、朝顔の花を愛しなが
ら、敢て自らそれを詩かず、購ひもしない水
中花、飼ひもしない金魚を、伊東がまことし
やかに歌ふ理由を訊ねてゐるのである。

過ぎ去つた時。まさに過ぎ去らうとする季。ないし愛してゐるが非存在のもの……。これらを伊東が好んで題材に選ぶ理由は、言ふなれば、鎮魂と回向の志なのである。つまり、敗亡が予感される時代への南無阿弥陀仏であつたわけである。

現にこの「いかなれば」を掲載する「コギト」九月号の編輯後記は、幾つかの時代の南無阿弥陀仏を伝へてゐる。

その一つは、「日本浪漫派」の作家中で、亡びる美しさを表現することでは、伊東が最右翼に挙げて讃歎を惜まなかつた緒方隆が、世田ヶ谷は経堂の一病院で不遇な一生を閉ぢたことである。伊東は緒方を太宰治や檀一雄氏以上に高く評価してゐた。たまたま東京の家に帰つた私は、その伊東の敬意を伝へに近くの病院に彼を見舞つたことがあつた。入口近くの病室に看護人もなく横臥してゐた彼は、肺疾患とは思へぬ太つた顔と枕からもたげると、かうしてはゐられない、一万円の朝日新聞の懸賞小説に応募するつもりだと熱にうるんだ眼を光らし、友小田嶽夫の話などをしたことを思ひ出す。

その二は、伊東が最も信頼してゐた独文学者大山定一氏が主宰した京大独文学研究誌「カスタニエン」が、国策に順応するといふ不

分明な声明をよぎなくされて、突然、当局の弾圧によつて休刊させられたことである。

その三は、伊東が緻密な分析家として最も敬愛した「コギト」同人の中島栄次郎が応召したことである。中島は即日帰郷となつたので丸坊主になつただけで事はすんだが、これらの事象が醸した伊東身辺の雰囲気は、南無阿弥陀仏でも唱へてゐねばいつ厄災が降つてこぬとも限らぬやうな一種の不安に満ち満ちてゐたのである。

翌十月末、伊東は次のやうな書翰を「コギト」の発行者肥下恒夫氏に送つてゐる。

「先日はわざわざあんなどころまでお訪ねいただきましたのに、丁度散歩に出てゐまして、実に／＼残念でした。御許し下さい。またいつお会い出来るかわからぬ珍しいお人でしたので、一晩しまつた／＼と愚痴云つてゐる家の者等に笑はれました。草々」

(昭和十三年十月三十一日堺市三国ヶ丘町四〇より)

(東京市中野区大和町二五二肥下恒夫宛はがき)

伊東は久しぶりに帰郷した肥下氏から、一別来の田中氏のその後の消息や、同人達の動静について、訊ねたかつたのであらう。伊東はこの年はもう作品を発表しなかつた。上京の悲願のため精神が落着かなかつたからであらう。

伊東は十一月下旬に次のやうな書翰を百合子さんに送つてゐる。

「昨日はお葉書うれしくございました。姫路の御一家様お引越の由、手伝ひにでも行きたいと思ひますもの、疲れ勝に、又ものぐさにて、ご挨拶の手紙さえ出してゐない始末です。例へ一寸もお訪ねしてはゐなくともいよ／＼お引越となると流石に取り残されてさびしく存じます。大阪もいやになりました。学校教師もつくづくいやです。毎日ぶらぶらして暮してみたいです。そして気がむいたら、思ひつき次第の文字書いて暮してみたいものです。そのくせ、文筆業をしたい気はなく大へんわがま、な蒼沢な考なのです。ゆり子さん、そんない、パトロンになつてくれるものはないでせうかね。日本にはい、詩人がゐないのだから、新詩の伝統をつくらせるために、わたし一人位はそんな生活させて詩か、せてみて日本の恥にはならぬと思つてゐるのですがね。(これは冗談)

今日学校にギリシャの壺の絵を写真版にしたものを売りに来た商人があり、わたしはその美しさに実に恍惚として非常に慇懃しありました。物慾の少いわたしではあります、これは何としてもほしく、それに

恋歌

——旧詩帖から——

森 亮

くものみだれにさそはれて
照つてはかける夏の庭は
あなたの面に似てゐます。
しろいおもてのかけろひは
こころの鬨かけと読むなれど
さぐりを入れるすべがない。

庭木の蟬は多くても

こゑをそへて蟬時雨

ただ一すちに聞えます。

わたしもうちに物おもへど、

あなたによつて生まれてきた

それはただ一すち、蟬のうた。

反歌

わが歌のこゑのとどかぬ野のはてに
驚りある眼の君立つらむか

ナルキッソス

福地 邦 樹

都会のナルキッソスは

夜の電車の窓に

おのれの姿をうつして飽きない

自愛がつよすぎるのは

まもなく人を愛しはじめ

準備なのだらうか

暗い窓外には

家々のともしびが点滅して走りすぎ

豊かな闇がひろがっているのに

都会のナルキッソスは

窓ガラスの内側で

いらだたしげに眼をしばたいて

恥ずかしそうに自分を眺めやつては

しきりに

おのれの意味をみつつけようとする

わたしは音楽より絵が、和歌より俳句がす
きです。年齢に関係があるのでせうね。ゆ
り子さんはどうですか。先日何気なく二科
展みにゆきましたら、二、三のほかみんな
つまらなく、まあ〜僕らの詩の程度だ
なといやになりました。みんな思ひつきの色
と形なのですね。何とかいふ女の人のか
いた、泉水に金魚が泳いでる庭先の景色か
いたのがある、あ、うつくしいとわたしはそ
れを思ひました。

こちらのまき子も大へんおしやべりにな
り、にくまれ口をきゝます。わたしが一番
かはいがります。しかし子供はわたしには
わるさばかりして、よくしてくれませぬ。
花子は病氣後、身がわるくなつてゐると見
えて、子供はあの子きりなのでせう。一人
子はさびしさうだと、へんにこちらが同情
的な氣持になつていけません。子供出来る
といろんなこと考へますよ。いたづらして
る顔などみても何だか急に哀しくかはい
さうになることがあります。子供といふの
は、かはい、といふよりかはいさうなもの
です。大人もさうですけれど。

さあ、時間がおそくなつて給仕さんがこ
まつてゐるやうですから、わたしはこれ
書きやめます。ほんとはいくらでもかうし

て近頃は文字を書いてゐたいのです。
わたしひとり職員会に残つた午後五時
十分。

二十六日

伊東静雄

ゆり子さん

(昭和十三年十一月二十六日堺市北三国ヶ丘町四〇より東
京市麹町区元園町一ノ四七元園コート酒井百合子宛封書)

酒井小太郎先生が姫路高等学校を停年退職
されて、酒井家がいよいよ思ひ出の姫路を引
払ひ、東京に引越すといふニュースは、上京
をこひ願ふ伊東を、まるで独りおいてきぼり
を喰ふやうな寂寥感に陥れたのであらう。伊
東は暗い職員室に居残ると、ほそく〜独り言
するやうにこの書簡を書いたのである。

去月十月には、上京した田中氏の処女詩集
「西康省」がコギト発行所から出版されてゐ
た。これは浪速中学校の退職金で自費出版さ
れ、彼は売文と家庭教師でからくも渡世する
といふ窮状にあつたが、伊東の空想からは東
京生活のはなばなしに映つたに相違ない。
伊東は田中氏の上京一ヶ月前に、すでに東京
の就職口を探してゐた事実が、六月二十二日
附百合子さん宛書簡に見えてゐた。言はば、
伊東は田中氏に機先を制せられた恰好だ。

さうした東窓心の伊東に、J・O・A・K
に勤めてゐると云ふ理由だけで、アナウンサ
ーの聲が、百合子さんではないか？と、錯覚

されたのである。金星としての自負……。新
詩の開拓者としての自覚……。それが強烈で
あればあるだけに身軽な上京を掣肘する係累
と、永年の返済を要する亡父の遺した負債
が、残念でならなかつたことだらう。

伊東が、音楽よりも絵画に関心してゐるの
は、昂揚しがちな意欲を、鎮静させてだて
でもあつたらう。校庭の榆や鈴懸や土の色を
凝視してゐる伊東の眼は、その鎮静によつて
深刻度を加へていつたのだ。たまたま見た二

葉ずれ

芳野 清

傷んだ思ひ出が
秋の風になつて入つてきた
私の心の空虚な穴に

思ひ出はいつも貧しく
私を支へるには弱すぎる
沼辺にさわめく葦のやうだ
腋ひのさなかに生れた
私の恋のやうに 不吉な

葉ずれのひそひそ話

科展の女流のタブローに彼は感心してゐる
が、それは佐伯米子の「緑蔭」である。手前
に吊燈籠と水蓮の花や魚を浮べた円形の池が
あり、向ふは庭の立樹が緑の妍を競つてゐ
る。そんな図柄である。伊東は彩管を持ちつ
、佐伯米子のメチエを思つたことだらう。
又、子供は可愛い、といふより可哀さうだ
……といふ自覚も、このまゝ、大阪に朽ち果て
るかもしれぬといふ諦念に似た予感から、こ
とさらにまきちゃんがいちらしく感じられた

あんなにも廃墟は美しかったと
人の営みのはかなさに
愛し合ふもの、吐息だけがあつたのに

少しの風にもうなづき合つて
語り始める葦の群から離れよう
そして沼の中へ漕いで行かう

未来はあちらの岸に咲く
彼岸花よりも鮮かに映えてあれと
信ぜざるものを信じよう

―田橋より―

夜明駅

上村 肇

九州 久大線に夜明けとよぶ
小さな駅がある。

夜明け 夜明けと呼ぶ駅夫の声に
ふとも目覚めて眺めた

はたち 二十歳の頃の失意の窓ごしに
楠の若葉と製材所、

生々しい切口と大鋸のこぎり

いま五十歳の年になつて

何故か山峡の小さな駅が懐かしまれる。

愛するものたちを多数失つた

その悲しみに いつまでも

おぼれているとも思はれないが。

からであらう。

この頃、伊東を訪れた私は、彼から佐藤春
夫氏の新詩集「東天紅」(昭和十三年十月)の朗
吟を聞かされたことがある。彼は水谷清画伯

のはなやかな栞榴の装幀になる詩集を愛撫し
ながら、「戊寅秋漢口従軍の朝 佐藤春夫誌
す」の自叙から始め、「伊良古鷹」「国旗を
謳ひて」「駅頭に立ちて」「りんごのお化」
等を一ツ気に朗吟した。「りんごのお化」の
ところで、暗い三疊の文閣兼書齋に電灯が点
いた。伊東は部屋の向ふにチラチラする「り
んごのお化」をさし招いた。漢で筒袖を光ら
せた「りんごのお化」は、客の私にひとみし
りをして入つてこなかった。

そら出た。そら出た。

出て来たぞ。

りんごのお化が出て来たぞ

お姉ちゃんに抱つて出て来たぞ。

おつむをタオルでつつまれて、

お父さんのバスロオプにくるまつて、

「りんごのお化」はまあちゃんだ。「お姉

「ちゃん」は妹のりつさんだ。伊東の境涯にも、そのまゝびたり……とするやうな佐藤氏のこの詩を朗吟して、伊東は全く上気嫌になつた。

「どうです？ うまい蕎麦屋に案内しませう……。」と、伊東は上気嫌のあまり立ち上つた。

「いつもご馳走にばかりなるから、今日は僕が奢ります。」さう言ふと、伊東は着流しのみ、先に立った。

坂を下り、町中の暗い露路を幾つか通り抜けながら、伊東は「完璧な詩人・佐藤春夫」について語りつづけた。なるほど天才にかけては萩原朔太郎は随一である。しかし、天才といふ呼称が必ず随伴する欠陥もまた持つてゐる。そこへゆくとき森鷗外は抜群である。春夫も遠く及ばない。「東天紅」は完璧ではあるが、所詮、ぬくぬくとした書齋での詩作である。鷗外の「うた日記」は日露戦争の戦陣の中でのめされたのだ。完璧さといつてもそこに雲泥の相違がある。さういつた論理だつた。伊東は「うた日記」の代表作として、次の作品を歩みつゝ、口ずさんだ。

扣 鈕

森 鷗外

南山の たたかひの日に
袖口の かがねのぼたん
ひとつおとしつ
その扣鈕惜し

べるりんの 都大路の
ぱつさあじゆ 電燈あをき
店にて買ひぬ
はたとせまへに

えぼれつと かがやきし友
こがね髪 ゆらぎし少女
はや老いにけん
死にもやしけん

はたとせの 身のうきしづみ
よろこびも かなしびも知る
袖のぼたんよ
かたはとなりぬ

ますらをの 玉と砕けし
ももちたり それも惜しけど
こも惜し扣鈕
身に添ふ扣鈕

「うた日記」

二人は宿院町の「千利休寓居」と書いた石柱の所で宵闇を左に折れた。しもたやがならんだ低い屋並の一軒の前で伊東は立ち止つた。見れば「ちくま」といふ暖簾がか、つてゐる。

「こ、です。三百年からの伝統のある蕎麦屋なんです。」と言ふと、伊東は暖簾をはねた。

入ると、左が上げ床になつてゐて、簀が敷きつめてある。八畳ほどの座敷だ。そこを腰屏風や衝立で三つに仕切つてゐる。その一と小間に、先客である家族づれが蕎麦を吸つてゐた。二人は庭に面した小間に陣取つた。硝子戸越しに奥行の浅い庭がしつらへられてゐる。若むした岩と石とを太高く積み上げ山嶽が造型されてゐる。その山に躑躅の森があり、箱庭の農家や、水車や、鳥居が間配られ、晩秋には、少しひやり……と寒いやり水が谷川を人工してゐた。いかにも庶民的な親和感とひそけさが場を占めてゐた。

(補正) 前号メリケの「春」独文十行目 Gleichmein の間に sein を挿入。

伊東静雄全集

全一冊豪華決定版

桑原武夫・富士正晴・小高根二郎 共編
井上靖氏は「詩を志す者は伊東静雄のところから出発しなければならず、しかもまた結局はそこに帰って行かなければならぬであらう。」と絶讃。三島由紀夫氏は又「私の青春の師」とたへた。まこと伊東静雄こそは藤村・朔太郎に継ぐ日本現代詩の正統、その詩精神は古今和歌集の譬喩に発し、独逸詩人ケストナー、リルケに対応を求めつつ、和漢朗詠集を経てこれを超克し、現代詩として初めて西欧の詩歌に一步も譲ることのない高峰を形成した。

【詩集】 既刊詩集の朋芽をなした未刊詩集「事物の本」抄を取録
童話「山科の馬場」各品「今年の夏」
【論文】 論文「水品観音」其他を含む
【書簡】 「わがひ解明する」談話のかりに等
【日記】 未発表の日記「子規の俳論」伊東の詩精神をふる京歌「わがひを解明する」を初め公開する書簡を含む三六七通
★菊版上製函入 ★六〇〇頁 ★豫価三〇〇円

十一月 上旬 発売

人文書院

京都市(中央局区内) 仏光寺通高倉西
振替京都一〇二番

ある表情

池 沢 茂

「幸ちゃん、おいで。幸ちゃん、おいで」とほくほくりかえし呼んだ。「もうおそいから早く寝ねしよ。そんなとこに乗ってたら、あぶないから……。落ちたら、けがするよ。な、幸ちゃん、こ、へ来て、とうちゃんとしよに寝ねしよ。早うおいで。おいでつたら、おいでッ」

五へん、六べん、十べんと、ほくほく呼びつづけた。だん／＼声があらくなり、いら／＼と叱りつける調子になる。それでも幸吉は、返事一つしようとしな。もと／＼反応のどほしい子だった。こちらから言うことは、なんにも聞いていないみたいだった。のどがかわいたり、腹がへったり、大小便がしたかったり、なにかして遊びたかったりしたときに、一方的に自分の意志を表現するだけだった。それでも学園へ行きだして二年目近くになると、ようやく返事が出来はじめた。先生がきついで、ついで名前を呼ぶと、おびえたように「はいッ」と声を張りあげるのだ。わらいながら、やさしく呼んでも、やはり、びくっ

と体をふるわせ、直立不動の姿勢に硬直して精いっぱい声を張りあげ、緊張のせいから、はずかしいのか、顔をあかくしている。家でも、おなじようにして返事をした。それから先生や友だちと別れるとき、ほそ／＼と口ごもりがちにだか「さよなら」が言えるようになった。自分以外の「ひと」や「社会」に対する反応が、ようやく芽を出して来たのだろう。しかし自分の「たからもの」のほうへ心がひかれてゆくと、たちまち逆もどりにしてしまふ。幸吉ひとりだけの、えたいの知れない執着の世界に、閉じこめられるのだ。それ以外の世界は、もうなんにも存在していない。ほくほく梅子をおいたま、お勝手へ立ってゆき、幸吉のそばに立った。

「幸ちゃん、あぶないから、おりなさい。とうちゃんがだっこしたげるからおおりなさい。もうおそいから、寝ねせんといかん。とうちゃんとしよに寝ねしよ」

もう一度やさしい声を取りもどして、ほくほくりかえした。だん／＼きつく、とき／＼叱りつけるようにもした。でも幸吉は、すぐそばからの、どんな呼びかけにも、やはり、なんにも感じようとしな。まるきり見向きもしないのだ。テーブルのうえにイスを三つも四つも積みかさね、はずれないように幾本

ものひもでく、りあわせて、そのうえにガラクタをいれた箱をのせ、その箱のうえに腰をおろして、まっすぐに、前方の壁や天井のあたりをながめている。ぐらぐらする足もとが気になるのか、ときぐらぐらつむいて、足場をたしかめて見るにすぎない。ほくはすぐそばに立っているのだから、まして正面へ回れば、幸吉には見えないわけではない。ことさらに無視しているのだろうか。天井のほうを見上げているときにも、その目のはしには、たしかに、ほくを意識しているらしい視線が、ちらちらする。そして奇妙な「わらい」が、ときぐらぐら顔に出てくる。「おやじはだいが困っているらしいぞ。おもしろい、おもしろい。もっと困らせてやれ」とあざわらっているようにも見える。「こんな変なものうえに登って喜んでいなんて、なんて風変わりな子なんだろう。しようのないやつだな」と自嘲しているようでもある。「こんなあぶない高いところに、だれが登れるか。どうだ、えらいだろう」と得意がっているようでもある。わらいがおさまって、まじめな顔になると、こんどは、ひどくさびしそうにも見える。「だれも理解してくれない。だれもこの気持ちを知ってくれない。ひとりぼっちで、さびしくて、しかたがない」と胸のうちで、なげき

精霊のとき

—おこたりそめてなかなか寝き— 漱石

堀ノ内 歴

線路にそって東から西へ
新しく出来た広い道路は
昼の間は土埃で 泥んこの広っぱ
つるべ墜しの陽が西没するころ
それが すばらしい道路に変はる
赫ら夕照の 長照準の下で 道は
はしばしまで恍惚と横たはり
地の厚い黄色の 素練り絹の
転延にもまがうか

やがてあたりが夕靄に包まれると 道は
あの誰しもがきつと夢でみた事のある
礙げ一つない 青い広い大通りに
なっている 無脚人影はない
心もとないこの季節を狙って

をひそかに、かみしめているようなのだ。でもほくはやはり、ぞっとして、無気味なのだ。目に見えても見ようとせず、耳に聞こえても聞こうとせず、頭が天井につきそうな高

気違いのことなんでしょう。この子が小児精神分裂症、あるいは、その一種の自閉症だとすれば、つまり、はっきり言うと、子供の気違いなんです。おとなになってから発病したのと違って、おさないころから、すでに、精神に異常をきたしているのですね」
「まあ一概には言えませんがね。原因やら症状の段階やら、いろいろですから……」

須磨琴

吉本青司

Phoebe Douglas に—

あなたは須磨琴をひいた
△あなたの名を一絃琴といひ
長さ一メートル
はば十センチの小さい琴だ△
師の老女の手ぶりに合わせ
憶良の旋頭歌をうたった
片ことの日本語で
△はぎの花 尾ばな ぐず花 なでしこ
の花 おみなえし また……△

あいまいにばかり、なだめようとしながら、結局は肯定していた医者のごとくは、また、ほくのなかに、よみがえってくる。気が狂った者の、気味のわるい「放心」や「にや／＼わらい」……幸吉の表情は、要するに、これに一番近いのではなからうか……。
「幸ちゃん、さあ、寝よう！」
ほくは気を取りなおし、背伸びして、幸吉

花の名をかぞえて
何になるだろう
たった一つの糸をひく
白い小指の行くさきは
どこにある
水いろの目の巡礼
地球の一隅に あなたが
見つけた須磨琴
△それは亡びゆく秘琴だった△
△美が永遠だというのは
誤まりなのか△
月がまるく虫がすだくころ
あなたは
竹林寺を後に立ちさった

忽然と一体誰が何の用で
斯かる道路を 敷設したのか
私には解らなくなってくる
そして いよいよ誘はれる

たった一人 夕べの新道を往くのは
寂かすぎるようで じつは
心賑はしいことに気付く、それは
夕靄の 殆んど見えぬ流れ具合の上に
精霊たちが出ていて
無邪気にかるく動き合っていたのだ
不可視な精霊らにとっても 今では
車も原動機車も来ない安全な道はない
彼らが暗黒に就く寸前の ひと刻を
新道の低空で 自在に絢爛と振舞うて
百も二百もいるらしいのが
寂けさとみえる賑はしさ

道を西に そして東に通りをえると
私の胸は いつかすーっとなつて
—一九六〇・九・二四—

いとこに腰をおろして、ひとり、にや／＼わらっている子……ほくは思わず、目をつぶり、うなだれてしまう。

「精神分裂症といえ、おとなの場合では、

の手と足をぐいとつかんだ。妻の洗たくがすむのを待っていたら、夜半をすぎて一時にもなってしまう。そっと放任しておいたほうがよいかもしれないとは思っても、なんとかして寝かさなかつたら、幸吉の頭はますますこわれてゆくだろうという不安がある。体も弱るにきまっている。あはれ、わめくのを、ほくはむりに引きずりおろし、両手でだきか、えた。そのまゝ、寝床まで運んでゆき、いっしょに横になる。起きて逃げださないように、荒れ狂っている気持ちがしずまるようにと、しばらく、力いっぱい、だきしめている。はじめは一層あはれ、ます／＼わめき立てる。でも、おとなと子供の力だから、やがて、あきらめたらしく、だん／＼しずかになり、ほくの胸に顔を押しつけたまゝ、にしている。ほくはかわいそうになって、その顔をのぞきこんで見る。

幸吉の平素の顔は、ふつうの子より、おくられているせいか、かえって一段と愛らしい。目鼻立ちもと、のい、ひたいもひいでて、人なみより、むしろ、かしくそうにさえ見える。これがこういふ病気の子の、一つの特徴なのだ。が、学園の生徒たちは、大部分がそうではない。口もとにしまりがなく、よだれをたれていたりと、頭や顔の形が変にゆがんでいた

する。手足の運動が不自由で、動作がすべてぎこちない。目が、まぶしそうにシヨボ／＼していたり、ひんがら目だったり、どろんとこごっていたりする。実際はこういう子のほうが、精神の働きもむろんにぶいけれど、狂っているわけではないから、友達や先生との関係も理解でき、保育の効果もあがりやすいのだが、一見したところでは、幸吉のような子のほうが優秀に見える。実情を知らない人たちは、ふつうの小学校へは行けない子だと言うと「へえ、このほっちゃんか！」とびっくりして、まじ／＼見なおしたりする。学園の先生でも、愛らしく賢そうな外見につられるのか、しば／＼特別の目をかけてくれる。いつも接しつづけている親のほくや妻でさえなおる見込みのない精神病の子だということ

が、とき／＼うそみたいな気がする。突然なおって、ふつうの子供にたちまち追いついてくれる、やがて近いうちに、そういう日が、きつと訪れてくる、そんな気がしてならないのだ。頭さえなおってくれたら、身体には別に目立つほどの欠陥はないのだから、おくればせながら追いついてゆけるに違いないと思えるのだ。幸吉を力いっぱいだきしめていると、おさない者の無意識の悩みが、おなじ一すじの血の流れになって、こちらにも伝わっ

てくるようだった。「この頭が——にぶい頭だが学校ぐらいは普通にいたこの頭が——この子のほうへ、せめて半分でも、移ってくれたら」とぼくは思った。と、たちまち、その思いも破れた。

「とうちゃん、こっちは向いてえな。はよう、とうちゃんてば、こっちは向いてえな」

ぼくの背後に寝ていた梅子が、かなきり声をあげているのだ。いつもなら眠っているころだが、幸吉が荒れ狂ったので、目がさめてしまったに違いない。眠りそびれた梅子はますます機嫌がわるく、ぼくの背中や首すじを引っかき、足をバタ／＼させ、たちまち泣き声になった。

編輯後記

八月六日。明大教授野隆三氏より激励の便りをいただいた。伊東論への回廊を喜んでくださったのである。伊東全集の準備に當つて、氏の梶井基次郎全集の体験から幾多の教示をいただいたるのを思ひ出した。改めてこゝに深謝申し上げる。

八月七日。新潮十月号に「日本浪曼派の残党」なる拙文を発表した。新潮編輯部より日本浪曼派のその後の動向、及び果樹園の立場の明示を要求されたからである。この拙文を讀んだ同人や讀者の方から、拙誌の立場と進路に安心したといふ旨の反響をいただいた。

九月一日。高知在の同人吉本青司氏が下呂の旅からの帰りに來訪した。氏と初めて出会つたのはもう十年以上前である。その日京都の朝日会館で「文藝講演と詩の朗讀の会」が催された。赤出し中の織田作之助も演臺に立つた。織田は高津中学校で僕の一、二年後輩であつた。彼は僕

の方が後輩であると錯覚してゐた。「鳥尾敏雄君等が神戸で同人雑誌を出してゐますよ。」さう……、頼みもしないのに僕の據り場をばらした。登山靴を穿いた彼はさう言ふと、服のまごころと膝下の床に仰向けに脱靴した。小説の構想でも考へてゐるのかと思つたが、どうやらヒロポンかなにかの中毒状態に陥つた。私はこの錯覚した先輩の悲惨さを見得た。そして、彼が吉本氏だつた。あの日にくらへ二人の頭髪には目立つほど白いものが混つてゐる。せめて精神の若さだけを蓄積してゐるのを喜び合つた。無名であること。それがなまじりの精神衛生であることに気がついた。

九月二六日。大朝に国際東洋学者會議に出席した吉川幸次郎氏の「ソ聯の印象」が掲載された。僕は最近遠く目的でソ聯を視察してきた三氏の講演や話を聞いてゐた。食堂での喫食に二時間を要する非能率。スターリンの示威的遺物である四十階の建物は出入口が一つに統制されて不便なこと。この話は皆同じだつた。吉川氏が逸した点を三氏の語で補足すると、取能による賃金格差は日本以上とのこと。但しエンゲル係数は五割で食生活だけは保証されてること。すでに社会主義体制に成長してゐること。七ヶ年計画を完了すれば異種の資本主義体制になりさうなこと。この現状の落差が、中共をして国際東洋学者會議をボイコットせしめるにいたつたのが真相だといふこと。E.T.C.O)

果樹園 第五十七号 (毎月一回日発行)

昭和三十五年十一月一日発行

池田市野町一六八

編輯者 小高根二郎

發行所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

果樹園社

定価 三十円

果樹園

第58号

わがひとに與ふる哀歌 小高根 二郎
音響地帯 堀之内 歴
ヘリック詩抄 森 亮
手紙 美堂 正義

鼠 上村 肇
真 昼 吉本青司
断 章 浅野 晃
谷 間 芳野 清
ひとりごと 池沢 茂
編輯後記

わがひとに與ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄(四十七)

小高根 二郎

伊東は麦酒と蕎麦とを註文した。麦酒と一緒に醬油をかけたオカカが運ばれた。こゝは

これがい、んですヨ。ね、い、でせう。と、伊東は私の肯定を強要してから、オカカをつまむとコップを傾けた。そこに蒸籠蕎麦が運ばれた。蒸籠の他に小鉢が添へてあつて、そこに生卵が一ヶ転がされてゐた。珍らしいでせう。これはかうして喰ふんです。と、伊東は生卵をかちわつてそれをほぐすと、蕎麦をタレに浸してからさらに生卵をまぶして、するするツ……と馴れた手付きで、咽喉に流しこ

んだ。

今おもへば、その宵の「ちくま」の招宴は、酒井家からも、田中氏からも、おいてきはりを喰つたやうな伊東の寂寥感を紛らすためであつたやうだ。それとも、ひそかに計画されてゐた上京を目安にしての、惜別の宴のもりであつたのかもしれない。

伊東は十二月初旬のやうな書簡を「文芸文化」の編輯者清水文雄氏に送つてゐる。同誌は発足当初より編輯は蓮田善明氏が担当してゐたが、十月十七日の成城学園の運動會当日に召集令状がきて入替して了つたので、学院に勤めてゐた清水氏が代つて編輯してゐるからである。

「御注意下さいました通り

(つきつき)は(つきつき)の

(撃れし)は(撃たれし)の誤であります。御訂正いたします。

右感謝いたします。

栗山君に約束しました詩集東天紅の評は今更何だかむだな気がして自信失ひましたから御違約せねばならなくなりました。お許し下さい。」

(昭和十三年十二月三日堺より東京市世田谷区(区祖師ヶ谷二丁目六六清水文雄宛(はがき))

右の訂正は「文芸文化」昭和十四年一月号のために書いた次の作品である。

野分に寄す

野分の夜半こそ愉しけれ。そは懐しく寂しきゆふぐれのつかれごころに早く寝入りしひとの眠を空しく 明るるみづ色の朝につづかせぬため 木々の歓声とすべての窓の性急なる叩もてよび覚ます。真に独りなるひとは自然の大きいなる聯関のうちに おほらめかなた 大海の彼方を得望まねど、

わが屋を揺すこの疾風を雲ふき散りし
星空の下、
まつ暗き海の面に怒れる浪を上げて来し。

柳は狂ひし女のごとく逆まにわが毛髪を
振りみだし、

摘まざるままに腐りたる葡萄の実はわが
眠目覚むるまへに

ことごとく地に叩きつけられけむ。

篠懸の葉は翼撃たれし鳥に似て次々に
黒く縫れて浚はれてゆく。

いま如何ならんかの暗き庭隅の菊や薔薇
や。されどわれ

汝らを憐まんとはせじ。

物皆の凋落の季節をえらびて咲き出でし
あはれ汝らが矜高かる心には暴風もなど

か今さらに悲しからむ。

こころ賑はしきかな。ふとうち見たる室
内の

燈にひかる鏡の面にいきいきとわが雙の
眼燃ゆ。

野分よさらば駆けゆけ。目とむれば草紅
の

音響地帯

堀之内 歴

晴天十日の秋の陽は 熟れ切つて
かるがると お午を回はる
家の前の空地に このごろ毎日
ブルドーザーが来ている

カタバルトの連続音響は
激しくあたりの空気を震動させる
馴れると 重い音が頼もしい
悠然と 同じ処を這ひ回はる
滑稽な甲虫だが 暖かな地ひびきも
絶え間なしに 伝はり
盛大に一日じゆう揺られていると
酔つばらいそうだ

葉すとひとと言へど、
野はいま一色に物悲しくも蒼褪めし彼方
ぞ。

第二詩集「夏花」

先の百合子さん宛書簡に、校庭の枯れか、
つた椽や、鈴懸や、土の色を凝視する……：條

眼の前の窓庇に さつきから

一匹の蜂が 遅れた翅で

庇の端に取つ付く作業を

覚束なげに 繰り返しているが

彼は弱りはてている

もどかしいその「のぞみ」が いつか

私を急速に仮睡へと魅きこんでゆく……

それは幾刻？ 眠つていたらしい

窓外は既に斜陽の紅が流れており

連続音は止んでいる

人夫らは帰る 蜂はいない

取り残された私の心に 空白が

一杯に拡がっている 酔い醒め？

「また 一日は済んだ」だけだ。

一九六〇、十、二四

があつたが、この詩にその伊東の心情がよく
滲みでてゐる。

事実、この詩のやうに、堺でも一段の高み
、しかも安負請の二階屋のことなので、暴風
の日の風あたりは一段ときつかつたであらう
。ゆきゆき揺れる家の不安から、伊東は着物

を着たまゝの姿で、一晚中まんじりともせず
床の上に坐つてゐたこともあつたのである。
(昭和十一年十二月二日
〔附百合子宛書簡参照〕) そんな時、空屋となつて
ゐた裏の邸の庭では、種々の立樹が異様に身
を揺り動かし、獣のやうに咆哮する叫びを、
聞かねばならなかつたらう。

ヘリック詩抄 (一)

森 亮

卓上小詩 その一

食卓の愉楽をつくりだすものは

くちにする食べ物でなく、満ち足りた心だ。

気苦労がもてなし役を買つて出るやうな卓

上では

人はお料理よりもむしろお皿を食べる思ひ

がする。

羊肉が積の肉かの分厚い一切れ

それを盛つたちいさな土鍋は、

気兼ねのないわたしの食卓に置かれたなら

立派な御馳走よりも数等わたしをよるこば
せる。

卓上小詩 その二

しかし、この詩の何処……とは明確に指摘
しえないが、たしかに影響を受けてゐると思
はれるのは、伊東が全篇を暗誦してゐた永井
荷風の「珊瑚集」である。とりわけ、伯爵夫
人マシユウ・ド・ノワイユの精緻で豊饒な情
念と、アンリイ・ド・レニエエの明晰な冥想

地上の権勢なんぞ恐かない。

好きなのは頭をかざる花の冠。

わたしのあごひげがちむさく

お酒やあぶらで汚れるのも悪くはない。

今日こそあらゆる悲しみを杯の底に沈めち
まはう。

明日のいのちを誰が知らう。

ロバート・ヘリックはロンドン生れの十七世紀の詩
人で、詩集は一六四八年に公にした「ヘスベリデー
イズ」が唯一のものである。これには千百三十篇の
世俗的な詩と巻末に一編めにした宗教詩二百七十
篇とが収められてゐる。詩の数がこんなに多いのは
彼の作品の大半が十行前後の短詩や更に小つづの四
行又は二行のエピグラムであるためである。

「卓上小詩その一」は三三三番、「その二」は一七
〇番の詩であるが、どちらも原詩では全く別の題が
附けられてゐる。今後連載する予定の訳詩でも原詩
の題と食ひ違ふことが多いと思ふが一々断らないこ
とにする。原詩の番号はエツリマン叢書本に従ふ。

とが、伊東が意識してゐたかどうか判らない
が、稲妻のやうな光を、その抒情に投げかけ
てゐると思はれる。

伊東は十二月下旬、いよいよ姫路を引揚げ
られる酒井小太郎先生に、次のやうな書簡を
書き送つてゐる。

「その後いかがですか、いつも御無沙汰し
てをります。このごろ学校非常に行事多く
休暇も日曜もろくに休ませてくれないやう
なままで、ものぐさの上に一層筆不精にな
つてゐる次第です。先日村上さん宅に行き
ましたら、お近い内に東京に皆様御移転の
由き、ました。姫路もだいが水くなります
し、お嬢様方も東京ですし、お賑はしくて
結構なこと、存じます。わたしも大阪にあ
き／＼いたし、又学校もあまり忙しいので
弱つて、東京に出てみたいとしきりに思つ
てゐます。で東京御移転うらやましく、い
つとも一向、御無沙汰してゐるくせに、や
はり取残されてみるとさびしいです。しか
し、一生の内には一度東京に出たいもので
す。い、口があつたらお世話下さい。

このごろはお目もだいがおよろしいとの
こと菊枝さんにおききしてゐます。どうぞ
充分お大切に願ひ上げます。

こちららもう一向平凡無事で、面白いこ

ともをかしいこともありませぬ。只女の子がだいが大きくなつたのでいたづらばかりしまして、取紛れて暮して居ります。弟はドイツのアングストといふ活動技師(新しき土をとつた男です)と一緒に三ヶ月ほど中支に行つて、先日飯つたところですよ。かし何にも云つてよこしません。一度葉書送つた位です。東京においでになりましたら、一度女優さんでも見物においで下さい。弟も喜ぶこととございませう。何かとよろしくおねがひします。東京市世田谷区代田一の六二五、明治荘といふアパートに在ります。

お引越さぞいろいろお忙しいこととせう。大体何日頃御出発でせうか。おついでがございましてお知らせ下さいませんでせうか。奥様にもよろしく御伝言下さい。

十二月二十六日 伊東静雄
酒井小太郎先生

(昭和十三年十二月二十六日堺市北三国ヶ丘町四〇) 上野区大森五軒邸六七酒井小太郎宛(封書)

伊東は昭和十四年一月初頭、次のやうな書を頼原先生に送つてゐる。

「コギトの御文章まことに有難うございまして。日本の国文学界に先生あること、実

にうれしく愉快とございます。切に御健康と、憚るところなき御活躍とを祈り上げます。感激のまゝ、以上のごとくでございませう。」

(昭和十四年一月二日堺市北三国ヶ丘町四〇より京都市上京区大森西町三六頼原退蔵宛(はがき))

この書簡は、第二回透谷賞を受賞した保田与重郎著、「戴冠詩人の御一人者」(昭和十四年)に対する批評を、「コギト」二月号に先生が寄せられたことに対する礼状である。

「戴冠詩人の御一人者」を通じて保田君のすぐれた天分を語る事は、もつと君を直接にかつ深く知つて居る人々に譲るべきであらう。私はたゞ本書の読後感として、君の批評精神について僅かの言葉を述べたい。「さうして私ら懶惰な詩人になしうることは、己が魂を以て古い世の人々の魂と詩心に即することである」。これは「雲中供養仏」の条に語る君の謙遜な言葉である。そしてここでは勿論それ以上の意味を以て語られて居るのではない。けれども最初の日本武尊の御歌から、大津皇子の像、白鳳天平の仏像、当麻曼茶羅、斎宮の琴の歌、雲中供養仏と、そのいづれもこの篇にみち溢れた香り高い詩情に魅せられて来た読者は、あの謙遜な言葉が実は所謂動勉

れたのである。(昭和十四年「コギト」二月号、頼原退蔵「戴冠詩人の御一人者」を読む)

伊東は若冠の批評家保田氏の見解にも充分同情を示しうる広量の先生の熱情に、感心したのであらう。

然し、伊東が先の書簡を先生に出したについては、実は、別の意図も含まれてゐるのである。

「先日長時間失礼いたしました。お休におさはりはなかつたでせうか。どうぞ呉々

手紙

美堂正義

子供が持つて帰つてきた高校新聞に
沖繩の高校生からの手紙が載せてあつた
祖国の高校生の皆様
私達は分断された歴史の悲しみを噛みしめ
祖国への復帰の日を待ち侘びてゐます
それを読みながら目頭がうるんだ
子供は見過したであらう
そんな苦しみを経たものでないと
悲願を苦痛として受け取れないから

沖繩は近くて遠い

戦場となつて荒廃し

外国の占領から管理下となつてゐる土地

肉親の血は砂に埋められて
いまもなほ匂ふことであらう

沖繩の岸打つ波は世界の激しい海に連なり

既に琉球の姿を失つてゐる

この廃虚のなかに育つた若者の
短い手紙の末尾に
同胞の高校生よ

一冊でも本を送つて下さい と

桑原武夫・富士正晴・小高根二郎 共編

伊東静雄全集

全一冊豪華決定版

井上靖氏は「詩を志す者は伊東静雄のところから出発しなければならず、しかもまた結局はそこに帰つて行かなければならぬであらう。」と絶讃。三島由紀夫氏は又「私の青春の師」とた、へた。まこと伊東静雄こそは藤村・朔太郎に繼ぐ日本現代詩の正統。その詩精神は古今和歌集の譬喩に発し、独逸詩人ケストナー、リルケに対応を求めつつ、和漢朗詠集を経てこれを超克し、現代詩として初めて西欧の詩歌に一步も譲ることのない高峰を形成した。

【詩集】 既刊詩集の萌芽をなした未刊

童話「山科の馬場」名品「今年夏」卒業のこと「水島観音」其他を含む

【論文】 論文「子規の俳論—伊東の詩精神を解明する—」談話のわがひとを解

明する「談話のわがひとを解明する」を含む三六七通

【日記】 未発表の日記

★菊版上製函入★300頁★豫価2000円

二十月中
発売

人文書院

振替京都一〇二番

お大切に祈ります。わたくしも風邪気味でこの三四日ふらふらしてをりました。遅くなりましたがお礼申し上げます。

(昭和十四年一月三十一日堺市北三国ヶ丘町四〇より京都市上京区大森西町三六頼原退蔵宛(はがき))
つまり、先の書簡を出してから間なしに、伊東は頼原先生をお訪ねしたのである。その用談の核心は、昨年六月以来心底にすぶりつめてゐる上京の願ひを打ち明け先生の助力を請ふことであつた事實は、十日後に出した次の書簡で、さらに具体的に知ることが出来る。

「お手紙有難うございました。早速能勢さん(註・能勢朝次、東京文理)にお話いただきましてさうで感謝いたしてをります。履歴書二通同封いたしました。御面倒でございませうが願ひいたします。

先夜は先生にお会ひしますと、どうも気持ちが悪く詳しく希望要項申述べませんでした。後で悔んではいけませんから、左記に書いてみます。

(尤もあまり虫がよすぎはしないかと自分でも思つてをります。お笑ひ下さいませんやう願ひします。

一、東京或はその近傍
二、中学校の受験準備的教育には充分飽き

鼠

上村 肇

あまり鼠がさわぐので
ねずみとり器を買ってきた。
今朝見ると一匹大きな奴がか、ついていた。
私は河の中に持つて行つて沈め
ずつと鼠の動きを見ていたが
それは何かに必死に堪える
私の思いであつた。
朝の食卓で
鼠のとれたことを話し
家人の皆が
それはよかつたねと云つたが
それをどうして殺したかと云う
方法については
皆 くちをつぐんで
聞くものも いなかつた。

てをります。(尤も十年間も激しく強
制されたのでその方面では大へん
上手ではありませんが)

三、それで、女学校といつたやうな比較的
受験準備の少い方面
内心のほんとの希望を申しますと、女
専とか、高等科とかいつたやうな程度
のものが希望なのです。(それにはお
前の学力が足らんと云はれさうですが
、これも大いに勉強して、お世話下さ
つた方には御迷惑かけぬやう頑張りま
す。

四、男の高等学校程度のものでしたら一層
思ふつほであります 阿々

五、前記の女専、高等学校程度のものでし
たら私立でも行きたうございます

六、普通の女学校でしたら公立がよいと思
ひます。恩給も、あと七年ですから。
以上のやうなものであります。
能勢さんには、先生の御考で右の六項目の
うち、あまりをかしくないものだけをお耳
に入れていただけませんか。非常識
と思はれるのは残念でございますから、ど
うも、えて勝手に、すみません。

和歌山のおかへりには是非お知らせ下さ
い。エビス百十五番に電話いただきました

真 昼

吉 本 青 司

そんな日々を慣るるように
登台のある岬の先端に
怒濤がしきりに歯がみをする

上の手をはらって
ひとりの若い母が
みどりごに乳をふくませる

松風が
オルゴオルのように鳴る
へちらばった新聞紙に
真昼の暗殺記事がのっている

母は乳房をていねいに仕舞い
野路菊の花をたおつて
みどりごの目をのぞきこむ

ら、私から出回ります。外に二三の友人も
お会ひしたがつてをります。それにしても
寒いことでございます。わたくしの学校で
は、五十人のクラスの内二十六・七人も休
んでをる組もある程です。御養生專一に祈
ります。

四月に東京に行つて運動してみたいとも
思つてゐます。又詩集も出版する用事もし
に行きたいと思つてをります。

自分のことばかりのお手紙になりました
。お許し下さいませ。

十日

伊東静雄拜

頼原退蔵先生

(昭和十四年二月十日堺市北三国ヶ丘四〇より)
(京都市上京区大将軍西町三六頼原退蔵宛(封書))

伊東の就職先の希望条件は、東京かその近
傍であり、学校は女学校から高等学校までの
幅広いものであるが、尻上りにおつおつと大
きな希望になつてゐるあたり、いかにも田舎
者の伊東らしい。

頼原先生が能勢朝次氏に斡旋を頼んでゐる
のは、東京高師時代の同期生であり、共に高
師を経て京大国文科に学んだよしがあつた
からである。

伊東はその四日後、頼原先生に次の礼状を
送つてゐる。

「さぞ御面倒様でございましたでせう。厚
くお礼申上げます。四月上京の折には是非
能勢さんに参上いたしたう存じます。どう
ぞ今後よろしくお願ひ申します。」
(昭和十四年二月十四日、堺市北三国ヶ丘四〇より)
(京都市上京区大将軍西町三六頼原退蔵宛(はがき))
この書簡から察すると、頼原先生から能勢
氏に伊東の希望条件を言つておいたから、春
休にでも上京して、直接お願ひするやうに：
……ともいふ、連絡があつたのだらう。

この半月後、転勤問題と離れて、伊東は次
のやうな興味ある書簡を、頼原先生に送つて
ゐる。

「頼原退蔵先生

伊東静雄

昨日は御本有難うございました。只今去
来抄の解説を拜見し終つたところです。そ
れにつけて思ひ出しました。わたくしが大
学卒業の作文の中に、去来抄の中の二、三
句を、しかも夜店で十五銭かいくらから求
めた活版本の中から大へん重大な引用をし
て口頭試験の時先生から、去来抄はそんな
に平気には信用ばかりしてはいけないので
はないかといふ意味の御注意をいただいた
ことがありました。そののみを知らないわ
けてはないわたくしは、去来抄そのものに
ついての御注意はそんなものかなあ位の、
のんきな度胸でゐましたが、引用に用ひた

あのひどい本を先生から見破られたのぢや
ないかと冷汗を流したことであります。
あれから丁度十年でございます。

二月二十八日

「

この書簡に出てくる御本とは、この月の十
五日に初版が出た頼原先生校訂にかゝる岩波
文庫「去来抄・三冊子・旅寝論」のことであ
る。この本の末尾の解説「去来抄について」
を伊東は読んだのだ。

去来の遺著として知られたものには、「去
来抄」を始め「旅寝論」・「去来文」・「芭蕉
談」等の数種がある。いづれも芭蕉の俳諧を
論ずるものにとつて必読の書とされ、就中「
去来抄」はさび・しをりを説き、不易流行を
論ずるものにとつて、殆ど缺くべからざる重
要資料とされて居る。しかもこれらの著書は
、すべて去来の没後数十年を経て、始めて世
に公にされたものであるから、その内容は信
ぜられながらも伝来については疑を抱かれて
居るものもあり、又「芭蕉論」の如く全然偽
作視されて居るものもある。

(岩波文庫「去来抄・三冊子・旅寝論」)
(頼原退蔵解説「去来抄について」)

この先生の解説文を読んだ伊東は、ひやり
……としたものを背に感したのだ。

十年一と昔、伊東の脳裏に卒業論文の口頭
試験場の光景が浮び上つた。ときたま教壇上
の先生の風姿と学匠らしい講義には接してゐ
たが、面とむかつて親しく声咳に触れるのは
、在学三年……その日が初めてだった。激石
の風貌を小型にしたやうな温雅な顔相。特に
ヒゲが似てゐる。五島とは言へ同じ長崎県人
。同県人といふことで酒井小太郎先生には甘
へすぎるほど甘へたのに、どうして頼原先生
には今まで甘へなかつたのだらう。原稿用紙
五十枚に書いた「子規の俳論」をめぐつてゐ
る先生の質問に待機しながら、伊東はさう
：後悔しただらう。「一つのことを三年やれ
ばたいい学界の水準を抜くことができる」
。教室の学生を激励するため、さう……豪語
しては、からなかつた先生の学匠らしさが、
文学青年の伊東にとつて縁遠い存在に映つた
らう。「一日にたつた二時間だけでい、。缺
かさず読書を続け給へ。それだけの努力を一
生払つたゞけで、立派な学者になることがで
きる。」とも、先生は垂訓された。学者にな
るこの天才と凡才法。捷徑と迂路。学者と違
ひ作家志望の伊東にとつては、どちらの方法
も、路も、無縁に聞えたとに相違ない。

すら／＼と口を銜いて出て来るその快さに一
種の恍惚境を感じたであらう。即ち長興氏の
所謂「作つたものが必しも美しくなければな
らぬとは考へずに、自分の広義の芸術的主観
を主としてあらはすことに満足」したであら
う。そして又それ等の句がたとへその二つの
歌からヒントを得たものであるにしても、一

「君は「去来抄」を気軽に引用してゐるが
、そんなに平氣に信用ばかりしてはいけな
いのぢやないかね？」
と、論文から頭をもたげた先生の眼鏡の底に
、きらり……鋭く眼差しが光つた。

「は？「去来抄」？」
と、伊東は戸惑つた。論文の主旨は子規の「
芭蕉雑談」に於ける芭蕉輕視論に対する弾劾
である。あまりにジャーナリスティックな子
規の身振りに対する批判である。「去来抄」
はその論証のためのほんの附けたしにすぎな
い。伊東には先生の質問の主旨が判らなかつ
た。いや、先生は夜店の古本屋で十五銭で買
つたあの「去来抄」のいかゞはしさを看破さ
れたに違ひない。伊東は論文の行文を脳裏で
たどつてみた。

……
即ち子規は「芭蕉雑談」に於て、芭蕉の悪
句の例として、「あか／＼と日はつれなくも
秋の風」「辛崎の松は花より臚にて」の二句を
挙げ、それ等が各々「須磨は暮れ明石の方は
あか／＼と日はつれなくも秋風ぞ吹く」「辛
崎の松のみどりも臚にて花より続く春のあけ
ほの」等の歌の「臚案剽竊にすぎず」と簡單
に片づけ「一文の価値も有せざる勿論なり」
「是等の句は芭蕉の為に抹殺し去るを可とす

度それを自己の燃焼する主観を通過させたこ
とによつて、何等芸術的良心の責をも感じな
かつたであらう。(ましてこれ等の句は、そ
れ等の歌の単なる臚案ではなくて、純粹に芸
術的にみても芭蕉の佳句として恥ない価値を
持つてゐると信ずる。)その心持は去来抄に
、子弟の間でそのにて、どまりが問題になつた

断章

浅野 晃

跡かたなきものが歩んだ
わたしといつしよに わたしのかたへに
けれど触れることなく

わたしが遍路の旅をいつたとき
わたしはじぶんの笠に同行二人とかいて
ゐた

旅のあひだちゆう
跡かたなきものはわたしと歩んだ
かれは時間のなかにゐなかつたのに

時にわたし自身が跡かたをうしなつた
そのときかれは跡かたあるものだった

ふたりの同行者はひとり跡かたあるも
のである

けれど跡かたの
いかにすみやかに消えさることか
まことに砂の上の古いたとへそのままに
けれどまた跡かたはいまこの眼に
かがやく海島々
よろこびの岬のみどり

そこを風とすざるもの
または光とあふれるもの
だからいまわたしは歩む
跡かたなきものとただふたりして

果樹園叢書 二八〇頁

詩集火焰歌

浅野 晃 著

イズムといふ一切の拘束と呪縛を棄却し
た著者の詩境は、当今無比の豁達さと平
明さとを誇つてゐる。濾過に濾過を経た
詩語は何等の新奇なてらひも弄せず、
しかも宇宙の理、人生と哀しみ悦びを盡
し得て妙である。まこと、達人の境涯を
極めたと言ふべきであらう。

(目次) 吊橋の歌、国道の歌、朝の河の歌、落日の
河の歌、夏の讃歌、終着駅の歌、一本の道の歌、友
だちの歌、内面の歌、チエロよせる歌、ある不時
着の歌、火船歌、梧桐の歌、南瓜の歌、ななまこと
の歌、地に平安の歌、はまなすの歌、船の歌、あつ
らへむきの天気歌、くちはなの歌。

果樹園社

「など痛罵してゐる。然し芭蕉にしてみれ
ばかゝる句を詠む際に於て、そんな歌が既に
前に存してゐたか否かと言ふことには何のか
、はりも感じなかつたであらう。旅でつれな
き夕暮に会ひ、臚なる辛崎の松に感じては、

時、
私は唯、花より松の臚にて面白かりしのみ
なり
と云つて無頓着にうそぶいてゐることが云い
伝へられてゐるのもわかる」

(昭和四年「国語国文の研究」七・八月号、)
伊東静雄——子規の俳論

右の論文の末尾に当る個所が頼原先生の質
問の焦点である。夜店本「去来抄」の誤謬か
、或ひは伊東自身が改ざんしたものか、芭蕉
の語録が

「私は唯、花より松の臚にて面白かりし
のみなり」
となつてゐるに對し、頼原先生の岩波本では
「我ハたゞ花より松の臚にて、おもしろか
りしのみト也」

先生の燭眼に驚いた伊東の額には脂汗が
滲んでゐた。が、再び論文に眼を落してゐた
先生は、それきり何も銜いてこられなかつた
。「一般の所謂研究といふものとして、あま
りにも激しい情熱を湛へてゐる事に驚いた。
しかもそれは奔放な主観に任せた煽情的な論
議ではない。非常に手堅い思索の底から、抑

へ切れないで湧き出す泉のやうなもの」に、先生はうたれてゐたからであつた。

伊東は「去来抄・三冊子・旅寝論」で先生の解説を読み、「去来抄」そのもの、伝来に考証的な疑ひが残つてゐる事実を知らされたわけである。十年前の先生の質問は、芭蕉語録の末梢的な相違なぞではなかつた。真偽そのものにあつたのだ……といふ事実を知つた伊東は、二月十日附の書簡で、「高等学校程度のものでしたら一層思ふつば」といふ転動希望をぬけぬけと述べてゐた手前、冷汗三斗の思ひを繰返したわけである。

ひとりごと

池沢 茂

ぼくは寢床であおむけになつたまゝ、右がわに寝ている梅子にむかつて、顔のうえにかさした絵本を精いっぱい読んでいた。もう一方のがわに、いやがってあばれる幸吉をむりやりに寝かせ、左手で、その幸吉をおさえいている。片手だけでは力がたりないから、あしも、幸吉のあしのうえに乗せて、もう起きられないようにしている。天井にとゞきそうなほど積みあげたイスのうえから幸吉を引きずりおろし、力いっぱいだきすくめていた

谷間

芳野 清

——詩集「火船歌」によせるパロディ

重いバトンをかゝえて
越えてきた峠だ
まだ休息には早い
谷間が見える
希望も愛慾も憎しみも嫉妬も
成功の甘い幻想も
すべて今は影になつて
淡々しい夕映えに染まつてゐる
あの奥の方で明滅している
水菓のやうな灯は
行きつくはての鬼火だ
山の彼方には
次の世代の著者達の
叫喚のエネルギが聞えるが
個と群の対比では
私の心は孤独な獣よりも頼りない
それは狂奔する風やうだ
私の獨をどこへ置かう

のは、おとなのほくにも、なか／＼の仕事だつた。ねむりそびれた梅子にせがまれ、あらためて絵本を読みはじめると、息があえぎ、声はずんでくる。そうして一層大きな不幸とた、かつてゐるやうな気持ちになる。

「ウラシマタロウがおふねにのつて、つりをしてゐると、お水のなかから、カメさんが、ぼつかりと顔を出しました。カメさんは、タロウさん、タロウさん、わたしの背中に乗りなさい、と言いました」とぼくは、息をとのえて読みつづける。「ウラシマタロウがカメさんの背中ののると、カメさんはずんずん海のなかへ、はいつてゆきました。やがて、リュウグウジョウが見えてきました」

「お水のなかへはいつていったら、きものがぬれてしまふややないの」と梅子はたずねる。すきな絵本が読んでもらえるので、もう、すっかり機嫌がなおつている。

「うん、そうやけど、カメさんの背中ののつていったら、ちつともぬれないんや。おふねにのつてゆくと、おんなじやね。うば車にのつてゆくみたいに、い、気持ちやねんで。ゆら／＼ゆれて、ゆら／＼ゆれて、い、気持ちやなあと思つてたら、もう、リュウグウジョウに着いたつた。そら、見てごらん。きれいなおいやる。あかい柱、あおい屋根。きれいなお

言つてゐるのだった。そして梅子は、ぼくが読んでゐるのを聞かず、絵本も見ずに、たゞ幸吉のことは、じつと聞きいつてゐたのだった。もつとおさないころは、ことがわかからないから、なにを幸吉が言つても、かまわなかつた。絵本も大体わかりはじめ、ことばに対する興味が一段とたかまつてゐるとき梅子は幸吉のひとりごとを聞いて、どんな気持ちになつてゐるのだろう。「どうしてあんな変なことを言うのかしら。なぜだろう」と兄をあやしみ、そういう兄を持つてゐる不安や不幸を、もう、うす／＼感じているのではなからうか。

幸吉のひとりごとの傾向は、ずつと早くから始まつてゐたのだった。ことばが言えるようになったときから、すべてが「ひとりごと」だつたといつてよかつた。「会話」が存在しなかつたからだ。なにをたずねても、まるきり聞いていないみたいに、返事が全然なかつた。たまに答えても、ピントがすかつり、はずれてゐた。家にばかりいては毒だからと「お宮さんへでも遊びにいこか」とさそつても「まるいイス、ほかそか」「フォークとおサジ、どぶのなかへほかそか。ごはんなたべられへんなあ」などと答えるのだ。さしせまつた自分の意志を表現するときだけ「ブウカ

ひめさまが、おうちのなかから「タロウさん、いらっしやーい」言うて、出てきたよ」

ぼくは片手で、顔のうえにかざした絵本のページを、苦心してめくる。もう一方の手をはなしたら、幸吉はたちまち起きだしてしまふらうから、片手しか使えない。そうして絵本を梅子の顔にちかつけ、一層よく見えるようにしてやる。ところが、ぼくは、はつとなつた。梅子は龍宮の場面がとりわけ好きでいつもなら、朱や緑や青に塗られた御殿をふしぎそうにながめ、くれないのもすそを長く引いた乙姫に目をかゞやかせ、夢中になつて見入るのに、いまは、なんにも見えていないのだ。その場面は顔のまえにあるのに、視線は宙の一点に、ほんやり／＼こりかたまつてゐる。ひと一倍／＼する、ほそい、ひとかむ目のひとみが、暗い淵の底にでも見入つてゐるように、じつと動かずに、強い不安をたゝえているのだ。

「キハツのビンにウソコつけよか。くそやなるなあ、せつけんで洗つても取れへんよ。まるいイス、お便所へほかそか。こえ屋さんがヒシヤクでくんで、トラックに入れて、持つていつてしまふなあ……」

幸吉がさつきから、しきりに、ひとりごとを

「「シッコカー」などと、こちらからたずねることばをそのまま、使つて、その目的を達してゐたにすぎない。それでも、養護施設の学園へかよひだして二年目になると、ぼくたちの待ちくたびれていた会話が、とき／＼、ふと、出来はじめた。

「学園のごはん、なにやつた」と妻がたずねると「パンやつた」「ライスカレーやつた」「おすしやつた」などと答える。「おかずは？」とたずねると「アジのフライやつた」「クジラやつた」「コロッケやつた」などとその日によつて、大体あやまりがない。

幸吉はどういうものか、米のめしは全然受け付けない。パン、うどん、おこのみ焼きなど、メリケン粉のものしかたべない。さいわい学園の給食は、主食はパンがおもだが、月に二度ほど米食の日がある。そんな日に妻が「たべた？」とたずねると「たべへなんだ」と答える。

「ちよつともたべなんだの？」

「ちよつともたべへなんだ」
ぼくと妻はがっかりしたが、じきに、よろこびのほうが大きくなった。「うーん、会話ができるようになったなあ」「ね、ちゃんと返事するでしょ」と二人は、こも／＼言いあつて、しばらくは有頂点になった。でも、や

っぱり、まだ、機械のよいときだけであった。一步進んでは二歩しりぞき、二歩進んでは一歩しりぞく、というふうには、成育できないのだ。機械がわるいときには、返事も会話も消えて、たちまち元の状態に逆もどりしてしまふ。ゆううつそうにも、かなしそうにも、しているわけではないが、そんなときには、たぶん、なにかが思うようにならなかつたり、だれかに痛められたり、欲望がおさえつけられたり、しているに違いない。そして、幸吉はいま「たからもの」のイスやテーブルのほうへ、どうしても行きなさいのだ。おとなのほかに、いわば暴力でおさえつけられ、神経がますます狂っているのだ。

「ミシンの機械にウンコ付けよか。ばい、ばいよ。うふ、うふ。動かれんようになつてしまふからあかんなあ。おふとんのうえにシッコしよか。くそうて、つめとつて、ねられへんよ。うふ、うふ。まるいイス、お便所へほかほか。こえ屋さんがヒシヤクでくんで、トラックに入れて持っていつてしまふなあ。キハツのビンにウンコ付けよか。くそうなるなあ。せつげんで洗つても、とれへんよ」

自分でたずね、自分で答えながら、なんべん、なん十べんとなく繰り返かえしている。幸

吉が以前ひとりごとを言っていたとき、これも会話の芽ばえに役立つだろうかと、ほくや妻がいち／＼答えていたのを意外にもおほえていて、こんどのひとりごとにも組み入れていくのだ。前半の、たとえば「キハツのビンにウンコ付けよか」というのは幸吉の以前のひとりごとで、後半の「くそうなるなあ。せつげんで洗つても、とれへんよ」というのは、ほくや妻の返事だつた。この二つを一つにし、ひとりごとで、ふたりづんを言っているのだ。ほくやが絵本を読むのをやめ、梅子といっしょに、だまって聞いていると、幸吉の声はますます大きくなつてゆく。とき／＼「うふ、うふ」と笑いごえもまじつて、なんだか、ひどく愉快そうにも聞こえる。ウンコやシッコや便所などがしきりに出てくるのは、それによつて無意識のうちに、うつぶんを晴らそうとしているのだろうか。それともフロイトの説のように、そういうものに特別な興味をいだくという幼児の精神状態に、七歳のいま、ようやく達しているのだろうか。

編輯後記

十月十九日。熊本県熊本郡植木町の田原坂公園で連田善明文学碑の除幕式が行はれた。八ふるさとの駅におりたち眺めたるかの薄紅葉忘れえなく、連田第二次應台時の望郷の歌が刻まれた。広島から清水文雄氏、東京から飛行機で栗山理一氏。学友、知友、地元民百名参加した上で、

果樹園

第59号

わがひとに與ふる哀歌 小高根 二郎
 夜火事 美堂 正義
 自殺の記事 福地 邦樹
 標的 吉本 青司

ヘリック詩抄 森 亮
 ひとり遊び 池 沢 茂
 ホラ貝 堀之内 歴
 地球のわかれ 浅野 晃
 半自叙伝の序 田中 克己
 編輯後記

わがひとに與ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄(四十九)

小高根 二郎

その頃、伊東は真剣に東京近傍への転動運動をしてゐた。しかし、若い友である私にはアツビにもその気配を示さなかつた。今かんがへると、伊東の上京の意志は「舞踏」といふ譬喩で語られてゐたのである。

三月上旬かの或る寒い午下り。北三国ヶ丘に伊東を訪ねた私は、「文芸」三月号であつたかに発表した「若死」の朗読を聞かされた覚えがある。

若 死

おはかおもて
 大川の面にするとい皺がよつてゐる。

昨夜の水は解けはじめた。

アロイデオといふ名と終油とを授かつて、

かれは天国へ行つたのださうだ。

大川に張つてゐた氷が解けはじめた。

鉄橋のうへを汽車が通る。

さつきの郵便でかれの形見がとどいた、

寝転んでおれは舞踏といふことを考へてゐた時。

しん底冷え切つた朱色の小匣の、
 真珠の花の螺鈿。

若死をするほどの者は、



遺児品一君(九大第二外科研究室)の長男慶太郎ちゃん(二才)の手で除幕式が行はれた。僕は事務多端で参加できなかった。三十日清水氏から當日の写真が送られてきた。二、に掲げたのがその一葉である。菊花を捧げられた碑石の前、未

(O)

果樹園 第五十八号 (毎月一回一日発行)

昭和三十五年十二月一日発行

池田野町一六八

編輯者 小高根 二郎

印刷所 元市印刷株式会社

池田野町一六八

発行所 果樹園社

定価 三十円

自分のことだけしか考へないのだ。

おれはこの小匣を何処に蔵つたものか。
 気疎いアロイデオになつてしまつて……

鉄橋の方を見てゐると

のろのろとまた汽車がやつてきた。

第二詩集「夏花」

この「若死」の原型には「N君」といふ献辞が添へられてゐる。N君とは夭折した彼の教へ子なのだらう。

隙間風がよく通る三疊の凍てついた支関兼書齋で、私は慄へながらこの酷薄華麗な詩の朗読を聞いてゐた。伊東と私の間には小さな瀬戸火鉢があつた。乏しい炭水はうすたかく灰を積んでゐた、伊東は朗読に自ら陶醉するに従つて火鉢を両腕に抱いて了つた。私は凍えた靴下の爪先だけを火鉢の肌に触れ、からも凍えからまぬがれてる恰好だつた。

大川の水は解け初めたが私の凍えはなほらなかつた。アロイデオ・Nはつ、がなく天国に着いたさうだ。大和川の鉄橋を刻みながら遠去る貨物列車。その列車が置いていつたかのやうに、形見別けの真珠目の螺鈿をほどこした小匣がとどいた。教師の俺は、延命の策